

化学史研究

第22卷 第4号 1995年

(通巻第73号)

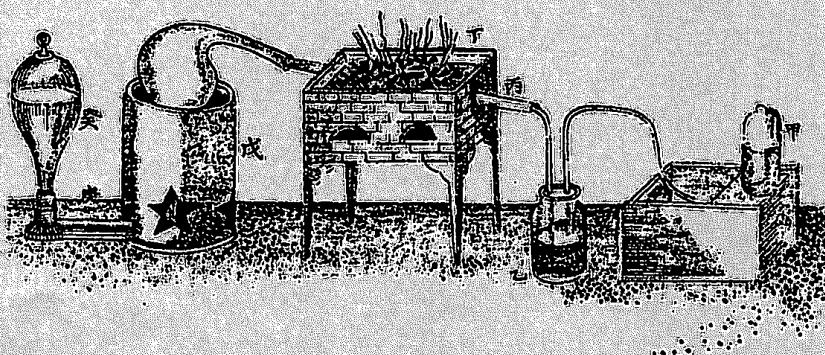
論 文 メルセンヌの学問擁護論 川田 勝 263(1)

特 集 技術史シリーズ 第15回
1-アミノアントラキノン製造法の変遷
—日本における無公害型製造法の開発— 上仲 博 288(26)

広 場 レントゲン線発見100年 原田 馨 300(38)

資 料 化学史および周辺分野の新刊書(1994) 編集部 309(47)
清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録 八耳俊文 312(50)

紹 介 松本三和夫著『船の科学技術革命と産業社会—イギリスと日本の比較社会学—』 田中浩朗 359(97)



化 学 史 学 会

[会 告]

1996年度化学史研究発表会

日 時 1996年5月18日(土)・19日(日)

会 場 名古屋工業大学(〒466 名古屋市昭和区御器所町)

プログラム

5月18日(土)

一般講演:募集中

シンポジウム:実験室の成立と科学の専門職業化

特別講演:潮木守一(名大教授)「ドイツ大学と化学」

5月19日(日)

一般講演:募集中

シンポジウム:科学と世界観

特別講演:ノリタケ(株)「日本の洋食器の歴史」

シンポジウム:ジェンダーと科学

(詳細は次号に掲載します)

一般講演要旨締切 1996年3月15日(金)

図・表・文献を含めて400字詰原稿用紙(横書)5枚あるいは、ワープロ原稿2,000字で書き、下記へお送り下さい。本誌1995年第1号を参照し、講演内容を具体的に記すとともに文献も記載して下さい。尚、シンポジウムの要旨は一般の2倍の量でお書き下さい。

申込先 〒101 東京都千代田区神田錦町2-2

東京電機大学工学部人文社会系列 古川研究室気付

化学史学会事務局 1996年度年会準備委員会

会員名簿について

遅くなりましたが新会員名簿を次号(1996年第1号)の発送に合わせてお送りする予定です。最近、住所・勤務先等の変更のあった方は至急事務局まで、葉書またはファックスにてお知らせください。

化学史学会事務局

〔論 文〕

メルセンヌの学問擁護論

川 田 勝*

1. 緒 言

デカルト (René Descartes, 1596-1650) の文通相手¹⁾として名のみ知られることの多いマラン・メルセンヌ (Marin Mersenne, 1588-1648) は、17世紀初期、西欧の知的中心地パリにおいて、当代一流の知識人の中心に位置していた。彼が、旺盛な好奇心と知識欲とに促されて、書簡による情報交換と直接の会合を通じて人的交流を図り、「新科学」を中心とする学問の発展に大きく貢献したことは、その名に加えて多少は知られているが、そればかりでなく、自身も、研究、実験に飽くなき探求心を見せ、『創世記問題集』²⁾、『普遍音階学』³⁾など大小併せて20冊余の書物を上梓するほどの「学者」でもあったことはそれほど知られていない。

当時、既に大きな問題となっていたコペルニクス説に対してさえも、ある意味で好意的な態度を採っていたほどの「新科学の擁護者」であったメルセンヌはまた、第一義的には、極めて伝統的なカトリック修道会、ミニモ会の司祭であった。この事実から、「中世的な世界観を持ったカトリック司祭が、新科学の振興に荷担するようなことはどうしてなったのか。」という類の啓蒙主義的疑問を直ちに抱くほど、われわれはドレイパー・ホワイト的歴史観⁴⁾に捉えられたままではいない。しかし、「伝統」の存在を常に意識しつつも、「新しい学問」の出現を目のあたりにしたメルセンヌが、いずれかの優越性を説くにしろ、正統性を説

くにしろ、あるいは調和を説くにしろ、平和的共存を説くにしろ、少なくとも現象としての「伝統」と「革新」という2項を捉えて、その関係を問おうとした、その問題設定の枠組までも否定し去ることは、啓蒙主義的な歴史観とはまた別の意味で非歴史的である。

メルセンヌは、当時教育、研究活動に最も熱心であったカトリック修道会の設立した学校で教育を受けた。その面においては、中世以来の伝統に連なる人物と見ることができるが⁵⁾、早くから鍊金術師、自然主義者、懷疑論者らへの激しい攻撃を始め、それは明確な意識の下に、次第にガリレオ的学問理念の受容へと繋がった。彼が多く時間と労力を割いた音楽論においても、古代復古主義的な態度から、ガリレオ的、あるいは所謂「機械論」的説明にシフトしていく様が観察される。そしてこのシフトは、音楽論においてのみならず、彼の思想全般に見られるものであったのである⁶⁾。

それでは、このような変化をどのような視点で捉えたら良いであろうか。ひいては一般に、「科学革命」期における「科学」と宗教との関わりについての歴史記述は、基本的にどのような視点でなされたらよいのであろうか。

W. アシュワースは、思想として、あるいは制度としてのカトリックを、一つの「全体」として見て、その「全体」と「近代科学」との関係を問うことに意味があるかと問い合わせ、それに否定的に答えた⁷⁾。これは、宗教と科学の関係はどのようなものであったか、あるいは、どのようなものであるべきか、といったステレオタイプの議論一般に潜む不毛性を示唆する警鐘と受け取ることもでき

1995年9月22日受理

* 東京大学大学院（科学史・科学哲学）

る。そこでわれわれは、徒に一般化を目指すことなく、メルセンヌにとってのキリスト教とはどのようなものであったのか、また、学問とはどのようなものであったのか、などといった基本的な点の堅実な認識を疎かにせず、それらを足場にすることから彼が辿った道程を追って見たいと思う。そのような、できうる限り「正面向き」の歴史研究⁸⁾の積み重ねのみが、「科学革命」といわれる時代の特質を、われわれにとって意味ある形で明らかにできるのであろう。

以下本論では、伝統的なスコラの教育を受けたメルセンヌが、「新科学」に関心を寄せていった事実を指摘したうえで、その関心の具現化がどのようになされたのか、また、それをなす彼の思想的、精神的基盤はいかなるものであったのかを描き出すことを目指すことにする。より具体的には、彼の受けた教育と所属していた修道会の有様を通じて、彼が基本に持っていた知的精神的「伝統」を明らかにし（2節）、それを踏まえて彼が展開した「革新的」学問の擁護論を検討する（3節）。それらの検討を通じて、メルセンヌの信仰の在り方と学問擁護の契機とは不可分であったことが結論され、また、それらが「メルセンヌアカデミー」と呼ばれた「科学者共同体」設立の思想へと、自然な形で繋がっていったと見ることができるということも示唆されるであろう（4節）。

2. ミニモ会士としての生涯⁹⁾

2.1 生涯の概観

「聖母マリアが生まれた日、また救世主が40年前に予言していたように、ウェスパシアヌスの子、皇帝ティトゥスによってイエルサレムが占拠、破壊され、陥落した日として特別な日、また信仰、武勇、学識をもった多くの著名人が生まれたことでも特別な日であった」1588年9月8日、フランス北西部、メーヌ（Mayne）地方オワゼ（Oysé）教区にマラン・メルセンヌは生まれ

た¹⁰⁾。

敬虔で質素な農耕者であった父ジュリアン・メルセンヌ（Julien Mersenne）と母ジャンヌ・ムーリール（Jeanne Mouliere）は、マランの誕生の日に洗礼を受けさせた。ル・マン（Le Mans）の学校でラテン語、ギリシア語の文法を中心勉強した彼は、1604年ラ・フレシュ（La Flèche）にイエズス会の学院が創立されたとの噂を耳にし、両親に入学させてくれるよう説得、そこで論理学、自然科学、形而上学、数学、神学、音楽などを学んだ¹¹⁾。

1609年ラ・フレシュの学院を卒業したあとメルセンヌは、コレージュ・ロワイアル（Collège Royal）とソルボンヌ（La Sorbonne）で語学と神学を学ぶためにパリへと旅立ったが¹²⁾、1611年7月17日、学業半ばにしてミニモ会に入会、以後1619年までの9年間は、各地の修道院を転々とすることになった。最初の2か月半をニジョン（Nigeon）の修道院で修練し、その後サン・ピエール・ドゥ・フュブレーヌ（S. Pierre de Fublaines）の修道院へと送られた。同年彼は、パリの王立広場（La place Royale）に新設された修道院へと送られ、副助祭、助祭、司祭の聖品を与えられ、1613年10月28日に初ミサを祝した。また2年も経たないうちにヌヴェル（Nevers）の修道院に送られ、1615年から3年間哲学を、1618年には神学を教えることを命じられたうえ、その後修道院長の要職につく。パリの修道院に戻されたのは1619年のことであった¹³⁾。

イラリオン・ドゥ・コトゥ（Hilarion de Coste）、ジャンフランソワ・ニスロン（Jean-François Niceron, 1613-1646）、ロベール・ロー（Robert Reaud）らの努力によって充実したものとなっていたパリの修道院の図書館は、蔵書8千巻に及ぶパリで最も良い図書館の一つとされるほどのものであった¹⁴⁾。自身この図書館の責任者に3回選ばれることになったが、スコラ哲学、新しい人文

学、さらには「新科学」の著作に存分に触れることができるこれらの環境に恵まれて、メルセンヌは本格的な著作、交信活動に入ることになった¹⁵⁾。

著作の内容からみても、書簡に記されている内容からみても、この頃のメルセンヌの主たる関心が、宗教上の論争にあったことが理解される¹⁶⁾。彼の最も初期の書簡には、魔術やオカルトを扱ったものがあり、1617年頃には既に、疑似学問（科学）を実践している者を反駁するための論拠を収集していることが報告されている¹⁷⁾。また、一般に「無神論者」への攻撃は、初期メルセンヌの著作において重要な部分を占めているが、特にそのレッテルは、ヘルメス的魔術や占星術、またアニズム的な主張をする者に対して貼られていた。それらルネサンス的「異教」思想は、当時のパリの思想界、宗教界を席捲しており、メルセンヌの目には、当時約40万のパリ市民のうち、5万人が無神論者に映っていたほどであった。また、数学や「新科学」に対する関心も、早いうちから示しており、『諸学の真理』¹⁸⁾という大著のうちの7、8割は数学的知識の集成である。しかし、後で詳しくみると、この頃のメルセンヌは、スコラの教育内容の影響を強く留めており、知識の在り方や、自然理解の仕方についても、アリストテレスの教説に概ね従っていたといってよい。

このような「伝統的」な態度に変化が観察されるようになるのは、コペルニクス説擁護についてのガリレオ（Galileo Galilei, 1564–1642）の書を、著者に代わって出版してもよい、という意向をガリレオに伝える1629年頃からである。ルノーブルは、1630–4年を、メルセンヌの思想の転換期としている¹⁹⁾。『普遍音階学』以降のメルセンヌからは、宗教的、論争的色彩は薄くなり、「科学」的、特に音楽的内容が豊富になっていく。著作刊行物を見ても、宗教的著作から「科学」的著作へのシフトが見られる。特に1634年に出版され

た『未聞の問題集』、『音階学問題集』、『神学・自然学・倫理学・数学問題集』、『ガリレオの機械学』、『音階学序論』の5冊の書物は、デカルトの著作になぞらえて「メルセンヌの法序説」とも呼ばれる著作群で、「機械論」への傾倒をはっきり示すものとして注目されている²⁰⁾。また、ラテン語で書かれた『音階学についての12巻』を元にし、1635–6年にフランス語で書かれた『普遍音階学』は、この時期に書かれた音楽史、音楽論上の著作としては、極めて重要なものであり、その後に与えた影響も大であった。内容的には1634年の諸著作と重なるものも多いが、全体としてはこちらの方がより徹底的で、学問的な著作である。リズムやハーモニーの原理といった理論的な問題を体系的に扱い、当時の楽器についての完全な記録を残しているほか、人間による音や楽器の音、調和や音響の数学的分析、作曲や演奏の原理、音楽教育、音楽の心理学的効果の生理学的原因など音や音楽についてあらゆることを問題にしている。その中で、音楽は精神や感情の状態に深い影響を与えるという音楽的プラトン主義（あるいは音楽的人文主義）を探る一方で、その力のもとは、魔術的なものではなく、機械学的なものであり、音は一種の運動であると考える実験科学的立場を探っている。メルセンヌに「専門」領域というものがあったとすれば、それはこの音楽論であったということになろう。「音楽を完全にするためには他のあらゆる学問を理解せねばならないだろう」と言っていることから見ても、彼が音楽を、あらゆる学問を統合するような分野だと考えていたことがわかる。

数学についても、いくつかの論考の再録、古代の数学学者からの引用、円錐曲線論に宇宙論と光学の考察を含めた内容の『普遍幾何学（*Universae Geometriae synopsis*）』や、いくつかの実験結果、音楽の量的な面を扱った『自然学的数学的論考（*Cogitata physico mathematica*）』などがあ

り、特に後者は、いわゆる数学的「機械論」的な方法を相当程度身につけていたことを示す内容のものといわれる²¹⁾。また、メルセンヌはほとんどパリを出たことはなかったが、1644年、彼は知り合いの学者を訪ねてイタリアとプロヴァンスを旅している。その際、エクスでは弾道学上の実験をし、ミラノでは図書館探索と望遠鏡の調査をしている。また、ローマにガブリエル・ノーデ (Gabriel Naudé) を訪ねたときには、サンピエトロ寺院の中で振り子の実験をしていた²²⁾。2年後、メルセンヌは再びプロヴァンスと南西イタリアを旅し、そこで得た知識を元に、翌47年『自然科学的数学的論考』への付論として、『物理学的数学的な新観察、第3巻 (Novarum observationum physico-mathematicarum Tomus III)』を出版、そこにはトリチュエルリ (Evangelista Torricelli, 1608-1647) の真空実験についての報告やロベルヴァル (Gilles Personne de Roberval, 1602-1675) の論考も収録した。

この間、彼は著作活動だけではなく、書簡を通じての「学術雑誌編集長」として、また秀逸な学者の「出版助成者」としての活躍もあった。彼の交信相手は、イングランドからポーランドまで200人以上にのぼり、書簡は検閲を逃れるという利点を持っていたために、学者間の自由な討論の場を提供することになった。これらがヨーロッパの学者のネットワークを作ることに果たした役割は古くから注目されてきたところである。また、1635年以降は、アカデミーを通じての複数の学者による「共同研究」の推進者としての活躍も見逃せない。1623年『創世記問題集』の中で既にバイフ (Jean-Antoine de Baif) のアカデミーに擬したアカデミーの設立を訴えていたが、それが一応形として成立するのは1635年、王立広場近くの修道院の一室を学者の参考場所に提供するようになってからのことである²³⁾。それ以降パリに訪れる、あるいはパリに立ち寄る学者たちがメルセン

ヌを修道院に訪ねるのは慣例になった。これらの書簡、会合を通じてメルセンヌと付き合いのあった人の中には、デカルト、フェルマ (Pierre de Fermat, 1601-1665)、ガッサンディ (Pierre Gassendi, 1592-1655)、ホップズ (Thomas Hobbes, 1588-1679)、ハイエンス (Christiaan Huygens, 1629-1695)、ペレスク (Nicolas-Claude Fabri de Peiresc, 1580-1637)、パスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) らがおり、ガリレオの思想などがよく問題とされた。そしてガリレオは、メルセンヌの学問觀に特に大きな影響を与えることになった。

このような広範な活動に携わっていたメルセンヌが生涯を終えたのも、友人の出版準備の最中であった。同僚で親友でもあったジャン・フランソワ・ニスロンを悼んで、ニスロンの手による『光学魔術』の出版を準備、彼の光学についての仕事にメルセンヌ自身のコメントを付け加えていた最中の1648年7月27日、おそらく偽肋膜炎が原因で発病、1648年9月1日、仕事半ばにして他界したのである²⁴⁾。

以上に概観した生涯を踏まえて、メルセンヌの学問擁護論を検討する作業に入る前に、メルセンヌにとっての「伝統」の一部を形成していた、ミニモ修道会とは、一体いかなる性格を持つ修道会であったのかを理解しておくことにしよう。

2.2 ミニモ修道会

先に見たように、1612年7月17日、パリでの学業半ばにしてメルセンヌは厳格な戒律で知られるミニモ会に入会する。法学を学ぶことを望み、神学の学びを始めたのを見た両親は、せめて在俗司祭になって出世することを期待したが、マランにそのような関心はなかった。学歴をいかすことができ、当時華々しい活躍をしていたイエズス会、フランシスコ会、あるいはドミニコ会といった修道会ではなく、学歴無用のミニモ会に入会した理由をマランは語らない²⁵⁾。しかしメルセンヌの心

性をミニモ会修道士としての生活と切り離して考えることはできない。否、むしろメルセンヌの思想、活動は、その生活との関わりから理解せねばならないだろう。以下その関心の下に、ミニモ会とはいかなる修道会であったか、また、その基本的な特徴、さらに、理性と信仰の問題、あるいは学問観を見ておこう²⁶⁾。

アッシジの聖フランチェスコの影響を強く受け、おそらく『マタイによる福音書』から名付けられたミニモ会は、トレント公会議間に創設された別の二つの修道会、イエズス会、オラトワール会が、目的の面でも制度の面でも伝統を超えて斬新なものであったことに較べると、伝統的、保守的な性格を持つ会であった。

列聖されてパオラの聖フランチェスコ (St. François de Paule, 1416–1507) と呼ばれることになる一人の人物が、イタリア南部の生地カラブリア地方パオラで数人の隠修士 (monk) たちと共に、厳格で自己否定の精神を体現した生活を始めたのは1436年のことである。その後次第に、彼の慈悲心と謙虚さは村の内外の耳目を集め、1472年6月18日、時の教皇シクストゥスIV世 (Sixtus IV, 在位1471–1484) によって修道会として認可される頃までには、その精神の卓抜さに加えて、病の癒しの奇跡を行うものとしての名声はフランスにも届いていた。1483年、病を患い死の床に赴こうとしていたルイXI世 (Louis XI, 在位1461–1483) はシクストゥスIV世を介してフランチェスコをフランスに招聘する。教皇の命を受けてル・プレシー・ドゥ・トゥールに王を訪ねたフランチェスコにできることは、最早、死への準備を整えるよう諭すことだけであったが、同年、王が茶毘に付された後も、王室の庇護の下、フランスで生活し、シャルルVIII世 (Charles VIII, 在位1483–1498) の好意によって建てられた二つの修道院を含めて、フランチェスコが亡くなる1507年には13の修道院がフランスに存在するようになつてい

た。

このような経緯で、その後ミニモ会は特にフランスで拡がりを見せる。そしてこのことが、ミニモ会に対抗宗教改革との関わりで重要な意味を与えることになった。カトリックとプロテスタントの対立が激しかったこの地で、会に属する修道士たちは説教者として、また異教徒に対しては改宗を促す者として熱心に活動し、カトリック界から積極的な意義を認められることになったのである。非カトリック教徒、あるいは異教的な気質を持った思想家たちに対するメルセンヌの激しい攻撃や、その他の彼の活動も、この流れの中で適切に位置付けられる。

先にも述べたようにミニモ会は、イエズス会のような革新的な性格を持つ会とは異なり、伝統的な色彩の強い修道会であった。アッシジの聖フランチェスコに影響を受けたパオラの聖フランチェスコは、「清貧」、「貞潔」、「従順」という三つの伝統的な誓願に、「謙遜」という誓願を加え、それは1506年、教皇ユリウスII世 (Julius II, 在位1503–1513) の大勅書によって承認された。修道士は何よりもまず、禁欲的で極端につつましい生活をすることが求められ、日々四旬節の心をもって暮らす誓願を立てた²⁷⁾。彼らは、靈的に完全なものとなることを望み、『聖人伝 (Les Vies des Saints)』に記された聖アントニオやアッシジの聖フランチェスコの伝記、さらには創始者聖フランチェスコの伝記の中に、そこに至る階梯を見出そうとした。

このように靈的完全性を求める、やや神秘主義的な色彩の濃い修道会において、学問研究、教育の地位は高くはなかった。

パオラの聖フランチェスコ自身は、ロヨラのイグナチウス (Ignatius de Loyola, 1491?–1556) とは違って、学歴もなく、神学者でも宗教著作家でもなかった。このことが学問に対する会全体の雰囲気を作るきっかけになったのであろうか、学

歴のある者を会に受け入れはしたもの、大学での学位取得といった学問的権威を感じさせる種類のことがらには、どちらかと言えば反感を抱くような気風があった。さらに学問は、所詮人間的な知識に過ぎず、靈的に完全なものをめざす務めをおろそかにして、不完全な知識の修得にのめり込むことは、好ましからざることであった。「怠けものとして知的な愉しみに耽っているものには、炊事場仕事というおしおきを」という台詞が修道院の中で通用していたのである²⁹⁾。しかし、修道院の中で、靈的な完全性を求める生活が基本的に重要であったことと、修道院外で、説教と病の癒しが主な活動であったことは矛盾するものではなかったようだ。フランス国内でも有数の充実した図書館を所有、管理していたという事実は、その表れと考えられる。しばしば市場で行われたカルヴィニストの主張を反論するための説教には、論点について充実した知識を所持していることが要求されたのであろう。各地の修道院内の図書館には、自分たちの宗派についての書物を中心とした歴史書、ギリシア・ラテンの著作、聖書研究書や祈禱書などのセクションの他に、数学や自然哲学のコーナーも備えられていた。特に1614年に作られた王立公園近くの修道院の図書室は、すぐに修道会中でもっとも重要な図書室となり、自分もそこで司書を務めたメルセンヌが、最新の知識の情報源としてその大きな恩恵を被ったことは既に述べたとおりである。

しかしそれにしても、メルセンヌの活動はこの修道会の中でも特異なものであったろう。ジャン・フランソワ・ニスロン、エマニュエル・ニヤン (Emanuel Maignan, 1601-1676)、シャルル・ブルミエル (Charles Plumier, 1646-1703) といった同僚が、新学問（新科学）に関心を抱き、実践をしていたということ²⁹⁾、また、王立広場近くの修道院の図書館は「科学器具をも含む珍品博物館」であったことも知られているが、学問

研究は、特に自然哲学、数学的な研究は、修道院全体として組織的に行われていたものではなかった。

ミニモ会の『学事規程』には、人間の知識の弱さが、6項目の理由によって説明されている。人間の学問が曖昧であること、それらを身につけることが困難であること、それらの所有が無味乾燥で不快であること、それを所有していることが他人に対してプライドや優越性を感じさせること、知識を手放したときの快適なこと、人間がそれを利用できる期間の短さ、の六つである。『学事規程』は続けて、

学問をすることは許されている。しかし見栄を張ったり、嫉妬を感じたり、野心を抱いたりしてはならない。常に、あなたがたは、ミニモ修道会の一員で、最も小さきものであることを忘れてはならない。この会の会員は、博士号を受けたり、学位を求めたりしないように気をつけていなければならぬ³⁰⁾。

と記している。この文言と、メルセンヌが『諸学の真理』の序文に記した

低い精神を持ち、分別のない人の中に、諸学問の真理が無用で敬虔や信仰に役にたたないと考えているものがいることは残念です。この書を読まれれば、すぐにその人たちの誤りに気づくでしょう。精神と神への愛にとって、大して役にたたないものなど、学問の中には存在しないのです³¹⁾。

という主張とは、矛盾対立するものではなかったと考えられる。実際、彼の『創世記問題集』は、修道院長、フランシスコ・ドゥ・マヤダ神父 (Francisco de Mayada) の、また『物理・数学的論考』は、次の修道院長、ロレンツォ・ダ・スペッザーノ神父 (Lorenzo da Spezzano) の認可を受けている。これらのことからすると修道院の内部では、やはり静寂の中で靈的な完全性を求める雰囲気が支配的であったにも関わらず、彼は学

問研究に勤しむことを許されていたと考えるのが適當であろう。

3. 宗教的機械論と学問擁護

3.1 伝統の擁護

アリストテレスがみずからの形而上学の中で、あらゆる種類の存在に共通なものを明らかにするために保持した原理や議論を整理し、三段論法を作り、ソフィストの誤謬や曖昧で詭弁的な命題を暴くために主張した原理は、私の考えでは正しく築かれたものであります。それゆえ神が、われわれが持っている以上に大きな光や自然についての知識を与えてくれるのでなければ、われわれはそれ以上に優れたものを考え出すことはできないのです³²⁾。

学校での学問を終え、ミニモ会に入会して以降しばらくの間、メルセンヌには革新的な雰囲気はなかった。彼は伝統を重んじる、時代から見ても彼の属していた修道会の雰囲気から見ても、ごく普通の修道僧であった。彼は、自ら属していたカトリックが真正な宗教であることは疑ったことはなかっただし³³⁾、自然哲学においても、イエズス会の学校で習ったアリストテレスの教説を信頼していた。

メルセンヌが伝統的であったのは、自然哲学においてのみではなかった。むしろ彼は、学問への道を一般に古代人を真似ることであるとさえ考えていた³⁴⁾。彼が最も関心を寄せた音楽についても、古代人の音楽が完全なものであると述べたうえで、

神の御力によって、われわれはこの完全さに到達できるでしょう。あるいは、少なくとも、古代人が曲の中で実践していたことを再確立することができれば、それに大変近づくことができるでしょう³⁵⁾。

と続けている。さらに、数学についても次のよう

に主張している。

古代人の解析を再確立することが必要でありましょうが、優秀かつ勇敢な数学者が、彼の時間と労力をそれに費やさなければ、このような偉大な業を誰かが成し遂げられるとは思いません。なぜなら、私にはその全貌が予測できないからで、それは、それらのかなり多くが再発見されているにしても、われわれは、まだこの計画に必要な古代人の著作のすべてを手にしていないことに理由があります。これらの〔未発見の〕著作のリストを私が提示すれば、君たちにとってはうれしいことでしょう。そうすれば、われわれの手にしていないこれらの著作にたまたま出会った時に、それを大切に保存しておくことができるでしょうからね³⁶⁾。

さらには「神よ、この時代に新たなアルキメデスを再び生まれさせ、数学を以前の完全さに引き上げさせて下さい³⁷⁾」とさえ主張している。古代を範とするこれらのメルセンヌの主張は、イエズス会が持っていた人文主義的な雰囲気の影響によるものであったと考えられる³⁸⁾。

しかし一方で、メルセンヌのアリストテレス主義は、当初から教条的なものではなかった。『諸学の真理』の中で、鍊金術師がアリストテレスの哲学を非難するのに応じて、キリスト教哲学者は、世界の永遠、無限などいくつかのアリストテレスの誤りを指摘している³⁹⁾。キリスト教哲学者に自らを擬して、以上のような内容を語らせたメルセンヌは、アリストテレスを「哲学における鷹であり、それに較べれば他の人々は、まだ羽が成長していないうちに飛ぼうとする鶏のようなものだ。実際、彼は感覚でき、創造できるあらゆるものを超えることができたのだ⁴⁰⁾」と評し、尊敬していた一方で、アリストテレスの誤りは誤りとして認め、正していくような態度を探っていた。これもまた、イエズス会の影響とみることも

できる⁴¹⁾。この、彼の態度に変化が見られ始めるのが、1634年頃であった。それは、ルノーブルが「メルセンヌの『方法序説』」と呼ぶ5冊の書物を上梓した前後のことである。この5冊の書物を転回点として、メルセンヌの思想は、アリストテレスの思想を基本において考える態度を次第に改め、「近代科学的」になっていく。その様子をより正確に理解するために、まず、この態度の変化を引き起こすことになった、「構成的懷疑主義(constructive scepticism)」と「自然主義者論駁」という二つの重要な契機について押さえておこう。

3.2 構成的懷疑主義

メルセンヌが『諸学の真理、懷疑論者あるいはピュロン主義者論駁』をパリで公刊したのは1625年、「フランス思想界の危機」の最後の年である⁴²⁾。オルレアン公ガストン(Jean-Baptiste-Gaston d'Orléans)に献呈された全4巻、1000頁を超えるこの大部の書は、キリスト教哲学者、懷疑論者、鍊金術者の3者の登場人物による鼎談のスタイルを探っている。「此において、懷疑主義者たちの意見が論駁される」というタイトルを持った第1巻全16章が、哲学的議論に当てられ、残りの3巻は、数学的知識を中心とした具体的な知識が延々と開陳されている。

おそらく自身の思想を、キリスト教哲学者に代弁させながら、メルセンヌは筆を進めているが、まず、「鍊金術が一つの確実な学問であることを証明しようと試みる鍊金術師に対し、懷疑主義者が反論する」というところから話を始める。鍊金術は確実な学問である、という鍊金術師の主張に対して、懷疑論者は、「この世界ではいかなることをもそれ自体確実に知っているものはいない。」と反論する。われわれは、ものごとの本性を知ることができず、ただ表面的に知覚しているに過ぎないうえ、感覚によって欺かれることがあるから、というのがその論拠である。ここでキリスト

教哲学者はすかさず、懷疑論者の論拠を逆手にとって、ある種の知識がわれわれに知られ得ることを主張する。

あなた(懷疑論者)の主張が示しているのは、われわれがほんの僅かのことしか知らないということです。……しかし、このほんの僅かな知識は、われわれの行動を導くものとして十分に役立つのです⁴³⁾。(傍点筆者)

さらに

あるものについての学を持つためには、その效能、操作、応用を知ることで十分です。……それよりも偉大な学や特殊な学をわれわれは主張しようとは思いません⁴⁴⁾。

つまり、懷疑論者が事物の本性の認識不可能性を説き、われわれの認識するのは単に表面、現象に過ぎない、とするその主張を、「表面、現象は認識できる」と読み変えてしまうのである。これが、メルセンヌの懷疑論批判の中心にあり何度も繰り返し主張される論拠である。懷疑論者の人間の認識能力に対する批判を根本的なところでは認めつつも、認識論的にはある種の現象主義的な姿勢を採りつつ、知識の有用性、実用性を盾に学問を擁護していくのである⁴⁵⁾。実際、

否定しようがなく正しい事柄は存在する。われわれは自分が存在しているということを知っているし、太陽がいつでも東から昇るということも知っている。さらに、全体はいかなる部分よりも大きいということなど、幾何学の基本的な前提も知っている⁴⁶⁾。

そして、第2巻以降800頁にわたって、彼は数学を中心とする「われわれが正しいと知っている」知識を例示することに没頭しているのである。懷疑主義者にとってさえ、「学問の中には、正しいものが多くあり、自分たちの判断力や理性を失いたくないのならば、ピュロン主義を捨てなくてはならない⁴⁷⁾」はずである。先にも見たように、学者は究極的な知識を得る必要はない。「現

象（みかけ）についての知識は、自然についての機械的な法則を発見するのに十分であり、その法則によって以前にはわからなかつたような、偉大な事柄を達成することができるようになるかもしれないのだ。⁴⁸⁾」

しかし、本巻全体を通して繰り返されるメルセンヌの懷疑論批判は、哲学的一貫性、統一性を持ったものはない。そこから読み取れることは、デカルトのような哲学的な徹底的な反省ではなく、懷疑主義者の主張のもつ破壊力に対して、何とか学問的知識を擁護しようという意思である。ポプキンはメルセンヌのそのような態度を「構成的または緩和された懷疑主義」と呼び、サンチェシュ (Francisco Sánchez, 1550? - 1623?), ガッサンディと共に、近代科学の認識論的側面の醸成に寄与した、と看做している⁴⁹⁾。ポプキンのメルセンヌ評を聞いておこう。

メルセンヌが確立しようとしたのは、たとえ懷疑主義者の主張を論破し得ないにしても、それでもやはり疑問を受ける余地のない型の認識をわれわれは持つことができるのであり、そしてそれがこの人生におけるわれわれの目標のすべてである、ということである。…メルセンヌにとって科学的・数学的認識は、超越的実在についての情報を生み出しましなければ、宇宙の本性についての形而上学的真理に基づいてもいなかった。実証主義的=実用主義的な認識概念が公表されたのである⁵⁰⁾。

ディアは、そのポプキンの主張を一定程度は受け入れながらも、メルセンヌがイエズス会の学校で受けた人文主義的な教育、特にキケロ (Marcus Tullius Cicero, B. C. 106-43) の影響を受けた蓋然主義 (probabilism) が、メルセンヌの思想に深く影響を与えたと、克明な分析をもとに主張した⁵¹⁾。この蓋然主義という態度は、イエズス会に広く蔓延している態度であった。それ

は、そもそも恐らく布教的関心から倫理神学において採られた態度であったと考えられているのであるが、メルセンヌが学問の「真理」というときに、例えばアリストテレスの権威さえも蓋然的なものと看做し、決定的な態度をとらないことなどに、このイエズス会の持つ知的雰囲気が色濃く影響していると見ることは自然であろう。

さらにメルセンヌの学問擁護の動機を忖度するためには、メルセンヌが懷疑論者を自由思想家と看做し、キリスト教の信仰を脅かすものと考えていた、という事実に注目する必要がある。

彼らは自分たちのことを懷疑論者と呼んでいますが、自由思想家で、そう呼ばれるのにふさわしい人々です。なぜなら、彼らは真理の光に耐えられぬ目を持った、闇の不吉な鳥のようなものだからです。彼らは恥しげもなく嘘に身をゆだね、あらゆる知識を感覚の唯一の主体と事物の外面に制限しているのです。われわれは、最も下劣な状態に置かれ、愚かだけだものの最低の状態に置かれているのです。さらにわれわれは、真の言論と理性の行使を奪われているのです⁵²⁾。

この点をさらによく理解するためには、もう一つの契機、メルセンヌが自然主義者、自由思想家に対して採った態度を調べておくことが必要になるが、その作業に移る前に、メルセンヌがことさら重要視していた数学に対する彼の態度を見ておくことにしよう。

3.3 メルセンヌの数学観

「自然学や数学の中でわれわれは何か確実なことを知ることができるであろうか。」メルセンヌは『未聞の問題集』の中でこう問うている。それに対して「自然学の中に確実なものは何もない、あるいは確実なものはほとんどないので見つけることは非常に難しい。」と答えている⁵³⁾。それでは数学についてはどうか。自然学にある限界は、数学的真理の客觀性をも脅かすようなものなので

あろうか。

『諸学の真理』と『普遍音階学序論』の両書の中でメルセンヌは、われわれは個物を視覚化することから抽象的概念を作り出すことができることを説明している。そして抽象された数学的対象は、外界の事物の持つ偶有性は持っていないので、数学は真の学問であるといえる、と主張している⁵⁴⁾。認識と対象との一致が、眞の知識の条件であるとするならば、両者が知性の中にある数学的対象は眞の知識となり得るというわけであろう。

数学的諸学やすべての諸概念は、外界の対象やそれら自身の性格と矛盾しないのならば、それらがそれと照らして眞であるとわかる、あるいはそれと調和するような存在が理性の中に存在していればよいのである⁵⁵⁾。

このように数学の確実性を保証したうえで、メルセンヌはさらに数学を自然科学よりも、哲学的にみて優位な学とする。なぜなら、算術と幾何学は他の諸学にも増して、「学問は、そこから厳密な論証が導かれる独自の諸原理を有していなければならない」というアリストテレスの格律を満たしているからである。さらにそれらの諸原理をもとにしてなされる、厳密な三段論法による証明方法は、自然科学やその応用的学問に見られる推論を含む論証に較べ、反駁不可能なものとなっている点でも、数学は秀れた学である。

数学に於ける諸量は不变である。というのは、三角形が三本の直線、三つの点で結ばれた三つの角からできていないということはあり得ないからである。この世に完全な三角形が在るかどうかなど問題ではない。この学問の真理を確立するために存在し得る、というだけで十分なのである⁵⁶⁾。

逆にいえば、自然科学はあくまで、眞の学問にはなりえないのである。

われわれは、自然の内側の秘密を見通すこ

とはできない以上、表面しか見ていないということができるが、同様に、その理由を見通すことができない以上、外面向的な結果の知識以外の知識を得ることはできないのである。また、われわれは出来事がどのように生じるかについても、ある日まで知ることはできない。その日とは、このような悲惨な状態からわれわれを解き放ち、眞の崇拜者のための光のよってわれわれの目を開かせてくれるよう神が思われた日のことである⁵⁷⁾。

以上のような認識論上の理由から、数学は眞の学問と看做されるのであるが、さらにメルセンヌは、哲学も法学も、他のいかなる学も数学なしにその完全性に到達することはないとまで考えていた⁵⁸⁾。さらに、先にも触れたように、『諸学の真理』で懷疑主義者を反駁するためにメルセンヌが示したのは、800頁にわたる過去に得られた数学的知識であった。数学という学への彼の傾倒にもイエズス会で受けた教育の影響が見られると考えることができよう⁵⁹⁾。

3.4 自然主義者論駁

初期メルセンヌの論敵は、ひとり懷疑論者にとどまらなかった。彼は、当時の思想界に多大な影響を及ぼしていたイタリア自然主義思想に対しても激しい攻撃を浴びせた。以下では特に、メルセンヌの初期の著作『創世記問題集』に盛られた自然主義者論駁の議論を題材に、当時の知的雰囲気とそれに対するメルセンヌの宗教的反論を見たうえで、それらのメルセンヌの態度を全般的に評価しておこう。その作業を通して、メルセンヌの宗教的態度の骨格が浮き彫りになるであろう。

「新科学」の知見を聖書注解に用いた最初の書とされる『創世記問題集』(1623)は、3部構成の著作である。実は、表題が表す『創世記』についての聖書注解は、約1200の項からなる第2部を占めているだけで、第1部の主な部分は、ピエトロ・ポンポナツィ (Pietro Pomponazzi, 1462-

1525) の思想の影響を強く受けた自然主義者ヴァニーニの2著作についての、625項からなる注解と批判、第3部は440項からなる「ルネサンス魔術」の唱道者ジョルジオ・ヴェネッティ (Giorgio Veneti) に対する注解と批判である⁶⁰⁾。

第1部での主な論敵になっているヴァニーニ (Julius Caesar Vanini, 1585-1619) は、イタリアを中心とした自然主義思想⁶¹⁾とフランスとの接点となった人物である。ナポリ王国で生まれた彼は、ナポリ、ローマ、パドゥアで医学と神学を学んだ。特にパドゥアは、いわゆるイタリア自然主義思想の中心地であった。当初カルメル会士だった彼は、1612年ローマ・カトリックを離れイングランドへと移住、しかしそうにパリへ移り、カトリックの信仰を取り戻した。そこで、2冊の書物を著し、その後1619年、無神論のかどでトゥールーズで火刑に処せられる、という人生を送った⁶²⁾。彼がイタリア自然主義思想をパリに持ち込むのに果たした役割は甚大であった。そしてメルセンヌが、この自然主義者の反駁の書を著そうとしたのは、恐らくヴァニーニの処刑が伝えられることによって、パリを包み込んだ興奮に促されてのことであろう、と推測されている⁶³⁾。

ここでは、メルセンヌの自然哲学思想一般に深く影響を与えていたものとして、特に重要な奇跡についての問題を検討することに关心を集中しよう。この問題は、ヴァニーニの処女作、『半円形劇場 (Amphitheatrum)』よりは、2冊目の著作『自然の驚異について (De admirandis naturae)』で多く議論されている。この中でヴァニーニは、真の奇跡は自然的手段によっては起こり得ず、キリスト教の奇跡は真の奇跡であると主張している。この主張自体は、メルセンヌの反論を招くような代物ではないが、ヴァニーニはさらに続けて、歴史の中で報告してきた多くの奇跡は、自然的に説明され得るもので真の奇跡ではなく、単に驚くべき出来事であるに過ぎない、と主

張する⁶⁴⁾。そして、この自然的に説明され得る奇跡の中には、正統信仰からいえば「真のキリスト教の奇跡」のいくつかをも含めてしまったのである。これは、イタリアの自然主義者一般に共通してみられる主張であるが、これに対するメルセンヌの反論を見よう。

メルセンヌは、キリスト教の伝統の中で真正のものとみなされている奇跡を擁護するために、自然主義者による奇跡の説明を吟味し、その説明が不適切であることを示そうとする。そして、その中で当時としては、最新の「科学的」知見を用いたのである。具体的に見てみよう。神の存在は、彼の作品（である自然界）に基づいて証明できるか、という問題を扱った箇所で、彼はこの問題に對して肯定的に答えているのだが、それは奇跡の問題と重要な関係があった。もし、奇跡が自然的に説明され得るのならば、神がそれらの原因であるという必要は確かにない。しかし、自然のなかに奇跡の原因となるようなものがなければ、自然の外に原因があるとするか、原因はないとするか、どちらかである。後者は当然受け入れることができないので、もし奇跡が自然的に説明され得ないならば、それは自然の外に原因がある、つまり神によるのだということになろう。そして、自然的に説明され得るというイタリア自然主義者の論拠を点検し、それらが正しくないことを示さえすれば、以上の推論によって、奇跡の原因は神であることが証明されよう。つまり、自然内で生じる「奇跡」から、神の存在が証明できるわけである。以上がメルセンヌの目論見である。まず、異教の奇跡とキリスト教の奇跡は、その事例報告の信頼性によって分けることができる、ということを述べたうえで、自然主義者の説明を具体的に反駁する。

天使の出現（という奇跡）についての問題を例として、この議論のてん末を見てみよう。鏡を用いることによって天使という像を映し出すことが

できるのだから、天使の出現は自然的に説明でき、なんら奇跡とするにはあたらない、という自然主義者の説明に対して、メルセンヌはいくつかの章を費やして反駁する。鏡の作用、光学の原理一般を説明したうえで、鏡が天使の出現の原因ではありえないことを説明する。天使があらゆる角度から見えることに触れられたり、話したり、ものを食べたりすることは鏡の作用や光学的知見からは説明できない、というわけである。ジャンバッティスタ・デラ・ポルタ (Giambattista della Porta, 1535-1615) は、天使の声さえも自然的に説明できるとし、実際にそれを試みているが、メルセンヌはこれに対しても、自然学(機械学)的に反論している。

メルセンヌはこのように、自然主義者による奇跡の「自然的」な説明を、当時の新知識を広範に利用しながら論駁していく。その中では、癒しの奇跡についての自然的な説明を反駁する場面も出てくるが⁶⁵⁾、メルセンヌにとって奇跡を擁護することは、単にキリスト教の一つの教義を擁護する、という以上の問題であったと想像される。彼が入会以後、生涯を過ごすことになったミニモ会という修道会は、パオラの聖フランチェスコという癒しの奇跡を行うものによって作られた修道会であったのだ。つまり、奇跡の教義を否定することは、修道会の基盤を否定することにそのまま繋がることであり、自らの信仰を脅かすものであったのであろう。

具体的にはフランスにおけるその普及者となつたヴァニーニを論敵にする形をとった、イタリア自然主義者に対するメルセンヌの反論には、当時の彼の心性がよく表れている、と見ることができ。メルセンヌにとってカトリックの教義を擁護するということは、自らの信仰の基盤に関わることであって、それを脅かすような問題は、完全に公平な立場から論じられうるような問題ではなかった。そしてそれらの問題を扱うときには、イ

エズス会で受けた教育、スコラの教育の影響を見せつつ、自然に対する新しい知見、それも隠在的な力に頼るような知見ではなく、そのような力を仮定せずに自然界の現象を「機械論」的に説明しようとする知見を援用し、自然と超自然をはっきりと区別したうえで、自然界のことはなるべく「機械論」的に説明する。そして、キリスト教の奇跡は、自然内現象ではあるが、超自然、言い換えれば神に原因があるものとして認めていく、という態度を採った。つまりメルセンヌは、宗教的動機によって奇跡と超自然の領域を守るために、自然を自然法則に従って生起する現象の集まりに過ぎぬもの、と見る必要があった、と考えることができる⁶⁶⁾。

このように見えてくると、『創世記問題集』の中でメルセンヌは、自然主義と魔術を論的にすえ⁶⁷⁾、それに対する反論をする中で、「自然」と「超自然」のそれぞれの領域を確保したうえで、「自然」内では、伝統的なアリストテレス的説明(これは彼がイエズス会の学校で学んだことであった)を基本に、隠在的な説明を拒否する、という態度を採ったことがわかる。しかしこれまで見えてきたように、それを、「自然」を「科学的」に説明することの形而上学的な基盤を据える、ということだけを目的とした議論と考えてはならない。「超自然」から「自然」界へ「奇跡」という形の干渉があることを認めさせようとした、この時点での彼の動機は、あくまで宗教的なものであり、それも伝統的なカトリック思想を擁護することにあったと考えられるからである。実際、メルセンヌの批判の矛先は、自然主義や魔術に留まらなかった。彼は「ルネサンスの伝統を総攻撃した」のである⁶⁸⁾。彼にとって、正統的なカトリックの信仰を脅かすものに思われた諸思想は、忌み嫌うべきものであったのであろう。それは、裏を返せば、カトリックの信仰と両立するような学問思想に対する共感となつても表れていた。イエズ

ス会という近代的な修道会で学んだメルセンヌが、そこで学んだ諸思想を正統的なものと考えていたことは十分に理解できる。実際、彼は1634年頃まではアリストテレス主義を捨てることがなかった、といわれる⁶⁹⁾。そしてその後、彼は次第にガリレオの思想に影響を受けながら、「科学的」な方向へと進んで行くことになる。

宗教的動機によって、「機械論的」に説明されるべき自然界の領域を確保し、自然界の中では、構成的懐疑の精神で有用な知識の探求がなされ得る、としたメルセンヌの思想は、ガリレオ的な思想の受容によって、新たな一步を踏み出すことになった。

3.5 「方法序説」とガリレオ的機械論

1634年、5冊の書物をたて続けに出版したメルセンヌには、学問の方法論の面でかなり大きな変化が観察される。この時代は単に伝統的なスコラ哲学やアリストテレス主義と、「近代科学」の間の思想的闘いがあつただけでなく、前節でも見るように、ヘルメス主義や魔術的伝統が広まって、かなり複雑な様相を呈していた。早くからこれら「異教的」あるいは「異端的」思想を「無神論」と称して徹底的な攻撃をしたメルセンヌは、それらの思想的混乱の中で、自然現象を説明するための「宗教に有用な合理的な思想」⁷⁰⁾を探していた。そして、メルセンヌが行き当たったのが、ガリレオ的機械学を道具とする彼独特の「機械論」であったといわれる。それは、自然の中に魔術的、隠在的な力を仮定せずに、所有者（神）によって支配された機械に自然を擬えるものであったと同時に、機械的技術の実効性を基礎に据えるものであった。自然、超自然の峻別という、彼の宗教擁護のための概念規定もこの「機械論」にうまく馴染んだということは前節で見た。『ガリレオの機械学』の中では彼は、機械学（論）は「魔術思想を終焉させ得る唯一の道」と呼んでいることに注目しよう⁷¹⁾。

より詳しく見てみよう。

1634年の五つの書物、『未聞の問題集』、『音階学問題集』、『神学・自然学・倫理学・数学問題集』、『ガリレオの機械学』、『音階学序論』は、専門家のために書かれた書物というよりは、より広い読者に対して書かれた書物であったろうと思われる。メルセンヌの他の書物の浩瀚さからいえば、分量も内容も軽いものが多い。そこでは、「人間は水の上を歩けるか」とか「人間は鳥のように空を飛べるか」といった問題が多く並べられ、一つ一つに解答が与えられている⁷²⁾。しかし、これらの書物にはわれわれにとって関心のある多くの思想もまた盛られている。これらをもとにメルセンヌの「科学方法論」の枠組を再構成してみよう。

既に見たように、懐疑的な風潮の蔓延した時代に、諸学をしっかりと基礎付けることはメルセンヌにとって重要なことであった。そこでは数学が基本的に確実な学と看做され、枢要な役割を果たすことになった。さらに、自然の法則は神が指定したもので、人間の意思に無関係に存在するものであった。それを真に明らかにすることは不可能であるが、ガリレオ的機械学（力学）によってもっとも蓋然的な知識が得られるようなものであった。『ガリレオの機械学』の献辞を締めくくる次の主張を見よう。

もし、真理が声を出して話すことができたら、機械学以上に真理に近い学問はないと広く告白することでしょう⁷³⁾。

自然学においても他の応用的な学問においても、学者は基本原理を勝手に指定したうえで、考察を進めることはできない。自然学者がするべきことは、自然を観察し、数量的に記述し、有用な結果を導き出すことである。自然学者は基本原理を見出すこともできない。感覚に欺かれる可能性が大であるからである。

われわれは、本当の理由、確実性に達する知識に到達することはできません。もし、真

の解答というものがあるとしても、私たちが仮定した原因が本当に真実かどうかを疑うような状況や場合がいつでも存在するからです。ですからだれも、より教養のある人たちに、自然のさまざまな現象や結果について観察したことや、意見を聞く以外のことなどでききないです⁷⁴⁾。

ここに表出されているのは、懐疑主義的な態度を持って、観察による学問を構築するという態度である。そこから得られるのは、いかなる懐疑も受け付けない確実な知識ではない。われわれの手にすることは、原因はわからなくても、あるいは確実性から言えば劣っていても、実際に有用な知識であった。

われわれは光の本性や、光がなぜ反射するのか、なぜ屈折するのか、なぜ吸収されるのかを知ることはないかもしれないが、この現象を利用できる⁷⁵⁾。

このようなメルセンヌの態度はあちこちに散見される。

われわれは、色は光の反射と屈折の効果であることを知っているが、それぞれの色がどのような屈折によって生じるのかは知らない⁷⁶⁾。

われわれは熱の本性を知らないでも、あるいはなぜ磁気を帯びた針が動くことがあるのかを知らないでも、われわれはそれを記述し、正確に実験すれば、何度も繰り返すことができる⁷⁷⁾。

さらにメルセンヌは、このような知識を得るために、実験が役に立つと考えていた。単に感覚によって得られた知識は、懐疑の矛先を向けられやすいが、理性を用い、観察や実験をすることによって感覚的印象による誤謬を正すことができる、とも彼は主張している⁷⁸⁾。数量的な計測と、実験結果の正確な報告を重んじる、これ以降のメルセンヌの態度は、質的、あるいは因果論的、思弁的

な説明、つまり自然現象についての伝統的な説明とは一線を画している。弦の共鳴について機械学的な説明を与えたあとで、メルセンヌは次のように主張している。

人々は、自分たちの欠点を補うために、あるいは自分たちの無知への言い訳として、あるいは実際には何も知らないことを伝えるために、共感、反感、などの概念や隠在的な性質を導入してきました。いくつかの弦の共鳴は、それらが共通に持っている共感の比によって振動すると主張することと、実際にはその原因を知らないと主張することは、同じことなのです。共鳴する弦について、私が今まで説明してきたことからわかるように、共感は無知と混用されています⁷⁹⁾。

メルセンヌは確かに実験を重視していたが、より適切な実験が行われるためには、いくつかのことに注意する必要があった。メルセンヌが、実験を導く指針と考えていたものは何だったのだろうか。まず、実験は研究者間で合意が得られるまで繰り返し行うことができ、検証されうるものでなければならない。次に実験結果は他の学者によって確認されなければならない⁸⁰⁾。そして、異なる立場の人たちによって論争が起こったときにも、その議論を収めるのは実験であるべきだった。以上のような、検証可能な知識を公に求めていく、という態度が、メルセンヌのアカデミーを設立する動機の一つとなった。そして、実験によって学者間の共同作業として知識の追及を行う上で、上述の注意点に加えてさらに、実験の結果についても注意すべきことがあった。それは、実験的に得られた法則を、実験で考慮されていない場合にまで拡大して一般化してはならない、というものであった⁸¹⁾。これらの（制限つき）法則は、次の実験へと向かう作業仮説を作るのには役に立つであろうが、決定的なものとして受け取ることはできない、というわけであろう。これら

のことにして行われる実験に基づく知識の追及が、その後の実験科学の伝統に向けての重要な一步となつたことは疑いない⁸²⁾。

このような指針をもつて、メルセンヌ自身多くの実験に携わった。それは、自ら考案した実験であったこともあるし、別の学者の実験を検証する意味での実験であったこともある。ガリレオの実験の検証や、パスカルの名とともに記憶されている真空実験などがその代表例であった。そして、このような「実験科学」へと向かう過程で、次第に伝統的な学問、あるいはアリストテレス主義へ固執する態度は緩んでいった。

もしわれわれが、永遠不変の知、というアリストテレスによる自然学の定義にいまだに従っているとすれば、結局われわれは何も知らない、と言わざるを得ません⁸³⁾。

メルセンヌが言うには、結局、質を扱う古代の哲学者によってなされた試みは不十分である。それは、それらの諸原因を証明することができないからである。むしろ、われわれは自然世界を、数、直線、図形、重さなど、数学的に扱うことのできるものに制限して考えるべきである⁸⁴⁾。そしてメルセンヌにとって、数学は、自然界の普遍的な要素であって、理性の基礎として機能するものであった⁸⁵⁾。

メルセンヌの以上の主張を簡単に纏めてみよう。彼は、本質の解明を目的とする従来の自然学に対して懐疑主義的に反論し、人間は神の指定した真理に到達することはできない、としたうえで、人間のレベルで有用な知識の獲得、という実用主義的知識観をとる。それは宗教擁護としても実際の生活の場でも実用的であるはずだった。そしてそのような有用な知識の獲得をわれわれに可能にするのは、主に実験であった。学者間で情報交換がなされ、お互いに検証し合うことで信頼性を保ちながら蓄積される実験的知識は、数学的に処理し得る量的な知識を供給し、より蓋然的な

知識としてわれわれの実用に益する筈であったのである⁸⁶⁾。

このような方法論、いわば宗教的護教論に立脚した機械論とでもいうべき方法論に沿って、学問活動を行うには、従来のような個人による思索、実験では十分ではなかった。そこで、彼はかねてからの希望であったアカデミー建設へと動き出したのであろう。1634年がメルセンヌの方法論的な転換期であったとすれば、1635年に彼が、実際にその学問プログラムを実際に運用する場所としてのアカデミー創設に成功したのは、彼が新しく得た学問方法論に対して持っていた、そしてその方法論によって得られるはずの有用な知識に対して持っていた、並々ならぬ関心の表れと見ることもできよう。

4. 結論、「新科学」の制度化へ向けて

メルセンヌは修道士であった。彼はおそらく、自身のカトリックの信仰を疑ったことはなかったし、むしろあらゆる知識を援用して、それを守ろうとした。ルネサンス諸思想に対する彼の態度には、その動機がよく表れていると言ってよい。この面から見ると、彼は伝統的な、敬虔なキリスト教徒であったと言える。彼が、もし伝統的なキリスト教徒と違うところがあるとすれば、それは彼が援用した知識が「新科学」の知識であったということだけなのかもしれない。

しかし、このささいな違いは、大きな違いを産んでいくことになった。彼の思想、活動は、結果として「科学革命」あるいは「聖俗革命⁸⁷⁾」の推進者の役割を果たすものになっていったのである。これら革命を経るうちに、自然についての知識は次第に世俗的なものとなり、神は棚上げされた。これは、自然を説明するときに、メルセンヌ自身がとった態度であったといつてもよからう。この道は、一見、メルセンヌが意図的に備えたものであるかのように見える。1711年から2年間、

ボイル講演をすることになったデラム (William Derham, 1657-1735) は、メルセンヌ、ニュートン (Isaac Newton, 1642-1727), ボイル (Robert Boyle, 1627-1691) の3人と同じ伝統に属する人物と看做しているし、啓蒙主義の思想とメルセンヌの思想もまるで一本の糸で繋がるようにさえ思われてしまう程である。

メルセンヌの思想をもう一度振り返ってみよう。彼は、搖ぎないカトリック信仰を持ちつつ、人間の理性の限界をよく認識していた。真理はわれわれが所有するべきものでも、所有しうるものでもなく、ただ神が持つだけのものであった。「あらゆる種類の真理は神から発し、この真理は本質的であり、創造されたものでもなく、独立したもの⁸⁸⁾」であるはずである。そして、人間の感性はそれを認識することはできない。あらゆる懷疑が、人間の認識活動に攻撃を加えるからである。結局われわれはその懷疑的攻撃力の強さを認めなければならない。しかし、人間の知的活動はだからといって無用であるわけではない、という開き直りがポプキンのいう「構成的懷疑」の在り方である。「確実性」においては譲歩する態度を示しつつも、「有用性」を柱に据えて現象主義的に人間の知的活動を擁護していくことができるはずである。そのような態度を探ったメルセンヌにとって、ガリレオに代表される実験的知識は、非常に魅惑的なものであったろう。それは、完全ではないにしろ、一定程度の確実性を有し、現実に実用に益することがある。「本質」の探求を諦めたうえで、現象主義的に実用的な知識を求めていくメルセンヌのこの思想は、まるで我々の持つ科学技術の直系の先祖にも見えてくるのは、むしろ当然なのであろう。このような見方をした場合、このメルセンヌの思想は、F. ベイコン (Francis Bacon, 1561-1626) の思想に奇妙過ぎるほどよく似たものとなって現れてくる。ベイコンにおいても、懷疑主義の克服は大きな問題であったし、

さらにおもしろいことには、彼は超越的な真理の基準を求めるることを諦め、行為や実践の持つある種のプラグマティックな真理性に訴えていく、という方策を探っていた。メルセンヌも、自然の中に隠在的な力を認めない「機械論的」な知識そのものに、独立した価値を与えていたわけではなかった。そのような説明様式は、まず彼の宗教性によく合った。そしてさらによいことには、そのような知識は、実用されることができた。われわれは、あることが「なぜ」役に立つかはわからない場合も多いが、役に立つ、ということは知っているのである。そしてメルセンヌもベイコンと同様、ガリレオに代表されるような機械技術的知識の有用性に心を奪われていたのである。

メルセンヌをベイコンに擬して理解しようとすると試みは、さらにベイコンがロイヤル・ソサイエティへの道を備えたという点に注目すると、さらに示唆的なものとなる。メルセンヌも、以上に述べてきたような学問擁護を携えて、アカデミー建設へと向かい、それは現実のものとなったのである⁸⁹⁾。そればかりではない。フランスにできた王立科学アカデミーは、メルセンヌ・アカデミーの直系なのである。すれば、メルセンヌの思想だけでなく、彼の始めた学会もまた、近代的学問へと繋がるもののように思われてくる。細部の検討はここでは描くとしても、彼のアカデミーでは、知識は公共のものとされ、情報の公開と吟味の必要性が訴えられる一方で、学問の専門化、細分化が推し進められた。各研究者は、専門領域を持っているほうが望ましかった。そして、確実に知られた新しいことを積み重ねていくことによって、われわれの所有している有用な知識は増していくはずであった。そして、実用的な目的にかなう「確実な (=蓋然的な)」知識を得る方法は、実験とその結果の数学的処理であったのだ⁹⁰⁾。

このように、一修道士であったメルセンヌは、「科学革命」と呼ばれる時代の学問（「科学」）的

活動のさまざまな面に関わっていた。そればかりかそれを推進していた、とさえいえる。そしてメルセンヌは、宗教世界から学問的知識を締め出そうとする考えに対して、はっきりと反対の意見を表明するのである。

宗教生活から諸学問を消し去ろうとする人々は、背教者ユリアヌスのような人々です。彼は、諸学の光を奪い去ることによって、愚かになり、異教徒に対して自分たちを弁護することも、彼らの反論に答えることもできないようにするために、キリスト教徒が学問をすることを禁止したのです。私は、宗教から学問を消し去ろうという意見をとらない、と心から告白します。敬虔な人たちが、諸学問を完璧に知っているとすれば、神に近くのに大変有利であり、無知な人にはまったくわからないような多くのものから、靈的に得るものがあるでしょう⁹¹⁾。

メルセンヌは「宗教生活から学問を剥奪しようとする人」を非難しているが、現実には逆のことが起こった。彼が備えたかに見える道を、後の人々が進んでいくなかで、「学問から宗教性が剥奪」されることになったのである。この責任の、少なくとも一部は、メルセンヌに帰すべきものと考えるべきであろうか。

もともとイエズス会でもミニモ会でも、学問が独立の真理性和価値を持っていると看做されてはいなかった、ということを思い起こそう。それは、より高次の目的のために善用されるべきものであったに過ぎず、ましてや濫用されはならないものであった。

繰り返すが、メルセンヌが教育を受けた学校でも、彼が過ごした修道会でも、学問は学問自体としての意味や価値を付与されていなかった。学問というのは、宗教生活から切り離して自律的に存在し得るようなものではなかった、あるいは少なくとも、そのように存在すべきものではなかっ

た。ではメルセンヌは、学問を、それまでそれが内包されていた宗教世界から、自覺的に切り離そうとしたのだろうか。答えは明確に、否である。たとえ実験的知識の獲得に没頭したとしても、たとえ数学的知識に魅惑されたとしても、そして、たとえアリストテレスの教説を捨てたとしても、彼の有した実用主義的な知識観は、あくまでそれ自体が魂を救うようなものではなかったはずである。彼がアリストテレスから離れていたのはなぜであったか。アリストテレスが与えてくれるよりもより確実な自然観、世界観があったからではなく、より有用な、確実性という点からいえば、せいぜいより蓋然的な知識があったからである。宗教的枠組は変わらずに、その構成要素が入れ替わった、という説明のほうがより現実に近いのではないだろうか。

「有用性」という学問理念が持つ意味は、まさに重いと言わざるを得ない⁹²⁾。メルセンヌが「世俗化」への道を（部分的にでも）開くことになったとすれば、彼が実用主義的な学問観、知識観を抱くようになったからだ、と言えるのかもしれない。それは、カトリックの信仰と矛盾するような知識観でなかった。むしろ、宗教擁護としても機能するような土台の上に乗った学問理念であったのである。

文 献

- 1) メルセンヌの書簡は、*Correspondance du P. Marin Mersenne, Religieux Minime*, éditée par C. de Waard, R. Pintard, B. Rochot, A. Beaulieu. 17 vols. Paris : Beauchesne (vol 1) ; Presses Universitaires de France (vols. 2-4) ; Centre Nationale de la Recherche Scientifique (vols. 5-17), 1932-1988 (以下 CM と略記) に纏められている。それ以外の書簡についての書誌的情報については、Robert Lenoble, *Mersenne ou la Naissance du Mécanisme*, Paris : J. Vrin, 1971 (Seconde édition) XXXI～XXXVIIをまず参照すべきである。また、わが国では、1943年に森有正が、「近代科学の恩人マラン・メルセヌ教父」(『デ

- カルトよりパスカルへ』日新書院, 昭和18年。『森有正全集』筑摩書房, 1979, 第10巻, pp. 437 ~448に再録)として、おそらく主に上記書簡集第I巻所収のCornelis de Waardによる伝記‘Vie de Mersenne’を参考にして、メルセンヌを紹介しているのは、もっとも初期の紹介のうちの一つであろう。書簡の邦訳については、『増補版デカルト著作集』白水社, 1993, 『デカルト選集』創元社, 1951, など参照。
- 2) 原題は、F. Marini Mersenni Ordinis Minimorum S. Francisci de Paula Quaestiones celeberrimae in Genesim, cum accurata textus explicatione. In hoc volumine Athei, et Deistae impugnantur, et expugnantur, et Vulgatae editio ab haeriticorum calumnijs vindicatur. Graecorum, et Hebraeorum Musica instauratur. Francisci Georgii Veneti cabalistica dogmata fuse refelluntur, quae passim in illius problematibus habentur. Opus Theologicis, Philosophicis, Medicis, Jurisconsultis, Mathematicis, Musicis vero, et Catoptricis praesertim utile. Cum indice... Lutetiae Parisiorum, sumptibus Sebastiani Cramoisy..., MDCXXIII. Cum Privilegio Regis Christianissimi, et Doctorum approbatione.
 - 3) 原題は、Harmonie Universelle contenant la théorie et la pratique de la Musique où il est traité de la Nature des Sons et des Mouvements, des Consonances des Dissonances, des Genres, des Modes, de la Composition, de la Voix, des Chants, et de toutes sortes d'Instruments Harmoniques, par F. Marin Mersenne de l'Ordre des Minimes, à Paris, chez Sébastien Cramoisy ...MDCXXXVI. (実際には、第1巻が1636年、第2巻は1637年に出版された。)
 - 4) John William Draper, *History of the Conflict between Religion and Science*, New York ; D. Appleton & Co., 1874 (ジョン・W・ドレイパー『宗教と科学の闘争史』平田寛訳、社会思想社, 1978. 1948には、創元社からも翻訳されている。) Andrew Dickson White, *The Warfare of Science*, New York : D. Appleton & Co., 1876. A. D. White, *A History of the Warfare of Science with Theology in Christendom*, 2vols. New York : D. Appleton & Co., 1896. を参照 (ホワイト『科学と宗教との闘争』森島恒雄訳、岩波書店, 1939. は前者と後者から、それぞれ一部を抽出、翻訳したものである。) いわゆる、「ドレイパー・ホワイトテーゼ」の評価については、James R. Moore,
 - The Post-Darwinian Controversies : A Study of the Protestant Struggle to come to terms with Darwin in Great Britain and America, 1870-1900, Cambridge : Cambridge University Press. 1979, pp. 19-49. David. C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.) *God and Nature : Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, California : University of California Press, 1986 pp. 1-18, (D. リンドバーグ/R. L. ナンバーズ編『神と自然』渡辺正雄監訳、みすず書房, 1994, pp. 1-19)などを参照。
 - 5) メルセンヌが中等教育を受けた学校を経営していたイエズス会が、一方で中世以来の伝統を引き継ぎながら、他方で、「近代的」な面をも備えていたことは、頻繁に指摘されてきたことである。このことについては、2節、3節を参照のこと。
 - 6) メルセンヌの音楽論については、Frederick B. Hyde, *The Position of Marin Mersenne in Music History*, Ph.D. dissertation, Yale University, 1954. David Allen Duncan, *The Tyranny of Opinions Undermined : Science, Pseudo-Science and Scepticism in the Musical Thought of Marin Mersenne*, Ph. D. dissertation, Vanderveld University, 1981. Albion Gruber, 'Mersenne and Evolving Tonal Theory', in *Journal of Music Theory*, 19, (1970) pp. 36-67. Dean T. Mace, 'Mersenne on Music and Language', in *Journal of Music Theory*, 14, (1970) pp. 2-35. J. M. A. Lenihan, 'Mersenne and Gassendi', *ACOUSTICA*, 1, (1951), pp. 96-99.などを参照。
 - 7) William B. Ashworth,Jr. 'Catholicism and Early Modern Science', in David. C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.) *God and Nature : Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, California : University of California Press. pp. 136-166, (W・B・アシュワース・Jr.「カトリック思想と初期近代科学」川田勝, 渡辺正雄訳. D. リンドバーグ/R. L. ナンバーズ編『神と自然』渡辺正雄監訳、みすず書房, 1994, pp. 149-182).
 - 8) 「正面向き」の歴史研究、という概念については、村上陽一郎『科学史の逆遠近法—ルネサンスの再評価』中央公論社, 1982, pp. 33-54を参照。
 - 9) メルセンヌの生涯を概観するには、同僚コトゥによる伝記『神父マラン・メルセンヌ師の生涯』(F. Hilarion de Coste, *LA VIE DU R. P. MARIN MERSENNE THEOLOGIEN, PHILOSOPHE ET MATHEMATICIEN de l'Ordre des Pères Minims*, 1649)が、一次史料としては基本的なも

のである。この伝記は、P. H. Tamisey de Larroqueによって *Les Correspondants de Peiresc*, fasc. XIX Paris, 1894 (facsimile rpt., Geneva, 1972) の冒頭に再録された。(ちなみに筆者が参照したテクストは、ハーバード大学図書館蔵の1649年版である。) 以降メルセンヌについての伝記的記述は、本書を基本になされる。古くから伝えられているそれ以外の二次的な史料については、Robert Lenoble, *Mersenne ou la Naissance du Mécanisme*, Paris : J.Vrin, 1971 (Seconde édition), xvff 参照。今世紀に入ってから、一次史料に基づいて書かれた伝記的記述としては、Lenoble の前掲書、第1章「メルセンヌの生涯」(VIE DE MERSENNE, pp. 15-59) と Cornélis de Waard による伝記、「Vie de Mersenne」in CM, I. pp. xix-lv の2著が標準的研究。他には、P. J. S. Whitmore, *The Order of Minims in Seventeenth Century France*, Hague : Hartinus Nijhoff, 1967, pp. 140-154. William L.Hine, *The interrelationship of Science and Religion in the Circle of Marin Mersenne*, Ph.D. dissertation, University of Oklahoma, 1967, pp. 2-28. David Allen Duncan, *The Tyranny of Opinions Undermined : Science, Pseudo-Science and Scepticism in the Musical Thought of Marin Mersenne*, Ph.D. dissertation, Vandervild University, 1981, pp. 73-171などがある。また、CM, XVII, pp. 17-45にArmand Beaulieuによって付けられた生涯の概観を伝える史料についての説明があり、大変有用である。

- 10) Coste, *La Vie du R. P. Marin Mersenne*, p. 2-7 「若いときから立派な性格を示していました。彼は、敬虔な心を強く好み、あらゆる種類の不思議なものや高貴なものを理解することに対する気高い情熱を持っていました。というのは、彼はあまり口達者ではなかったので、正確なことしか話しませんでしたし、ほとんど出歩くこともなかったので、学校に行きたがったのです。つまり、彼はお祈りと勉学以外の、他のすべての訓練が嫌だったのです。その二つの課題は、彼に何の苦労も与えたことはありませんでしたし、彼が年をとるにつれて、勉学と祈禱の中にある魅力をますます知るようになりました。その結果、彼をそれらの幸福な仕事から引き離したときには、強制を必要としたのです。」
- 11) デカルトも学んだその学院で、メルセンヌが受けた教育は、彼のその後の人生に大きく影響を及ぼすことになった。この学院で、メルセンヌは、スマレスによる論理学、トレトゥス、フォンセカに

よる倫理学、アリストテレスの自然学、クラヴィウスの著書によって、数学、天文学、音楽などをルイ・ド・ラ・サール師の指導によって学んだ。また、哲学課程を終えた後は、エティエンヌ・ノエル師について、スコラ神学を学んだ。イエズス会の教育は、スコラ教育の伝統を受け継ぎながらも、人文主義的な色彩の濃いものであった。イエズス会の教育について詳しくは、Allen P. Farell, S. J. *The Jesuit Code of Liberal Education*, Milwaukee : The Bruce Publishing Company, 1938. George Ganss, S. J. *Saint Ignatius' Idea of a Jesuit University*, Milwaukee : The Marquette University Press, 1953. 高祖敏明「原初期イエズス会学校の教育-メッシナのコレギウムを事例として(1)」上智大学教育学科『教育学論集』, 15, pp. 19-41, 1980. 同「原初期イエズス会学校の教育-メッシナのコレギウムを事例として(2)」上智大学教育学科『教育学論集』, 16, pp. 1-32, 1981. 同「イエズス会学校」, 『ルネサンスの教育思想(下)』上智大学中世思想研究所編, 東洋館出版社, 1986, pp. 271-303. Sasaki Chikara, *Descartes's Mathematical Thought*, Ph. D. Dissertation, Princeton University, 1988, esp. pp. 19-53.などを参照。メルセンヌとの関わりについては、Peter Dear, *Mersenne and the Learning of the Schools*, Ithaca : Cornell University Press, 1988. が主題的に扱っている。またその後、激しい思想的闘いを交わすことになる魔術的知識のことを初めて知ったのもこの頃である。

- 12) 前者ではマリウス・アンボジウス (Marius Ambosius), ジョルジュ・クリトン (George Critton), テオドール・マルシル (Theodore Marsile) らの、後者ではアンドレ・ドゥ・ヴァル (André du Val), フィリップ・ドゥ・ガマッシュ (Philippe de Gamaches), ニコラ・イザンベル (Nicholas Ysambert) らの講義を聴講した。彼は、「これらの大人物たちのもとで、他の諸学問がその召し使いに過ぎぬ、諸学の女王のような神学の講義を受け、そこで常に賞賛されました。また、彼は絶えず、生活の大部分を聖なる仕事に用い、聖書や、ギリシアまたはラテン教父〔の書物〕を読まずに過ごす日など一日たりともありませんでした」, *Ibid.* p. 8.
- 13) この頃のメルセンヌの生活ぶりについては、「その徳性と謙虚な学識によって、それら二つの修道院のすべての修道士を感化しながら、まったく聖人のように過ごし、彼らに、謙虚、悔悛、従順、慈悲の立派な模範を示しました」, *Ibid.* p. 12. 「謙虚な生活を送り、出世欲もなく、本と学問

を愛していたので、ミニモ会の中で静かに暮らすことになりました。彼の心には清純さが行き渡っていたので、彼は修道院の中で、学問と徳を身につけることのみを求めていました。ただ、それをよく身につけて、実践し、敬虔な人々、また学識のある人々との会話を欲することだけが、彼の仕事であり喜びであったのです」*Ibid.*, p. 12などと報告されている。

- 14) P. J. S. Whitmore, *The Order of Minims in the Seventeenth Century France*, p. 124.
- 15) Coste, *La vie*, pp. 16-24. 教師としてヌヴェルに送られていた1614年から、本格的な著作活動の始まる1623年までの間のことについては余り情報がないが、次に見るように23年からの5年間の間に5冊の大著を出版したことから考えると、その間に膨大な量の読書をし、おそらくは原稿を書きためていたのであろう。その後の著作には、古典から聖書、また最新の知識まで大変広い範囲の学問的知識が、時にはやや乱雑にではあるが、並べられていることを見てもこの推測は蓋然的であろう。
- 16) メルセンヌの著作活動について、少し長くなるがコトゥに拠って、その概観を理解しておこう。メルセンヌは、パリの王立広場近くの修道院に戻されるとすぐに、「聖書についての勉強にふけり、すぐに『創世記注解第1巻』(*Premier Tome des Commentaires sur la Genèse*)を書きました。それは1623年に日の目を見、またそれはパリの大司教ジャン・フランソワ・ド・ゴンディ (Jean François de Grancy) 氏に捧げられました。同じ頃彼はまた、『ジョルジュ・ヴェネッティの諸問題についての考察』(*Des remarques sur les Problèmes de George Venetien*)も書きました。

同年、彼はフランス語で2冊の小さな宗教書、すなわち『靈的生活概要 (*L'Analyse de la vie spirituelle*)』と『理性の用途 (*L'usage de la raison*)』を世に問いました。さらにその不幸な時代に不敬虔が増大していること、また神が、幾人かの若い自由思想家によってひどく卑しめられているのを見て、彼は、すでに創世記についての注解の中でラテン語ではそれをしていましたように、フランス語で彼らの忌まわしき道徳基準を論駁しようと強く思いました。そして、彼は以下の題で2部で2巻に分かれている本を公けにしました。

『哲学と神学から採られた論拠によって正確に反論され、打破される、当世の理神論者、無神論者、さらに巧妙な自由思想家の不敬虔 (*L'impiété des Deistes, des Athées, et des plus subtils libertins de ce temps, combattue et renversée de point en point par raisons tirées de la Philosophie et*

de la Théologie)』

彼はまた、『諸学の真理 (*de la Vérité des Sciences*)』を世に問い合わせ、その中で懷疑論者あるいはピュロン主義者の意見を論駁し、また数学者のために、ラテン語で『数学の概要または目録 (*De l'Abregé ou Inventaire de la Mathematique*)』という題で、もう1冊は、フランス語で『普遍音階学 (*de l'Harmonie Universelle*)』という題で、2冊の小著を出しました。

続いて彼は、同じ言語（フランス語）で何冊もの別の本すなわち、『未聞の問題集 (*Les Questions inouïes*)』『音階学問題集 (*Les Questions Harmoniques*)』『神学・自然学・倫理学・数学問題集 (*Les Questions Theologiques, Physiques, Morales, et Mathématiques*)』『ガリレオの機械学 (*Les Mécaniques de Galilée*)』『音階学序論 (*les Préludes De l'Harmonie*)』を書きました。

ラテン語の『音階学についての12巻 (*Douze Liures de l'Harmonie*)』は、彼が彼の死亡のほんの数か月前の第2版で校訂増補をしました。

しかし、彼は祖国を愛し、彼の国をすっかり尊敬していたので、その本を、われわれの言語（フランス語）で、フォリオ版の大きな2巻本『音楽の理論と実践を含む、普遍音階学 (*L'Harmonie Universelle contenant la Theorie et la Pratique de la Musique*)』を出しました。

第1巻で彼は、音、テンポ、協和、不協和、様式、音階、作曲、歌声、旋律、またあらゆる種類の楽器を図入りで論じました。

第2巻は、装飾的対立法における協和と不協和の実習、歌唱の教育・学習法、旋律の装飾、アクセントのある楽曲、リズム、音律、フランスの韻律、ピンドロスやホラチウスの頌歌の歌唱法、和声法の有用性、また自然学的または数学的な、多くの新しい観察を含んでいます。

四つ折のラテン語版の3巻本の第1巻は、以下の論考を含んでいます。すなわち、1. フランスの値に換算されたヘブライ、ギリシア、ローマの寸法、重さ、貨幣。2. 水や空気の運動や圧力によって生じる現象あるいは自然の神秘。

- 3. 水の上や下を航行したり進んだりする方法。天然磁石についての論考を含む。
- 4. 思弁的、また実践的な音楽について。
- 5. 理論、また実践による機械学についての論考。
- 6. において彼は、弓や弩の力によって押し込まれられた砲弾、矢、槍の投射を説明する。

第2巻は、『普遍幾何学または混合数学概要 (*Abregé de la Géometrie Universelle et des Mathématiques mixtes*)』を含む。

まず、『ユークリッド原論』15巻、また、二つの王立修道院の〔信徒の〕長で、当時のユークリッド、デール (François de Foix de Candale Euéque d'Aire) 氏の3著作を含む。

2. ピエル・ド・ラ・ラメー (Pierre de la Ramée) すなわちラムス (Ramus) の幾何学についての27巻。
 3. アルキメデスの諸著作。つまり、球と円柱について、円、円錐状体や球状形など計測についての2冊。
 4. アルキメデスの補足。
 5. テオドシウスの球についての3著作、またメネラオスの3著作、マウロリクスの3著作。球についてのアナトリウス [の著作]、地上に住む人間の様々な住み家についてのテオドシウス [の著作]。ユークリッドの現象と宇宙形状誌。アポロニウスの円錐曲線についての4巻。セレニウスの円錐面についての2巻。ミュドルジュ氏の円錐曲線についての4著作。パッポスの集成の8巻の短縮版、そこにはユークリッドの仮説も見られる。ヴィエト氏の角の切断と多くの別の論考。機械学についての2著。そこには、コマンディーノとリュック・ヴァレリウスの諸著作がある。固体の重心についてなど。光学の7巻。そこで彼は、反射光学、屈折光学、パララックス、また様々な面や屈折を説明している。
- 第3巻には、宇宙の構成についてのサモスのアリストタルコス [の論考]と物理数学的な新しい観察。
- ここで、われわれの修道会の修道士で、パリ人の神父ニスロン (R. P. Jean François Niceron) が『光学魔術 (Thaumaturgue Optique)』 [の執筆] 中に死去したので、われわれの神父マラン・メルセンヌ師は、そのラテン語の書物と、エクス＝アン＝プロヴェンスの修道院で、1646年の9月22日に、彼を知っており、神学や哲学、数学における彼の卓越した学識や、他の秀れた性質のために彼を愛していた学者や好事家に大変惜しまれながら、33歳で死去したこの修道会のフランソワを見直す [思い出す] ための労をとったことを見逃してはなりません。」 (書名等の原綴は現代的に改めていない) Coste, *La vie*, pp. 16-24.
- 17) CM, I, p 5, pp. 40-41.
 - 18) 原題は、*La Vérité des Sciences, contre les septiques (sic) ou Pyrrhoniens, dédié à Monsieur Frère du Roy, par F. Marin Mersenne de l'Ordre des Minimes*. A Paris, chez Toussaint du Bray ...1625.
 - 19) Lenoble, *Mersenne ou La Naissance du Méca-*

nisme

- pp. 336-382.
- 20) 原題はそれぞれ、*Questions inouyes ou Recreation des Scavans. Qui contiennent beaucoup de choses concernant la Theotie, la Philosophie et les Mathématiques*. A Paris, chez Jacques Villery, 1634. Avec Privilège du Roy. *Questions Harmoniques, dans lesquelles sont contenues plusieurs choses remarquables pour la Physique, pour la Morale, et pour les autres sciences*. A Paris, chez Jacques Villery, 1634. Avec Privilège du Roy. *Les Questions theologiques, physiques, morales, et mathematiques. Où chacun trouvera du contentement, ou de l'exercice. Composées par L. P. M..* A Paris, chez Henry Guénon, 1634. Avec Privilège et approbations. *Les Mechaniques de Galilée, Mathématicien et Ingenieur du Duc de Florence. Avec plusieur additions rares, et nouvelles, utiles aux Architectes, Ingenieurs, Fonteniers, Philosophes, et Artisans. Traduites de l'Italien par L. P. M. M..* A Paris, chez Jacques Guénon, 1634. Avec Privilège et approbation. *Les préludes de l'Harmonie Universelle, ou Questions curieuses utiles aux Predicateurs, aux Theologien, aux Astrologues, aux Medecins, et aux Philosophes. Composées par L. P. M. M..* A Paris, chez Henri Guénon, 1634. Avec Privilège et approbation.

- 21) Lenoble, *op. cit.*, pp. 50-51

- 22) *Idid.*, p. 52.

- 23) 「メルセンヌ・アカデミー」については、Jean-Robert Armogathe, 'Le groupe de Mersenne et la vie académique parisienne' *XVIIe Siècles*, pp. 131-139, 1991. C. H. Bouhhors, 'Pascal ; L'académie Parisienne et la crise de 1654' *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 36, pp. 231-241, 1929. Harcourt Brown, *Scientific Organizations in Seventeenth Century France (1620-1680)*, 1934, New York : Russell & Russell. Alistair C. Crombie, 'Marin Mersenne (1588-1648) and the Seventeenth-Century Problem of Scientific Acceptability,' *Physis*, 17, pp. 186-204, 1975. Bernard Rochot, 'Le P. Mersenne et les relations Intellectuelles dans l'Europe du XVIIe Siècles' *Cahiers d'Histoire Mondiale*, 10, pp. 55-73, 1966. P. Sergescu, 'Mersenne l'animateur (8 Septembre 1588-1er Septembre 1648)' *Revue d'Histoire des Sciences*, 2, pp. 6-12, 1948などを参照。

- 24) コトゥは、メルセンヌの最期について、次のように語っている。「その本、また同時に『創世記注

解』第2巻、聖マタイについて別の著作や真空についての継続的な実験に携わっているとき、1648年7月27日に、おそらく偽肋膜炎の発病に気付かなかったために、彼は病気になりました。ほんの数日後、彼の脇腹の痛みがやわらがず、日に日に増していくのを見て、地上の生活から永遠至福〔の生活〕へと移っていく覚悟をしました。といふのは、大部分の人たちに恐ろしいものに見える死は、彼の目には、美しく魅力を持って現れたのでした。彼は、彼の人生全体について正確な全体的告解をすることによって心を清め、その心からの慈愛をもって、彼の人生の終りを毅然として受け入れました。彼はその告解をノートル・ダム・ドゥ・ネージュ (Notre-Dame des Neiges) の祝日、8月5日に私に聽かせたのでした。かくして彼は、何度も聖体拝領や、臨終の聖体拝領、また彼が切に願い、信じられないほどの熱情と熱い信仰をもって受けた終油の秘蹟によって、心を強めました。彼は、肉体と精神の間の戦いにおいて神軍によって大変強化され、ただ十字架につけられたイエス・キリストを身につけるためにすべての人間的な欲望を完全に捨て去っていたので、その極めて大変な時に、申し分のないキリスト教徒、また眞の修道士となつたのです。修道会長ジャン・アヴリ (Jean Auury) 尊師と王立広場近くのパオラの聖フランチェスコ修道院のすべての修道士たちは、メルセンヌが病気であった37日の間メルセンヌを助け、彼が人生を終えるのを見届けて、彼の心の異常なまでの力に再び感服したのでした。病の日々も終りの頃、印刷中であった本に関する彼の意向を述べ、彼の部屋にある禁書を束ねるように修道院長に頼んだあとは、彼の自由な精神は、もはや天国への道を開けることしか考えていました。

かく生き、パオラの聖フランチェスコのミニモ会修道院修道士、神父マラン・メルセンヌ師は、1648年9月1日、60年よりは8日少なく生きて、かく亡くなつたのでした。彼はそのうち37年を修道会で生活し、それ〔その年月〕を、神への祈禱、勉学、また、メルセンヌの学識のゆえだけでなく、彼の柔軟さや謙虚さ、また他の優れた性質のゆえに彼を大変尊敬しており、彼をして豊かな学識を持ったあらゆる人を尊敬せしめた、あらゆる職業の学識のある多くの人々と口頭や文書で会話をすることに使つたのです。…

彼は、彼を知る大人からも子供からも、すべての人々に悔やまれました。また、彼は話している誰に対しても、私には理解できないほどの心からの優しさを与えました。彼の話はまったく愁いに

満ちたものではなく、むしろある種の無邪気さや、大変魅力的な優しさによっておもしろくされていましたので、まるで心の柔軟に支配されているかのようでした。実際、世界中が彼の会話のおもしろさを愛していました。」Cotes, *op. cit.*, pp. 25-29.

- 25) 故郷ラ・スルティエル (La Soultière) からパリへの旅路でたびたび立ち寄ったル・プレシー・ドゥ・トゥール (Le Plessis de Tours) のミニモ会修道院で深い感銘を受けたことが原因であった、と推測されている。そこでは修道士たちが非常に敬虔で、大変親切にもてなしてくれたのであった。Coste, *La vie...* p. 10
- 26) 以下、ミニモ会の歴史、性格については、前記のメルセンヌについてのいくつかの伝記的記述の中で、特に P. J. S. Whitmore, *The Order of Minims in Seventeenth Century France*, Hague : Martinus Nijhoff, 1967に詳しい。
- 27) William Ashworth, 'Catholicism and Early Modern Science', p. 138., William L. Hine, *The Interrelationship of Science and Religion in the Circle of Marin Mersenne*, Ph. D. Dissertation, University of Oklahoma, 1967, esp. p. 15.
- 28) Whitmore, *op. cit.* pp. 111-119.
- 29) *Ibid.*, pp. 158-198.
- 30) M. Lesguiller, *Ratio Studiorum* (Paris, 1639). 引用は、*Ibid.*, p. 261による。
- 31) Mersenne, *La Vérité des Sciences*, unnumbered Introduction. また、Boria Vittorio, *Marin Mersenne : Educator of Scientists*, Ph. D. Dissertation, The American University, 1989, p. 52, n 63.
- 32) Mersenne, *La Vérité des Sciences*, p. 125.
- 33) *Ibid.*, pp. 62-66参照。
- 34) Peter Dear, 'Marin Mersenne and the Probabilistic Roots of Mitigated Scepticism', *Journal of the History of Philosophy*, 22, pp. 173-205, 1984. Dear, *Mersenne and the Learning of the Schools*, pp. 9-48参照。
- 35) Mersenne, *op. cit.*, pp. 558-9.
- 36) *Ibid.*, p. 748. Dear, *Mersenne and the Learning of the Schools*, p. 11参照。
- 37) *Ibid.*, p. 750.
- 38) Dear, *op. cit.* pp. 9-47.
- 39) Mersenne, *op. cit.*, pp. 119-120.
- 40) *Ibid.* pp. 109-110.
- 41) William Lewis Hine, *The Interrelationship of Science and Religion in the Circle of Marin Mersenne*, p. 11 ff.などを参照。イエズス会のスコラ主義は、当然トミズムを中心としたものであった

- が、必ずしも教条的なものではなかったことが知られている。
- 42) 1562年にセクストゥス・エンペイリコス (Sextus Empiricus) の『ピュロン哲学の概要』、1569年に『諸学者反駁』が相次いでラテン語に訳されたことに端を発する「ピュロン的危機」がフランス思想界、宗教界に対して与えた衝撃の大きさは、ここで改めて強調するまでもない事柄である。対抗宗教改革の推進者によって訳されたこれらの書物を通じて持ち込まれた「懷疑主義思想」は、個人の聖書解釈を基礎とするプロテスタント思想を独断論として退けるためのカトリックの武器として強力な威力を發揮した。しかもしとより、懷疑論の持つ批判力は、プロテスタント思想のみならず、スコラ主義、アリストテレス主義をはじめ様々な思想に対して同様に破壊的な力を持つものであった。
- 恐らく30年戦争の勃発の影響を受けて起こった思想界の混乱の時代、スピングによって「フランス思想界の危機」と呼ばれた1619-25年の間には、パリ大学、パリ高等法院など権力側が無神論者とおぼしき者を火刑に処し、あるいは追放し、反アリストテレス的鍊金術の教授を禁止するなどの強行手段でるが、もはや中世以来の知的コスモスの崩壊は押し留めようはなかった。ポプキンが、近代科学の認識論的側面の成立に重要な役割を果たしたと見るガッサンディが、『アリストテレス主義者に対する逆説的研究原綴』の第1巻を出版したのは1624年、まさにこの「危機」のさなかであった。そして彼のアリストテレス批判の支柱としてもやはり、懷疑論が存在していたのである。John S. Spink, *French Free-Thought from Gassendi to Voltaire*, London : Athlone Press, 1960, esp. p. 6ff. 参照。
- 43) Mersenne, *op. cit.*, p. 13-14.
- 44) Mersenne, *op. cit.* p. 15f.
- 45) 佐々木力『科学革命の歴史構造』岩波書店、1985, p. 110-111 (講談社学術文庫版、1995, pp. 166-167).
- 46) *Ibid.* p. 57.
- 47) *Ibid.*, preface.
- 48) *Ibid.*, preface.
- 49) Richard H. Popkin, *The History of Scepticism from Erasmus to Spinoza*, Berkeley : University of California Press, 1979., (『懷疑』野田又夫・岩坪紹夫訳、1991) Idem, 'Father Mersenne's War against Phrythonism' *Modern Schoolman*, 34, pp. 61-78. など、ポプキンの諸論考を参照。
- 50) Popkin, *The History of Scepticism*, pp. 130-131.
- 51) Dear, *Mersenne and the Learning of the Schools*.
- 52) Mersenne, *Ibid.*, dedication.
- 53) Mersenne, *Questions Inouyes*, question XIII.
- 54) Mersenne, *La Vérité des Sciences*, p. 277.
- 55) *Ibid.*, p. 275.
- 56) *Ibid.*, p. 266.
- 57) Mersenne, *Questions theologiques*, p. 11.
- 58) Mersenne, *La Vérité des Sciences*, p. 730.
- 59) メルセンヌの数学観に対する、あるいは17世紀思想界一般に対するイエズス会の数学思想の影響については、John L. Heilbron, *Electricity in the 17th and 18th Centuries : A Study of Early Modern Physics*, Berkeley : University of California Press, 1979. Chikara Sasaki, *Descartes's Mathematical Thought*, Ph. D. Dissertation, Princeton University, 1988. Peter Dear, 'Jesuit Mathematical Science and the Reconstruction of Experience in the Seventeenth Century', *Studies in History and Philosophy of Science*, 18-4, pp. 133-175, 等を参照。
- 60) Mersenne, *Quaestiones in Genesim*. L. Hine, *The Interrelationship of Science and Religion in the Circle of Marin Mersenne*, p. 31.
- 61) 「ルネサンス自然主義」という言葉は、この種の諸思想一般、スコラ的な意味でアリストテレス主義でも、ガリレオやベイコンなど、「近代科学」的思想でもない思想一般を括るために使われることが多いが、「ルネサンス魔術」と区別しておくことは重要である。この両者は多くの史家によって渾然一体として用いられることが多いが、メルセンヌは『創世記問題集』の中でこの両者を別々の場所で論じており、それぞれに対して別の危険を察知し、それ相応の批判を展開しているからである。従って予め「自然主義」と「魔術」を簡単に定義しておこう。「自然主義」は、「自然の外にはいかなる力も仮定せずに自然現象を説明する態度」と考えることができる。ここで「自然」という言葉の中には、啓示に対するものとしての意味も込められている。例えば、自然主義者は、自然現象の中には天使も悪魔も存在しないという。なぜなら、それらは自然理性によっては説明できず、信仰によってのみ受け入れられるべきものだからである。彼らにとって、自然現象は自然的に説明されるはずであったのだ、それに対して、「ルネサンス魔術」は、天使や悪魔の存在を認め、自然内での出来事の原因を、それら自然外の原因と結びつけて説明する傾向を持つ思想とされる。William L. Hine, 'Marin Mersenne : Renaissance Naturalism and Renaissance Magic', in

- B. Vickers ed. *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance*, Cambridge : Cambridge University Press, 1984, pp. 165-176. 参照.
- 62) Spink, *op. cit.*, pp.29-31.
- 63) Hine, *The Interrelationship...*, p. 47.
- 64) *Ibid.* p. 52.
- 65) Mersenne, *op. cit.*, pp. 541-2., Hine., *op. cit.*, p. 59 ff.
- 66) アシュワースは、このような自然観を、メルセンヌの「機械論哲学」と呼んでいる。Ashworth, *op. cit.*, p. 138. 「機械論哲学」という語は、様々な連想を持つ言葉であるが、メルセンヌの機械論、という場合には、ポプキン、ディアも言うように、一つの世界観であるというよりはむしろ、新しい学に向けての一つの企図のようなものと捉えておくのが良かろう。だから、世界は原子からできているか否か、というような世界観的考察は必要とされなかったのであろう。それは、より具体的には、後に見るように、実験と観察、さらにそれらの結果に定量的、数学的な処理を施すことによって、自然についてより蓋然的な知識が与えられる、という自然学研究計画に繋がった。Popkin, *The History of Scepticism*. Dear, *Mersenne and the Learning of the Schools*. ちなみにメルセンヌと原子論との関わりについては、Howard Jones, *The Epiculian Tradition*, 1989, Routledge, esp. pp. 169-171などを参照。
- 67) 魔術についての議論の詳細については、紙幅の都合上ここでは扱わなかったが、概観を与えるものとしては、William L. Hine, 'Marin Mersenne : Renaissance Naturalism and Renaissance Magic'. Idem, *The Interrelationship of Science and Religion in the Circle of Marin Mersenne*などを参照。
- 68) Francis A. Yates, *The French Academies of the Sixteenth Century*, London : The Warburg Institute, 1947, p. 164. この中で有名なものに、いわゆるフラッド・メルセンヌ論争がある。これについては、Frances A. Yates, *Rosicrucian Enlightenment*, 1972, Routledge (『薔薇十字の覚醒』山下知夫訳、工作舎、1986) を参照。
- 69) Lenoble, *Mersenne ou...*, esp. 336-383 : 佐々木力『科学革命の歴史構造』岩波書店、1985., p. 110参考。
- 70) Lenoble, *op. cit.* p. 33, 参照.
- 71) Mersenne, *La Méchaniques de Galilée*.
- 72) Mersenne, *Questions inouyes* など参照.
- 73) Mersenne, *La Méchaniques de Galilée*, preface
- 74) Mersenne, *Questions Théologiques*, p. 18.
- 75) *Ibid.* p. 63.
- 76) *Ibid.* p. 63.
- 77) Lenoble, *op. cit.* p. 394, 参照.
- 78) Mersenne, *Questions Harmoniques*, p. 198, 217
- 79) Mersenne, *Questions inouyes*, p. 63.
- 80) Lenoble, *op. cit.*, p. 365, 参照.
- 81) *Ibid.*, p. 357, 参照.
- またディアの近著 Peter Dear, *Discipline & Experience, Chicago : The University of Chicago Press*, 1995. esp. pp. 129-138も参照.
- 82) Alistair C. Crombie, 'Marin Mersenne (1588-1648) and the Seventeenth-Century Problem of Scientific Acceptability' *Physis*, 17, pp. 186-204, 1975.
- 83) Mersenne, *Questions inouyes*, pp. 69-71, また, *Questions Théologiques*, p. 9にも同様の主張が見られる.
- 84) Mersenne, *Questions Théologiques*, p. ai.
- 85) Mersenne, *Questions inouyes*, p. 132 : Hine, *Interrelationship...*, p. 214 参照.
- 86) パオロ・ロッシは、メルセンヌにとっては、「現象の記述的知識と機械的技術の実践は新科学の特徴的な構成要素であった」と述べ、さらに以下のように続けている。「神は技術と科学が「実践に移される」ことを望む。あらゆる科学は神からわれわれに贈られたものであり、この贈り物は「単に理論家の精神の楽しみのために」贈られたのではなく、あらゆる科学が「他の者の役に立つことを目指して、また第一の至高なる製作者である神の名誉のために」営まれるべきなのである。技術を通じて人間は「作り出す」ことができるようになり、静力学、水力学、空気力学は「人々が神のもっとも称賛されるべき仕事も模倣できると思われるほどに並外れた成果を生み出す。」それらによって「あらゆる種類の物体を移動させ…支柱のない橋を建造し、惑星や星辰の運行を小さな球上に再現することが可能になる。」これは、本論の主旨と概ね一致する見解である。Paolo Rossi, *I Filosofi, e le Macchine, 1400-1700*, Milano : Giangiacomo Feltrinelli Editore, 1962 (『哲学者と機械』伊藤和行訳、学術書房、1989, pp. 123-124).
- 87) 「聖俗革命」という歴史的概念装置については、村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』、新曜社、1976, 参照.
- 88) Mersenne, *La Vérité des Sciences*, p. 108
- 89) この、いわゆる「メルセンヌ・アカデミー」には、パスカル父子、ミドルジュ、ロベルヴァル、デザルグ、ガサンディ、デカルト、フェルマ、ホイヘンスら我々から見て錚々たるメンバーが集ま

- っていた。
 90) 注23参照。
 91) Mersenne, *Harmonie Universelle*, Paris, p. 20.

- 92) 佐々木力『近代学問理念の誕生』岩波書店,
 1992, esp. 1-32, 454ff.

The Defence of Science by Fr. M. Mersenne

Masaru KAWADA

(The University of Tokyo, Graduate School)

Marin Mersenne (1588-1648) is generally known by his vast correspondance with prominent scholors of his age, especially with René Descartes, and by his academy. But he, a Minim monk, was both a faithful Catholic and a promulgator of new sciences promoted by Galileo, Descartes, Gassendi, etc. This, seemingly contradicted character he bore, is a main theme of the paper. That is, in this, the reason that Mersenne promoted modern sciences or that he rejected naturalistic and magical ideas as heresy is explored.

Mersenne, educated by Jesuits in his school days in Paris, inherited the legacy of Scholastics, but as was not often the case with Jesuits, not dogmatically. He attacked Vanini, Veneti, etc, from the Catholic standpoint, and in the attack, the distinction between natural and supernatural gave him a firm foundation. But

toward the knowledge of nature, which would give us an aid to become a good believer, he seems to have had a mitigated sceptical position in the age of intellectual crisis, which led his mind to gather as many probable opinions as possible and check them up by experiments with the aid of reason. This idea is expressed in his many monographs, especially in five works of 1634, what Lenoble called, *Le Discours de la Méthode* by Mersenne, therefore this argument of ours is also based on the analysis of those books. All in all, leaving the traditional Catholic scholastics, he gradually became more concerned with new sciences which seemed to him more probable than traditional scholastic Aristotelianism, and the more probable ideas become, he thought, the better life all believers would lead.

[技術史シリーズ 第15回]

1-アミノアントラキノン製造法の変遷

——日本における無公害型製造法の開発——

上 仲 博

1. はじめに

1856年ロンドンの王立化学カレッジにおいて W. H. Perkin (1838-1907) が全くの偶然から紫色染料モーベインを作り出したのを契機として¹⁾、ヨーロッパとくにドイツ、イギリス、フランスで新しい染料開発競争の幕がきっておとされた。一方、同時に当時広く使用されていた天然染料藍や茜の構造を明らかにし、ついで人間の手によってこれら天然染料を合成しようという動きもあらわれた。わが国において徳川幕府より朝廷へ大政が奉還され日本が近代国家への第一歩を踏み出した1868年、C. Graebe (1841-1927) と C. Liebermann (1842-1914) によって茜の構造が1,2-ジヒドロキシアントラキノンであることが明らかにされた²⁾。この報告こそが染料分野にアントラキノン骨核が存在することを明らかにした第1報となったのである。この発見をきっかけとしてアントラキノン骨核を含む染料がつぎつぎに合成されていった。この系列の染料は濃色の染色物に仕上げにくいという欠点を有しているにもかかわらず、鮮明に染め上げられ、かつ堅牢度は抜群であり、さらに染めやすいため、媒染、酸性、塩基性、建染、分散、反応染料として綿、羊毛、絹、アセテート、ポリエステル、ナイロン、アクリル繊維、織物の染色に幅広く用いられ、現在でも染料業界の大きな分野をしめている。また、顔料としても耐候性のすぐれた塗料用原料などとして重要な地位をしめている。

1995年9月28日受理

このようにしてアントラキノン骨核を持つ多くの染顔料が開発されるにつれ、1-アミノアントラキノンが染顔料製造分野において重要な地位をしめるにいたった。

以下、この1-アミノアントラキノンの工業的製造法の変遷について説明を加えたい。

2. 1-アミノアントラキノンの工業的製造法の変遷

2.1 ニトロ体経由法（旧法）*

アミノ基の導入に際して普通用いられる方法は、まずニトロ化し、ついでニトロ基をアミノ基に変える方法である。

事実、染料分野における先駆的企業であるBayerでは早くも1899年（明治32年）12月ニトロ体を経由する方法での生産を開始し、1904年までこの方法を継続している。生産量の推移は第2-1-1表に記載のとおりである³⁾。

第2-1-1表 Bayerにおける1-アミノアントラキノン生産量³⁾
(ニトロ体経由法(旧法))

年	生産量
1899	0.006トン
1900	3.9
1901	2.5
1902	5.3
1903	5.4
1904	1.9

* ニトロ体経由の方法については、後述するように前述の方法と異なった方法がその後開発されているので、Bayerによって1899年に開発された方法を旧法と称することにする。

2.2 スルホン酸経由法

ニトロ体経由法（旧法）について現在の技術水準から判断すると、1-アミノ体の純度は70ないし75%しかなく、色調も赤よりむしろ褐色に近く、品質上不満足なものであったと考えられる。

当然この点についてBayerは不満を有していたのであろう、より品質のすぐれた1-アミノアントラキノン合成への努力が続けられた。しかし、当時の技術水準ではニトロ体経由法（旧法）で1-ニトロ体あるいは1-アミノ体を分離することはきわめて困難であった。種々検討を続けていく中で、アントラキノンと濃硫酸を反応させた際通常2-位置がスルホン化されるのに対し、水銀

または硫酸水銀の存在下に反応した場合には選択的に1-位置がスルホン化されてアントラキノン-1-スルホン酸がえられるという新しい事実が見出された。さらに、アンモニアと反応させると1-アミノアントラキノンになる方法が1902年Bayerによって生み出され、特許出願された。1904年この方法について試製造が行われてその有効性が確認された後、1905年より本格的生産にはいり、第一次世界大戦直前の1913年には生産量24.3トンに達している³⁾。

1904年より1920年にかけてのBayerでのスルホン酸経由法による生産量は第2-2-1表に示すとおりである³⁾。

以下にスルホン酸経由法について詳細に説明する。まず、スルホン化については第2-2-1図のように進行する。

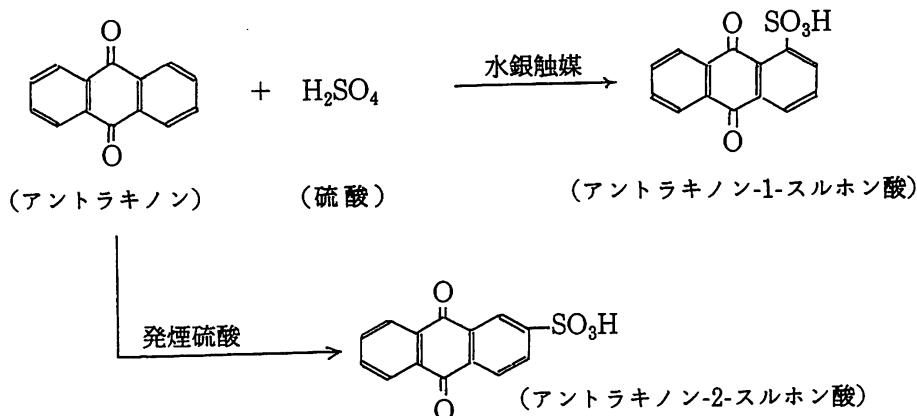
特許⁴⁾によれば発煙硫酸に硫酸水銀を投入、ついでアントラキノンを加え120°Cでスルホン化する。反応終了後、塩化カリ水溶液を加えアントラキノン-1-スルホン酸カリ塩として取り出す。アントラキノンの反応率は40%，消費アントラキノンに対し73%の収率でアントラキノン-1-スルホン酸カリがえられる。

ついでアミノ化反応にはいるが、特許⁵⁾によれば第2-2-2図のように反応は進行する。

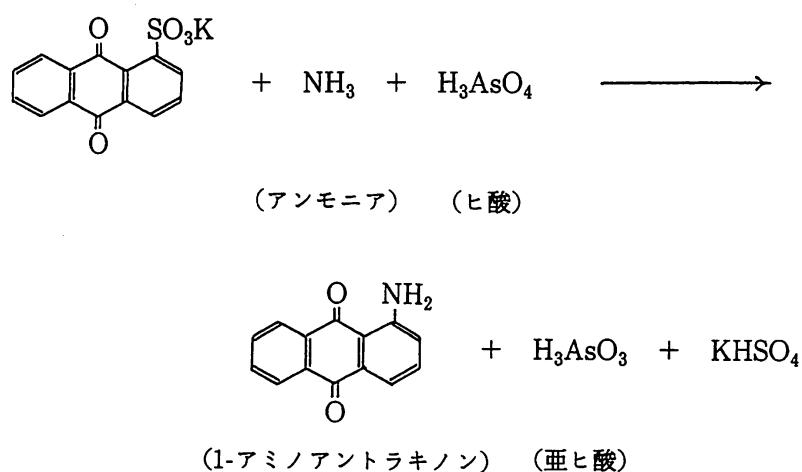
すなわち、前工程でえられたアントラキノン-

第2-2-1表 Bayerにおける1-アミノアントラキノン生産量³⁾
(スルホン酸経由法)

年	生産量
1904	0.046トン
1905	1.3
1908	9.2
1911	21.3
1912	24.2
1913	24.3
1914	23.3
1915	16.2
1920	11.8



第2-2-1図 アントラキノンのスルホン化反応



第 2-2-2 図 アントラキノン-1-スルホン酸のアミノ化反応

1-スルホン酸カリとアンモニア水溶液、さらにヒ酸をオートクレーブに投入、175°C、20~30 kg/cm²に50~60時間保持する。反応終了後、1-アミノアントラキノンを濾別すると純度97~98%の製品がえられる。収率はアントラキノン-1-スルホン酸カリに対し83%である。副反応を抑制するため、副生する亜硫酸塩を硫酸塩にかえるが、その酸化剤としてヒ酸を利用している。ヒ酸のかわりにm-ニトロベンゼンスルホン酸塩を利用する方法もある⁶⁾。

Bayer, B. A. S. F. などで発達させられたこの製法は主要なドイツ化学会社の大同団結によって生まれた IG Farben によってさらに発展させられた。また、第一次世界大戦によるドイツ染料輸入途絶を契機として、イギリス、フランス、アメリカさらに日本もこの技術に手を染めることとなつた。

日本では住友化学で昭和13年（1938）から昭和15年（1940）にかけて少量製造されたといわれている。

一方第二次世界大戦後の1945年秋、米調査団によってドイツ化学工業の調査が詳細に実施された。その結果「米化学工業ドイツにおくれること20年」との嘆声を調査団はあげたが、その調査内容は PB Report として公開されていった。

当時、戦後の廃墟から立ち直りつつあった日本化学企業も乏しい外貨をはたいてこれらの PB Report⁷⁾ を購入した。これを基礎として改良された方法での製造再開が検討され、三井化学（現在の三井東圧）では昭和25年頃から、住友化学では昭和28年からスルホン酸経由法での製造が開始された。各社の生産能力は第2-2-2表のとおりである。

またアメリカにおいても第二次世界大戦後活発に生産された。生産量の推移は第2-2-3表のとおりである⁸⁾。

1965年に 700 t/Y に達し、以後低迷している。1980年代中頃からアメリカにおける染料生産は第2-2-4表に示されるようにドイツ、イギリス、イスイスの化学企業がアメリカに設立した会社での生

第 2-2-2 表 スルホン酸経由法による各社の 1-アミノアントラキノン生産能力

会社名	住友化学		三井化学(三井東圧)
年	昭和28年	昭和36年	昭和25年
生産能力	40 t/Y	160 t/Y	250~300 t/Y

第 2-2-3 表 アメリカにおける 1-アミノアントラキノン生産量⁸⁾

年	1961	1965	1970	1971	1972	1973	1974
生産量	666 t	700	430	163	161	268	314

第2-2-4表 アメリカにおける染料生産能力(1994)⁹⁾

会社名	生産能力(t/Y)
Crompton & Knowles (米)	15,400
CIBA (スイス)	10,900
Hoechst-Celanese (ド)	10,900
Sandoz (スイス)	10,400
BASF (ド)	9,000
Miles (Bayer) (ド)	6,800
Zeneca (イギリス)	3,600
Cytec (米)	2,300
その他	6,800
計	76,100

産に集中され、1994年アメリカでの染料生産の約80%がこれら欧州系企業で行われたが⁹⁾、染料生産に利用される中間物の殆ど全てが輸入にたよっているのである。

一方わが国においては有機水銀による水俣病、PCBによるカネミ油症に端を発した公害問題は大きな社会問題となり、昭和42年公害対策基本法、昭和46年水質環境基準が制定され、廃水にきびしい規制が加えられることとなった。これらの処置は人間の生活環境、さらに地球環境の保全にとって当然のことであり、各社は懸命に水銀あるいはヒ素の回収に努力していく結果をあげたものの、強化されていく規制値に適合することがきわめて困難であることが明らかとなっていました。

ここで各社は水銀、ヒ素を使わない新法の開発に一斉に着手するが、昭和48年三井東圧が、昭和

50年住友化学があいついでスルホン酸経由法工場を閉鎖するに至った。

2.3 ニトロ体経由法（新法）

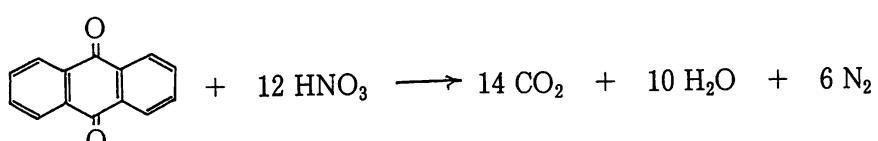
急速に強化される廃水規制に対処するため、各社は時間の余裕も乏しく、手近な方法すなわちニトロ化し、ついでアミノ基に変える方法の検討にあいついで着手した。しかし、この方法には二つの大きな問題点があった。一つはニトロアントラキノン製造時の安定性の問題であり、もう一つは前述のとおり副生する異性体と1-ニトロ体あるいは1-アミノ体とをいかに分離するかという点である。これらの問題点を各社がその特色を生かした方法で解決すべく歩みを進めた。

当初、ヨーロッパ、日本の多くの化学会社が新法の検討に着手したが、脱落するものが続出し、結局 Bayer、三井東圧、住友化学の3社が新法の工場建設まで進むことができた。以下、前記3社の方法について生産開始時期の順に説明を加える。

2.3.1 アミノ体精溜法（住友化学）

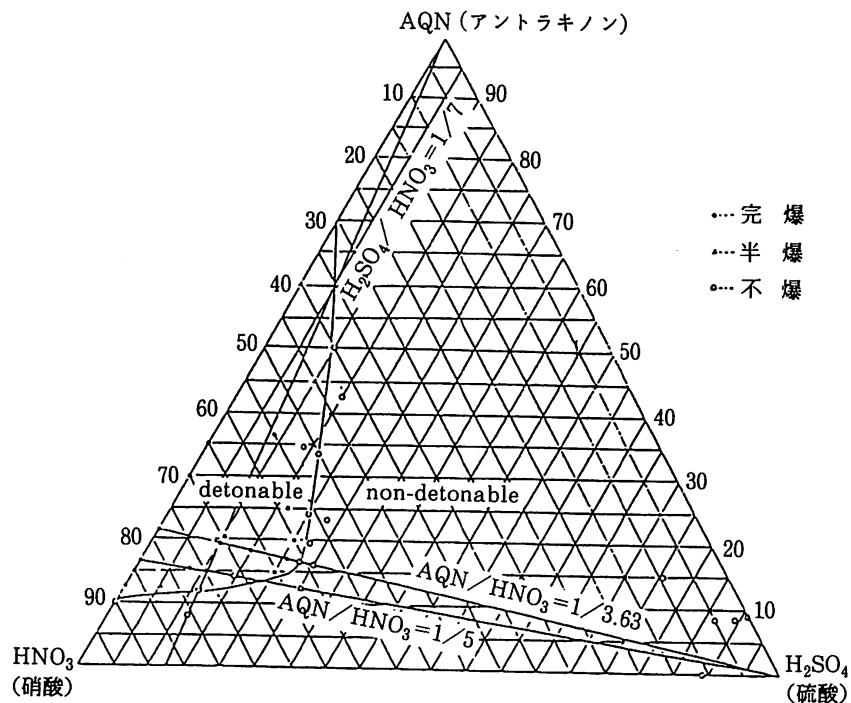
住友化学では昭和50年の旧法工場閉鎖に先立つこと3年、昭和47年新しいとくに無公害型製法の開発に着手した。検討の結果ニトロ化法を採用することとし、濃硝酸によるニトロ化により収率75%以上で1-ニトロアントラキノンがえられる反応条件を見出しがたが、第2-3-1-1図に示す組成になる可能性が大きいことが避けられなかった。

Oxygen Balanceといわれるこの組成比になると、完全に炭酸ガス、水、窒素に分解することになり、なんらかの衝撃をうけると大爆発をおこす



(アントラキノン) (硝酸)

第2-3-1-1図 アントラキノンの Oxygen Balance

第 2-3-1-2 図 アントラキノン-硝酸-硫酸三成分系爆発限界図¹⁰⁾

可能性があるといわれている。そこで横浜国立大学工学部福山教授指導のもと詳細検討したところ、ニトログリセリンなみの爆発力を有することが明らかとなり、濃硝酸ニトロ化法の採用を断念している。爆発を抑制するため第3成分を添加することを考え、硫酸を添加して測定を続け、まず第2-3-1-2図に示すアントラキノン-硝酸-硫酸3成分系爆発限界図の作成に成功し、その後の研究の基礎とした¹⁰⁾。

ここで硫酸-硝酸によるいわゆる混酸ニトロ化法を採用して詳細検討し、安全な条件下で1-ニトロ体収率75%前後でえられる方法を開発している¹¹⁾。

すなわち100%硫酸にアントラキノンを投入、98%硝酸を滴下する。この間、反応系内に存在する水に対し、常に3ないし5倍の硫酸が存在するように調節することによって、使用アントラキノンの98ないし99%が反応し、74ないし77%の1-ニトロ体、1ないし2%の2-ニトロ体、のこりはジニトロ体となる結果えた。

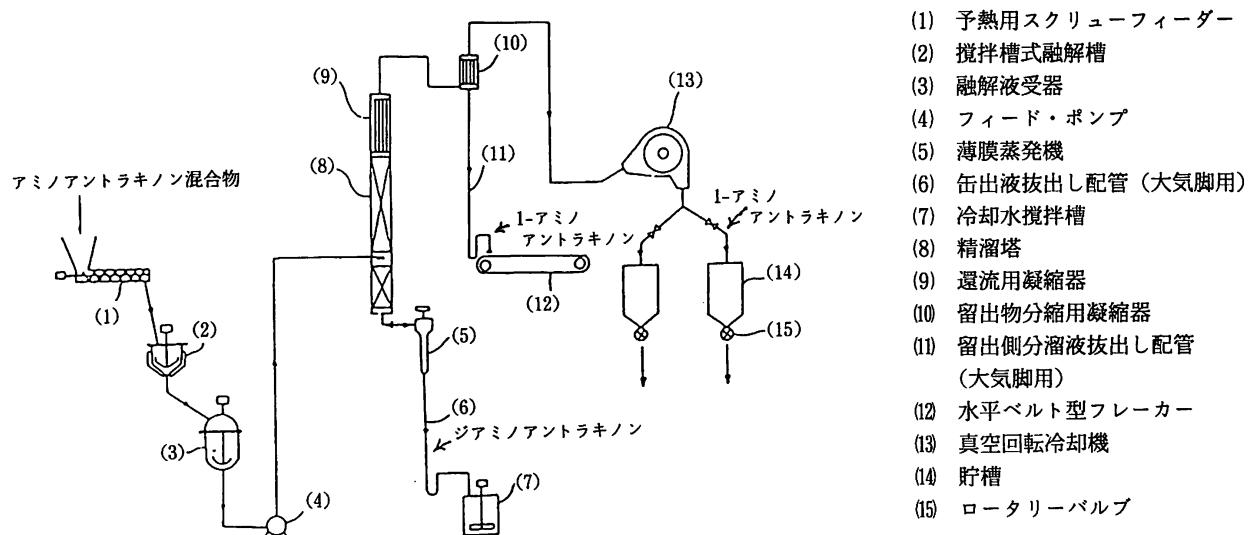
ここでニトロ体での分離を検討し、各異性体の

物性から分離しうる可能性の大きいことを知ったが、ニトロ体には加熱時爆発的に分解するものがあり、一方アミノ体には爆発的に分解するものもなく、後述する理由も含めアミノ体での分離を検討することとした。

ここで各種の還元法について検討したなかで水硫化ナトリウムを用いる方法を選択した。この方法では水懸濁液中ほぼ定量的にニトロ基をアミノ基に変化させうる¹²⁾。

最終精製段階ではアミノ体での分離となり、各アミノ異性体の物性を詳細に測定、調査し、大変せまい許容温度範囲ではあるが精溜分離が可能なことが明らかとなった。将来の大量生産にそなえ連続精溜方式を採用した。詳細は特許¹³⁾および第2-3-1-3図のとおりである。

要点は下記のとおりである。圧力損失の低い充填物を用いた精溜塔に粗アミノアントラキノン混合物を熔融して供給する。分離器で還流させながら溜出する蒸気が全離器であるバキュームフレーカーに導かれて固化され、連続操業を可能にしている。製品1-アミノアントラキノンの純度は

第2-3-1-3図 精溜による1-アミノアントラキノンの分離精製¹³⁾

99%以上であり、ジアミノアントラキノンおよびタール状成分を含まない。この理由で本法による1-アミノアントラキノンを原料とした染顔料は鮮明な色調を有している。一方塔下部に薄膜蒸発器を設置し、連続的に高沸物であるジアミノアントラキノンを取り出すが、大気脚方式で塔内の減圧状態を一定に保っている。流出した高沸物は水中で粒状固型物として取り出され、焼却処分される。

なお融点、沸点の差が小さくかつ高融点、高沸点の困難な条件下での減圧精溜を可能とし、かつ高品質の製品がえられる点が評価されて、この方式に昭和57年度化学工学協会技術賞がおくられた¹⁰⁾。

この方式による1-アミノアントラキノン製造工場は1,000トンの年間生産能力で住友化学愛媛工場に建設され、昭和55年（1980）春稼働した。生産能力はその後の合理化、改良により増加しているといわれている。

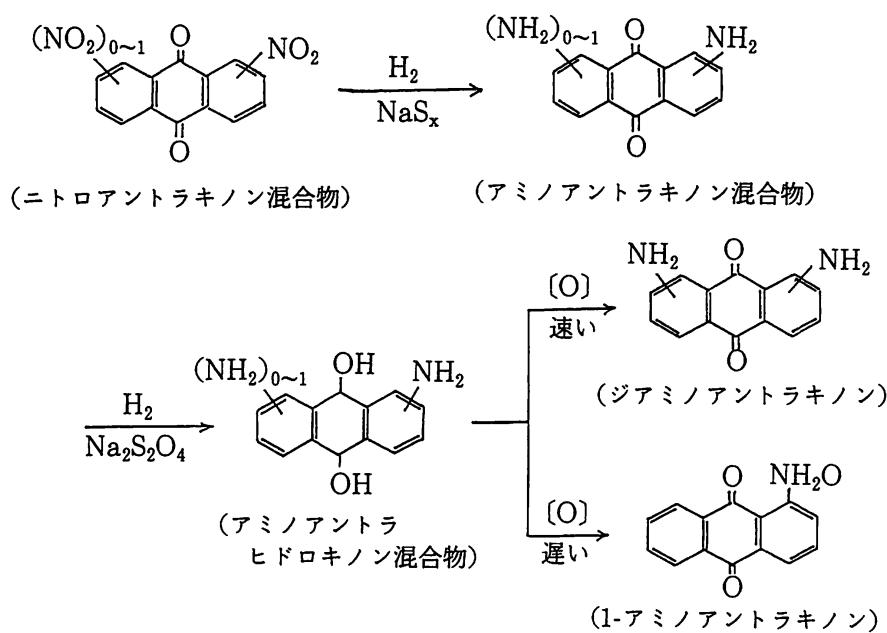
第2-3-1-1表 アミノ体精溜法による1-アミノアントラキノン生産能力（住友化学）

年	1980年(昭和55年)	1993年(平成5年)
生産能力	1,000 t/Y	(1,000+α)t/Y

2.3.2 還元酸化法（三井東庄）

この方法においても2-3-1法と類似の方法で硫酸-硝酸を用いてアントラキノンをニトロ化し、1-ニトロ体を約75%含むニトロアントラキノン混合物をうる。これら水中に懸濁して亜硫酸ナトリウム水溶液と反応させ、2-ニトロ体のみを除去する。ついでアルカリ性水中で接触水素化、あるいは亜二チオン酸ナトリウムを用いてニトロ基のアミノ基への還元からさらにキノン基をヒドロキノン基にまで還元し、全てを水に溶解させる。ついで空気を吹き込んで逆にヒドロキノン基のキノン基への酸化を進め、まず酸化されやすいジアミノ体をジアミノアントラキノンとして析出させた後濾過分離する。濾液にさらに空気を吹き込み酸化を進め、1-アミノアントラキノンを析出させて目的物をうる。えられた1-アミノアントラキノンの純度は98ないし99%，1-ニトロ体に対する収率は90ないし95%である。この工程を反応式であらわすと第2-3-2-1図のとおりである¹⁴⁾。

この方法は前項の物理的手段である精溜法に対し、各化合物の反応性の微妙な差をみごとに利用した方法で、化学的に磨き上げられた方法である。両方法に担当した研究者、技術者の経験、考え方の差がみごとにあらわれた興味ある現象であ



第 2-3-2-1 図 還元酸化法（三井東圧）による 1-アミノアントラキノンの分離精製¹⁴⁾

る。

三井東圧では昭和55年秋大牟田にてこの方法による工場をスタートさせ、56年上半期には生産は軌道にのった。

2.3.3 ニトロ体精溜法 (Schelde Chemie)

ヨーロッパにおいて多くの化学会社によって新しい1-アミノアントラキノン製法の開発が進められたが、最終的にBayerが開発に成功し、CIBA-GEIGYとの合弁会社Schelde Chemieを組織し、この新しい会社によって無公害型製造法の工場の建設をエルベ川河口において進めた。

製造法の内容は公開されていないため不明であるが、特許記載内容より類推すると以下のとおりとなる。

まず、ナフタリンを気相で空気酸化して無水フタル酸とナフトキノンとし、ナフトキノンとブタジエンとからアントラキノンを製造する。ついで硝酸ニトロ化¹⁵⁾、あるいは混酸ニトロ化¹⁶⁾によってニトロアントラキノン混合物を作る。これを精溜にかけ¹⁷⁾、塔頂より1-ニトロ体をとり出し、塔底よりジニトロアントラキノン混合物をと

り出す。ジニトロアントラキノンは別途染料原料として使用する。このようにしてえられた1-ニトロ体のニトロ基をアミノ基にかえて目的物1-アミノアントラキノンがえられる。

前述のわが国で開発された2製法ではアミノアントラキノンの階段で精製し、かつジアミノアントラキノンは焼却などの方法で処分されているのに対し、Scheldeの方法はニトロアントラキノンを極力利用する方式であり、資源有効利用の観点から、さらに1-アミノアントラキノン生産能力9,000 t/Yという規模のメリットからもすぐれた方法との評価が高かった。日本の2社におくれること2年、昭和57年(1982)試運転にはいったが、昭和58年(1983)2月爆発事故が発生して工場は閉鎖され、その後合弁会社も解散されている。この状況からみて本方法の再採用は全く断念されたと考えられる。この結果現在世界で無公害方式で操業を続けている1-アミノアントラキノンの製法は日本の2社によって生み出された方法のみとなっている。

3. 新製造法開発をめぐる研究者・技術者

以上説明したように、3 グループが同一原料から出発しながら全く異なったルートを通じて同じ目標物に到達している。この差があらわれた原因をさぐるため、新製造法開発を担当した研究者・技術者の面から検討を加えたい。

3.1 3 ルートが生み出された背景

担当研究者の体制について 3 グループについてまとめると第 3-1-1 表のようになる。

Bayer について特許から推測すると、研究员 4 ないし 5 名からなるグループが 4 組編成され、各グループが一工程ずつ担当し、一つひとつ確実にかためていく方式をとっている。その基本には理論どおりに工場を操業しうるとの考え方方が厳存している。

加えて年間 9,000 トンの生産、換言すれば 1 日に約 30 トンの製品を取り扱うことになり、この大量の物資を支障なく動かすにはガス状、液状など流体の形で取り扱うことが不可欠であり、さらに収率向上、反応試剤およびエネルギー使用量の削減、廃棄物の極小化をねらえば、その当然の帰結としてニトロアントラキノンの精溜法に到達したといえる。すなわち最も合理的な方法を選択している。

一方住友化学では染料合成研究者によって研究が開始された。当然のことながら化学反応面の検

討が中心となり、分離に関しても化学反応を利用する方向で検討したが、よい結果がえられなかつた。生産量 1,000 トンを超えることも予想され、大量生産の経験ある研究者がリーダーとして投入され、ここで物理的な分離法へと方向転換した。その結果当然のことながら Bayer と同様ニトロアントラキノン精溜法が浮き上がった。しかしながらニトロ体の中にはある温度以上で爆発的に分解する異性体があることも見出し、爆発事故発生の懸念をぬぐいきれなかった。

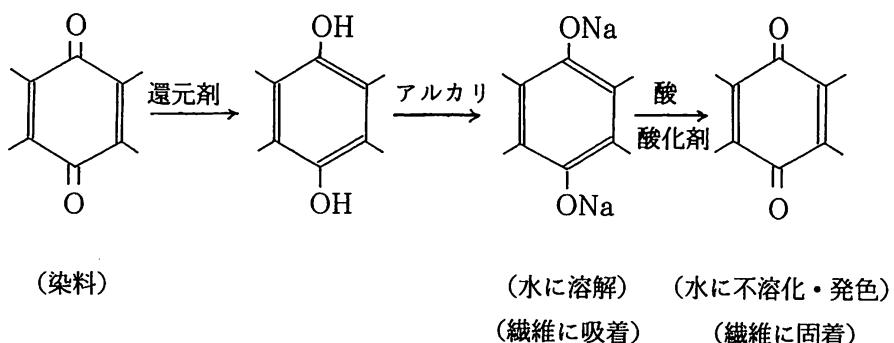
住友化学大分工場で 1973 年農薬工場から硫化水素などが漏出して周辺住民に被害をおよぼす事故が発生し、その結果約 6 ヶ月にわたり官庁命令により操業停止された。その直接的な被害はもとより、長期にわたる周辺住民の信頼喪失という大きな損害を被っていた。この事実は住友化学でのニトロアントラキノン精溜法採用への大きな足枷となった。そこで方向転換し、ニトロアントラキノンよりはるかに難しいアミノアントラキノンの精溜分離へと向かい、後述するように大変な努力を積み上げて技術を確立した。

また三井東圧では合成分野で経験を積んだ染料研究者と大量生産の経験のある工業薬品研究者が大牟田で協力し、さらに中央研究所が新しい合成ルート開発担当で参加している。そのメンバーからみて化学反応を利用する方向へと研究を進めていくことが主流になったと考えられる。

さらに三井東圧は建染染料の製造、応用研究に

第 3-1-1 表 Bayer・三井東圧・住友化学研究体制

会社名	研究立地	研究グループ内容
Bayer	Leverkusen	4 グループ編成 一工程ずつ担当 (合成化学、化学工学)
三井東圧	大牟田 横浜(中央研究所)	染料研究者(合成化学) 工業薬品研究者(大量生産経験者) 新合成ルート探索 } グループ編成
住友化学	大阪	染料研究者(合成化学) リーダーは大量生産経験者

第3-1-1図 建染染料の染着機構¹⁸⁾

長い歴史を有している。建染染料の染着機構は第3-1-1図に示すとおりであるが¹⁸⁾、当然アントラキノン系化合物に関しキノン構造のヒドロキノン構造への還元、さらにナトリウム塩になっての水への溶解、再酸化について多くのデータが蓄積され、これらデータの解析から今回のユニークな分離法誕生のヒントが生まれたものと考えられる。

上述したように研究者の専門分野の相違、あるいは企業をめぐる環境の相違など、種々の影響をうけつつ3社それぞれ独自の方法を生み出していったのである。

3.2 アミノ体精溜法を生み出した力

前述のように住友化学では1-アミノアントラキノンの精溜による分離精製法の工業化に成功した。

この精溜法の開発には融点250°C、沸点300°C、300°C以上の品質劣化、すなわち僅か50°Cの温度範囲でかつ高温での処理というきびしい条件の克服が不可欠となった。実験室での回分式蒸溜実験では問題はなかった。しかし工業化のための連続精溜塔パイロットプラントでは深刻な問題が生じた。小型で高温に耐える流量計、定量ポンプの入手が困難であり、加えて石油危機によって打撃を受けた化学会社では予算面での制約もきびしかった。

そこで高校卒のベテラン技術者数名をえらび、実験目的・内容について充分理解させた後、原料供給、製品抜出し、高沸物抜取りなどの定量性の

確保を全て人力によって行うこととした。訓練と予備運転を終えてやがて運転は軌道にのり、工場装置設計への基礎データが順調に採取された。

しかし、その作業は一刻の油断を許さぬ極度の緊張を必要とする環境、さらに周囲には縦横に走る300°Cをこす熱媒パイプによる劣悪な環境で全て人力により実施された。このきびしい条件下での作業を可能にしたのは大変むつかしい仕事をまかされたという誇り、さらになんとしても新しい技術を開発しなければならないという使命感といって誤りではあるまい。パイロットプラント運転を指導したリーダーは数年間のドイツ駐在員生活を経験していたが、あるときつぎの意見を述べた。「この技術は今日の日本で初めて可能であって、ドイツでは不可能ではないか。なぜならドイツでこの種の運転を担当するオペレーターの資質や忠誠心に懸念があるからである。定刻に出社、退社し、命ぜられたことはする。手当がつかなければ劣悪な環境では働かない。なによりも重要なことは、彼等は充分な知識を与えられていないだけに正確なデータの採取あるいは運転に変動が生じたときの的確な対応は望むべくもない。」と

またBayerと住友化学との会合の席上Bayer側から「精溜特許¹³⁾を住友化学は工場で実施しているのか。Bayerの一部にはあの特許は紙の上に書かれただけのものとの意見もある」との発言があった。この二つの発言は現段階での日独の技術開発の差についていろいろなことを考えさせ

る興味あるものである。

高専高校卒クラスの技術者の献身的な努力によって新しい技術が具体化したことは日本独特のもので、他に例を見ないという愚論を主張する考えは毛頭ない。しかしこの開発方法はわが国で現在よく見かけるが、欧米では少ないと云はれる。となると長期不況に苦しむ日本がこの苦況から脱出するための有力な武器として、この努力をたくみに使うことはきわめて重要と考える。

一橋大学伊丹教授は「日本の鉄鋼、自動車、半導体分野で製造部門技術者の経験の積み上げとその努力によって既存技術の大幅改良さらに新技術開発へつなぐ例が見られるが化学分野では乏しい」とその著書に述べておられるが¹⁹⁾、ここに記した1-アミノアントラキノン精溜のみならず、いくつかの優れた成果が研究よりむしろ製造部門に近い技術者の努力によって具体化されている例が化学の分野でも知られており、日本化学工業も決して例外でないことをここに明らかにしておきたい。

4. む す び

1856年 W. H. Perkin による紫色染料 (mauveine) 発明を契機として西欧で合成染料開発競走が始まった。多くの合成染料が作られていくなかで、1-アミノアントラキノンが染料製造用中間体として重要な地位をしめるに至った。

この分野の中心的企業である Bayer がアントラキノンをニトロ化、還元する方法で1899年から工業生産に着手し、さらに品質の優れた製品を製造するため Bayer で水銀系触媒の存在下でアントラキノンの1-位置をスルホン化し、さらにヒ酸の存在下スルホン基をアミノ基に変える新しい方法が開発され、1904年工業生産にはいった。

この方法はその後イギリス、フランス、アメリカさらに日本へと拡がり、1-アミノアントラキノン製造の唯一の工業的製造法となつた。

しかし、1970年頃から世界的に人々の健康の確保、地球環境保護のため廃水規制が強化され、水銀、ヒ素を排出する前記の方法の継続はきわめて困難となり、1975年前後に各社はこの方法を停止した。

停止に先立つ1972年頃から無公害型製法の開発に各社は着手した。その中から Bayer、三井東圧、住友化学の3社が開発に成功して工場建設へ進んだ。

3社ともアントラキノンのニトロ化からスタートする。Bayer では粗製ニトロアントラキノンより1-ニトロ体を精溜分離して1-アミノ体としているのに対し、三井東圧は粗製アミノアントラキノンの各異性体の化学反応性の差を利用して1-アミノ体を分離している。さらに住友化学は粗製アミノアントラキノンを精溜にかけて1-アミノ体を分離している。

3社とも同じニトロアントラキノンを出発原料としながら、全く異なる経路をたどって同じ目標化合物に到達している。この現象は各社研究者の経験、考え方の相違、各社のおかれた環境の相違にもとづいてあらわれたものと考えられ、興味ある事実である。

3社の工場は1980年から82年にかけてスタートしたが、Bayer では1983年に爆発火災事故が発生し、その後の工場再開は完全に断念されている。この結果住友化学、三井東圧の2社が順調に工場を稼働させ、世界への1-アミノアントラキノンの供給を続けた。

しかし1990年頃から大変安価な1-アミノアントラキノンが中国、インドから世界の市場に流れ込み始めた。当初一部の製品に微量の水銀の混入が認められることもあったが、間もなく水銀が全く検出されなくなった。一体いかなる方法で製造されているのか、わが国関係者の関心事となっていた。

たまたま住友化学の一研究員が中国へ出張した

際、北京の書店で『化工産品手冊、有机化工原料』なる書物を見つけた。日本語に訳せば有機化合物ハンドブックとなろう。その下巻に1-アミノアントラキノンの項がある²⁰⁾。詳細に2製法が記載されているが、その一つが三井東圧法そのものであり、もう一つは水銀触媒法である。加えてこの書物が一般書店で容易に入手しうるものであることから考え、さらに住友化学法は特種な装置を必要とするのに対し三井東圧法ではその必要がないため、中国から世界の市場へ流入している製品のほとんどが三井東圧法によって製造されたものと推測される。また三井東圧法の特許も1995年中にその効力を失う。

第二次世界大戦後われわれは常に欧米の化学企業を追いつけてきた。それが現在中国、インドさらに台湾、韓国に追われる立場に変わった。日本に比して安い人件費、緩い公害規制を考慮に入れると、1-アミノアントラキノンの製造は中国などへ渡すべき時が来た。換言すれば日本の有機合成化学工業においても空洞化の時が来たのであろうか。

しかし、冷静に1-アミノアントラキノンの現製法を再検討してみると、三井東圧法、住友化学法はともに出発原料アントラキノンに対し収率75%でしか目的物を与えない。つまり向上の余地は充分にこされている。ここに日本の有機合成化学者の知恵をふるう場所がある。幸い現段階では中国、インドは新しい合成反応を開発する力にも経験にも乏しい。今こそ新しい合成法、それも1-アミノアントラキノンのみを合成する方法開発の時だといえる。出発原料はなにもアントラキノンに限らない。より廃棄物が少なく、より安価な1-アミノアントラキノンを合成

する新しい方法を創造するのが日本の有機合成化学研究者の使命であると考える。この方法を用いて工場で見事に製造する技術者にもわれわれは恵まれている。

日本化学工業の空洞化を防ぎ、今後の発展への道を拓く若い有機合成化学者達の知恵と努力に大きな期待を抱きながら筆をおきたい。

参 考 文 献

- 1) W. H. Perkin, *J. Chem. Soc.*, **14** (1862) 232.
W. H. Perkin, *Ibid.*, **69** (1896) 603.
日吉, 『化学史研究』**21** (1994) 345.
- 2) C. Graebe, C. Liebermann, *Ber.*, **1** (1868), 49.
- 3) W. Kleinschmidt, (Bayer) の筆者あて書簡, 1995, 2, 3.
- 4) Bayer, ドイツ特許, 第149,801号 (1902).
- 5) Bayer, ドイツ特許, 第175,024号 (1902).
- 6) CIBA, ドイツ特許, 第391,073号 (1921).
- 7) PB Report, 25624 F, 1235 (1935).
- 8) Kirk-Othmer, *Encyclopedia of Chemical Technology*, 3rd. Ed. Vol. **2**, 719 (1978).
- 9) *Chem. Week*, Nov. 16 (1994) 36.
- 10) 上仲, 高橋, 村本, 小寺, 『化学工学』**47**, 363 (1983).
福山『芳香族化合物のニトロ化反応における安全性の研究』昭和50年10月 (財団法人総合安全工学研究所).
- 11) 住友化学, 日本特許, 特開昭 52-156,848号.
- 12) 住友化学, 日本特許, 特開昭 54-154,748号.
- 13) 住友化学, 日本特許, 特開昭 56-25,130号.
- 14) 三井東圧, 日本特許, 特開昭 51-92,828号.
三井東圧, 日本特許, 特開昭 51-109,029号.
- 15) Bayer, 日本特許, 特開昭 51-148,821号.
- 16) Bayer, 日本特許, 特開昭, 53-50,151号.
- 17) Bayer, 日本特許, 特開昭, 53-25,547号.
- 18) 細田, 『染料化学』, (技報堂) (1966) 250.
- 19) 伊丹, 『日本の化学産業, なぜ世界に立ち遅れたのか』, (NTT出版) (1991) 162~176.
- 20) 化学工业部科学技術情報研究所, 『化工産品手冊 有机化工原料』(化学工业出版社) 下冊 122.

The Transition of the Manufacturing Process of 1-Aminoanthraquinone The Development of the Non-Polluting Process in Japan

Hiroshi KAMINAKA

The W. H. Perkin's invention of the purple dyestuff "Mauveine" in 1856 was the birth of the synthetic dyestuff. In the course of development of the synthetic dyestuff, 1-aminoanthraquinone has obtained a very important position in the intermediates of dyestuff production.

In 1899, Bayer produced it in a plant scale for the first time in the world with nitration and reduction of anthraquinone. In order to improve its quality, Bayer found a new process that consisted of sulfonation of anthraquinone in the presence of mercury catalyst followed by amination of anthraquinone sulfonic acid in the presence of arsenic acid. The plant scale production of this process began at Bayer in 1904. The mercury catalyst process spreaded over Great Britain, France, U.S.A. and Japan.

In order to preserve the people's living enviroment, the regulation for quality of effluent was strengthened in about 1970 in the developed countries. The mercury catalyst procss plants were closed in about 1975.

In 1970~1975, many chemical companies

have started the study of non-polluting process. Bayer, Mitsuitoatsu and Sumitomo Chemical Companies have succeeded in the development of the new non-polluting processes, constructed the new plants, and started the production in 1980~1982.

The first step of three companies processes was the nitration of anthraquinone similarly. Bayer obtained pure 1-nitroanthraquinone with rectification of nitroanthraquinone mixture, and converted it to 1-aminoanthraquinone, Mitsuitoatsu separated the 1-aminoanthraquinone from aminoanthraquinone mixture utilizing the difference of isomer's reactivities. Sumitomo obtained pure 1-aminoanthraquinone with rectification of aminoanthraquinone mixture.

Bayer has stopped the plant with accident, but both Mitsuitoatsu and Sumitomo have been operating their plants smoothly. From about 1990, China has produced and exported 1-aminoanthraquinone to all over the world at very low price utilizing Mitsuitoatsu process probably.

[広 場]

レントゲン線発見100年

原 田 馨*

1. はじめに

19世紀の最後の年（1900）にイギリスの高名な物理学者ケルヴィン卿（Lord Kelvin；ウイリアム・トムソン, William Thomson, 1824-1907）は19世紀における物理学の発展を回顧して次のように述べている。すなわち、物理学の基本的な問題はすべて解決された。いまや物理学の世界はきれいに晴れわたり、地平線上に小さな二つの雲が見えるだけであり、これらの問題もいずれ解決されるであろうと。二つの雲（未解決の問題）とは一つはエーテルに対する運動の問題であり、他は熱放射の問題であった。古典物理学の最後の巨人であったケルヴィン卿にとって19世紀は物理学の偉大な発展の時代であり、物理学の将来について極めて楽観的であった。しかし、霧散するはずであった地平線の小さな雲は次第に広がり、従来の物理学では予想し難い現象が次々と発見されるようになった。

その第1は1895年のレントゲンによるX線の発見であり、第2に1896年のベックレルによる放射能の検出であり、また1898年のキュリー夫妻によるラジウムの発見であった。ちょうどその頃電子の存在が実験的に確立され、電子は原子を構成する一要素であると考えられるようになった。X線の発見にはじまるこれら一連の新発見は古典物理学を20世紀初頭から始まる新物理学の誕生へと導くことになった。

1995年6月30日受理

* 筑波大学名誉教授、神戸松蔭女子短期大学

2. X線の発見

1895年レントゲン（Wilhelm Konrad Röntgen, 1845-1923）は陰極線の研究のために種々の真空放電管（ガイスラー管、ヒットルフ管、クルックス管、レナルト管など）を用いて放電実験を行い、文献の追試を行うと共に陰極線の研究を行っていた。レナルト管を用いると薄いアルミニウムの窓を通して陰極線を空気中に取り出すことができるが、レントゲンはアルミニウムの代わりに薄いガラス壁でも陰極線が透過するのではないかと考え、ヒットルフ・クルックス管を用いて放電実験を行った。空気中に取り出された陰極線を蛍光物質で検出しやすいように、蛍光を発する放電管を黒い紙で包んで放電を行った。放電時における管からの可視光は紙により遮断されたが、放電管から1mほど離れた所にあるシアノ化白金バリウムを含む蛍光紙が発光しているのを見た。もしそれが陰極線によるのであれば、アルミニウムの窓から2~3cm程度しか空気中へ取り出せないはずである。明敏な実験家であったレントゲンはこれは何かの新しい現象であると直観した。この発見が行われたのは1895年11月8日（金曜日）の夕方のことであった。

レントゲンはこの発光現象の正体を明らかにするために徹底的な研究を開始した。彼はベッドを研究室に持ち込んで住みつき、7週間にわたる研究を行った。彼はこの新しい放射線についての論文を書き上げ、その年の終りに近い1895年12月28日に、『新しい線について (Über eine neue Art von Strahlen)』の第1報がヴュルツブルクで発行されている地方誌『ヴュルツブルク物理医学会

報』(Sitzungsber. der Würzburger Physik.-Medic. Gessellsch.)に発表された。その後に発表された2論文(1896, 1897)を含めレントゲンのX線に関する3報は1898年になり国際的学術誌である『物理化学年報』(Annalen der Physik und Chemie)に再録されている。X線発見の瞬間についてはその詳細はわからないが、F.N.ネーエルの科学小説“レントゲン”に記載がある。これは歴史書ではないが、X線発見にかかるレントゲンの「詩と真実」であると考えてもよいだろう。筆者は数十年前の学生時代にこれを興味深く読んだ記憶がある。

3. X線発見に対する評価

X線の発見は単に医学において重要であるのみならず、化学において結晶構造および分子構造の研究に不可欠のものとなり、現在X線を利用する装置は科学研究における基本的な設備となっている。レントゲンがX線の発表をするとヴュルツブルクの同僚達は大きな喜びをもって彼を祝福した。高名な生理学者、解剖学者であったフォン・ケリカ (Rudolf Albert von Koelliker, 1817-1905) は1896年1月26日のヴュルツブルク大学物理学教室のX線についての講演会においてこの未知の線を「レントゲン線」と名付けることを提案し、参加者の喝采のうちに賛同された。レントゲンはこの会合においてケリカ教授の手をX線で撮影した。解剖学者のケリカ教授はメスを使うことなく、また痛みを覚えることなく自分の手の骨を見たのである。レントゲンは1901年第1回のノーベル物理学賞を受けた。レントゲンの受賞以後何人の科学者がX線を用いる研究によりノーベル賞を受賞している。このことはX線の発見が科学における偉大な貢献であったことを意味している。

しかし一方X線の発見は單なる偶然の幸運であるとする考えがあり、またレントゲンの発見以

前にX線に関連する現象が他の人々により認められていたことから、レントゲンによるX線発見の評価がかなり割り引かれてきたことは否めない。レントゲンによるX線の発見以前にクルックス (Sir William Crookes, 1832-1918) は放電している真空管から発するX線により新しい写真乾板を感光させていたけれども、彼はこれが未知の放射線によることに気付かず、このカブリの原因を乾板の製造不良によるものであると考え、X線発見のチャンスを逃がした。これと同様なことがアメリカでも起こったことが報告されている。特にレントゲンの評価に影響を及ぼしたのはX線発見の優先権論争に関するレナルト (Philipp Eduard Anton Lenard, 1862-1947) による非難であった。レナルトは陰極線、光電効果について優れた業績を挙げた実験物理学者であったが、X線の発見に関して、特にレントゲンが第1回ノーベル賞を受けた後激しくレントゲンを攻撃した。一方レントゲンはX線の研究について上述の3論文を発表した後は研究を止め、学術講演の招待も断わり、また外国からの学者の儀礼的訪問をも固辞し、実質的に学界から引退して大学の業務と教育に専念した。さらに悪いことはレナルトはナチスの勃興と共にナチ思想の同調者となり、アーリア的物理学を唱えてユダヤ系学者を追放し、ナチスの崩壊まで長期間にわたりドイツの物理学界における支配的地位を保ち続けたことである。レントゲンはユダヤ人ではなかったが、ナチスの時代もまたレントゲンのX線発見の評価を低めることになったと考えられる。X線の発見に絡んで彼に投げかけられたいろいろの批評、特にレナルトの非難と流布された噂は彼にとって大きな心の痛手となったと思われる。彼は知人に「私はX線を発見したが、このことは何か私が悪いことをしたような気がする」と述べているが、この言葉から学界で孤立したレントゲンの心理状態を推測することができる。X線の発見に関連

する中傷については文献1)を参照されたい。

クルックスらのようにX線が知らない内に発生していて、そのX線により生じた結果を見たことと、X線を科学的に発見したこととは全く異なる次元に属するものである。レントゲンによるX線の発見は偶然の幸運であったとする非難があるが、発見はそれを受け取る用意のある科学者のみがその希な偶然を受け取ることができるのである。事実優れた科学者であるクルックスさえもX線を発見することはできなかった。彼の背後から近付き、その肩を叩こうとした幸運の女神は黙ってクルックスから離れたのである。X線の発見はセレンディピティ(Serendipity)の一例としていろいろ議論することができる。11月8日の実験において何かがあると確信した後のレントゲンの努力は激しいものであった。その発見を根拠づけるための7週間の研究は実験物理学者レントゲンの真価を示している。レントゲンの場合のセレンディピティとは単に棚からボタモチというようなものではなく、摑み取る能力のことであった。

4. レントゲンの人柄と個人的な問題

レントゲンは平均的な家庭の善良な一人息子であった。少年時代にはいたずら者で、また少々わがままな面もあったようだ。

レントゲンの年譜で特に注目すべきことがいくつかある。その第一はバイエルン政府がレントゲンに勲章を授け、貴族に列する名誉を与えたが、彼は勲章のみを受け取り、貴族になることを謝絶したことである。このようにレントゲンは世俗の名誉に恬淡であった。X線は発見当時から医学において極めて有用であることが一般に認められていたが、レントゲンはX線について特許を取る意思を持たず、X線が医学一般に用いられるように配慮した。これらのこととは彼のおおらかな人柄を示していると考えられる。同じノーベル物

理学賞を得た物理学者W.ネルンスト(Hermann Walter Nernst, 1864-1941)は特許に興味を持っていたが、この点レントゲンとは非常に異なるようである。レントゲンは彼に与えられた多くの名誉とともに一方レナルトの中傷の中で、これらの世俗の栄誉を醒めた目で眺めていたのであろう。レントゲンはレナルトに対し、また学界に対しても沈黙を守り続け、自ら学界から離れて一人の隠者となっていました。レントゲンはその後X線についての補足的実験を断続的に行っていれる。X線の発見ほどの科学的貢献を成し遂げれば、その後新しい領域の研究報告を出さずともレントゲンの科学界における地位はすでに不動であるといえる。

青年レントゲンを悩ましたものに学歴問題があった。レントゲンは技術者となることを希望してギムナジウムには入学しなかった。彼はユトレヒトの工業高校を卒業した後大学に入りたいと考えるようになり、高校(ギムナジウム)卒業認定試験を受けたが不合格となった。それはレントゲンの少年時代のいたずらが原因しているといわれている。ギムナジウムの卒業資格が無ければドイツの大学にもオランダの大学にも入学することはできなかった。暫くユトレヒト大学で聴講した後、高校卒業資格を必要としないチューリッヒのポリテクニクム(後の工科大学)に入学し、機械工学を専攻した。卒業の翌年物理学者A.クント(August A. E. E. Kundt, 1839-1894)の助手となるが、1870年クント教授と共にヴュルツブルクの大学へ移る。ここでクント教授はレントゲンを私講師にすべく熱心に推薦したが、レントゲンがギムナジウムを卒業しておらず、古典語の素養がないことから、規則を理由に大学側から私講師になることを拒否された。私講師になるということは大学において教える資格を得ることである。レントゲンは幸いクントの援助によりその後ストラスブルク大学で私講師となり、ホーエンハイム農科

大学を経て再びストラスブルク大学に戻り、次で H. ブッフ (Heinrich Buff, 1805-1879) 教授の後任としてギーセン大学の教授となる。そして1888年10月、私講師になることを拒否されたヴュルツブルク大学へ物理学教授として招かれることになった。学歴問題で苦しんだレントゲンのヴュルツブルク大学への着任は彼にとって大きな喜びであったに違いない。そしてこのヴュルツブルク大学において彼は X 線を発見したのである。

19世紀においてもドイツの知識人はいかなる専門分野の人であっても古典語の教養が要求された。ドイツの化学者 J. リービッヒ (Justus von Liebig, 1803-1873) も少年時代この古典語に悩まされ、ギムナジウムを退学している。我々が知っているこの古典的教養主義に徹した人に哲学者ケーベル先生 (Raphael Koeber, 1848-1923) がいる。すべての知識人はギリシア、ローマの古典に通じていなければならぬとするケーベル先生の信念はむしろ西ヨーロッパにおけるドイツの後進性とドイツの貧弱な古代文化の反映ではないかと思われる。レントゲンもまた西ヨーロッパにおける人文主義的ギムナジウム (Humanistisches Gymnasium) の教育をよしとする当時の学歴制度の犠牲者の人一人であった。

W. レントゲンは一人息子であり、若い時代には少々我がままな所があったようである。一方特許問題、貴族の称号におけるように純粹で公正な人であることは前に述べた。またこのようなレントゲンの性格のゆえに、20歳そこそくで両親の反対を押し切り 6 歳年上の酒屋の娘ベルタと結婚することになったと思われる。年上女房のベルタは若いレントゲンのよき妻であったようである。

レントゲンは晩年金銭的に非常に苦しむことになる。第一次大戦後のドイツにおける猛烈なインフレのために通貨はほとんど意味をなさず、年老いた学者のレントゲンはこの動乱の世を生きることができなかった。ミュンヘンに住んでいたレン

トゲンは墓地をミュンヘンに求めることができず、彼の前任地のギーセンまで出向いて墓地を確保することができた。もしレントゲンが X 線について特許を取っていれば、晩年にこのような金銭的苦しみを受けることはなかっただろう。そのようなわけでレントゲンの家族の墓はギーセンの旧墓地 (Alter Friedhof) にある。

6. レントゲンの記念碑

私達がドイツなどを旅行する時容易に見ることができるレントゲンに関する記念碑などを以下に紹介する。機会があればこれらのレントゲンに係わる記念物を訪れて下されば幸いである。

1) レムシャイド・レンネップ市の「レントゲン博物館」

レントゲンの生地レムシャイド・レンネップ市 (Remscheid-Lennep) のゲンゼマルクト (Gänsemarkt 1) に生家があり、そこには記念板が掲げられている。その生家から近いシュヴェルマー通り 41 (Schwerner Str. 41) にレントゲン博物館 (Röntgen Museum) がある。種々の放電管とそれに関連する資料が展示してある。例えば巨大なエジプトのミイラをその棺ごと X 線照射により中にある人骨を X 線写真により検査した巨大な写真がある。レントゲンはその研究と関連して当時発達しつつあったカメラに興味を持ち大型カメラを使って多くの写真を写していたが、それらの写真も展示されている。写真撮影はレントゲンの趣味の一つであった。

2) レントゲン一家が移住したオランダには彼に関する記念板のようなものは無いようである。

3) チューリッヒのポリテクニクムで勉学した時代の下宿 (Sailergraben 7) にレントゲンを記念する記念板が掲げられている。1922年スイス レントゲン学会による。

- 4) レントゲンは H. ブッフの後任としてギーセン大学の物理学教授となった。ギーセン市にはレントゲンを記念するモダンな記念碑(1962年建立)がズート・アンラーゲ(Süd-Anlage)にある。またギーセンの旧墓地(Alter Friedhof)にはレントゲン一家の墓がある。
- 5) ヴュルツブルク市には X 線の発見を記念するモダンな金属の記念碑(1978年建立)が市のレントゲンリング(Röntgen Ring)にある。また同じレントゲンリングには昔の物理学教室の建物があり、その地階にはレントゲンの記念室があり、前もって連絡しておけば見学することができる。ここには種々の放電管、リューンコルフ感応コイル、真空装置、レントゲンの胸像、ノーベル賞文書のコピー、種々の興味ある文献が展示されている。レントゲン記念室のあるこの建物のレントゲン・リング側の上部にはこの建物で X 線が発見されたという記念の文字がある。
- 6) ミュンヘンのドイツ博物館の物理学部門、第16のレントゲン線部門に X 線についての多くの展示がある。さらに科学の偉人の記念堂(Hall of Fame)に多くのドイツの科学者、技術者とともにレントゲンの像がある。またレントゲンが居住していたマリア・テレジア通り(Maria Teresia Str. 11)にある高級住宅地の旧住居にはレントゲンの記念板がある。

7. レントゲン線発見100周年

X 線の発見は1895年11月 8 日のことであった。それゆえ今年は X 線発見100年目にあたる。ヴュルツブルク大学は今年の 2 月14日から11月19日まで X 線の発見100周年を記念する展示会を市の旧宮殿(Residenz)で催している。私はこの稿では簡単に X 線と記したが、ドイツでは X 線では

なく誇らしくこの催しを「100 Jahre Röntgenstrahlen」と称している。このレジデンツ宮殿は フランケン地方を支配していた聖職者であるとともに地方領主(Prinz Bischoff)の建造したドイツの代表的バロック建築である。領主がこの宮殿の建造以前に住んでいた川向うのマリエンブルク要塞(Festung Marienburg)は難攻不落であったが、現在この城にある博物館には多くのリーメンシュナイダー(Hans Tilman Riemschneider, 1460頃-1531)の彫刻のオリジナルがある。なおヴュルツブルクは日本に多くの影響を与えた P. F. シーボルト(Philipp Franz Siebold, 1796-1866)の生地である。シーボルト家はヴュルツブルクの名家であり、多くの学者を輩出した。当市では「シーボルト博物館」を建設中で、1994年秋に完成と聞いていたが、資金難のためか今年はじめには未完成であった。博物館の早期完成を期待したい。

謝 辞

本稿で利用した写真はすべて筆者が撮影したものである。取材のために御協力下さったヴュルツブルク大学のグロス教授(Prof. H. J. Gross)をはじめ多くの方々に感謝する。

文 献

- 1) 山崎岐男『レントゲンの生涯、X 線発見の栄光と影』(富士書店, 1986), 全186頁
- 2) 山崎岐男「レントゲンとオランダ、アベルドルン」『サクラ X レイ写真研究』38 (1987), 63-65.
- 3) 山崎岐男「レントゲンとオランダ、ユトレヒト」『ibid.』38 (1987), 39-43.
- 4) 山崎岐男「レントゲンとオランダ、後半生でのかかわり」『コニカ X レイ写真研究』39 (1988), 46-51.
- 5) 山崎岐男「レントゲンとスイス(その1), チューリッヒ(1)」『ibid.』39 (1988), 94-98.
- 6) 山崎岐男「レントゲンとスイス(その2), チューリッヒ(2)」『ibid.』39 (1988), 139-145.
- 7) 山崎岐男「レントゲンとスイス(その3), バカンスと保養の地として」『ibid.』39 (1988), 180-188.

- 8) G. Schwartz, P. W. Bischop, eds., *Moments of Discovery, The Development of Modern Science* (Basic Books, 1958), 867-882.
- 9) 大野陽郎監修, 高村泰雄, 藤井寛治, 須藤喜久男編『近代科学の起源-物理学編Ⅲ』(北海道大学図書刊行会, 1974), 134-138
- 10) C. マチヨス, 高山洋吉編『マチヨス西洋技術人名辞典』(北隆館, 1946), 808-810.
- 11) T. T. Williams ed., *A biographical Dictionary of Scientists* (Wiley Interscience, 1969), 448-449.
- 12) I. アシモフ, 皆川義雄訳『科学技術人名辞典』(共立出版, 1971), 359-360.
- 13) D. Millar, I. Millar, J. Millar, M. Millar, *Chambers Concise Dictionary of Scientists* (Chambers, 1989), 329-330.
- 14) レントゲン線発見100周年記念展示会のカタログ, *100 Jahre Röntgenstrahlen* (Universität Würzburg, 1995), 全211頁.
- 15) F. L. Neher, *Röntgen, Roman eines Forschers* (Verlag Braun & Schneider, 1936), 全323頁；同上訳書：常木実訳『レントゲン』(天然社, 1943), 全405頁.



写真1. レムシャイド・レンネップ市にあるレントゲン博物館。レントゲンおよびX線に関連する多くの資料が展示されている。

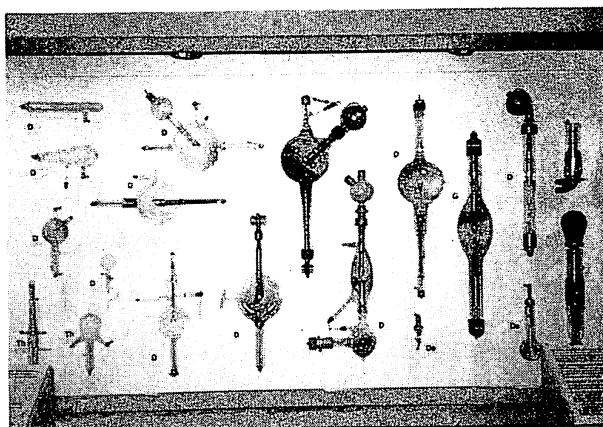


写真2. 同左博物館に展示されている種々のX線発生用の放電管。

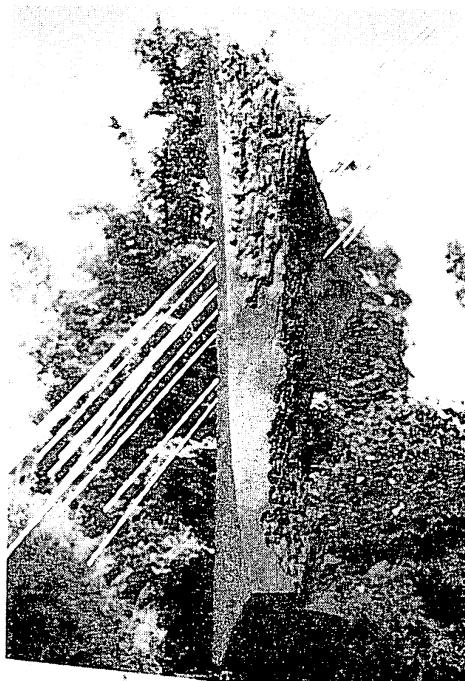


写真3. ギーセン市のズード・アンラーゲ（南緑地帯）にあるX線発見の記念碑。Xの透過力を象徴的に示している。

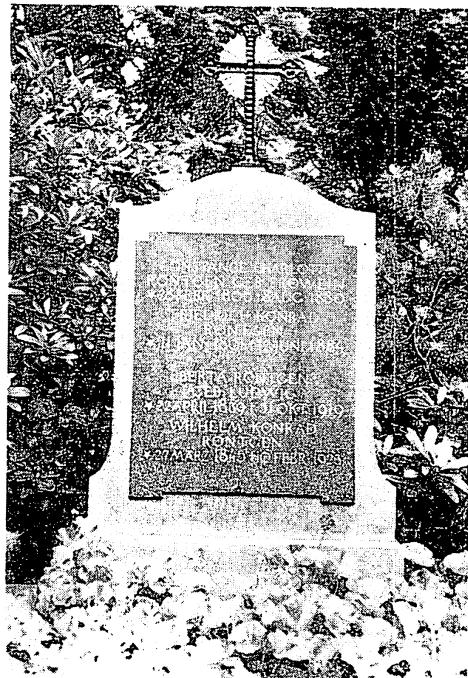


写真4. ギーセン市の旧墓地 (Alter Friedhof) にあるレントゲンの家族の墓。

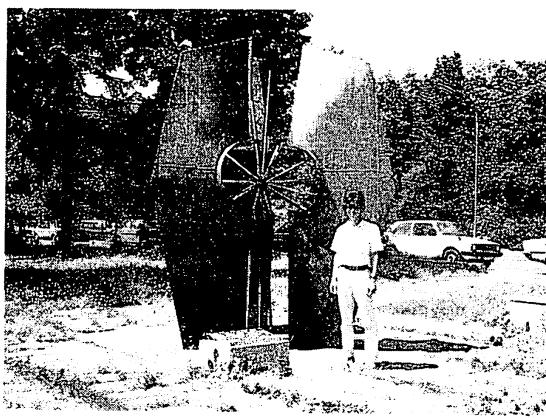


写真5. ヴュルツブルク市のレントゲン・リングにあるX線発見の金属製記念碑。

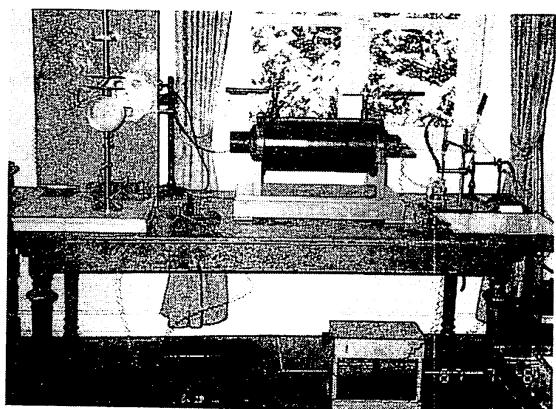


写真6. ヴュルツブルク大学の旧物理学教室 (レントゲン・リング) 地階にあるレントゲン記念室における展示の一部



写真7. 同上記念室に展示されていた解剖学者フォン・ケリカーレ教授の左手のX線写真(1896年1月26日撮影)。



写真8. レントゲン・リングの旧物理学教室の外壁に記されたX線発見を記念する文字(「この建物で W.C. レントゲンは1895年彼の名で呼ばれる放射線を発見した」)。



写真9. ミュンヘン市マリア・テレジア通り11にあるレントゲンの旧居に掲げられた記念碑。

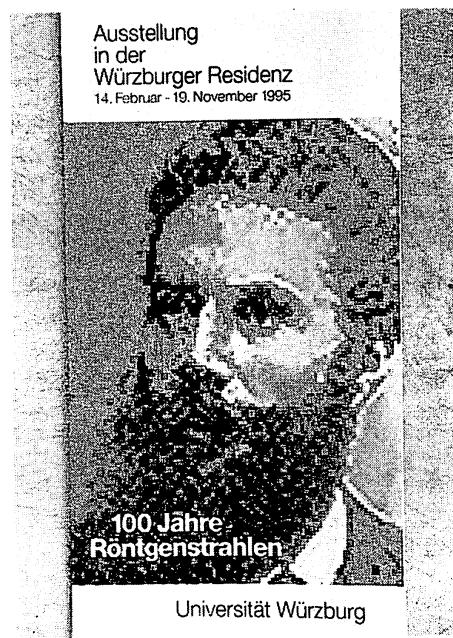


写真10. ヴュルツブルク大学が主催して行われているレントゲン線発見100年を記念する展示会(1995年2月14日-11月19日)への案内書。



写真11. 同上レントゲン線発見100年を記念する
展示会のカタログの表紙。記述内容は豊
富であり、写真も多い。総頁数211頁。
ヴュルツブルク大学発行。この写真は英
語版。

維持会員 三菱化学株式会社

会員訃報

本会会員遠藤 肇氏は平成7年1月11日逝去されました。享年60歳。
本会会員須藤幸作氏は平成7年2月9日逝去されました。享年58歳。
本会は謹んで哀悼の意を表し、御冥福を祈ります。

〔資料〕

化学史および周辺分野の新刊書（1994）

編・著者	書名	判・ページ数	定価(円)	出版社
*金森 修	フランス科学認識論の系譜	B6・331	3,090	勁草書房
*大林信治, 森田敏照編著	科学思想の系譜学	B6・298	2,800	ミネルヴァ書房
*新田義弘他編集	科学論（岩波講座現代思想）	A5・349	3,200	岩波書店
*渡辺一衛	科学の基礎を考える	B6・217	2,200	思想の科学社
*村上陽一郎	科学者とは何か	B6・186	900	新潮社
*村上陽一郎	文明の中の科学	B6・251	2,200	青土社
*R.ベル著 井山弘幸訳	科学が裁かれるとき	B6・432	3,296	化学同人
*今井隆吉	科学と外交（中公新書）	B40・243	740	中央公論社
*成定 薫	科学と社会のインターフェース	B6・254	2,800	平凡社
*バーナード・コーエン 総編集	〈マクミラン〉世界科学史百科図鑑1, 4, 6	B5・423 +320+221	9,800, 9,800, 8,000	原書房
*G.E.R.ロイド著 山野耕治, 山口義久訳	初期ギリシア科学	B6・229	2,472	法政大学出版局
*角田幸彦	アリストテレスにおける神と理性	A5・408	8,600	東信堂
*木場公男	イスラーム科学の残影	B6・87	1,200	日本図書刊行会
*R.リンドバーグム, R.L.ナンバーズ編 渡辺正雄監訳	神と自然	A5・576	9,270	みすず書房
*シンシア・イーグル・ラセット著 上野直子訳	女性を捏造した男たち	A5・309	3,296	工作舎
*武内 博編著	日本洋学人名事典	B5・560	18,000	柏書房
*尾崎久弥	近世科学者列伝（列伝叢書）	A5・266	6,000	大空社
*寺島栄史	日本大科学者物語（列伝叢書）	A5・293	15,000	大空社
*長島 讓	女博士列伝（列伝叢書）	A5・220	7,000	大空社
*三枝博音	技術家評伝（列伝叢書）	A5・276	8,000	大空社
*三枝博音	技術家評伝 続（列伝叢書）	A5・268	8,000	大空社
*山本 巖	工業日本の先駆者たち（列伝叢書）	A5・180	6,000	大空社
*実学資料研究会編	実学史研究10	A5・268	5,974	思文閣出版
*洋学史学会編	洋学2（洋学史学会研究年報）	A5・202	4,300	八坂書房
*有坂隆道, 浅井允晶編	論集日本の洋学2	A5・318	4,944	清文堂出版
*杉本つとむ編集	前野蘭化集（早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇）	B5・484	28,000	早稲田大学出版部
*杉本つとむ編集	杉田玄白集（早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇）	B5・460	28,000	早稲田大学出版部
*杉本つとむ編集	大槻玄沢集1, 2（早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇）	B5・479 +396	28,000, 28,000	早稲田大学出版部
*杉本つとむ著訳	知の冒険者たち：『蘭学事始』を読む	B6・326	2,575	八坂書房
*SADANORI編集	江戸さいえんす図鑑	B5・111	2,000	インテグラ
*杉山滋郎編集	日本の近代科学史	A5・214	2,884	朝倉書店
*中山 茂, 吉岡 斎編著	戦後科学技術の社会史（朝日選書）	B6・360	1,600	朝日新聞社
*柴田鉄治	科学報道	B6・238	1,400	朝日新聞社
*佐々木力編集	近藤洋逸数学史著作集1-5	A5・443 +212+422 +355+410	8,755, 6,695, 8,755, 7,725, 8,755	日本評論社
*佐藤健一	江戸庶民の数学	B6・235	1,800	東洋書店
*下平和夫監編 佐藤健一他編	江戸初期和算選書 第4巻1-3	A5・総538	3冊 12,000	研成社

編・著 者	書 名	判・ページ数	定価(円)	出 版 社
*西田知己	「算勘」と「工夫」：江戸時代の数学的発想	A5・248	8,240	研 成 社
*ノエル・ロリオ著 伊藤力司, 伊藤道子訳	イレーヌ・ジョリオ＝キュリー	B6・342	2,800	共 同 通 信 社
*パリティ編集委員会編	核時代の科学者たち	B6・150	1,236	丸 善
*マルク＝アントニオ・クラッセラーム著 有田忠郎訳	闇よりおのづからほとばしる光（ヘルメス叢書）	B6・287	2,800	白 水 社
*ラムスプリンク著 有田忠郎訳	賢者の石について（ヘルメス叢書）	B6・265	2,700	白 水 社
*D.N.トリフォノフ, V.D.トリフオノフ著 阪上正信, 日吉芳朗訳	化学元素発見のみち	A5・267	2,575	内 田 老 鶴 園
*村上枝彦	人物化学史事典	A5・295	3,605	海 游 舍
*Anthony Serafini著 加藤郁之進監訳	ライナス・ポーリング	B6・315	4,300	宝 酒 造
*廣田鋼藏	化学者：池田菊苗	B6・256	1,600	東 京 化 学 同 人
*大崎正次編	近世日本天文史料	A5・620	18,540	原 書 房
*続日本アマチュア天文史編纂会編	日本アマチュア天文史続	A5・383	4,017	恒 星 社 厚 生 閣
*吉田正太郎	望遠鏡発達史上下	A5・231+244	各2,300	誠 文 堂 新 光 社
*渡辺敏夫	日本・朝鮮・中国日食月食宝典		20,000	雄 山 閣
*渡辺敏夫	暦入門	A5・553	1,980	雄 山 閣
*岡田芳朗	明治改暦	B6・354	2,884	大 修 館 書 店
*西沢宥綜篇著	暦日大鑑	B5・427	12,000	新 人 物 往 来 社
*リチャード・M・イーキン著 石館三枝子, 石館康平訳	ダーウィン教壇に立つ	B6・198	1,800	講 談 社
*山田慶児編	物のイメージ・本草と博物学への招待	B6・409	3,900	朝 日 新 聞 社
*鈴木善次	人間環境教育論	B6・206	1,500	創 元 社
*今西錦司	今西錦司全集 第5-10巻, 別巻	B6・514 +520+506 +518+533 +527+358	各4,900, 4,600	講 論 社
*大槻真一郎編集 岸本良彦他訳	プリニウス博物誌植物篇, 植物薬剤篇	A5・612 +556	14,000 13,000	八 坂 書 房
*村元直人	蝦夷地の外人ナチュラリストたち	B6・191	1,800	幻 洋 社
*マイア著 小杉貞雄, 新妻昭夫訳	進化論と生物哲学	B6・605	4,300	東 京 化 学 同 人
*ハ杉竜一編訳	ダーウィニズム論集（岩波文庫）	A6・388	670	岩 波 書 店
*E.マイア著 養老孟司訳	ダーウィン進化論の現在	B6・253	2,500	岩 波 書 店
*シルヴァン・シュウェーバー著 横山利明訳	『種の起源』の起源を再訪して	B6・174	1,900	新 水 社
*長野 敬	進化論のらせん階段	B6・357	2,400	青 土 社
*長野 敬	生命の起源論争	B6・254	1,500	講 論 社
*日本医師会編集	医界風土記 北海道・東北篇	B6・210	2,100	思 文 閣 出 版
*日本医師会編集	医界風土記 関東・甲信越篇	B6・322	2,500	思 文 閣 出 版
*日本医師会編集	医界風土記 中部篇	B6・265	2,500	思 文 閣 出 版
*日本医師会編集	医界風土記 中国・四国篇	B6・295	2,500	思 文 閣 出 版
*日本医師会編集	医界風土記 九州・沖縄篇	B6・200	1,900	思 文 閣 出 版
*波平恵美子	医療人類学入門（朝日選書）	B6・203	1,100	朝 日 新 聞 社
*楳佐知子全訳精解	医心方 卷18, 24, 26	A5・511 +305+276	18,000, 14,000, 13,000	筑 摩 書 房
*蓑内宗一篇著	経路の原典	B5・435	15,000	い な ほ 書 房
*宮沢正順	素問・靈枢（中国古典新書続編）	B6・220	2,700	明 德 出 版 社

編・著者	書名	判・ページ数	定価(円)	出版社
*李元植, 李雲柱編訳	新註校定四象医学源流 上巻	B5・262	12,000	かまわぬ書房
*ラルフ・C・クロイツァー著 難波恒雄他共訳	近代中国の伝統医学	A5・322	4,500	創元社
*杉田玄白訳	解体新書(複製)	B5・34丁 ・付23	3,605	地歴社
*田中聰	衛生展覧会の欲望	B6・223	2,472	青弓社
*石波哲夫	やさしいくすりの歴史	A5・196	2,060	南山堂
*杉原正泰, 天野宏	横浜のくすり文化(有隣新書)	B40・139	950	有隣堂
*辰野高司編	対談でつづる昭和の薬学の歩み	A5・332	2,800	東京理科大学薬学部同窓有志会
*吉岡信	江戸の生薬屋	B6・251	2,575	青蛙房
*難波恒雄	和漢薬百科図鑑2	B5・525	16,000	保育社
*浅見恵, 安田憲訳編	採薬志(近世歴史資料集成第2期)	B5・1320	51,500	科学院書院
*日本工業会編	明治工業史1-4(明治百年史叢書)	A5・1160 +454+661 +755	23,690, 18,540, 18,540, 20,600	原書房
*萩原晋太郎編著	日本工業技術史	A5・321	9,785	新泉社
*安井国雄	戦間期日本鉄鋼業と経済政策	A5・255	3,500	ミネルヴァ書房
*川名英之	ドキュメント日本の公害8, 9	B6・469 +553	4,326, 4944	緑風出版
*高橋暁正	薬品食品公害の二〇年	A5・238	2,000	松籟社
*橋本洋, 上野滋共訳	精密の歴史	B6・319	2,400	大河出版
*野本陽代	日本のロケット(NHKブックス)	B6・246	890	日本放送出版協会
*五代富文	国産ロケットH-II2 宇宙への挑戦	B6・258	1,900	徳間書店
*岩井登, 高橋雄造編著	てれこむノ夜明ケ	B6・250	2,000	電気通信振興会
*寺谷武明	造船業の復興と発展(戦後日本海運造船経営史)	B6・285	2,884	日本経済評論社
*宇田川武久	東アジア兵器交流史の研究	A5・454	12,000	吉川弘文館
*所莊吉	火縄銃	A5・258	6,200	雄山閣出版
*ジョン・エリス著 越智道雄訳	機関銃の社会史	B6・310	3,200	平凡社
*山崎晃, 立花誠逸編 岡田良之助訳	資料マンハッタン計画	A5・821 +736	15,000	大月書店
*リチャード・ローズ著 神沼二真, 渋谷泰一訳	原子爆弾の歴史上下	A5・736 +740	6,500, 6,500	啓学出版
*安倍悦生	大英帝国の産業霸権	A5・424	6,180	有斐閣
*岡崎哲二	日本の工業化と鉄鋼産業	A5・236	4,944	東京大学出版会
*岡崎幸雄	地方紡績企業の成立と展開	A5・351	6,386	九州大学出版会
*松下幸子, 榎木伊太郎編集	再現江戸時代料理: 食養生講釈付	B5・182	4,800	小学校館
*及川章夫	日本農業統計調査史	A5・352	3,900	農林統計協会
*佐々木高明編	農耕の技術と文化	A5・693	18,000	集英社
*大沢正昭	陣勇農書の研究	A5・302	7,500	農山漁村文化協会
*A.G.オドリクール, L.エダン著 小林真紀子訳	文明を支えた植物	A5・246	5,800	八坂書房
*海原猛, 安田喜憲編	森の文明・循環の思想	B6・244	2,300	講談社
*樋口清之	木炭(ものと人間の文化史)	B6・286	2,472	法政大学出版局
*笠原正夫	近世漁村の史的展開	A5・323	4,900	名著出版
*鳥巣京一	西海捕鯨業史の研究	A5・503	9,476	九州大学出版局
*福本和夫	日本捕鯨史話(教養選書)	B6・289	2,266	法政大学出版局
*矢崎孟伯	信州寒天業発達史(銀河グラフィック選書)	A5・117	1,600	銀河書房
*加茂詮	近代日本塩業の展開過程	A5・608	17,000	北泉社

[資料]

清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録

八 耳 俊 文*

1. はじめに

筆者は平成5・6年度科学研究費補助金（一般研究C）を得て「19世紀中期の中国における西洋人宣教師の科学啓蒙活動についての基礎研究」として、当該期間において中国で欧米人により著訳された科学関係書およびその和刻本の国内における所在調査を行った。本調査と重なる同種の試みとして、従前キリスト教史学関係者により広範囲な和漢書を対象とした『日本基督教史関係和漢書目録』（1954）、*Christianity in Japan*（1960）、『日本キリスト教文献目録』（1965）が上梓されているが、本研究では科学及びその周辺分野に限り、最近編纂された蔵書目録を含め徹底した調査を実施することを主眼とした。その結果がこの「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」である。調査方法は、全国の図書館の蔵書目録から目的の図書を採録するという手法をとったが、それらをできるだけ近年の研究成果に従い区分を行い、一部の図書については直接、図書館に赴き対査して、目録の精度と水準を高めるよう努力した。作業を進める中で、当初では科学書をかなり限定していたが、当時出版に関与した欧米人の大半は宣教師であった事情から、彼らの著した宗教書の中にも科学に関する内容を含むものが少なくないことを知り、宗教書まで対象を広げることにした。またできるだけ情報量を高めるため、19世紀中期だけでなく、その後の江南製造局等出版の科学関係書まで対象とするとの編集方針に改めた。しかし、何分、この拡大した分野の図書に関する情報は膨大で、残念ながら本目録では不備のままに終わった。この分野については、上述の目録等を併せて参看されることを切願する。

2. 凡例

a. 本目録では、19世紀中期に欧米人が中国語で著訳した科学関係書、およびその和刻本のうち、原則として日本で所在が明らかな図書を対象とした。これに関連して同様の経緯で作成された、当該時期における宗教書

1995年12月20日受理

* 青山学院女子短期大学

連絡先：〒150 東京都渋谷区渋谷 4-4-25（勤務先）

や19世紀後期の科学関係書も付加情報として対象とした。なお『国書総目録』『古典籍総合目録』では、収載書目の範囲を慶應3年までに日本人の著編撰訳した書籍と限り、漢籍の場合原文に句読訓点を施したに過ぎないものは收めないと定めているため（「凡例」）、本目録で収録された図書は掲載しておらず、内容が重なることはない。

b. 本目録の記載事項は、書名、巻数、著訳者名、出版年、出版地、出版者、冊数、丁数、大きさ、所在等である。参照した蔵書目録の記述では判明せず、かつ公刊論文等で言及されたことがなく、現物調査に至らなかつた事項については、未記入のままとした。特記事項は※以下に記した。所在については〔 〕内に列挙した。

c. 排列は中国書の書名を見出しに、日本語読みの五十音順とした。和刻本の書名は見出しに用いていない。

d. 著訳者名以下の書誌事項・特記事項について、中国書では、Wylie (1867)、熊月之 (1994)、熊月之 (1995)、王揚宗 (1995)、Bennett (1967)、Reardon-Anderson (1991)、和刻本では、長澤規矩也 (1976)、長澤規矩也 (1980) を大いに参考にした（書名、論文名等は本稿末の「引用参考文献一覧」参照）。

e. 出版年について、「刊」「印」「修」の区別が必要であるが、これらを誤りなく判別するのは容易ではない。まして蔵書目録の記述だけから分類できるものでない。これらの違いを意識して出版年を表している目録もあるが、その中には明らかに誤っていたり、現物調査の結果その判断に疑いをもつものがあったため、本目録ではその区別を明記することは控えた。ただし、目録の記述が信頼できると判断したり、実際に確認した場合は、区別した。

f. とはいえる同一の書名でも内容が同じ版と異なる版を同列に扱っては、情報量に欠けるため、同系列に属する刊本については△、異なる系列に属する刊本については□を冒頭に付し、視覚的に違いを表現した。ただしこの区分は確定的なものではなく、小区分と大区分の違いとして理解されたい。

g. 図書の大きさは、図書館に所蔵されるさい加工が施されたり、また保存状態により収縮があるため、厳密にミリメートルの単位まで測定しても、意味がない。

このため、「大」「半」「小」などの概括的な書型でもって表現するのが一般的とされている。しかし、ここではあえて数値にも何らかの情報が含まれているとの見方をとり、蔵書目録に数値の記入があるもの、実際に測定したものについては、その数値を記した。縦×横の数値で、一つの数値しかない場合は縦長である。

h. 所在については、国内の機関をあげることを第一としたが、一部の図書については英米の図書館まで記した。最も取り上げたのは英國図書館東洋写本刊本部コレクションである。同コレクションは本目録が対象とする図書を、おそらく一つの機関としては世界で最も多く所蔵していると思われ、また蔵書目録も Douglas (1877) および Douglas (1903) が作成され、その複製版も出版されていて筆者は身近に利用できたという理由による。それ以外の国外の図書館については、特定の図書に絞り所蔵の有無を調査し、所蔵が確認されれば記すとの方針をとった。従って網羅的な調査の上での結果でないことを断わっておく。国内については、公開されている国公私立の図書館、大学等学校図書館蔵書を収録対象とし、個人蔵書は取り上げなかった。

i. 所蔵機関の略称については、『国書総目録』『古典籍総合目録』に準じた。ただし、機関の名称や所属が変更となり、現時点での略称が不適切と考えられるものは、異なった略称を用いた。例：教大→筑大、東京天文台→国立天文台、愛知学芸大→愛教大、津山郷土館→津山洋学（資料館）。外国の機関については、英國図書館東洋写本刊本部コレクション：BL、ケンブリッジ大学アストンコレクション：CAM (A)、ケンブリッジ大学サトウコレクション：CAM (S)、カリフォルニア州立大学バークレー校東アジア図書館：UCLA (B)、ハーバード燕京図書館：HYL の略称を使用した。

j. 所蔵機関の排列順は、外国の機関をはじめとし、次に国内の機関を所在地により北から南へとあげた。同一都府県内では、国公私立図書館と大学等学校図書館に分け、前者をさきに後者をあとにそれぞれ五十音順で並べた。ただし、国立国会図書館と国立公文書館については、総合的との性格より国内機関の筆頭に置くようにした。

k. 端本についても蔵書目録に記されている限り、収録するようにした。この場合、現存する冊数および存本あるいは欠本の内容を（ ）に記した。端本の排列は、完本のあととし、完本と同様の基準 j で並べた。同一書を複数所蔵する場合は 2 点といったように記した。

l. 分類不明としたのは、蔵書目録の記述だけでは詳細が分からず、かつ現物調査が及ばなかった資料で、本来ならば「未調査」とすべきあるが、本研究の目的が総合目録の作成にあって資料の網羅的調査でないため、このような表現を用いた。了解していただきたい。なおこ

れに属する資料は蔵書目録の記載を転記するにとどめた。

m. 特記事項には、Wylie (1867), Douglas (1877), Douglas (1903) に記載がある場合は、その該当ページ数を記した。Douglas (1903) についてはページ数の前に「補」の文字を付し、Douglas (1877) のページ数と混同しないようにした。その他の特記事項は、翻訳の原本、英語書名、出典、内容の簡単な紹介、出版事項の補足等である。

3. 謝 辞

この目録を作成するにあたり多くの人の手を煩わした。問い合わせに快く応じて下さったかた、御自身から貴重な情報を提供して下さったかた、次のかたにまず献辞を述べたい。千野光芳氏、伊藤節子氏、田村省三氏、吉田寅氏、高田誠二氏、古川安氏、土井康弘氏。

目録の記述からは詳細が不明であるため、現物調査を実施し、不備を補うように努めた。もとより個人の限られた時間の調査であるため、全体からみれば手にすることができたのは、ごく一部に終わったが、直接訪問した図書館では様々ななかたちで協力を得た。（科学研究費補助金による本格的調査を開始した1993年度以前の分も含め）以下の各機関に謝意を表したい。宮城県図書館、東北大学付属図書館、茨城大学付属図書館、埼玉県文書館、青山学院大学図書館、青山学院資料センター、宮内庁書陵部、慶應義塾大学三田メディアセンター、国立公文書館、国立国会図書館、国立天文台図書室、静嘉堂文庫、東京国立博物館、東京商船大学付属図書館、東京大学総合図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、東京大学新聞研究所付属新聞資料センター、東京大学東洋文化研究所、東京電機大学工学部図書館特別集書室、東京都立中央図書館、日本学士院、前田育徳会、早稲田大学図書館、神奈川近代文学館、横浜開港資料館、横浜市立大学図書館、金沢市立図書館、福井県立図書館、福井市立図書館、小浜市立図書館、西尾市立図書館、半田市立図書館、大谷大学図書館、京都大学付属図書館、京都府立総合資料館、大阪府立大学経済学部図書室、関西大学図書館、杏雨書屋、神戸大学人文社会科学系図書館、天理大学付属天理図書館、和歌山大学付属図書館、山口大学経済学部東亞経済研究所、香川大学付属図書館、高知県立牧野植物園、九州大学中央図書館、九州大学理学部、佐賀県立図書館、長崎県立長崎図書館、長崎大学付属図書館経済学部分館、鹿児島県立図書館、鹿児島大学付属図書館。最後に、国内外の機関に所蔵図書の書誌事項の確認の問い合わせ、複写の依頼等でお世話になった、筆者の本務校である青山学院女子短期大学の図書館の方々に、改めて感謝の意を表したい。

鴉片六戒 培端 (D. B. McCarteree) 撰 道光27 (1847)
寧波 1冊 7丁

- ◇ [咸豐2 (1852) 頃] 寧波 1冊 7丁
- 『勸解鴉片論』1卷 同治3 (1864) 上海 1冊 5丁
- ◇『勸解鴉片論』1卷 同治11 (1872) 上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]
- ※ Wylie, 79, 136
- 和刻本『鴉片戒』(題簽「官板鴉片戒」) [文久年間] 東都：老臣館萬屋兵四郎 1冊 6丁 [18.1 × 12.3 cm 国会, 慶大, 19 cm 金沢市蒼龍館, 京大富士川, 杏雨]

井礦工程 3卷 白爾捺 (O. Byrne) 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・趙元益筆述 光緒5 (1879) 上海：江南製造局 [BL]

- ※ Douglas, 補103
- ※ "Boring and Blasting" in Spons' Dictionary of Engineering, Division II (London : E. and F. N. Spon, 1870)
- 『西學大成』午編礦學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 『西學富疆叢書』辛集礦學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 『礦務業鈔』第2冊 [国会]
- 『礦學大成』所収 [京大採鉱]
- 『江南製造局訳書彙刻』所収 [京大人文研]

為人祈禱論 咸豐10 (1860) 上海：墨海書館 [閔大增田]

- 『中西通書』咸豐10 (1860) 版, 所収. 22ウ-23ウ. [宮書古賀, 大谷, 閔大增田]

運規約指 3卷 白起德 (R. Burchett) 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述 同治10 (1871) 上海：江南製造局 1冊 26 cm [BL, 国会, 内閣3点, 筑大, 東大総2点, 早大小倉]

- 『江南製造繙譯各種西書』第54・55冊 [静嘉]
- 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
- 『古今算学叢書』所収 [東北大林]
- ※ Douglas, 補102
- ※ Practical Geometry

英國志→大英國志

英國鑄錢說 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

- 『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]
- ※『格致彙編』1891年秋号に「英國鑄錢說略」あり。

影相會說 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

- 『格致叢書』会例 [日比谷実藤, 杏雨]
- ※『格致彙編』1891年夏号に「影相會說」あり。影相

とは写真, つまり写真の会の紹介.

以利亞言行傳 克陸存 (M. S. Culbertson) 咸豐3 (1853) 寧波 1冊 23丁

- ◇ 咸豐11 (1861) 上海：美華書館 1冊 20丁 25 cm [BL, 大谷, 大洲矢野, 佐賀鍋島]
- ※ Wylie, 147 Douglas, 補30

益智新錄 慕維廉 (W. Muirhead) 等編 上海：公報館 1876.7-1879.4 全36期 [Vol. 1, No. 1-12, Vol. 2, No. 1-12 BL, 4-10, 13-15, 19-36 明大, Vol. 2, No. 1-4, Vol. 3, No. 12 5冊 静嘉]

- ※ Douglas, 補101

※ Monthly Educator

- ※ 廣瀬一恵「益智新錄目録」『近代中国』22号 (1991), pp. 279-296.

遠鏡図説 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

- 『格致叢書』光学 [日比谷実藤, 杏雨]

円錐曲線説 3卷 艾約瑟 (J. Edkins) 口訳・李善蘭筆述 [光緒2 (1876)] 1冊 [BL, 東北大狩野, 東大総]

- 『古今算学叢書』所収 [東北大林, 東洋]

- 覆則古昔斎本 1冊 [大谷]

- ※ Douglas, 補39

- ※ 橋本敬造 (1992: 10) によれば, 初版は咸豐8 (1858) 刊, 原本は W. Whewell, Conic Sections であるが, この版は焼失に遭い, 数部が印刷されただけという。

延年益壽論 愛凡司 (C. W. de L. Evans) 撰 傳蘭雅 (J. Fryer) 訳 光緒18 (1892) 上海：格致書室 1冊 18丁 [UCLA (B)]

- 『格致叢書』医学 [日比谷実藤, 杏雨]

- ※『格致彙編』1891年夏一冬号に「延年益壽論」あり。

- ※ How to prolong Life. 2d ed, 1885.

悔改信耶穌説略 培端 (D. B. McCarteree) 同治7 (1868) 上海：美華書館 1冊 [内閣]

- ※ Wylie, 136

外国史畧 [馬禮遜 (Morrison)]

- 『小方壺齋輿地叢鈔』第83冊再補編 [国会, 筑大, 早大, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外大石浜]

繪地法原 1卷附図表 金楷理 (C. T. Kreyer) 口訳・王徳均筆述 [同治15 (1876)] 上海：江南製造局 1冊 27 cm [BL, 国会, 内閣4点, 東北大狩野, 大阪府]

- 『西學大成』寅編地學 [国会, 日比谷実藤, 早大倉, 京大人文研]

- 『江南製造局訳書彙刻』所収 [国会, 京大人文研]
 ※ Douglas, 補63

開媒要法12巻 士密德 (W. W. Smyth) 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・王德均筆述 同治10 (1871) 上海 : 江南製造局 2冊 [BL, 国会 2点, 内閣, 東大総, 早大, 愛教大, 京大, 京大地理, 存1冊 静嘉]
 □『西学大成』午編礦學 「開媒要法 2巻」 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
 □『西学富彊叢書』辛集礦學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
 □『礦務叢鈔』第1冊 [国会]
 □『礦學大成』所収 [京大採鉱]
 □『江南製造繙譯各種西書』第36冊 [静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 ※ Douglas, 補123
 ※ Coal and Coal-Mining. London, 1869.

化学易知2巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 輯 光緒7 (1881)
 上海 : 易知書会 [BL]
 ※ Douglas, 補171

化学衛生論4巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 訳 光緒7 (1881)
 2冊 [BL, 京大富士川]
 ※ Douglas, 補21
 ※ J. F. W. Johnston. The Chemistry of Common Life. 1859.
 ※『格致彙編』1878.2-1882.1 に「化学衛生論」あり。

化学鑑原6巻 章而司 (D. A. Wells) 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽訳 同治10 (1871) 上海 : 江南製造局 4冊 30cm [BL, 国会, 内閣, 東北大岡本, 筑大, 静嘉, 東大総 2点, 長崎大武藤]
 □『西学自彊叢書』第11冊 [日比谷実藤]
 □『西学富彊叢書』第9-16冊 「鑑原6巻・統卷6巻・附1巻・表1巻」 [早大小倉]
 □『江南製造繙譯各種西書』第17・18冊 [静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研, 長崎大経済]
 ※ Douglas, 補151
 ※ Wells's Principles and Applications of Chemistry. New York, 1858後.
 ※『教会新報』1872.11.30-12.21, 「化学鑑原」紹介する。
 □近藤圭造『化学鑑原』 8冊
 ※「新刻書目便覽」(東京, 明治7) 広告より. 所在を確認できず未刊と思われる。
 □宮崎柳條纂訳『百工製作新書』初篇3巻首1巻 清風閣藏版 明治10 二書房梓 (牧野善兵衛出版,

稻田佐兵衛発児) 3冊 23+19, 43, 48丁 23cm [国会, 内閣] ※抄訳

化学鑑原続編24巻 蒲陸山 (C. L. Bloxam) 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽筆述 光緒元 (1875) 上海 : 江南製造局 6冊 [BL, 国会, 筑大, 静嘉, 東大総, 大阪府, 長崎大武藤]
 □『西学大成』已編化学 「化学鑑原続編 4巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 杏雨]
 □『西学自彊叢書』第12・13冊 [日比谷実藤]
 □『西学富彊叢書』第9-16冊 「鑑原6巻・統卷6巻・附1巻・表1巻」 [早大小倉]
 □『江南製造繙譯各種西書』第19・20冊 [静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研, 長崎大経済]
 ※ Douglas, 補104
 ※ Chemistry Inorganic and Organic, with Experiments and a Comparison of Equivalent and Molecular Formulae. London, 1867.

化学鑑原補編6巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽訳 光緒8 (1882) 上海 : 江南製造局 6冊 [BL]
 □『西学自彊叢書』第14-16冊 [日比谷実藤]
 □『江南製造繙譯各種西書』第21-24冊 [静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 ※ Douglas, 補5
 ※ Chemistry Inorganic and Organic, with Experiments and a Comparison of Equivalent and Molecular Formulae. London, 1867.

化学器説6巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 輯
 □『格致叢書』化学 [日比谷実藤, 杏雨]

化学求数15巻付表1巻 富里西尼烏司 (K. R. Fresenius) 原著 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽筆述 光緒9 (1883) 上海 : 江南製造局 [UCLA (B)]
 □『西学富彊叢書』丙集化学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 ※ Quantitative Chemical Analysis. London, 1876.
 原本は独語原著の英訳。

化学啓蒙 羅斯古 (H. E. Roscoe) 築 林樂知 (Y. J. Allen)・鄭昌棟訳 光緒6 (1880)
 ◇光緒12 (1886) 総稅務司署 1冊 [九大]
 □『西学大成』已編化学 「化学啓蒙 1巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研, 杏雨]
 □『西学啓蒙』第9冊 [日比谷実藤, 早大小倉]
 □『西学十六種啓蒙』第9冊 [関大増田]
 □『西学十六種』第7冊 [国会]
 □『新輯各国政治芸学全書』所収 [京大人文研]

化学工芸10巻図3巻 能智 (G. Lunge) 著 傳蘭雅 (J. Fryer)・汪振聲訳 光緒24 (1898) 上海：江南製造局

□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ A Theoretical and Practical Treatise on the Manufacture of Sulphuric Acid and Alkali. London, 1880.

化学考質8巻表2巻 富里西尼烏司 (K. R. Fresenius) 原著 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽筆述 光緒9 (1883) 上海：江南製造局 6冊 [東洋]

□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Qualitative Chemical Analysis. London, 1876. 原本は独語原著の英訳。

化学材料中西名目表 江南機器製造総局編 光緒10-15 (1884-1889) 特大 1冊 37 p. [東洋藤田, 日比谷井上]

※ 合刻：西薬大成薬品中西名目表・附人名地名両表 (68 p.), 汽機中西名目表 (58 p.)

□『西学自彊叢書』第9冊 [日比谷実藤]

化学指南10巻 畢利幹 (A. Billequin)・聯子振訳 同治12 (1873) 北京：同文館 10冊 27 cm [BL, 国会]
※ Douglas, 補100
※ F. J. M. Malagutti, Leçons élémentaires de chimie. Paris, 1853-68.

化学初階 D. A. Wells 撰 嘉約翰 (J. G. Kerr) 口訳・何瞭然筆述

◇ 2巻 同治9 1871年英文序 広州：博濟医局 2冊 28.5×16.2 cm [BL, 青学短]

◇ 3巻 同治10 (1871) 序 3冊 27.2×15.6 cm [国会, 静嘉, 京大富士川]

□『西学大成』已編化学 「化学初階2巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研, 杏雨]

※ Douglas, 242

※ Wells's Principles and Applications of Chemistry—Inorganic Part. New York, 1858.

□市川央坡訓点『化学初階』2巻 從吾所好齋藏版 明治6.2(新刊) 東京：小林新兵衛ほか6軒 4冊 25.1×17.5 cm 3+6+4+(1~38)+2, 39~77, 2+(1~32)+1, 33~59丁 [内閣, 牧野, 3冊(欠巻1後半) 25.2×17.4 cm 内閣]

□高見岱校閲『化学初階』2巻 大阪書林会社蔵版 明治6.3(発行) 1871年英文序

◇ 2冊 77, 59丁 25 cm [国会, 内閣, 25.5×17.5 cm 東大洪庵, 杏雨]

◇ 4冊 26 cm 1-38, 39-77, 1-22, 23-59丁 [成田,

宮書, 25.7×17.8 cm 東大総(宮書旧蔵書), 内藤, 大阪府, 和歌山大紀州藩, 岡山大古医書, 牧野3点, 存1冊(巻1之上) 25.6×17.7 cm 東大総]

□宇田川興斎閲・宍戸逸郎和解『化学初階和解』5巻 明治6 東京：青山清吉(青山堂)等 5冊 19 cm [国会, 内閣, 18 cm 愛教大, 京都府, 岸和田高]

□清原道彦訳『化学示蒙 原素略解』 明治6 好文書堂 2冊 [国会, 京都府]

化学須知 傳蘭雅 (J. Fryer) 光緒12 (1886) 上海
□『格致須知』所収 [東北大狩野, 日比谷実藤]

化学闇原16巻 畢利幹 (A. Billequin) 口訳 承霖・王鐘祥筆述 光緒8 (1882) 北京：同文館 16冊 [BL, 存7巻(巻1-7) 首1巻 日比谷実藤]

※ Douglas, 補100

※ K. R. Fresenius, Anleitung zur qualitativen chemischen Analyse の重訳(仏訳, 中訳)

化学農務

□『続西学大成』第18冊・農学 [早大小倉]

化学入門2巻 厚美安 (M. A. Holbrook) 撰 丁立端校 光緒15 (1899) 1冊 1+1+41丁 [UCLA (B), 成田, UCLA (B) 本複製: 杏雨]

化学分原8巻 包門 (J. E. Bowman) 原著 蒲陸山 (C. L. Bloxam) 撰 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述 同治10 (1871) 上海：江南製造総局 2冊 28 cm [BL, UCLA (B), 国会, 内閣, 筑大, 東大総2点, 大阪府, 関大増田]

□『西学大成』已編化学 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研, 杏雨]

□『西学自彊叢書』第10冊 [日比谷実藤]

□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Douglas, 補104

※ An Introduction to Practical Chemistry, including Analysis. London, 1866.

化学要略

□『続西学大成』第20冊・化学 [早大小倉]

火器略説 王韜撰

□『西学大成』第7冊・辰編兵学 [日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研, 杏雨]

格致彙編 傳蘭雅 (J. Fryer) 編 1(光緒2, 1876) - 28(光緒18, 1892)号 上海：格致書室 [第1-4年 BL, 国会1-28号, 光緒2-8 早稻田小倉27冊, 3版復刻 南京古旧書店1-28号, 光緒2(1, 2, 3, 5, 6) 5冊 国会, 光緒2 11冊 東京理科大, 光緒3(1-12) 4

- 冊 静嘉, 光緒3 33冊 成田]
 □『最樂草堂叢書』卷79-85 「格致彙編44編」[東大
 総]
 ※ Douglas, 補101
- 格致啓蒙 4巻 羅斯古 (H. E. Roscoe) 撰 林樂知 (Y.
 J. Allen)・鄭昌棖訳 光緒元 (1875) 上海: 江南製
 造局 [BL, 成田, 静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 □『新輯各國政治芸學全書』所収 [京大人文研]
 ※ Douglas, 補86
 ※ Science Primer Series
- 格致質學啓蒙 艾約瑟 (J. Edkins) 総稅務司署 光緒
 12 (1886) 1冊 [九大]
 □『西學啓蒙』第6冊 「格致質學啓蒙11卷」[日比谷
 実藤, 早大]
 □『西學十六種』第8冊 「格致質學啓蒙1卷」[國
 会]
- 格致新法・統格致新法 慕維廉 (B. W. Muirhead)
 □『格致叢書』格致 [日比谷実藤, 杏雨]
- 格致須知 傳蘭雅 (J. Fryer) 編 上海: 格致書室 光
 緒8-20 (1882-1894) 19冊 [日比谷実藤]
 ※ 1. 化学須知 2. 気学須知 3. 地学須知
 4. 声学須知 5. 地理須知 6. 地志須知
 7. 天文須知 8. 重学須知 9. 力学須知
 10. 三角須知 11. 画器須知 12. 微積須知
 13. 電学須知 14. 量法須知 15. 代数須知
 16. 算法須知 17. 水学須知 18. 礦学須知
 19. 全体須知
 ◇ 光緒12-24 (1886-98) 21冊 [東北大狩野]
 ※ 1. 力学須知 2. 重学須知 3. 声学須知
 4. 光学須知 5. 熱学須知 6. 電学須知
 7. 化学須知 8. 全体須知 9. 植物須知
 10. 気学須知 11. 天文須知 12. 地学須知
 13. 地志須知 14. 礦学須知 15. 算法須知
 16. 量法須知 17. 代数須知 18. 三角須知
 19. 曲線須知 20. 微積須知 21. 画器須知
- 格致總學啓蒙 3巻 艾約瑟 (J. Edkins) 総稅務司署
 光緒12 (1886) 1冊 [九大]
 □『西學啓蒙十六種』第2冊 [東洋, 日比谷実藤,
 早大, 関大増田]
 □『西學十六種』第2冊 [国会]
- 格致叢書 徐建寅輯 32冊 [日比谷実藤, 杏雨]
- 格致理三家論 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰
 □『格致叢書』格致 [日比谷実藤, 杏雨]
 ※『格致彙編』1876.8-1876.9 に「格致理論」あり.
- 格致略論 12巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰
 □『格致叢書』格致 [日比谷実藤, 杏雨]
 ※『格致彙編』1876.2-1877.1 に「格致略論」あり.
- 格致雜說 4巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰
 □『格致叢書』格致 [日比谷実藤, 杏雨]
 ※『格致彙編』1876.2-1878.1, 1890春, 秋, 1891春秋
 冬, 1892春 に「格致雜說」あり.
- 格物窮理問答 慕維廉 (B. W. Muirhead) 上海 咸豐
 元 (1851) 1冊 10丁
 ※ Wylie, 168
 ※ J. F. Martinet, The Catechism of Nature の訳.
 23問答よりなる.
 ※ 和刻→安政6年4月「差支えの筋も御座候ニ付同
 書共差戻ス」(開版見改元帳)
 ※ 柳河春三『横浜繁昌記』の舶来書籍に「格物窮理
 問答」の書名あり.
 ※ Martinet 蘭語原本は『雪華図説』に利用される.
 『遠西観象図説』にも Martinet の説を利用したと
 ある.
- 格物探原 3巻 韋廉臣 (A. Williamson) 光緒2
 (1876) 3冊 27 cm [BL, 国会, 筑大, 静嘉, 學
 習院, 東大総2点, 関大増田, 2冊 (首卷・卷3) 早
 大]
 ◇ 3卷 4冊 光緒6 (1880) [BL]
 ※ Douglas, 補151
 ※ Natural Theology
 ※『教会新報』1872.1.15-1874.4.4, 「格物探原」連
 載.
 □ 熊野与訓点『格物探原』5巻
 ◇ 明治11 東京: 原胤昭 (十字屋) 5冊 2+1+1+
 1+3+1+53, 41, 40, 1+32, 40丁 25.9×18.1
 cm [国会, 内閣2点, 茨城大蔵, 学士院, 研医
 会, 無窮平沼, 青山学院, 26 cm 東京理科大,
 二松學舍, 早大, 城北, 豊橋, 関大増田, 香川大
 神原, 金刀比羅, 牧野2点, 長崎大武藤, 1冊
 (存卷1) 慶大富士川, 4冊 (欠卷5) 新潟県立図
 書館]
 ◇ 明治36 東京: 原胤昭 5冊 [杏雨, 関大増田]
 □ (和訳)『格物探原』卷5上下 写本 2冊 (合綴1
 冊) 24 cm [青山学院]
 □ 高木玄真訳解『格物探原訳解』3巻 大阪: 高木
 玄真 (敬虔堂) 蔵板 明治11 3冊 33, 39, 46
 丁 22.1×15.2 cm [国会, 内閣, 青山学院, 牧
 野]
- 格物入門 7巻 丁題良 (W. A. P. Martin) 同治7
 (1868) 北京: 同文館 7冊 [BL, 29.5×18.2 cm

宮城伊達，東北大狩野，佐倉高，静嘉，宮書，東大総，東大生薬，東大史料，東京理科大，早大2点， 29.2×17.7 cm 加賀聖藩， 29.5×18 cm 金沢泉丘高，愛教大，岡山大古医書，牧野， 29.7×18.0 cm 鹿児島大玉里，6冊（欠巻2）内閣，5冊（欠巻5・7）加賀聖藩，2冊（存巻3・4）加賀聖藩]

※ 卷首英文三枚付く書あり。

※ Douglas, 補131

※『教会新報』1868.9.5-1869.7.3号、「接抄格物入門 化学」掲載、全40回。

◇『増訂格物入門』7巻 光緒15（1889）北京：同文館 7冊 17 cm [国会, 6冊（欠巻6）東大総]

□ 和刻本 何礼之助訓点『格物入門』首巻・1巻 明治2.4（新鑄）京都：山城屋勘助ほか6軒 2冊 25.7×18.2 cm 33, 4+32丁 [内閣]

※序、凡例、目録、水学

□ 本山漸吉訓点『格物入門』7巻 菊間藩（上総）明親館蔵版 明治2.6（官許）東京：雁金屋清吉 7冊 $2+2+2+(2+4+3+4+4+6+4)+4+32$, 4+8+58, 3+5+56, 4+8+58, 4+4+60, 6+1+84, 4+3+76丁 26.0×17.8 cm [国会2点、内閣5点、宮城伊達、筑大、学士院2点、宮書、玉川大、東大岡、東大総、早大小倉、早大2点、福井市2点、小浜市立図書館、愛教大、神宮、京都府、京大、西京商業高、杏雨、関大増田、神戸大住田、山口大棲息、九大2点、伝習館高、2冊（巻1・2）内閣、3冊 学習院、1冊（巻1）慶大医、4冊（巻1-4）東大総、3冊（巻3・4）横浜市大三枝、3冊（巻2・6・7）加賀聖藩、2冊（巻首・巻1）福井市、6冊（欠第4冊）重山、27 cm 2冊（巻3・4）佐賀県鍋島]

□ 柳河春三等『格物入門和解』7編 北門社蔵版 明治3-7 20冊 23 cm [国会、筑大、豊橋、京都府、金刀比羅、15冊（欠2・3編）内閣、12冊（初-5編）内閣、5冊（初編2冊、2編上1冊、3編2冊）立教大久保、2冊（2編中下）学士院、3冊（2編） 22.5×15.0 cm 青山学院、3冊（2編）玉川大、2冊（初編）東大総、12冊（初・3-6編）東大教育、7冊（初-3編）東京理科大、3冊（2編）二松學舎、12冊 横浜市大三枝、2冊（5編）加賀聖藩、7冊（初-3編）福井市、3冊（初編上・2編中・3編下）福井市、6冊（初-3編、欠2編上）小浜市立図書館酒井、3冊（4編）上田藤廬、2冊（初編）岩瀬、7冊（初-3編）京大、7冊（初-3編）大阪府、7冊 杏雨、10冊（初-4編）岡山大、12冊（初-5編）岩国微古館]

◇ 詳細不明 奥村精一等解 明治3 2冊 [宮書]/

奥村精一等解 明治3 12冊 [宮書]/7巻 明治元 3冊 [無窮平沼]/戊辰 京都同文館存板 卷1上下2冊 [京都府]

◇ 宇田川準一和解『格物入門和解第六編（化学）』自筆稿本 4冊 [杏雨]

□『校正格物入門和解』 明治10修 7冊 [内閣]

遐邇貫珍 W. H. Medhurst→C. B. Hillier→J. Legge 1 卷1号（1853.8）-4卷5号（1856.5）香港：英華書院 創刊記事：The China Mail, 1853.8.4

1巻1号（1853年8月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原、佐賀鍋島]

2号（1853年9月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原、佐賀鍋島、抄写 東大総]

3号（1853年10月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原、佐賀鍋島]

4号（1853年11月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原、佐賀鍋島、抄写 東大総]

5号（1853年12月）刊本 [BL, 東大史料].

写本 [国会算作、抄写 東大総、東大史料、早大洋学、香川大神原、佐賀鍋島、有所不為斎雜錄]

2巻1号（1854年1月）刊本 [BL, 東大史料].

写本 [東大史料、抄写 東大総、東大明治文庫、東大社会情報研小野、香川大神原、有所不為斎雜錄]

2号（1854年2月）刊本 [BL].

写本 [東大明治、抄写 東大総、香川大神原]

3号（1854年3月）刊本 [BL].

写本 [3・4号 香川大神原]

4号（1854年4月）刊本 [BL]

5号（1854年5月）写本 [東大明治、香川大神原、佐賀鍋島]

6号（1854年6月）写本 [香川大神原]

7号（1854年7月）刊本 [東大史料、東大明治].

写本 [香川大神原]

8号（1854年8月）写本 [香川大神原]

9号（1854年9月）写本 [東大社会情報研小野、抄写 東大総、香川大神原、佐賀鍋島]

10号（1854年10月）写本 [東大明治、香川大神原]

11号（1854年11月）写本 [香川大神原]

12号（1854年12月）写本 [香川大神原]

3巻1号（1855年1月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原]

2号（1855年2月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原]

3号（1855年3月）刊本 [BL].

写本 [香川大神原、佐賀鍋島]

4号（1855年4月）刊本 [BL]

- 5号（1855年5月）刊本 [BL]
 6号（1855年6月）刊本 [BL].
 写本〔香川大神原〕
 7号（1855年6月）刊本 [BL].
 写本〔香川大神原〕
 8号（1855年8月）刊本 [BL].
 写本〔東大明治〕
 9号（1855年9月）刊本 [BL].
 写本〔国会算作，香川大神原〕
 10号（1855年10月）刊本 [BL, 東大東文研].
 写本〔国会算作，香川大神原〕
 11号（1855年11月）刊本 [BL, 東大東文研].
 写本〔香川大神原〕
 12号（1855年12月）刊本 [BL, 東大東文研].
 写本〔香川大神原〕
 4卷1号（1856年1月）刊本 [BL].
 写本〔香川大神原〕
 2号（1856年2月）刊本 [BL].
 写本〔香川大神原〕
 3号（1856年3月）写本〔香川大神原〕
 4号（1856年4月）刊本 [BL]
 5号（1856年5月）刊本 [BL].
 写本〔東大明治，香川大神原，佐賀鍋島〕
- ◇ 詳細不明 1854年版 写本 2冊 [岩国徵古館]
 ※ Douglas, 164, 補100
 ※ 羅森「日本日記」は1854年11号～1855年1号に連載。
 ※ 和刻本『中外襍誌』に『遐邇貢珍』よりの録出記事あり。「生物總論」第4号、「統生物論鳥類」（第5号）、「統生物論」（第6号）、「統生物論虫魚類」（第7号）、「補災救患普行良方」（第7号）。() 内の号数は『中外襍誌』の号数。
- 火車鉄路論 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰**
 □『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]
 ※『格致彙編』1877.3 (光緒3.2) に「火車與鉄路略論」あり。
- 華番和合通書 波乃耶 (D. Ball) 香港 1冊 27 cm**
 □ 道光24（1844）年版 1冊 60丁+図2枚 26.5 × 16.9 cm [国会]
 □ 道光27（1847）年版 [BL]
 ※ Wylie, 110 Douglas, 補100
- 堪輿問答 葉納清 (F. Genähr) 同治2（1863）香港 1冊 4丁**
 ◇ 同治7（1868）香港：英華書院 1冊 [BL, 東女大佐波, 新潟県立図書館]
 ※ Wylie, 162 Douglas, 94
- 幾何原本15卷（続幾何原本7-15卷） 偉烈亞力 (A. Wylie) 続訳 李善蘭筆受 咸豐7（1857）跋刊 松江：韓應陞 8冊 [BL, 横浜市大三枝]**
 ※ 所在は目録による。実際に咸豐7刊本であるかは現物調査が必要。
 ◇ 同治4（1865）南京：金陵書局 大 8冊 [内閣, 築大, 静嘉, 早大小倉, 學習院, 京大数学, 関大增田, 内閣本複製：3冊 京大人文研]
 □『古今算学叢書』所収 [東北大林, 東洋, 早大小倉]
 □ 光緒23（1897）上海：積山書房 合本4冊（巻1-4, 5-8, 9-10, 11-15）67, 71, 65, 57丁 16 cm [東京理科大]
 ※ Wylie, 173 Douglas, 241
- 汽學器説・論輕氣球 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰**
 □『格致叢書』汽學 [杏雨]
- 汽機新制 8卷 白爾格 (N. P. Burgh) 撰 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述 同治12（1873）上海：江南製造局 4冊 26 cm [BL, 国会, 2冊 學習院]**
 □『西學大成』申編汽學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
 □『西學自彊叢書』第1冊 [日比谷実藤]
 □『格致叢書』工芸学 [杏雨]
 □『江南製造繙譯各種西書』第38冊 [靜嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 ※ Pocket-book of Practical Rules for the Proportions of Modern Engines and Boilers for Land and Marine Purpose, London, 1864.
- 機器採要圖説 [傳蘭雅 (J. Fryer)] 撰**
 □『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]
- 汽機入門 丁體良 (W. A. P. Martin) 訳**
 □『西學大成』申編汽學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研, 杏雨]
- 汽機發勵 9卷表1卷 美以納 (T. J. Main)・白勞那 (T. Brown) 撰 偉烈亞力 (A. Wylie) 口訳・徐壽筆述 同治10年（1871）上海：江南製造局 4冊 29.8 cm [BL, 30 cm 国会2点, 内閣, 學士院, 静嘉, 學習院, 東大總, 早大, 28.0×17.3 cm 大谷]**
 □『西學大成』申編汽學 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研, 杏雨]
 □『西學自彊叢書』第1冊 [日比谷実藤]
 □『江南製造繙譯各種西書』第37冊 [靜嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 □ 江南機器製造總局編『化學材料中西名目表』光緒10-15（1884-1889）刊 特大 1冊 37 p. [日比谷井上]

※ 合刻：西藥大成藥品中西名目表・附人名地名両表 (68 p.)，汽機中西名目表 (58 p.)

※ Douglas, 補92

※ Manual of the Steam Engine

- 汽機必以12卷首1卷附1卷 蒲而捺 (J. A. Bourne) 撰
傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述 同治11 (1872)
上海：江南製造局 5冊 26 cm [BL, 国会, 東北大総, 4冊 内閣, 4冊 静嘉]
□『西學富彊叢書』壬下集汽機學 [国会]
□『江南製造繙譯各種西書』第39・40冊 [静嘉]
□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
※ Douglas, 補104
※ A Catechism of the Steam Engine, in its various Applications. London, 1865.

汽機鍋爐図説 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

□『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]

汽機命名説 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

□『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]

- 器象顯真 4巻図1巻 白力蓋 [M. Le Blanc] 輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐建寅刪述 4巻：同治11 (1872) 付図1巻：光緒5 (1879) 上海：江南製造局 2冊 27 cm [BL, 国会, 東北大岡本, 東北大狩野, 学士院, 東大総, 早大小倉, 大阪府]
□『西學富彊叢書』甲集算学 「器象顯真 4巻図1巻」 [国会, 東北大狩野, 日比谷実藤, 早大小倉]
□『西學自彊叢書』第3冊 「器象顯真 4巻図1巻」 [日比谷実藤]
□『古今算学叢書』所収 「器象顯真 4巻図1巻」 [東北大林]
□『江南製造繙譯各種西書』第25冊 [静嘉]
□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
※ Douglas, 補102
※ M. Le Blanc and J. E. Armengaud, The Engineer and Machinist's Drawing-Book
□ 和刻本『器象顯真』4巻 東京：陸軍文庫 明治8 1冊 [内閣3点]

汽電車論 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

□『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]

- 祈禱入門要訣 麥嘉締 (D. B. McCarteree) 道光29 (1849) 寧波 1冊 24丁
◇ 同治2 (1863) 上海 1冊 31丁 [大谷]
◇ 同治10 (1871) 上海：美華書館 1冊 3+2+26丁 19.5 cm [同志社新島]
◇ 同治10 (1871) 祈禱真神入門要訣 1冊 [内閣]
※ Wylie, 138

旧遺詔書 5巻 (摩西五經) 道光26 (1846) 寧波：華花聖經書房 1冊 25×15 cm [東北大, 東洋, 福井松平]

※ 創世伝, 出麥西国伝, 利未書, 戸口冊紀, 復伝律例書.

救火器説 1巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

□『格致叢書』工芸学 [日比谷実藤, 杏雨]

救世主耶穌訓徒祈禱文句解 培端 (D. B. McCarteree) 撰
同治5 (1866) 上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]

救世主耶穌之聖訓 愛漢者 (K. F. A. Gützlaff) 築 道光16 (1836) 新嘉坡：堅夏書院 1冊 18丁 [BL, 東北大]

※ Wylie, 57 Douglas, 68

救世之妙 李提摩太 (T. Richard) 訳 赫士 (W. M. Hayes) 輯 光緒21 (1905) 上海：美華書館 1冊 [東洋]

救世要論 丁題良 (W. A. P. Martin) 撰 咸豐10 (1860) 寧波 1冊 4丁

◇ 同治3 (1864) 上海：美華書館 1冊 4丁 18 cm [大谷]

◇ 同治13 (1874) 上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]

※ Wylie, 205

救溺死烟毒編 瑪高溫 (D. J. Macgowan) [上海] 光緒3 (1877) 1冊 10丁 [BL, 内閣]

※ Douglas, 補89

旧約史記條問 哈巴 (A. P. Happer) 咸豐2 (1852) 寧波：華花聖經書房 1冊 82丁 [香川大神原]

◇ 同治3 (1864) 1冊 [大谷]

◇ 同治14 (1875) 上海 1冊 pp. 114 [BL]

※ Wylie, 145 Douglas, 補41

旧約聖書30巻 同治2 (1863) 上海：美華書館 4冊大 [大阪府, 卷11-14 早大]

旧約全書

上海

□ 咸豐3 (1853) 旧約全書・新約全書 墨海書館合1冊 [東北大]

□ 咸豐4 (1854) [1冊 (存卷3) BL]

◇ 咸豐4-5 (1854-55) 旧約全書3巻新約全書2巻 [BL]

◇ 咸豐5 (1855) 3巻 墨海書館 3冊 [BL, 佐賀大小城鍋島]

◇ 咸豐8 (1858) 3巻 墨海書館 3冊 150, 195,

158丁 21 cm [20×14 cm 東大総 3点, 天満宮, 天理, 2冊(次巻2) 青山学院, 2冊(次巻3) 青山学院]

◇ 咸豊8-9(1858-59) 旧約全書3巻新約全書27巻 墨海書館 1冊 [東大総]

◇ 咸豊9(1859) 3巻 墨海書館 3冊 21 cm [葵, 1冊(巻1)長崎大武藤]

◇ [咸豊11(1861)] 美華書館 1冊 24 cm [佐賀鍋島]

□ 同治2(1863) 39巻 美華書館 [BL, 6冊 静嘉, 聖書図書館, 6冊 大谷, 天理, 松江, 4冊 香川大神原, 牧野, 3冊(巻1-5, 18-39) 東北大, 1冊(巻23-39) 23 cm 長崎大武藤]

◇ 同治3(1864) 39巻 美華書館 6冊 27.5×16.7 cm [東北大狩野, 北野, 関大増田, 7冊 天理]

◇ 同治3(1864) 旧約全書・新約全書 [BL]

◇ 同治3-4(1864-65) 旧約全書39巻・新約全書27巻 美華書館 4冊 13.9 cm [和歌山大紀州藩]

◇ 同治4(1865) 39巻 美華書館 3冊 洋装 pp.1-391, 392-968, 969-1352 14×8.5 cm [CAM(S), 国会亀田, 国会2点, 内閣, 宮城小西, 筑大, 青山学院, 長崎大経済, 1冊(巻1-7) 茨城大蔵]

◇ 光緒6(1880) 39巻 美華書館 19 cm 513丁 [千葉, 青山学院]

香港

□ 咸豊5(1855) 3巻 英華書院 [2冊(巻2, 3) 東北大]

◇ 咸豊5(1855) 旧約全書・新約全書5巻 [BL]

◇ 咸豊11(1861) 英華書院 3冊 [静嘉]

◇ 咸豊11(1861) 両約全書 英華書院 2冊 [東北大]

◇ 同治3-4(1864-65) 7巻 英華書院 7冊 [東北大, 3冊 東洋]

◇ 同治3-5(1864-66) 旧約全書7巻新約全書2巻 [BL, CAM(A) 2点]

□ 同治5-6(1866-67) 39巻 英華書院 3冊 [内閣]

◇ 同治5-8(1866-69) 旧約全書・新約全書 [BL]

刊行地不明

□ 同治7(1868) 7巻 7冊 [大谷]

□ 刊年不明 1冊 [神宮]

* Wylie, 35, 71, 148 Douglas, 1, 补2

旧約全書新約全書即新旧約聖經 施約瑟 (J. Schereschewsky) 訳 光緒28(1902) 上海: 大美國聖經会 1480 p. 23 cm [青山学院]

◇ 光緒29(1903) 上海: 大美國聖經会 1冊 [長

崎大経済]

教会新報 1868.9.5-1874.8.29 Vol. 1 (1-50), Vol. 2 (51-100), Vol. 3 (101-150), Vol. 4 (151-200), Vol. 5 (201-250), Vol. 6 (251-300) [The Honnold Library of Claremont College, HYL: 1869-70, BL: 欠152, 154, 155-157, 173, 176, 183, 219-220, 222-223, 239, 260]

□ 影印 (台北: 華文書局, 1968年) 6冊 [北大, 筑大, 東洋大]

* Douglas, 补101

* A. A. Bennett comp. Research Guide to the Chiao-hui hsin-pao (The Church News) 1868-1874 教会新報目録導要 (San Francisco: Chinese Material Center, Inc., 1975)

* 創刊時名称「中国教会新報」, 1872.8.31 より「教会新報」と改題。

居宅衛生論 2巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰

□ 『格致叢書』医学 [日比谷実藤, 杏雨]

* 『格致彙編』1890春-冬に「居宅衛生論」あり。

郷訓 同治9(1870) 上海: 美華書館 [1冊 静嘉, 第1冊 東洋]

◇ 同治13(1874) 上海: 美華書館 1冊 小 [早大]

◇ 清刊 1冊 [内閣]

* Wylie, 30, 201

御風要術 3巻 白爾特 (W. R. Birt) 撰 金楷理 (C. T. Kreyer) 口訳・華蘅芳筆述 上海: 江南製造局 2冊 29.4×17.3 cm [BL, 25 cm 国会, 内閣, 東大総, 学習院, 九大桑木]

□ 『江南製造繙譯各種西書』第42冊 [静嘉]

□ 『江南製造局譯書彙刻』所収 [国会, 京大人文研]

* Douglas, 补62

* Handbook of the Law of Storms

基督實錄 3巻 韋廉臣 (A. Williamson) 撰 董樹棠筆記 光緒5(1879) 烟台: 韋廉臣 3冊 [東洋, 東大総]

◇ 光緒6(1880) [東北大狩野]

□ 奥野昌綱訳『基督實錄』35章 明治15(出版人) 東京: 飯島靜謙 1冊 洋装本 108p. 18.3×12.5 cm [青山学院, 東女大佐波]

* Life of Christ

金石識別 12巻 代那 (J. D. Dana) 撰 瑪高温 (D. J. Macgowan) 口訳・華蘅芳筆述 6冊 [BL, 国会, 内閣2点, 筑大, 静嘉, 学習院, 早大, 京大地理, 京大採鉱, 大阪府]

◇ 同治10(1871) 上海: 江南製造局 6冊 序なし

- ◇ 6 冊 (1-4, 5, 6, 7, 8-10, 11-12巻) 序なし
無刊記 [29.8×17.2 cm 国会伊藤, 27.6×17.1 cm 国会, 29.7×17.1 cm 東大総 (第一学区開成学校旧蔵)]
- ◇ 6 冊 (1-2, 3-4, 5, 6, 7-9, 10-12巻) 序なし
無刊記 「長洲沙英絵図・元和江衡校字」削除 [29.4×17.4 cm 東大南蔵]
- 同治11 (1872) 江南機器製造総局蔵板 6 冊 序あり 金石表なし [北京全国地質図書館, 南京図書館, 上海図書館]
- 『江南製造繙譯各種西書』第32・33冊 [静嘉]
- 『江南製造局譯書彙刻』第308-314冊 12巻附表 1 卷 7 冊 序あり 金石表あり [北京図書館文津街分館, 上海図書館, 京大人文研]
- 『西学富彊叢書』丙集化学 「金石識別12巻表 1 卷」 [北京図書館文津街分館, 上海図書館, 国会, 東北大, 日比谷実藤, 京大人文研]
- ※ Douglas, 補125
- ※ Manual of Mineralogy, 増補版 (1857後)

金石名表

- 『江南製造局訳書彙刻』所収 [国会]

- 近代教士列傳 李提摩太 (T. Richard) 撰 光緒20 (1894) 上海: 広学会 1 冊 [東洋]
- 教士列傳10巻 上海広学会訳・刊 光緒26-27 (1900-1901) 10冊 小 [早大, 9 冊 (欠巻 1) 早大]

- 航海金針 3巻 黎特 (W. Reid) 等著 瑪高温 (D. J. Macgowan) 訳 寧波: 愛華堂蔵板 咸豐 3 (1853) 1 冊 35丁 30 cm 英文序あり [BL, Brown University, New York Public Library]
- ◇ 写本 [神戸大住田] ※写本「博物通書」と合綴.
 - ※ Wylie, 133 Douglas, 151, 補89
 - ※ The Progress of the Development of the Law of Storms, and of the Variable Winds. London, 1849.
 - 和刻本『航海金針』3巻 薩摩府学 1 冊 1+8 +10+8+5+地図1枚 26×17.5 cm 近世木活字本 ※ 4種の異植字版あり.
 - ◇ 安政3年8月刊 [宮城伊達, 東北大狩野, 蕃書調所→国会, 宮書古賀, 国立天文台, 尊經, 東京商船大, 早大洋学2点, 大阪府大經濟, 九大, 長崎]
 - ◇ 写本 [東北大, 有所不為斎雑録]
 - ◇ 安政3年8月後刊 [早大洋学, 天理, 和歌山大学紀州藩文庫, 鹿児島]
 - ◇ 安政4年夏刊 江戸: 岡田屋嘉七 [東北大数科, 内閣, 学士院, 宮書2点, 日比谷近藤, 慶大幸田, 横浜市大鮎沢, 金沢市稼堂, 福井市, 岩瀬, 神戸]

- 大住田, 和歌山大紀州藩, 香川大神原, 九大, 九大桑木, 海事史料叢書]

- ◇ 安政4年夏後刊 江戸: 岡田屋嘉七 [東博, 東大総2点, 東京商船大百周年記念資料館, 金沢市蒼龍館, 福井市, 京都府, 京大, 関大増田, 九大]

- 航海簡法 4巻 那麗 (G. S. Nares) 撰 金楷理 (C. T. Kreyer) 口訳・王徳均筆述 同治10 (1871) 上海: 江南製造局 2 冊 25 cm [BL, 国会, 東大総2点, 大谷]

- 『西学大成』寅編地学 「航海簡法 2巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研]
- 『江南製造繙譯各種西書』第41冊 [静嘉]
- 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Douglas, 補62

- 光学 2巻 田大里 (J. Tyndall) 撰 金楷理 (C. T. Kreyer) 口訳・趙元益筆述 光緒2 (1876) 上海: 江南製造局 2 冊 27 cm [BL, 国会, 学士院, 大阪府]

- ◇ 2巻 同治9 (1870) 序 2 冊 54.66丁 30 cm [筑大, 東洋, 東京理科大]
- ◇ 2巻付聲学 8巻 同治9 (1870) 序 4 冊 [東北大岡本]
- 『西学大成』戌編光学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 『西学富彊叢書』第18冊 [早大2点]
- 『江南製造繙譯各種西書』第12冊 [静嘉]
- 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Douglas, 補130

- 古今萬国綱鑑錄20巻 郭実獵 (K. F. A. Gützlaff) 新嘉坡 1838年 1 冊 244丁 [HYL]

- 道光30 (1850) 寧波: 華花聖經書房 1 冊 266 丁 24.6×14.5 cm [香川大神原]
- ※ Wylie, 60

- ※ 香山院龍温『総斥排仏弁』に「近クハ万国綱鑑錄ト云ヘルモノ二十巻」.

- 簡約版 McCarteree 『萬国綱鑑』 寧波 道光30 (1850) 132丁

※ Wylie, 137

- 大槻誠之・渡辺約郎解『萬国綱鑑錄和解』4巻 明治7 何不成社蔵 4 冊 [内閣]

※ McCarteree 本の和解か.

- 古今萬国綱鑑錄 3巻 模禮菘 (Morrison) 著 大槻誠之点・柳沢信大校 明治7 東京: 袋屋亀次郎等 3 冊 3+2+3+54, 71, 52 丁 26.4×18.5 cm [国会, 内閣, 千葉, 宮書, 半田, 愛日]/塚本明毅・重野安繹同閲 明治7 3 冊 26.3×18.5 cm [重山]

察世俗每月統記傳 米憐 (W. Milne) 等 咸豐 9 (1859) 1815-1822年
マラッカ 19×12 cm [1815.7-1821.9, 1822.1-3 BL]

※ Wylie, 19 Douglas, 164

三字經 咸豐11 (1861) 1 冊 [大谷]
※ Wylie, 27, 92, 232, 284

三德論 1巻 艾約瑟廸謹 (J. Edkins) 咸豐 6 (1856)
上海 1冊 17丁 [筑大]
※ Wylie, 187

三要錄 丁題良 (W. A. P. Martin) 咸豐 9 (1859) 寧波：華花印書房 1冊 [静嘉, 25 cm 22丁 青山學院, 18 cm 27丁 東文大佐波, 早大]
◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 築大, 東大総]
◇ 光緒 8 (1882) 上海 [BL]
◇ 刊年不明 [大谷]
※ Wylie, 205 Douglas, 補90

祀先辨謬 倪維思 (J. L. Nevius) 咸豐 9 (1859) 寧波
□ 同治 7 (1868) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 京大人文研]
※ Wylie, 224

使徒行傳

□ (耶穌聖徒使徒行傳福音全書) 同治元 (1862) 上海：美華書館 1冊 [静嘉]
◇ (新約全書第5巻) 同治 3 (1864) 1冊 [大谷]
◇ 同治 4 (1865) 上海：美華書館 1冊 [東北大]
◇ 同治 11 (1872) 1冊 [東北大]
◇ 同治 12 (1873) 上海：美華書館 1冊 [東北大]
◇ 光緒 3 (1877) 上海：美華書館 1冊 [東北大]
□ 大美國聖經会官話訳 光緒 12 (1886) 上海：大美國聖經会 1冊 [東大総]
※ Wylie, 124, 211

使徒行傳註解 倪維思 (J. L. Nevius) 撰 同治 4 (1865) 1冊 [大谷]
◇ 同治 7 (1868) 上海：美華書館 1冊 101丁 24 cm [BL, 内閣2点, 酒田光丘, 築大, 静嘉, 東洋, 青山学院, 東大総, 早大, 京大人文研, 大阪府, 九大]
※ Wylie, 225 Douglas, 補97
※ 流布書名「使徒行傳註釋」

指南編 哥伯播義 (R. H. Cobbold)

□ 咸豐 7 (1857) 上海 1冊 15丁 [BL]
□ 同治 8 (1869) 香港：英華書院 1冊 [内閣]
※ Wylie, 183, 186 Douglas, 163

釈教正謬10章 艾約瑟廸謹 (J. Edkins) 咸豐 7 (1857)
1冊 31丁 [BL]

- 増補版『釈教正謬・統釈教正謬』 20章 咸豐 9 (1859)
- ◇ 同治 5 (1866) 香港：英華書院 1冊 26丁 20.1×13.0 cm [無窮神習, 東大南葵, 龍谷, 関大增田]
- ◇ 同治 7 (1868) 香港：英華書院 1冊 26丁 20 cm [国会, 茨城大菅, 静嘉, 東大総, 早大]
- ※ Wylie, 188 Douglas, 69
- 和刻本『釈教正謬』2巻 近世木活字本 2冊 9 行×18字 中 見返「活字板/限百部/禁壳買」[大阪府, 香川大神原, 1冊 天理]
- ◇ 見返文字なし 2巻 (巻上下) 20章 木活本 9行×18字 1冊 32+30丁 18.1×12.3 cm [青山学院]
- 和刻本『釈教正謬』2巻 近世木活字本 2冊 25, 24丁 10行×21字 半 見返「活版限百部/不許壳買」[茶園成實, 22.4×15.6 cm 大阪府, 23 cm 九大, 異版 26 cm 九大]
- 分類不明 [漢刊] 2巻2冊 [大谷]
- 写本 20章 1冊 26.8×17.9 cm [東大渡辺]/写本 2冊 中 [早大]

上海新報 上海 A. A. Jameson, M. L. Wood, J. Fryer, Y. J. Allen 1861.11-1872.12.31
※ 高杉晋作, 文久2年5月27日 (1862.6.24) 上海のミュアヘッドを訪問, 『上海新報』を購求する (上海淹留日録).
※ Wylie, 260, 262

重學17巻 胡威立 (W. Whewell) 撰 艾約瑟 (J. Edkins) 口訳・李善蘭筆述 松江 (上海) 咸豐 9 (1859) 3冊
◇ 17巻 同治 6 (1867) 上海：美華書館 2冊 [東北大狩野]
◇ 17巻首1巻 同治 6 (1867) 上海：美華書館 2冊 28 cm [東北大林, 国会, 東大総, 早大小倉]
□ 20巻・附曲線説 3巻 同治 5 (1867) 南京 6冊 大 [BL, 東北大岡本, 2冊 (20巻) 山形大柳原, 学士院, 学習院, 早大小倉, 5冊 (欠附) 東大総, 1冊 (巻8-17) 長崎大武藤]
□ 『西学富彊叢書』第4・5冊 「重學20巻」[早大小倉]
※ Wylie, 188 Douglas, 補39
※ An elementary treatise on mechanics
□ ホウエール著 宮崎柳條纂輯『百工器械新書』2巻 明治 7 東京：清風閣 2冊 2+3+37, 37丁 23 cm [国会]

重學図説 1巻 体性図説 1巻 熱學図説 2巻 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰 光緒 11, 16 (1885, 1890) 上海：益智書会 1冊 [関大增田]

- 重学図説 傳蘭雅 (J. Fryer) 撰**
- 『西学大成』未編重学 [国会, 京大人文研]
- 重学浅説 W. & R. Chambers 原著 偉烈亞力 (A. Wylie)・王韜訳 咸豐8年4月(1858) 上海:墨海書館 1冊 14丁 20.9×14.1 cm [東洋藤井, 大谷, 香川大神原]**
- 『六合叢談』第2巻第1号, 第2巻第2号 所収→『六合叢談』を見よ。
 - 『重学』17巻首1巻 卷首再録→『重学』17巻首1巻を見よ..
 - 『西学輯存六種』第2冊再録→『西学輯存六種』を見よ.
 - ※ Wylie, 173
 - ※ 原本は, William and Robert Chambers eds. "Mechanics-Machinery" in Chambers's Information for the People, 3rd ed. Edinburgh, 1848-1849.
 - 和刻本『重学浅説』(題簽「官板重学浅説」) 1巻 1冊 23丁 22.7×14.6 cm [UCLA (B) 三井, 国会, 内閣, 東北大狩野, 茨城大菅, 東大田中, 金沢市蒼龍館, 福井県大野高, 刈谷村上, 京大, 西京商業高, 九大, 九大桑木] ※「官板六合叢談」別冊。
 - 荒井公履(叔礼)傍點『重学浅説』(題簽「翻刻重学浅説」) 1巻 安政7年春(1860)荒井公履序 万延元年6月(1860)刊 淀藩:木村淳邑(粹夫) 翻刊 黄花園藏梓 奥付書店, 京都二条堀川越後屋治兵衛等 1冊 1+23丁 22.4×15.7 cm [東北大岡本, 東大絵, 早大小倉, 京都府, 関大増田, 和歌大紀州藩, 香川大神原]
 - ※ 「開版見改元帳」(万延元ノ分)に「四月二十五日改/酉[万延二]正月二十九日納/重学浅説 全一冊/壬[文久二]三月 京都町人 治兵衛/右表紙ニ願人越後屋治兵衛/校合城州[山城国]淀藩荒井甲四郎と有之」とあり。
 - 『六合叢談』(題簽「六合叢談 刪定本」) 第2巻付録(題簽「六合叢談 第二巻/刪定本一二/附重学浅説」)→『六合叢談』(題簽「六合叢談 刪定本」)を見よ。
 - 分類不明 24 cm [玉川大]
- 重学入門 丁鶴良 (W. A. P. Martin) 撰**
- 『西学大成』未編重学 [国会, 京大人文研]
- 習漢英合話 写本 1冊 [香川大神原]**
- ※ A Guide to Conversation in the English and Chinese language for the use of American and Chinese in California and elsewhere by Stanisze, as Hernisz M. D. (Boston, 1854) 蕃書調所の朱字あり.開版見改元帳, 安政5年10月に書名みえる。
- 十條誠註(神天之十條誠註明) 尚徳者 (W. H. Medhurst) 築 [1830年代] 1冊 94丁 22 cm [青学短]**
- ※ Wylie, 29
- 儒釋道回耶蘇五教通考 慕維廉 (W. Muirhead) 明治12 東京:十字屋 1冊 62p. [19 cm 青山学院, 18 cm 東女大佐波]**
- 儒門医学 3巻附1巻 海得蘭 (F. W. Headland) 撰**
- 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・趙元益筆述 光緒2(1876) 上海:江南製造局 4冊 27 cm [BL, 国会, 3冊京大]
 - 『新輯各国政治芸学全書』所収 [京大人文研]
 - 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 - ※ Douglas, 補40
 - ※ 1867年 Headland 自序
 - ※ 卷末漢英対訳薬物語彙・江南製造局日付「August, 1875」
 - ※ The Medical Handbook
 - 太田雄寧點注『儒門医学』4巻附1巻 明治12版 権免許 明治13序 東京:太田雄寧 4冊 卷1(2+1+5+30丁) 卷2(32丁) 卷3(31丁) 卷4(23+5+6+2丁) 23 cm [国会, 内閣, 東洋藤井, 牧野, 1冊(卷2) 東大絵]
- 循環日報 王韜主筆 1874. 2.4 - 香港:中華印務總局 [1874.2.4-7.4 BL, 1880.7.5-1884.12.29 国会, 1874.5.16-1874.8.10 東大明治]**
- ※ 卓南生 (1990:229-260)
- 上帝總論 湛約翰 (J. Chalmers) 撰 咸豐8(1858) 香港 [BL]**
- ◇ 同治7(1868) 香港:英華書院 1冊 [新潟県立図書館]
 - ※ Wylie, 217 Douglas, 177
- 上帝萬物之大主 2巻 善徳 (K. A. F. Gützlaff) 築 [1836?] 新嘉坡:堅夏書院 1冊 1+9+10丁 23 cm [HYL, 東北大]**
- ※ Wylie, 59
- 初學編 3巻 麥嘉緒 (D. B. McCarter) 咸豐元(1851) 寧波 166丁 [2巻 BL]**
- ※ Wylie, 138 Douglas, 3, 153
 - ※ Old Testament History for Beginners
- 植物学 8巻 章廉臣 (A. Williamson) 輯訳・艾約瑟 (J. Edkins) 続訳・李善蘭筆述 上海:墨海書館 咸豐8(1858) 1冊 101丁 [BL, 筑大, 京大]**
- ※ Wylie, 239 Douglas, 241
 - ※ 原本は上野(1980)によれば, John Lindley, Elements of Botany, 1841, 292 p.

- ◇ 上海墨海書館刊・紋銀 3 錢 [25.6×16.3 cm 国会白井, 25.6×16.6 cm 牧野3398 (Macgowan 将来本), 25.1×16.1 cm 東大田中]
- ◇ 上海墨海書館後印・紋銀 4 錢 27.3×17.3 cm [岩瀬]
- ◇ 上海墨海書館後印 [23.7×15.0 cm 茨城大菅, 24.6×15.8 cm 牧野3396, 牧野3397]
- ◇ 上海：益智書会（1877設立）印 24.1×15.4 cm [牧野3399]
- 和刻本『植物学』（題簽「翻刻植物学」）8巻 足利：求道館藏 慶応3（1867）3冊 101丁 [東北大狩野, 東洋, 慶大, 杏雨, 岡山大古医書, 牧野（外包紙→江戸科学古典叢書24）]
- ※ 和刻本は全文翻刻
- ※ 足利藩校求道館版木55枚は、1959.2.17に足利市文化財となり、同市の復原史跡足利学校に書扉の版木1枚が展示されている。
- ◇ [後印] 3冊 [牧野7点, 2冊（欠巻1-3）牧野]
- ◇ 慶応3 足利学校求道館藏版 川越屋松次郎 3冊 [岡山大大原]
- ◇ 後印 3冊 足利学校求道館藏版 東京：川越屋松次郎 [牧野]
- ◇ 慶応3 江戸：鈴木善右衛門等 3冊（巻1-3, 4-5, 6-8）33+26+43丁 27 cm [東京理科大, 牧野2点]
- ◇ 灌（荷）園蔵版 3冊 [牧野2点]
- ◇ 和刻本『植物学』（題簽「翻刻植物学」）8巻 無刊記 木邨嘉平刻 3冊 欄外〇あり [宮書古賀]
- ◇ 和刻本『植物学』（題簽「翻刻植物学」）8巻 無刊記 木邨嘉平刻 3冊 26.4×17.2 cm 101丁 [国会→江戸科学古典叢書24, 内閣4点, 千葉2点, 学習院, 慶大, 東大総徳川宗敬, 青学短, 早大花房, 内藤, 神宮, 京大富士川, 西京商業高, 関大増田, 和歌山大紀州藩, 岡山大大原農書, 岡山大古医書2点, 牧野, 九大, 1冊（巻6-8）UCLA (B) 三井, 1冊（巻6-8）内閣, 1冊（巻6-8）岡山大大原農書] ※ この項は分類不明の和刻本も含む。
- ◇ 明治元 3冊 [東大農]
- 阿部為任訳『植物学訳解』8巻 明治8 東京：甘泉堂 3冊 [国会, 学習院, 牧野]
- * 上野（1973:608）によれば、阿部国弘述『植物学和解』3冊、明治8刊があるという。未確認。阿部国弘校『（増補）和訳地理全志（上篇）』（明治7）4冊奥付の雁金屋清吉発児広告に「植物学和解全3冊 追刻」あり。
- 田原陶猗編『植物学抄訳』8巻 明治8 天野芳次

- 郎 中 5冊 [国会白井, 牧野]
- 植物学啓蒙 光緒12（1886）税務司署 1冊 [九大]
 - 『西学十六種』第11冊 [国会]
 - 『西学啓蒙十六種』第10冊 [日比谷実藤, 早大, 関大増田]
- 信經註釋 培端 (D. B. McCarteree) 撰 咸豐10（1860）寧波：華花聖經書房 1冊 5丁 18 cm [東女大佐波]
 - ◇ 同治5（1866）上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]
 - ※ Wylie, 137
- 新釈地理備考全書10巻 瑪吉士 (L. Marques) 撰 道光27（1847）5冊 [日比谷実藤]
 - 『海山仙館叢書』[BL, 国会, 宮書, 東洋, 東大総, 早大小倉, 愛知大簡斎, 京大, 龍谷, 大阪府, 九大]
 - ※ Douglas, 257
 - ※ 『海國図志』巻76に「地理備考叙」収録。
- 真神十誠釋義 培端 (D. B. McCarteree) 撰 咸豐10（1860）寧波：華花聖經書房 1冊 5丁 18 cm [東女大佐波]
 - ◇ 同治5（1866）上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館, 大谷]
- 真神總論 淑 (J. L. Shuck) 道光29（1849）[上海]
 - [BL]
 - ◇ 同治2（1863）上海：美華書館 [大谷, 大洲矢野]
 - ◇ 同治7（1868）上海：美華書館 1冊 5丁 16 cm [東女大佐波]
 - ※ Wylie, 92 Douglas, 183
- 信操三綱 培端 (D. B. McCarteree) 同治5（1866）上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館, 大谷]
 - ※ Wylie, 137
- 信操三綱信經註釈主祈禱文句解 培端 (D. B. McCarteree) 寧波：華花聖經書房 咸豐10（1860）1冊 13丁 18.5 cm [天理]
 - ◇ 主祈禱文句解 咸豐10（1860）寧波：華花聖經書房 1冊 3丁 18 cm [東女大佐波]
 - ◇ 主祈禱文句解 同治5（1866）[大谷]
- 新增聖書節解2巻 麥嘉締 (D. B. McCarteree) 道光28（1848）寧波：華花聖經書房 1冊 130丁 26 cm [佐賀鍋島]
 - ※ Wylie, 136
 - ※ 流布書目「新遺詔書註解」。版心による。

神天聖書（載舊遺詔書兼新遺詔書） 馬禮遜（R. Morrison）・米憐（W. Milne） マラッカ：英華学堂（Anglo Chinese College）1823年 17 cm [BL, 立教大, 欠1卷 京都外大, 20-21本 聖心]

- 第1本「創世歴代傳」50章 1823年 64丁 [菱本丈夫編『漢訳聖書の研究(1)』創世記甲編, 1977年, 所収]
- ◇ 道光23(1843) [12冊(巻1-17) 東北大]
- ※ Wylie, 5 Douglas, 1
- ※『舊遺詔書』全17本(1823), 『新遺詔書』全4本(1813).

真道衡平 葉納清（F. Genähr） 同治2(1863) 香港1冊 53丁 [BL, 静嘉, 早大, 大谷]

- ◇ 光緒2(1876) 広州：福音堂 1冊 55丁 25 cm [静嘉, 青山学院]
- ※ Wylie, 163 Douglas, 258
- 辻靜訓『斥儒真道衡平』 東京：原胤昭 明治14年 1冊 洋装本 145p. 19 cm [東女大佐波]

神道總論 3卷 倪維思（J. L. Nevius） 同治3(1864) 上海：美華書館 3冊 96, 46, 83丁 [大谷, 関大増田]

- ◇ 同治9(1870) 上海：美華書館 3冊 24 cm [青山学院, 京大人文研]
- ◇ 同治11(1872) 上海：美華書館 3冊 [BL, 茨城大菅, 静嘉, 東洋, 松江]
- ◇ 清刊 3冊 [内閣]
- 分類不明 咸豐2(1852) 上海：美華書館 3冊 [新潟県立図書館]
- ※ Wylie, 225 Douglas, 補97
- ※ Wylieによれば、『神道總論』の初版は1864年刊, Neviusの入華は1854年という。
- 奥野昌綱訓点『訓點神道總論』3卷 東京：原胤昭 明治14-15年 2冊(上下) pp. 5+138, 2+(139~315) 19 cm [国会]

信道摘要書 咸豐6(1856) 上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]

- ◇ 同治5(1866) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 大谷]
- ◇ 光緒7(1881) 上海 pp. 92 [BL]
- ※ Douglas, 補119

真道入門 W. Milne著 W. C. Milne改訂 咸豐6(1856) 香港 [BL]

- ◇ 同治6(1867) 香港：英華書院 1冊 19丁 15.5 cm [東女大佐波]
- ※ Wylie, 15, 124 Douglas, 33

新約串珠27卷 同治8(1869) 福州：美華書院 1冊 65丁 25 cm [BL, 内閣, 東北大狩野, 青山学院, 大谷]

- ※ Wylie, 236 Douglas, 3
- ※ God:上帝

新約聖書27卷 同治元(1862) 2冊 [大谷]

- ◇ 同治2(1863) 上海：美華書局 28 cm [東北大, 静嘉, 早大, 佐賀鍋島]
- ◇ 同治3(1864) 上海 [BL]
- ◇ 同治3(1864) 香港：英華書院 1冊 [静嘉]
- ◇ 同治7(1868) 2冊 [東北大狩野]
- ◇ 光緒5(1879) 上海：美華書局 [BL, 関大増田]
- ◇ 光緒9(1883) 2冊 [東北大]
- (聖書問答) 光緒14(1888) 広東長老公会 1冊 [東北大]
- (新約土話) 光緒15(1889) 2冊 [東北大]
- ※ Douglas, 3, 補3

新約全書

上海

- 咸豐2(1852) 12卷 [BL]
- ◇ 咸豐4-5(1854-55) 旧約全書3卷・新約全書2卷 [BL]
- 咸豐7(1857) 官話 [BL]
- ◇ 咸豐8(1858) 27卷 墨海書館 1冊 147丁 21 cm [青山学院, 東大絶3点, 26卷 新潟県立図書館, 天満宮]
- ◇ 咸豐9(1859) 墨海書館 147丁 21 cm [立命館岡村, 天理]
- ◇ 咸豐11(1861) 10卷 美華書館 [BL]
- ◇ 同治2(1863) 27卷 美華書館 1冊 28 cm [内閣, 早大洋学, 神宮, 27.8×16.9 cm 北野, 大阪府, 佐賀鍋島]
- ◇ 同治3(1864) 27卷 美華書館 1冊 洋装本 384 p. 14 cm [CAM (S), 国会亀田, 宮城小西, 青山学院]
- ◇ 同治3-5(1864-66) 旧約全書・新約全書 [BL]
- ◇ 同治5(1866) 27卷 美華書館 1冊 185丁 16.4 ×9 cm [BL, 青山学院, 13.9×9.1 cm (縦長を縮小加工) 青山学院, 2卷2冊 大谷, 1冊(5巻附22章) 大洲矢野, 16 cm 長崎大武藤]
- ◇ 同治8(1869) 27卷 美華書館 2冊 144丁 [静嘉, 18.3×11.9 cm 青山学院, 17.7×11.7 cm 青山学院, 基督大内村, 大谷]/1冊 [東北大, 東洋2点]
- ◇ 同治10(1871) 美華書館 [1冊(巻1) 新潟県立図書館]
- ◇ 光緒6(1880) 文理24卷 [BL]
- ◇ 光緒9(1883) 27卷 美華書局 [長崎大経済]

- ◇ 刊年不明 美華書局 2冊 27.8×16.9 cm [北野]
- ◇ 光緒18 (1892) 文理27巻 美華書館 1冊 144丁 19.2×12.4 cm [青山学院]
- 光緒6 (1880) 21巻 申報館 1冊 175丁 17.3×10.7 cm [青山学院]
- 香港
- 咸豐5 (1855) 英華書院 1冊 [東北大]
- ◇ 咸豐7 (1857) 英華書院 [佐賀大小城鍋島]
- ◇ 同治元 (1862) [BL]
- ◇ 同治3 (1864) 英華書院 1冊 [内閣]
- ◇ 同治5 (1866) 2巻 英華書院 [BL, 2冊 東北大, 1冊 東洋]
- ◇ 同治5 (1866) 旧約全書7巻 (1864-65) 新約全書2巻 (1866) 英華書院 合4冊 半 [CAM (A) 2点]
- ◇ 同治5・6 (1866・67) 2巻・宗主詩章1巻 英華書院 1冊 [内閣]
- 官話 同治8 (1869) 香港 [BL]
- 寧波
- 咸豐9 (1859) 27巻 華花印書局 1冊 24 cm [東北大狩野, 佐賀鍋島]
- 広州
- 同治10 (1871) 恵師礼堂 2冊 [東北大]
- 刊行地不明
- 咸豐5 (1855) 1冊 [慶大]
- 同治5 (1866) 2冊 [大谷]
- 同治8 (1869) 官話 2冊 [大谷]
- 刊年不明 3巻3冊 [東北大]/中 [早大]/24.0×13.7 cm [射和]
- ※ Wylie, 35, 36, 71, 117, 148, 236 Douglas, 1, 2, 补2, 补3
- 新約全書 楊格非 (G. John) 訳
- 文理 光緒16 (1890) 漢口 [BL]
- 官話 光緒18 (1892) 漢口 [BL]
- 文理27巻 光緒25 (1899) 漢譯: 英漢書館 1冊 404p. 20×12.2 cm [青山学院] ※God: 上帝
- ※ Douglas, 补3
- 新約全書註釈 同治6-8 (1868-70) 香港 [欠あり BL]
- ◇ 同治7 (1868) 香港: 英華書院 3冊 [内閣]
- ※ 第1冊 (卷1馬太傳福音書), 第2冊 (卷2馬可傳福音書), 第3冊 (使徒保羅達哥林多人前書)
- ※ Wylie, 119 Douglas, 3
- 新約全書註釈 何進善撰・理雅各 (J. Legge) 校 同治13 (1874) 上海: 美華書館 [1冊 (卷1・馬太傳福音書) 内閣, 1冊 (卷1) 新潟県立図書館]
- 新版 『聖經證據』 同治元 (1862) 香港 1冊 9丁 [大谷]
- ※ Wylie, 120
- 新約全書註釈卷1 馬太傳福音書卷上 廣瀬又治點明治14 近江国蒲生郡市邊村: 廣瀬又治鉛印 24, 113頁 23 cm [国会]
- 真理易知 培端 (D. B. McCarteree) 咸豐3 (1853) 寧波 1冊 16丁
- ◇ 同治元 (1862) 上海: 美華書館 1冊 20丁 16.6×9.1 cm [青山学院]
- ◇ 1862年版 写本 20丁 「問答良言」と合綴 1冊 卷末識語「明治五壬申秋七月中辭写之 紙耕氏蘭堂」[青山学院]
- ◇ 同治6 (1867) 上海: 美華書館 1冊 [京大人文研]
- ※ Wylie, 138
- ヘボン訳『真理易知』 1862年訳 1863年刻 (横浜)
- ◇ 元治元 (1864) 上海 29丁 20 cm [東女大佐波]
- ◇ 廉應3 (同治6, 1867) 印 上海 1冊 39丁 23 cm [日本神学校, 大谷, 日本キリストン史料集]
- ※ 11巻, 終言
- ※ 見返「米国長老教会/ヘボン神父著/真理易知/文久三年/日本横浜版木彫刻/同治六年/清國上海初刷千部」
- 1冊 18丁 18.6×12.5 cm [19 cm 立教大久保, 青山学院2点, 19 cm 東女大佐波, 香川大神原, 明治文化全集] ※11章
- ◇ 明治16 横浜: 倫敦聖教書類会社 1冊 24p. 17.5×11.6 cm [青山学院, 19 cm 東女大佐波, 同志社キリスト研] ※11章
- 分類不明 10巻1冊 [筑大]
- 身理啓蒙1巻 光緒12 (1886) 稅務司署 1冊 [九大]
- 『西学啓蒙』第7冊 [早大]
- 『西学十六種啓蒙』第7冊 [関大増田]
- 『西学十六種』第10冊 [国会]
- 真理三字経註釈 培端 (D. B. McCarteree) 同治5 (1866) 上海: 美華書館 1冊 [内閣]
- ※ Wylie, 136
- 数学啓蒙2巻 偉烈亞力 (A. Wylie) 咸豐3 (1853) 上海 127丁
- ※ 関連記事 The North-China Herald, 1854.3.18
- 2巻 光緒12 (1886) 2冊 [東北大狩野, 早大小倉]
- 『統西学大成』第9・算学 「数学啓蒙2巻」 [早大]

小倉]

※ Wylie, 173

□『古今算学叢書』所収 偉烈亞力『数学啓蒙圖解』2卷 [東北大林, 東洋]

□和刻本『数学啓蒙』2卷付対数表(題簽「官版数学啓蒙」) 覆咸豐3刊本 咸豐6(1856) 金咸福跋 1冊 124丁 22.7×15.1cm [東大田中, 金沢市蒼龍館, 金沢泉丘高, 福井市, 京大数学, 京大人文研, 九大桑木]

※日本洋学編年史(p.557)によれば秋田氏蔵版。

□和刻本 題簽「数学啓蒙」明治3(外包紙による)賣捌 藏田屋清右衛門 1冊 22.5×15.1cm [国会]

※『官許英吉利單語篇』開成所版, 明治3年の奥書も「賣捌 藏田屋清右衛門」。

◇咸豐3年跋刊本 1冊 [関大増田]

◇[江戸] 刊本 1冊 [関大増田]

◇[明治初] (官版) 1冊 [内閣, 新潟大]

◇明治初年 1冊 [新潟県立図書館]

□分類不明 金咸福校 嘉永5(1852)刊 1冊 [東北大狩野]/日本刊 2卷 1冊 [筑大]/和 咸豐3(1853)刊 1冊 23cm [日大室井]/英人偉烈著 1冊 [神宮]/1853年 1冊 [岩国徵古館]

西医新法 嘉約翰(J. G. Kerr)口訳・林湘東筆述 1冊 26cm [国会, 京大富士川]

西医略論 3卷 合信(B. Hobson)著 管茂材撰 咸豐7(1857)序刊 上海:仁濟医館 1冊 [英文序付BL, UCLA-Medical Library, 国会, 24.5×15.3cm 研医会, 静嘉, 葵, 25.5×15.9cm 射和, 大阪府, 香川大神原]

※ Wylie, 127 Douglas, 79, 補47

□和刻本『西医略論』3卷 桃樹園三宅氏蔵板 安政5(1858)刊 江戸:老臣館萬屋兵四郎発行 4冊 [国会, 内閣, 宮城小西, 26×17cm 黒羽町作新館3点, 埼玉小室, 25.4×17.3cm 研医会, 宮書古賀, 静嘉, 東博, 東洋藤井, 慶大富士川, 26cm 慶大医, 26cm 玉川大, 25.5×17.3cm 東大洪庵, 豊橋, 滋賀医大, 京大, 京大富士川, 大阪府, 杏雨, 岡山大池田, 岡山大古医書10点, 牧野4点, 幕末期医学書復刻II期, 1冊(卷下)千葉, 1冊(卷上)静嘉大槻, 2卷2冊 東洋藤井, 1冊(卷上)25.7×17.5cm 東大総, 3冊(卷中下) 東大総, 2冊 豊橋, 2冊(卷中) 北野, (欠巻上) 神大医, 1冊(卷上) 岡山大古医書2点, 1冊(卷下) 岩国徵古館]

◇後印 [小浜市立図書館]

◇明治4印 東京:老臣館 4冊 25cm [同志社小室沢辺, 牧野]

□内田嘉一訓点『西医略論』明治7 1冊 ※中村(1914:1222)による。

□山本義俊訳解・安代良輔註『西医略論訳解』明治8官許 明治10 東京:椀屋江島喜兵衛 3冊 19cm [国会, 1冊 54丁 順天堂大山崎, 5冊(存2上中) 杏雨, 岩国徵古館]

聲学 8卷 田大里(J. Tyndall)撰 傳蘭雅(J. Fryer)

口訳・徐建寅筆述 同治13(1874)上海:江南製造局2冊(卷1-4, 5-8) 30cm [BL, 国会2点, 筑大, 静嘉, 東京理科大, 大阪府]

□『西学大成』亥編声学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]

□『西学富彊叢書』第17冊 [早大小倉]

□『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Douglas, 補130

西学啓蒙 艾約瑟(J. Edkins)編

□光緒14(1888)「西學十六種」上海:総税務司署16冊 28cm [国会]

□光緒22(1896)「西學啓蒙十六種」上海:著易堂書局 16冊 [日比谷実藤, 東洋, 早大]

□光緒24(1898)「西學十六種啓蒙」上海:盈記書莊 [関大増田]

※『格致彙編』1891年夏号に「披闡西學啓蒙十六種」の紹介記事あり。

西学考略 2卷 丁題良(W. A. P. Martin)撰 光緒9(1883)北京:同文館 2冊 大 [BL, 内閣, 東北大狩野, 静嘉, 東洋, 東大総, 早大, 早大小倉, 関大増田]

※ Douglas, 補131

西学輯存 6種 王韜輯並撰 光緒15-16(1889-1890) 6種 [国会, 東北大狩野, 東北大藤原2点, 日比谷実藤2点, 東大総, 早大小倉, 存3種 早大]

西学略述 10卷 艾約瑟(J. Edkins)訳 光緒12(1886)刊 1冊 [九大]

□『西學十六種』第1冊 [国会]

□『西學十六種啓蒙』第1冊 [関大増田]

正教安慰 4卷 愛漢者(K. F. A. Gützlaff)纂 道光16(1836)新嘉坡:堅夏書院 1冊 82丁 26.5cm [BL, 青学短]

※ Wylie, 57 Douglas, 68

聖經鑑略 應思理(E. B. Inslee)撰 張體元刪正 咸豐10(1860)寧波 1冊 38丁 [東洋, 東大総, 大谷]

- 刊年不明 [東北大狩野]
 □ 江戸末 写 1冊 [内閣]
 ※ Wylie, 244
- 聖教信徒問答 不思業 (C. F. Preston) 著 1冊 洋木
 77p. 20.5 cm [東女大佐波]
- 聖經圖記 卦徳明 (J. W. Quarterman) 咸豐 5
 (1855) 寧波 1冊 40丁 [1850? BL]
 ◇ 光緒20 (1894) 1冊 40丁 25 cm [青山学院]
 ◇ 刊年不明 1冊 [内閣, 東北大狩野, 静嘉, 東洋, 東大総, 神宮, 関大増田, 24.5 cm 40丁 天理, 牧野]
 ◇ 民国排印本 1冊 [千葉]
 ※ Wylie, 159 Douglas, 4
 □ [江戸期] 1冊 26 cm [佐賀鍋島]
- 聖經圖記略 卦徳明 (J. W. Quarterman) 撰 清末 1
 冊 [東大総, 関大増田]
- 聖經圖說啓蒙 S. M. Sites 編 同治12 (1873) 福州：
 美華書局 1冊 84丁 17 cm [青山学院, 慶大, 関大増田]
 ◇ 和 小 [早大]
- 聖經全書 光緒19 (1893) 福州：美華書局 962 p.
 20 cm [青山学院]
- 西芸知新 3卷 諾格徳布倫等撰 傳蘭雅 (J. Fryer) 等
 訳・徐壽等筆述 [光緒元 (1875)] 上海：江南製造
 局 2冊 27 cm [BL, 国会, 内閣, 静嘉, 東洋,
 東大総, 大阪府]
 ※ 匠誨與規第一第二第三
 □ 10卷 [光緒 6 (1880)] [上海] [BL]
 □ 『江南製造局譯書彙刻』「西芸知新22卷」[京大人文
 研]
 ※ Douglas, 補36, 補98
 ※ Modern Arts and Manufactures of the West
- 聖教理證 咸豐 2 (1852) 1冊 [静嘉]
 ◇ 光緒15 (1889) 香港 1冊 2+147 pp. [BL]
 ◇ 光緒22 (1896) 香港 [BL]
 ※ Douglas, 補116
- 聖經理問 同治10 (1871) 北京：大俄國聖母堂 1冊
 [東洋]
 ◇ 光緒27 (1901) 北京：東教宗北館 1冊 [東洋]
- 聖經類書 2卷 培端 (D. B. McCarteree) 撰 咸豐 6
 (1856) 寧波：聖經書房 1冊 75丁 [BL, 内閣,
 新潟県立図書館]
 □ 刊年不明 1冊 24.8×15.2 cm [射和]
 ※ Wylie, 139 Douglas, 補93
- 西国天学源流 偉烈亞力 (A. Wylie)・王韜訳 同治 4
 (1865)
 □ 『西學輯存六種』所収 [国会, 日比谷実藤, 東大
 総, 早大小倉]
 ※ 『六合叢談』Vol. 1, No. 5, 9, 10-13, Vol. 2, No. 1
 -2, 「西国天学源流」連載。
- 西士來意略論 麥嘉締培端 (D. B. McCarteree) 同治 2
 (1863) [登州] [BL]
 ◇ 同治 6 (1867) 1冊 [筑大]
 ※ Wylie, 139 Douglas, 補89
- 聖書安息日撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3
 (1864) 上海：美華書館 1冊 12丁 17 cm [東女
 大佐波, 大谷]
 ◇ 同治 8 (1879) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 新
 潟県立図書館]
 ※ Wylie, 227
- 聖書衍義 哈巴安德 (A. P. Happer) 訳 同治 3
 (1864) 上海：美華書館 1冊 [東北大狩野]
 ◇ 同治13 (1874) 上海：美華書館 1冊 46丁 24
 cm [青山学院]
 □ 同治13 (1874) 広州 pp. 5, 91 [BL]
 ※ Douglas, 補41
- 聖書氣戒撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3 (1864)
 上海：美華書館 1冊 7丁 [大谷]
 ◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 新
 潟県立図書館]
 ※ Wylie, 227
- 聖書五常撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3 (1864)
 上海：美華書館 1冊 19丁 17.5 cm [青山学院,
 東女大佐波]
 ◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1冊 6丁 20
 cm [内閣, 東女大佐波]
 ※ Wylie, 226
- 聖書五倫撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 5 (1866)
 上海：美華書館 1冊 [東北大狩野, 早大, 大洲矢
 野]
 ◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 新
 潟県立図書館, 神宮]
 ※ Wylie, 226
- 聖書財戒撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3 (1864)
 上海：美華書館 1冊 10丁 [大谷]
 ◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 新
 潟県立図書館]
 ※ Wylie, 227

聖書色戒撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3 (1864)

上海：美華書館 1 冊 10丁 [大谷]

◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1 冊 [内閣, 新潟県立図書館]

※ Wylie, 227

聖書酒戒撮要 不思業 (C. F. Preston) 同治 3 (1864)

上海：美華書館 1 冊 6丁 [大谷]

◇ 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1 冊 [内閣 2 点, 新潟県立図書館]

※ Wylie, 227

聖書要理 咸豐 10 (1860) 上海：墨海書館 [関大増田]

□ 『中西通書』咸豐 10 (1860) 版, 所収. 18オ-22ウ.
[宮書古賀, 大谷, 関大増田]

正道啓蒙 同治 8 (1869) 上海：美華書館 1 冊 [東洋]

西遊地球聞見略傳 馬禮遜 (R. Morrison) マラッカ
1819年 29丁 [BL]

※ Wylie, 5 Douglas, 201

西薬大成

□ 江南機器製造総局編『化学材料中西名目表』光緒
10-15 (1884-1889) 1 冊 37 p. [日比谷井上]

※合刻：西薬大成薬品中西名目表・附人名地名両表 (68 p.), 汽機中西名目表 (58 p.)

□ 江南製造局輯『西薬大成薬品中西名目表』1 冊
光緒 13 (1887) 上海：江南製造局

1 冊 [杏雨]

□ 『江南製造局訳書彙刻』「西薬大成 10 卷首 1 卷薬品
中西名目表 1 卷附補編 6 卷首 1 卷」[京大人文研]

西薬略釈 嘉約翰 (J. G. Kerr) 口訳・林湘東筆述

□ 同治 10 (1871) 1 卷付表 広州：博濟医局 1 冊
1+2+85+10丁 23.7×14.1 cm [BL, 国会白井, 杏雨] ※英文序 (1871)

◇ 同治 10 (1871) 小本 [京大富士川]

□ 光緒元 (1875) 2 卷付表 広州：博濟医局 2 冊
2+102, 88+6 丁 22.9×13.3 cm [国会] ※英文序 (1876)

□ 光緒 12 (1886) 扇「新增西薬略釈」 孔繼良訳
4 卷目録 1 卷 4 冊 [牧野, 3 卷 3 冊 23 cm 41
丁 慶大医]

※ Douglas, 補59

※ 近代西洋薬学を体系的に紹介

□ 西春蔵訓点『西薬略釈』2 卷 (乾坤) 附 1 卷 兵庫：澹靜堂蔵板 明治 7 出版 3 冊 1+1+1+(1~53), 54~85, 10 丁 送り仮名あり [国会, 内閣, 滋賀医大河村, 牧野] ※英文序 (1871)

□ 内田嘉一訓点『西薬略釈』2 卷 (上下) 明治 7
官許 東京：自由存廻 22.3×15 cm 2 冊 送り
仮名なし [内閣, 東大総, 金沢市蒼龍館, 内藤,
京大, 京大富士川, 牧野 2 点] ※英文序 (1871)

性理略論 丁題良 (W. A. P. Martin) 同治 8 (1869)

香港：英華書院 1 冊 19 丁 19 cm [BL, 静嘉,
青山学院, 東女大佐波]

◇ 光緒 4 (1878) 3 卷 広州：小書会 1 冊 [東洋]

※ Douglas, 185

□ 嘉魯日耳士 (C. Carrothebers) 訳『性理略論解』
3 卷 明治 8 東京：嘉魯日耳士 2 冊 23 cm
[立教大久保, 神習, 岩国徵古館]

全体新論 合信 (B. Hobson) 著 陳修堂撰 咸豐元
(1851) 刊 広州：恵愛医館 [BL, HYL, UCLA-
Medical Library, 2 冊 付生理図 東北大狩野, 2
冊 16.1×26.6 cm 宮書古賀, 咸豐元年序 3 冊
京大]

◇ 後印 1 卷 咸豐 3 (葉遂翁) 賛 上海：墨海書館
1 冊 24.8×15.5 cm [国会, 日比谷実藤]

◇ 後印 1 卷 上海：墨海書館蔵板 1 冊 [葵, 杏
雨]

◇ 咸豐 8 後 後印 1 卷 覆 (咸豐 3 (葉遂翁) 賛
墨海書館蔵板) 上海：仁濟医館 1 冊 25.9×
16.6 cm [静嘉]

◇ 合冊 (全体新論・婦嬰新説) 全体新論：墨海書館
蔵板 婦嬰新説：仁濟医館蔵板 24.3×15.0 cm
[静嘉]

□ 『海山仙館叢書』「全体新論 10 卷」咸豐 2 記 [BL,
国会, 宮書, 東洋 2 点, 慶大, 東大総, 東大東文
研, 早大小倉, 愛知大簡齋, 京大, 大阪府, 龍谷,
九大]

※ Wylie, 126 Douglas, 257, 補47

□ 和刻本『全体新論』乾坤 青表紙 越智藏版 安
政 4 (1857) 江戸：山城屋佐兵衛ほか (江戸 2
軒, 大坂 1 軒, 京都 2 軒)

◇ 2 冊 [東北大狩野, 東洋藤井, 25 cm 慶大富士
川, 25 cm 慶大医 2 点, 26.6×18.2 cm 北野,
大阪府, 1 冊 大阪府, 岡山大古医書 11 点]

◇ 後印 2 卷 2 冊 [香川大神原]

◇ 2 卷図 1 卷 3 冊 [黒羽町作新館 2 点, 埼玉小室,
静嘉大槻, 25.8×17.5 cm 東大洪庵, 早大, 金
沢泉丘高, 小浜市立図書館, 豊橋市, 刈谷村上,
神宮, 京大法医, 杏雨 2 点, 岡山大古医書, 九大
眼科, 27 cm 佐賀鍋島, 幕末期医学書復刻 II 期]

□ 和刻本『全体新論』乾坤 黄表紙 安政 4 (1857)
刊 後印 二書堂発兌 25.1×17.5 cm 2 冊

- [内閣, 東北大狩野, 東大総 2 点, 25 cm 同志社小室沢辺, 北野, 杏雨, 愛日, 凤鳴青山, 金刀比羅]
- ◇ 明治印・24.9×17.5 cm (東京:須原屋茂兵衛等, 京都:若山屋茂助等) [東大総 2 点, 浅野]
- 分類不明 (目録に越智蔵版か二書堂発兌か明記されていないもの。奥付の発行書林は流用があり区別できない) 安政4刊 2 冊 [内閣 2 点]/京:若山屋茂助等 安政 4 2 冊 [酒田光丘, 高鍋町立図書館]/[須原屋茂兵衛] 乾坤 大阪:秋田屋太右衛門 安政 4 2 冊 26 cm [国教研]/西京:若山茂助 乾坤 2 冊 安政 4 25 cm [慶大富士川]/1 冊 (存坤) 27 cm 33 丁 [慶大富士川]/安政 4 刊 2 冊, 1 冊 [神宮]/乾坤 2 冊 安政 4 [滋賀医大河村]/乾坤 2 冊 安政 4 [滋賀医大守一堂]/2 冊 安政 4 [京大 2 点]/上下 1 冊 [京大富士川]/安政 4 晩冬 京都:勝村治右衛門他 5 軒 2 冊 [大阪女子大]/10 卷 安政 4 刊 [神大医]/安政 4 2 冊 [岩国徵古館]
- 詳細不明 研医会本は 25.5×17.3 cm で越智蔵板, 二書堂とする。
- 高木熊三郎訳『全体新論訳解』4 卷 明治 7 刊 大阪:文栄堂・寶文軒梓 4 冊 17.8×12.2 cm [3 卷 3 冊 明治 6-7 鹿沼大樺, 18×12 cm 廣大医 2 点, 滋賀医大, 杏雨, 愛日, 岩国徵古館, 金刀比羅, 2 冊 (卷 4) 香川大神原]
- ◇ 高木敷叔駁訳『全体新論訳解』 明治 6 大阪:寶文軒吉岡兵助等 1 冊 [東洋藤井]
- 石黒厚訳『全体新論訳解』3 卷 明治 7 刊 東京: 静観堂 3 冊 22.5×15.5 cm [UCLA (B), 東北大狩野, 研医会, 静嘉, 東大洪庵, 金沢泉丘高, 神宮, 京大, 京大富士川, 杏雨, 愛日, 金刀比羅, 2 冊 (卷 2-3) 滋賀医大守一堂]

全体闡微 6 卷 柯為良 (D. W. Osgood) 撰 光緒 7 (1881) 福州:聖教医館 5 冊 [BL, 杏雨]

※ Douglas, 補98

※ Gray, Anatomy, descriptive and surgical

全体通考18巻図 2 卷 德貞 (J. Dudgeon) 撰 北京: 同文館 光緒12 (1886) 16 冊 [杏雨]

宣道指帰 倪維思 (J. L. Nevius) 撰 同治 5 (1866)

1 冊 [静嘉, 大谷]

◇ 同治12 (1873) 上海:美華書館 1 冊 pp. 4, 98 [BL, 内閣, 東北大狩野, 大谷]

※ Wylie, 224 Douglas, 補97

宗主詩章 [麥都思 (W. H. Medhurst)] 咸豐 5 (1855) [上海] [BL]

◇ 同治 6 (1867) 香港:英華書院 1 冊 20 cm [国会, 新潟県立図書館]/『新約全書』と合冊 1

冊 [内閣]

※ Wylie, 32 Douglas, 220

雙千字文 丁題良 (W. A. P. Martin) 同治 4 (1865)

上海 1 冊 26 丁

◇ [北京 同治 9 (1870)] [BL]

◇ 清刊 1 冊 半 [内閣, 千葉, 大洲矢野]

※ Wylie, 205 Douglas, 補90

造硫強水法 士密德 (W. W. Smyth) 撰 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽筆述 光緒 3 (1877) 上海:江南製造局

□ 『西芸知新』正集第 5 種→『西芸知新』を見よ.

□ 『西学富彊叢書』壬下集工芸学 [国会, 日比谷実藤, 早大, 京大人文研]

※ Manufacture of Sulphuric Acid

測地繪圖11巻附1巻表 1巻 富路馬 (E. C. Frome) 撰

傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・徐壽筆述 上海:江南製造局 4 冊 27 cm [国会 2 点, 内閣 2 点, 東北大岡本, 東北大狩野, 静嘉, 大阪府]

□ 『江南製造局訳書彙刻』所収 [国会, 京大人文研]

※ Outline of the Method of Conducting a Trigonometrical Survey..., 3rd ed. London, 1862.

測候叢談 4 卷 候失勒 (J. F. Herschel) 著 金楷理 (C. T. Kreyer) 口訳・華蘅芳筆述 光緒 3 (1877)

上海:江南製造局 2 冊 27 cm [BL, 国会, 東北大 4 点, 東大総, 東大東文研]

□ 『西学富彊叢書』丁集天文学 [国会, 日比谷実藤, 早大 2 点, 京大人文研]

□ 『華氏中西算學全書』第16冊 [早大小倉]

□ 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

※ Douglas, 補63

※ "Meteorology" in Encyclopaedia Britannica 8 版 (1853-60) →『代數術』『微積溯源』も見よ.

大英國志 8 卷 米爾納 (T. Milner) 撰 慕維廉 (B. W.

Muirhead) 訳 咸豐 6 (1856) 上海:墨海書館 2 冊 25 cm [BL, 宮城伊達, 立教大久保, 福井市, 大阪府, 関大増田]

◇ 後印 2 冊 [日比谷実藤]

◇ 8 卷続刻 1 卷 咸豐10 (1860) 後 2 冊 [内閣, 東大総 6 点]

◇ 光緒 7 (1881) 上海 [英文序付 BL]

□ 『西學大成』卯編史學 [国会, 日比谷実藤, 早大 小倉, 京大人文研]

□ 『五洲列国志彙』第18-19冊 「英吉利志 8 卷」 [早大]

□ 『新輯各国政治芸学全書』所収 [京大人文研]

※ Wylie, 169 Douglas, 157, 補131

※ The History of England

- 和刻本『英國志』8巻 長門温知社藏梓（江戸長州藩邸内）文久元刊
- ◇ 8冊（巻1-2, 3-4, 4, 5, 6, 6, 7, 7-8）江戸：和泉屋金右衛門 25.8×17.8 cm [館林秋元, 26 cm 立教大久保, 千葉, 宮書, 福井市, 3冊（巻1-4）福井市, 26×18 cm 福井県大野高, 射和, 三重大, 京女大吉沢, 26 cm 愛日, 26 cm 長崎大武藤, 7冊（次巻8）内閣, 7冊 26 cm 山口大]
- ◇ 精写本 8冊 [山口] ※著書調所改の黒印あり。
- ◇ 5冊（巻1-3, 4, 5, 6, 7-8）23 cm [内閣3点, 宮城伊達, 茨城大菅, 筑大, 立教大久保, 宮書2点, 東大総4点, 横浜市大鮎沢, 小浜市立図書館, 愛教大, 京都府, 関大増田, 岩国徵古館, 伝習館高, 23 cm 佐賀鍋島, 24 cm 佐賀鍋島]
- ◇ 後印 江戸：和泉屋金右衛門 [2冊（巻1・2）東大総]
- ◇ 分類不明 文久元 1冊（巻1-5）23 cm [佐賀鍋島]
- ◇ 写本 安政3 2冊 26 cm [佐賀鍋島]

- 代数学13巻首1巻 棟磨甘 (A. de Morgan) 撰 偉烈亞力 (A. Wylie) 口訳・李善蘭筆述 咸豐9 (1859) 上海：墨海書館 [1冊 東北大狩野, 3冊 東北大岡本, 半 2冊 福井市]
- ◇ 光緒24 (1898) 江夏程氏確園藏版 8冊 大 [早大小倉]
 - ※ Wylie, 174
 - ※ A. de Morgan, Elements of algebra (London, 1835) は早大小倉蔵。
 - 塚本明毅校『代数学』
 - ◇ 5巻首1巻 明治5 静岡：静岡集学所 3冊 3+1+22, 27+12+10, 31+23丁 23 cm [国会, 2冊（巻首-3）内閣, 2冊（巻首-3）東大総, 1冊（存3巻）早大小倉]
 - ※ 序に削除あり。
 - ◇ 写本 3冊 [鳳鳴青山]

- 代数幾何 華里司 (W. Wallace) 輯 傅蘭雅 (J. Fryer) 口訳・華蘅芳筆述
- 『西学大成』子編算学 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉]

- 代數術25巻・巻首1巻 華里司 (W. Wallace) 輯 傅蘭雅 (J. Fryer) 口訳・華蘅芳編 同治11 (1872) 上海：江南製造局 6冊 29 cm [BL, UCLA (B), 国会, 内閣2点, 東北大狩野, 筑大, 東大総, 学士院, 早大小倉, 京大数学]
- 25巻首1巻 8冊 時宜書室 [東北大数科]
 - 『古今算学叢書』附刊誤25巻 [東北大林]

- 『華氏中西算学全書』參集 [早大小倉]
- 『測海山房中西算学叢刻』第15-17冊 [東北大狩野, 東京理科大]
- 『江南製造局繹訳各種西書』3・4冊 [静嘉]
- 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
- ※ Douglas, 49
- ※ Encyclopaedia Britannica 8版 (1853-60) の中の「Algebra」(W. Wallace) → 『測候叢談』『微積溯源』も見よ。
- 和刻本 神保長致訓点『代數術』25巻 明治8刊 陸軍文庫 5冊 [内閣, 神習]
- 写本（題簽代数学）存巻1,3-7,9,11-13 14冊 [福井市]

代數術補式27巻 華里司 (W. Wallace) 輯 傅蘭雅 (J. Fryer) 口訳・華衡芳編 光緒26 (1900) 上海：順成書居 8冊 小 [早大小倉]

- 代微積拾級18巻 羅密士 (E. Loomis) 撰 偉烈亞力 (A. Wylie) 口訳・李善蘭筆述 咸豐9 (1859) 上海：墨海書館 3冊 298丁 27 cm [BL, 国会, 内閣, 東北大林, 東北大岡本, 筑大, 28.6×18.2 cm 国立天文台, 東大総, 学院院, 早大小倉2点, 1冊（次巻10-18）岡山大池田]/第1冊写本 [渋川家文書]
- ◇ 咸豐10 (1860) 夏 [学士院]
 - ◇ 咸豐刊 [静嘉]
 - ◇ 同治10 (1871) [静嘉]
 - 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研, 長崎大経済]
 - ※ Wylie, 174 Douglas, 143, 補85
 - ※ Element of Analytical Geometry and of Differential and Integral Calculus.
 - 和刻本 福田半（治軒）訳解『代微積拾級訳解』4巻 明治5刊 1冊 [山形大佐久間2点] ※内容は、巻1の1~4。
 - 大村一秀和訳『代微積拾級』（題簽「訓訳代微積拾級」）18巻 写本 3冊 [東北大狩野]

- 大美聯邦志略（重刻聯邦志略）2巻 牯治文 (E. C. Bridgeman) 撰 [BL]
- ◇ 上海：墨海書館 咸豐11 (1861) 序刊 50+47丁 38 cm 1冊 [静嘉, 横浜市大鮎沢]
 - ◇ 上海：墨海書館 咸豐11 (1861) 序刊 7+50,48+2丁 26.3×17.7 cm 2冊 [内閣, 龍谷大宮, 28×18.4 cm 大谷]
 - ※ 同撰『美理哥合省國志略』(1838) を重刻続刻したもの。
 - ※ 『小方壺斎輿地叢鈔』第79冊再補編、「美理哥國志略（美國高理文）」[国会, 筑大, 日比谷実藤, 無窮平沼, 早大, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外]

大石浜]

- 『西学大成』卯編史学 「大美聯邦志略 1巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研]
 ※ Wylie, 70 Douglas, 補174
- 箕作阮甫訓點『大美聯志略』(題簽・見返は「聯邦志略」) 2巻
- ◇ 文久元 江左：老臣館萬屋兵四郎 2冊 26.6×18.2 cm [内閣, 千葉, 加賀聖藩, 福井市, 龍谷, 佐賀鍋島 5点10冊, 佐賀大小城鍋島]
- ◇ 元治元印 江左：老臣館萬屋兵四郎 2冊 25.8 cm [国会 2点, 内閣 6点, 26 cm 立教大久保, 東大総, 早大, 横浜市大鮎沢, 山梨, 神宮, 京大, 京大法, 京大人文, 同志社キリスト研, 和歌山大紀州藩, 津山洋学, 佐賀大小城鍋島]
- ◇ 明治4印 東京：萬屋兵四郎 25.7×17.9 cm 2冊 54, 48丁 [西京商業高, 関大増田, 神戸大住田]
- ◇ 明治7後印 東京：萬屋兵四郎 2冊 54, 50丁 (50丁のうち末2丁は跋) 25.8×17.6 cm [内閣, 茨城大菅]
- ◇ 刊年不明 萬屋兵四郎 2冊 [筑大, 27 cm 葵, 葵久能, 岩瀬, 江左老臣館 愛教大, 25.8×18.0 cm 北野, 京大法]

- 談天18巻付表 侯失勒 (John F. W. Herschel) 撰 偉烈亞力 (A. Wylie) 口訳・李善蘭刪述・趙元益筆述
 咸豐9 (1859) 上海：墨海書館 3冊 [英文序付 BL, 宮城伊達, 東北大数科, 筑大, 成田, 東大東文研, 大谷, 関大増田, 九大桑木]
 □ 上海：江南製造局 18巻首尾 2巻 4冊 [東北大林]
 ◇ 同治13 (1874) 徐建寅補 18巻附余録 英文序付 上海：江南製造局 3冊 [BL, 東北大狩野, 千葉, 学士院, 東洋, 東大総, 静嘉, 天理, 九大物理]
 □ 光緒22 (1896) 徐建寅統述 18巻 上海：著易堂 4冊 [東北大藤原]
 □『測海山房中西算学叢刻』 徐建寅統述 [東北大林, 東京理科大]
 □『西学富彊叢書』丁集天文学 「談天18巻附表1巻」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 ※ Wylie, 174 Douglas, 74, 補43
 ※ Outlines of Astronomy, 1851.
 □ 福田理軒訓正『談天』12巻付表 文久元 (1861) 序
 ◇ 初編 3冊 (6巻付表) 25.2×17.7 cm [尊経, 日比谷近藤, 東大総, 新潟県立図書館, 加賀聖藩, 京大地理, 関大増田, 佐賀鍋島]
 ◇ 初編・中編 大坂：河内屋太助等 6冊 25 cm

[国会, 内閣 4点, 東北大狩野, 早大小倉, 早大 2点, 横浜市大鮎沢, 福井市, 26 cm 名大皇学, 京都府, 京大数学, 京大物理, 大阪府, 和歌山大紀州藩, 九大桑木, 2冊 (巻1-4) 金沢泉丘高, 3冊 (存巻1-6) 大阪府]

- ◇ 慶応2版 25 cm 3冊 [東外大]
 ◇ 分類不明 1冊 (原3) 27 cm [山口大]

地学啓蒙 8巻 光緒12 (1886) 総稅務司署 1冊 [九大]

- 『西学十六種』第12冊 「地学啓蒙 8巻附石塊目録 1巻」 [国会]
 □『西学啓蒙十六種』第5冊 「地学啓蒙 8巻附石塊目録 1巻」 [日比谷実藤, 早大, 関大増田]

地学浅釈38巻 雷俠兒 (Ch. Lyell) 撰 瑪高温 (D. J. Macgowan) 口訳・華蘅芳筆述 同治12 (1873) 上海：江南製造局 8冊 [BL, 内閣 4点, 同治12序 4冊 東洋, 日比谷実藤, 東大総, 静嘉, 学習院, 愛教大, 大阪府 2点, 牧野]

- 『西学富彊叢書』戌集地理学 [国会, 日比谷実藤, 早大 2点, 京大人文研]
 □『江南製造局譯書彙刻』28-31冊 [静嘉]
 □『江南製造局譯書彙刻』所収 [東大東文研, 京大人文研]
 ※ Douglas, 補88

※ Elements of Geology, 6th, 1865.

- 乙骨太郎乙・保田久成訓點『地学浅釈』 明治12版 権免許 東京：丸屋善七ほか 3軒 1冊 洋装本 892p. 20.8×15.0 cm
 ◇ 明治14印 1冊 [国会, 内閣]

智環啓蒙塾課初步 理雅各 (J. Legge) 撰 香港英華書院訳 1856.12.1 英文序 咸豐7 (1856) 香港：英華書院 1冊 51丁 19.4×12.9 cm [BL, 青山学院, 東大社会情報研, 香川大神原 (福澤諭吉旧蔵), 長崎大武藏]

- ※ 「(横書) GRADUATED READING; COMPRISING A CIRCLE OF KNOWLEDGE, IN 200 LESSONS. GRADATIONS 1./ (縦書) 咸豐七年活版印刷 智環啓蒙塾課初步 香港英華書院從英文訳出/(横書) HONGKONG: PRINTED AT THE LONDON MISSIONARY SOCIETY'S PRESS 1856」 各ページ 上半分英文, 下半分漢文

- ◇ 咸豐9 (1859) 広州 1冊 51丁 ※ 咸豐9版は漢文部分の再版。
 ◇ 同治3 (1864) 香港：英華書院 1冊 [大東急, 東洋, 長崎大武藏]
 ◇ 同治7 (1868) 香港：英華書院 1冊 51丁 19.5 cm

- ◇ 同治12(1873) 上海 [BL]
- ◇ 光緒21(1895) 香港 [BL]
- ※ Wylie, 120 Douglas, 補74
- ※ C. Baker's Lessons
- 和刻本『智環啓蒙』江戸刊 原田氏藏板 咸豐7版の翻刻 1冊 48丁 22.9×15.6 cm [蓄書調所新刻納本→内閣, 東北大狩野, 22.5×15.5 cm 黒羽町作新館, 東大田中, 東大史料, 岡山大池田, 長崎大経済]
- ※ 本書との関係は不明だが、坪井信良より実兄佐渡三良あて文久3年10月23日(1863)付書簡に「日本文典・智環啓蒙之類、追々御入手之由、此等書夥敷出来仕候」とある。『幕末維新風雲通信』p. 191.
- ※ 「開版見改元帳」文久2年分に「4月15日改/6月28日納/智環啓蒙 一冊/「再伺ひ」/4月 朔日 原田吾一」とあり。
- 和刻本『智環啓蒙塾課初步』(外題「翻刻智環啓蒙」)1巻 柳河春三訓点
- ※ 同治3年香港再訂版の翻刻。
- ◇ 廉応2刊 江戸: 開物社 1冊 51丁 19×13 cm [東北大狩野, 立教大久保, 東博, 東洋, 東京理科大, 早大洋学, 18.6×12.8 cm 敬業堂印 加賀聖藩, 豊橋, 18.5×12.7 cm 重山, 香川大神原, 九大物理, 松浦史博, 長崎大武藤5点]
- ◇ 廉応3印 江戸: 大和屋喜兵衛重印 1冊 51丁 19 cm [国会, 内閣2点, 東北大, 東洋, 尊經, 東大史料, 早大2点, 横浜市大鮎沢, 福井市3点, 京大谷村, 西京商業高, 大阪府, 関大増田, 神戸大住田, 高鍋町立図書館]
- ◇ 後印 東京: 大和屋喜兵衛 [東北大狩野]
- 明治3改鑄 『智環啓蒙』鹿児島藩蔵版 1冊 48丁 25 cm [立教大久保, 早大洋学, 牧野, 長崎大武藏2点, 高鍋町立図書館2点, 鹿児島, 鹿児島大玉里]
- 『智環啓蒙』(見返「官許智環啓蒙」)1巻 明治3沼津: 沼津学校 1冊 (咸豐7版の和刻) 48丁 18.2 cm [国会, 東洋, 19 cm 東京理科大, 早大洋学2点, 香川大神原, 牧野, 長崎大武藤, 鹿児島黎明]
- ◇ 分類不明 明治3刊 [京大]
- ◇ 刊年不明 [宮城小西]
- 広瀬渡・長田知儀訳述『智環啓蒙和解』3巻 石川県学校蔵版 明治6 3冊 33, 36, 37丁 17.8×12 cm [筑大, 18 cm 立教大久保, 加賀聖藩, 金沢市蒼龍館, 長崎大武藤]
- 橋爪貫一撰『智環啓蒙圖解第一編』明治5序 東京: 大和屋喜兵衛 1冊 21丁 22.3×15.0 cm
- [半田, 香川大神原, 長崎大武藤]
- 瓜生於菟子訳述『啓蒙智慧之環』3巻 瓜生氏藏版 明治5 東京: 和泉屋吉兵衛 3冊 (天地人) 23, 27, 24丁 19 cm [国会, 東京理科大, 香川大神原]
- ◇ 明治7 東京: 和泉屋吉兵衛 3冊 86丁 18 cm [金沢市蒼龍館]
- 三宅少太郎『智環啓蒙和解』付録 明治8 1冊 23丁 18 cm [国会]
- 地球推方図説** 培端 (D. B. MacCartee)
- 『小方壺齋輿地叢鈔』第69冊再補編 [国会, 筑大, 無窮平沼, 早大, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外大石浜, 九大]
- ※ 『海国図志』卷76に「地球推方図説」収録。
- 地球図説**
- 裨理哲 (R. Q. Way) 道光28(1848) 寧波: 華花聖経書房 1冊 53丁 18.1×12.1 cm [宮城伊達]
- ※ Wylie, 140
- 地球説略**
- 裨理哲 (R. Q. Way) 咸豐6(1856) 寧波: 華花聖経書房 1冊 114丁 (本文110丁) [BL, 宮城伊達2点, 東北大林集, 25.1×15.1 cm 茨城大菅, 25 cm 立教大久保, 24 cm 日比谷実藤, 東大総4点, 横浜市大鮎沢, 24.5×14.7 cm 金沢市蒼龍館, 岩瀬, 大阪府, 24.7×15.0 cm 北野, 京大, 関大増田2点, 和歌山大紀州藩, 23×15.1 cm 神戸大住田, 香川大神原]
- ◇ 同治10(1871) 上海: 美華書館 1冊 118頁 [BL, 25 cm 横浜市大鮎沢]
- ◇ 光緒4(1878) 上海: 美華書館 1冊 [BL, 東大総]
- ◇ 光緒刊 [静嘉]
- 『小方壺齋輿地叢鈔』第83冊再補編 [国会, 筑大, 無窮平沼, 早大, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外大石浜, 長崎大経済]
- ※ Wylie, 140 Douglas, 補151
- 箕作阮甫訓点『地球説略』3巻 竹口瀧三郎図絵彫刻 江戸: 老泉館
- ◇ 万延元刊 3冊 26 cm [東北大狩野2点, 1冊 25.5×17.2 cm 宮城教育大, 筑大, 埼玉小室, 千葉, 国立科博, 静嘉大槻, 日比谷近藤, 慶大, 玉川大, 東大総(J10-150), 東大経済, 東大教養, 早大3点, 27.5×17.5 cm 福井県大野高, 神宮, 京大, 関大増田, 天理, 和歌山大紀州藩, 神戸大住田, 津山洋学仁木, 岩国微古館, 香川大神原, 牧野, 佐賀鍋島]
- ※ 「万延元刊」は見返による。ただし奥付には文久元

年老臣館発行書籍目録や、老臣館萬屋兵四郎「發閲目録」、元治元年老臣館発兌書目があり、万延元以降の印もふくむ。

- ◇ 同 後修 27.5×17.5 cm 3 冊 [加賀聖藩、福井市、福井県大野高]
- ◇ 同 文久元後印 老臣館 3 冊 [国会 (4-223), 国立天文台]
- ◇ 元治元後印 3 冊 25.4×17.4 cm 107丁 (1~37, 39~71, 72~107) [UCLA (B) 三井、内閣 5 点、宮城小西, 26 cm 立教大久保, 宮書, 東大総 (J 10-55), 東大総 (J10-119), 早大 2 点, 26 cm 横浜市大鮎沢, 山梨, 福井市 6 点, 27.5 \times 17.5 cm 福井県大野高, 小浜市立図書館 2 点, 25.5 \times 17.3 cm 重山, 天満宮, 大阪女子大, 九大 2 点, 島原, 鹿児島大玉里]
- ◇ 1856 1 冊 和 [佐賀大小城鍋島]
- ◇ 明治 4 印 東京：老臣館萬屋兵四郎 3 冊 25.4 cm [2 冊 (次巻上) 牧野]
- ◇ 分類不明 箕作阮甫訳 1 冊 [神宮]/3 冊 26 cm 国書 [佐賀鍋島]/2 冊 [高鍋町立図書館]
- 箕作阮甫「地球説略疏証」稿本 半紙半裁43枚
※漢洋語対称地名リスト [国会箕作]
- 赤沢常道訳『地球説略和解』5 卷 明治 7 刊 東京：甘泉堂 5 冊 23 cm [神戸大住田]/明治 7 序 東京：和泉屋市兵衛 5 冊 23 cm [横浜市大鮎沢]/明治 7 序刊 5 冊 [内閣]/明治 8 序 東京：和泉屋市兵衛 5 冊 42, 47, 43, 40, 41丁 26 cm [立教大久保]
- 福田敬業訳『地球説略訳解』明治 8 刊 江藤喜兵衛 (宝集堂) 4 冊 [内閣, 豊橋]
- ※ 福田敬業注解『博物新編註解』(明治 9) 卷 2 末に「地球説略訳解 全部四卷」の広告あり。

地志啓蒙 4 卷 1 冊 光緒 12 (1886) 総稅務司署 1 冊 [九大]

- 『西学十六種』所収第 3 冊 [国会]
- 『西学啓蒙十六種』第 3 冊 [日比谷実藤]

中外襍誌 麥嘉湖 (J. Macgowan) 輯訳 同治元 (1862) 上海

※ Wylie, 257

- 和刻本『中外襍誌』元治元 (第 2, 3 号末に「文久三年刻」とあり) 江戸：老臣館萬屋兵四郎 17, 28, 25, 24, 16, 10, 14丁 [東洋 1-7 号, 東大社会情報研 1, 2, 5 号, 東大史料 1-7 号→日本初期新聞全集 2, 立教大久保 5 冊 (1-4, 7 号), 金沢市蒼龍館 1 号, 1 号 1 冊 加賀聖藩 2 点, 京大上野 1 号, 関大増田 1-7 号, 神戸大住田 1 号, 高鍋町立図書館 1 冊]

中外新聞七日録 湛約翰 (J. Chalmers) 主編 広州

同治 4.1.7 (1865.2.2) - 同治 6.12.29 (1868.1.23)

全 155 号 [East-West Center, Hawaii]

※ 影印『(清末民初報刊叢編之五) 中外新聞七日録』
(台北：華文書局, 1969 年)

中外新報 瑪高温 (D. J. Macgowan) 咸豐 4-8 (1854-

-1858) 寧波：愛華堂

Vol. 2 (咸豐 5) No. 2 (正月 15 日) [BL]

No. 3 (2 月 1 日) [BL]

No. 19 (11 月 15 日) [BL]

Vol. 3 (咸豐 6) No. 2 (2 月 15 日) [BL]

No. 12 (12 月 15 日) [BL]

Vol. 4 (咸豐 7) No. 1 (正月 15 日) [BL]

※ Wylie, 133 Douglas, 325, 補 101

中外新報 應思理 (E. B. Inslee) 咸豐 8-11 (1858-1861) 寧波 25 \times 14.8 cm

No. 1 (咸豐 8 年 11 月 15 日)

[抄写：鈴木大雑集 16]

No. 2 (咸豐 8 年 12 月 15 日)

[HYL, 抄写：鈴木大雑集 16]

Vol. 2, No. 1 = No. 3 (咸豐 9 年 3 月 1 日)

[抄写：鈴木大雑集 16]

No. 4 (咸豐 9 年 6 月 1 日)

[HYL, 抄写：鈴木大雑集 16]

No. 5 (咸豐 9 年 8 月 1 日)

[写本：国会箕作, 抄写：鈴木大雑集 16]

No. 6 (咸豐 9 年 10 月 1 日) [福井松平]

No. 7 (咸豐 9 年 11 月 1 日)

[福井松平, 抄写：鈴木大雑集 16]

No. 8 (咸豐 9 年 12 月 1 日)

[写本：福井松平]

No. 9 (咸豐 10 年 2 月 1 日)

[写本：福井松平, 抄写：鈴木大雑集 16]

No. 10 (咸豐 10 年 4 月 1 日)

[写本：福井松平・国会箕作]

No. 11 (咸豐 10 年 9 月 1 日)

[写本：福井松平・国会箕作]

No. 12 (咸豐 11 年 正月 1 日)

[福井松平, 写本：岩瀬]

※ Wylie, 243

□ 和刻本『中外新報』(題簽「官板中外新報」) [文久年間] 江戸：老臣館萬屋兵四郎 [筑大 1-11 号 (欠 9), 東大社会情報研 1-12 号 11 冊 (欠 9), 日本初期新聞全集 1 1-12 号 11 冊 (欠 9), 国会古典籍 1-8 号 6 冊 (欠 3, 5), 国会古典籍 6-12 号 7 冊 (欠 9, 10), 立教大久保 1-12 号 9 冊 (欠 2, 4, 9), 東洋 1-8 号, 東大明治 1-8 号 7 冊 (欠 5), 早大柳田 1-12 号 10 冊 (欠 4, 9), 神奈川近代文学 3 冊 (1,

- 2, 11), 金沢市蒼龍館 1-12号10冊 (欠 5, 9), 福井松平 5 冊 (1-5), 山梨 6 冊 (1-4, 6, 8), 刈谷村上 7 冊, 京大上野 1-12号 7 冊 (欠 2, 5, 6, 9, 10), 西京商業高 1 号 1 冊, 関大増田 1-8 号 7 冊 (欠 5), 香川大神原 1-12 号 10 冊 (欠 4, 9), 佐賀県鍋島 1-12 号 10 冊 (欠 6, 9), 長崎大武藤 3 冊 (6, 7, 11)]
※ 「中外新報之説ニ而ハ英仏不和英米不和杯之説も有之候」(万延元.5.7 武谷椋亭あて川本幸民書簡).
※ 鈴木大, 文久元年 (1861) 閏 4 月 22 日, 中外新報を校読する (鈴木大日記).
※ 和刻本「中外新報」9 号, 存在を確認できず, 未刊か.
◇ 写本「中外新報」12 号 [早大服部]/「中外新報」10・11 号 1 冊 10 丁 [津山洋学愛山]/「中外新報抜萃」写本 1 冊 [高鍋町立図書館]

中国教会新報→教会新報

- 中西通書 偉烈亞力 (A. Wylie) 上海: 墨海書館
◇ 咸豐 9 (1859) 1 冊 20.4×14.1 cm 2+2+27 丁 [大谷]
◇ 咸豐 10 (1860) 1 冊 20.7×14.1 cm 3+3+29 丁 [宮書古賀, 大谷, 関大増田]
※ Wylie, 174

- 中西聞見録 艾約瑟 (J. Edkins) 編輯 京都 (北京) : 施医院 1 号 (1872.8) -36 号 (1875.8) 27 cm [11, 27-34, 36 BL, 国会 1-36 (欠 5-9, 12, 25, 26, 33), 内閣 1-15, 静嘉 16 冊, 東洋 1-20, 22, 33, 京大上野 6-12, 神戸大教養 4 冊 (8-11), 複製版: 南京古旧書店 1-36 号]
□ 丁題良 (W. A. P. Martin) 編『中西聞見録選編』1-36 号 光緒 3 (1877) 4 冊 [日比谷実藤, 東大総, 関大増田]
※ 以後「格致彙編」と改題.
※ Douglas, 補 101

張遠両友相論

- 米憐 (W. Milne) [1830?] [BL 2 点]
◇ 1831 年 マラッカ 1 冊 42 丁 [BL]
◇ 道光 24 (1844) 香港: 英華書院 1 冊 41 丁 19 cm [BL, 国会]
◇ 新版 光緒 8 (1882) 上海 1 冊 pp. 44 [BL]
※ Wylie, 16 Douglas, 7
□ 淑 (J. L. Shuck) 改訂 同治 3 1 冊 [大谷]
◇ 同治 7 (1868) 上海: 美華書館 1 冊 [静嘉, 関大増田]
◇ 同治 8 (1869) 上海: 美華書館 1 冊 11 丁 20 cm [内閣 2 点, 東洋, 東女大佐波, 早大, 新潟県立図書館, 香川大神原]

※ Wylie, 92

- W. C. Milne 改訂『長遠両友相論』光緒 9 (1883) 漢口 1 冊 [BL]
◇ 光緒 21 (1895) 漢口: 英漢書館 1 冊 [東洋]
※ Wylie, 17 Douglas, 7, 補 7
□ J. Edkins 増訂『甲乙二友論述』咸豐 9 (1859) 1 冊 [大谷]
※ Wylie, 17
□ 『両友相論』光緒 7 (1881) 広州: 小書会 [東北大]
※ Wylie, 17
□ ミル子著 安川亨訳『両友相論』明治 14 東京: 原胤昭 1 冊 66 p. 19 cm [国会, 青山学院]

地理質学啓蒙 7 卷

- 『西学十六種』第 4 冊 [国会]
□ 『西学十六種啓蒙』第 4 冊 [関大増田]

地理全志上編 5 卷下編 10 卷 慕維廉 (W. Muirhead) 輯訳 上海: 墨海書館

- ※ 関連記事 The North-China Herald, 1855.1.13
◇ 上編 5 卷 咸豐 3 (1853) 上海: 墨海書館印 1 冊 [東大総 (中牟田武信氏寄贈), 香川大神原]
※ 冒頭「創造天地萬物記」. 卷 5 末には 1 丁分の訂正ページ. ただし和刻本にある「訂誤」の文字なし.
◇ 下編 10 卷 咸豐 4 (1854) 上海: 墨海書館藏板 1 冊 [21.3×14.5 cm 東大総 (中牟田武信氏寄贈)]
※ 冒頭「縁起」
□ 光緒 9 (1883) 上海: 益智書会 [BL, 日比谷実藤]
□ 『小方壺斎輿地叢鈔』第 84 冊再補編 「地理全志 1 卷」 [国会, 筑大, 無窮平沼, 東大総, 東大東文研, 早大, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外大石浜] ※ 上編のみ
□ 『西学大成』寅編地学 「地理全志 5 卷」 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研]
※ Wylie, 168 Douglas, 補 96
□ 和刻本『地理全志』上編 5 卷・附訂誤 1 卷 (題簽 [例] 第 1 冊「地理全志 上篇 亞細亞 第一冊」) 安政 5 晚秋刊 爽快樓藏版 安政 6 印 江戸: 山城屋佐兵衛ほか 2 軒 (京都: 勝村治右衛門/大坂: 河内屋茂兵衛) 5 冊, 3+55+4, 56+2, 36+3, 29+2, 19+2+3 丁, 下編 10 卷 (題簽 [例] 第 6 冊「地理全志 下篇 第一冊」) 安政 6 榆夏刊 爽快樓藏版 安政 6 印 江戸: 山城屋佐兵衛ほか 2 軒 (京都: 勝村治右衛門/大坂: 河内屋茂兵衛) 5 冊 (縁起・目録・卷 1・2, 卷 3・4, 卷 5・7, 卷 8・9, 卷 10), 3+3+27+24, 23+40, 8+10+16,

- 10+24, 39丁 26.1×18.2 cm [国会（わ290-1), 茨城大蔵, 横浜市大鮎沢, 小浜市立図書館]
- ◇ 分類不明 10巻 安政5刊 10冊 [神宮, 京都府, 大谷, 九大]/後印 上編5巻 安政5刊, 下編10巻 安政6夏刊 [加賀聖藩]/安政5・6刊 10冊 [内閣3点, 東北大狩野, 宮書, 東大岡, 京大小早川, 5冊(上篇) 宮書, 5冊(上篇) 福井市, 5冊(上篇) 京都府, 5冊(上篇) 大阪府]
- 和刻本『地理全志』上編5巻・附訂誤1巻(題簽[例] 第1冊「地理全志 上篇 亞細亞志 一」) 安政6榴夏刊 爽快樓藏版 後印 江戸: 山城屋佐兵衛梓/京都: 勝村治右衛門/大坂: 河内屋喜兵衛ほか8軒 5冊, 3+55+4, 56+2, 36+3, 29+2, 19+2+3丁, 下編10巻(題簽[例] 第6冊「地理全志 下篇 第一冊」) 安政6榴夏刊 爽快樓藏版 後修(下篇冒頭「縁起」削除) 江戸: 山城屋佐兵衛梓/京都: 勝村治右衛門/大坂: 河内屋喜兵衛ほか8軒 5冊(目録・巻1・2, 巷3・4, 巷5-7, 巷8・9, 巷10), 3+27+24, 23+40, 8+10+16, 10+24, 39丁 26.0×18.0 cm [内閣(292-201), 東大南葵, 9冊(次上篇巻3) 国会(4-234)]
- ◇ 分類不明 安政6刊 10冊 [三重大]/安政6 10冊 [筑大2点, 立教大久保, 宮書, 二松學舎, 重山, 関大増田, 神戸大住田, 萩高, 牧野, 佐賀大小城鍋島, 長崎大武藤, 6冊(上篇5巻下篇10巻) 岡山大池田, 5冊(上篇) 埼玉小室, 5冊(上篇) 立教大久保, 5冊(下篇) 京都府, 5冊(上篇) 佐賀大小城鍋島]
- ◇ 分類不明 2冊(存上篇巻3, 下篇巻1-2) [東大総]/安政3 10冊 [早大] (早稻田大学図書館所蔵漢籍分類目録による)/安政6刊 5冊 [神宮]/安政3-6 34冊 26 cm [佐賀鍋島]
- * 「博物新編地理全志等の英人著述追追出版ニ相成申候」(安政6.1.25 武谷椋亭あて箕作秋坪書簡) ※井上忠(1958:35).
- ◇ 明治印 東京: 稲田佐兵衛等 10冊 [国会(4-234)], 内閣2点, 愛教大]
- 慕維廉(ウイルレム) 摂 阿部弘国述『和訳地理全志』上編4巻 槐陰書屋藏版 明治7 東京: 雁金屋清吉(青山堂) 発兌 4冊 3+4+6+2+52, 54, 49, 55丁 [国会, 内閣, 筑大, 学習院]
- * 唐本の首篇から巻2までの和訳。目次では上篇として巻7構成を示すが後半は出ず。
- 川本幸民「地理全誌漢字地名箋」 署紙51枚装幀 [学士院川本]

地理便童略傳 麦都思(W. H. Medhurst) マラッカ
1819年 1冊 21丁 [BL]

- * Wylie, 27 Douglas, 201
- 地理問答 江徳(I. M. Condit) 広州 同治4(1865) 51丁 [BL]
- * Wylie, 261 Douglas, 201
- * 類似及至同一書目「地理問答條畧」同治4(1865) 1冊 [内閣]/「地理問答」光緒4(1878) 1冊 [内閣]
- 電学10巻首1巻 瑣挨徳(H. M. Noad) 摂 傳蘭雅(J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述 光緒5(1879) 上海: 江南製造局 [BL]
- 『西学富彊叢書』乙集電学 [早大小倉, 京大人文研]
- 『江南製造局訳書彙刻』所収 [京大人文研]
- * Douglas, 補96
- * A Manual of Electricity
- 電学源流 瑣挨徳(H. M. Noad) 摂 傳蘭雅(J. Fryer) 口訳・徐建寅筆述
- 『西学大成』酉編電学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 天学啓蒙 駱克優(J. N. Lockyer) 築 林楽知(Y. J. Allen)・鄭昌棟訳
- 『西学大成』丑編天学 [国会]
- * Science Primer Series—Astronomy, London.
- * 格致啓蒙・天文学
- 電学綱目 田大里(J. Tyndall) 輯 傳蘭雅(J. Fryer) 口訳・周郁筆述 光緒7(1881)頃 上海: 江南製造局 pp.140 [BL]
- 『西学大成』酉編電学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 『西学富彊叢書』乙集電学 [国会, 日比谷実藤, 早大小倉, 京大人文研]
- 『江南製造局訳書彙刻』所収 [京大人文研]
- * Douglas, 補130
- * Notes on Electricity
- 電学須知
- 『格致須知』所収 [東北大狩野, 日比谷実藤]
- 『新輯各国政治芸学全書』所収 [京大人文研]
- 電学入門 丁題良(W. A. P. Martin) 摂
- 『西学大成』酉編電学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 電学問答 天津水雷局訳
- 『西学大成』酉編電学 [国会, 日比谷実藤, 京大人文研]
- 天鏡衛人 湛約翰(J. Chalmers) 同治元(1862) 香

港 1 冊 20丁

- ◇ 同治 5 (1866) 香港: 英華書院 1 冊 [BL, 内閣, 静嘉, 新潟県立図書館, 大谷]
- ◇ 光緒 4 (1878) 広州: 小書会 1 冊 [東洋]
- ※ Wylie, 217 Douglas, 202

天人異同 慕維廉 (W. Muirhead) 咸豐 6 (1856) 香港 1 冊 6 丁 [大谷]

- ◇ 咸豐 7 (1857) 香港 1 冊 [BL]
- ◇ 同治 8 (1868) 香港: 英華書院 1 冊 [新潟県立図書館]
- ※ Wylie, 169 Douglas, 202

天地人論 [麥都思 (W. H. Medhurst)] 同治 8 (1869) 香港 [BL]

- ◇ 同治 8 (1869) 香港: 英華書院 1 冊 [東北大狩野]
- ※ Wylie, 33 Douglas, 202

天道鏡要 3 卷 孟丁元 (S. N. D. Martin) 咸豐 8 (1858) 寧波: 華花聖經書房 1 冊 97 丁 25 cm [福井松平, 92 丁 長崎大武藤]

- ※ Wylie, 204

天道溯原 丁題良 (W. A. P. Martin) 咸豐 4 (1854) 寧波 1 冊 77 丁 [79 丁 長崎大武藤]

- ◇ 咸豐 8 (1858) 寧波: 華花印書房 1 冊 91 丁 21 cm [国会, 葵]
- ◇ 咸豐 10 (1860) 寧波: 華花書局 118 丁 24.0 cm [葵, 同志社神学部]
- ◇ 同治 6 (1867) 上海: 美華書館 126 丁 23.6 cm [BL, 東洋, 慶大, 大谷, 京大人文研, 関大増田, 116 丁 長崎大武藤]
- ◇ 同治 8 (1869) 上海: 美華書館 1 冊 56 丁 19.6 × 11.7 cm [国会, 内閣, 東北大狩野, 茨城大菅, 静嘉 2 点, 東洋, 19 cm 青山学院, 東大総 2 点, 48 丁 19 cm 東女大佐波, 早大 2 点, 新潟県立図書館, 神宮, 立命館岡, 関大増田, 天理, 香川大神原]
- ◇ 同治 11 (1872) 上海: 美華書館 1 冊 116 丁 24 cm [宮城小西, 青山学院]
- ◇ 光緒 20 (1894) 華北書会 [長崎大武藤]
- ※ Wylie, 204 Douglas, 補131

□ J. S. Burdon (包爾騰) 訳『天道溯原直解』

- ◇ 同治 9 (1870) 上海: 美華書館 71 丁 23.7 cm [静嘉]
- ◇ 光緒 7 (1881) 3 卷 [BL]
- ◇ 光緒 9 (1883) 華北書会 131 丁 23 cm [124 丁 東女大佐波]
- ◇ 光緒 16 (1890) 上海: 美華書館 71 丁 25.7 cm

[東洋]

※ Douglas, 補130

□ 訓點『天道溯原』 明治初 東京: 敬虔社 3 冊 24 cm [無窮平沼, 青山学院, 東大総, 香川大神原]

◇ 中村正直訓點『天道溯原』 山田俊藏藏版 明治 8 東京: 和泉屋市兵衛 3 冊 112 丁 24 cm [国会, 東大総, 立教大久保, 青山学院, 牧野, 1 冊 (欠巻中) 内閣]

◇ 明治 10 東京: 山田俊藏藏版 1 冊 112 丁 23.3 × 15.5 cm [国立天文台, 東洋, 慶大, 東大総, 天理, 香川大神原, 九大桑木]

◇ 明治 13 横浜: 倫敦聖教書類会社 1 冊 85 丁 21.7 cm [東北大林, 国学院河野, 香川大神原]

◇ 明治 14 横浜: 倫敦聖教書類会社 1 冊 81 丁 22 cm [日比谷井上, 青山学院, 慶大, 東大教養, 二松學舍, 加賀聖藩, 三重県米山, 京大谷村, 同志社キリスト研, 天理]

◇ 明治 15 横浜: 倫敦聖教書類会社 1 冊 81 丁 22 cm [無窮平沼, 青山学院, 梶山八木, 京大谷村, 香川大神原]

◇ 明治 19.5 横浜: 倫敦聖教書類会社 1 冊 81 丁 22 cm [青山学院, 天理, 長崎大武藤]

◇ 明治 19.6 横浜: 倫敦聖教書類会社 洋装 1 冊 162 p. 20 cm [大倉山, 大阪外大]

◇ 明治 20 横浜: 倫敦聖教書類会社 洋装 1 冊 162 p. 19 cm [青山学院, 天理]

◇ 明治 22 倫敦聖教書類会社 洋装 1 冊 [天理]

◇ 明治 29 倫敦聖教書類会社 洋装 1 冊 [天理]

□ 嘉魯日耳士 (C. Carrothers) 訳『天道溯原解』 明治 7 嘉魯日耳士藏板 3 冊 36, 55, 80 丁 23 cm [HYL, 館林秋元, 青山学院, 東女大佐波, 大谷, 同志社キリスト研, 大阪外大石浜, 天理, 岩国微古館]

◇ 嘉魯日耳士 (C. Carrothers) 訳『天道溯原解』 明治 8 嘉魯日耳士藏板 3 冊 22.4 × 15.2 cm [2 冊 無窮平沼, 青山学院, 上田市藤盧, 北野, 天理]

□ 安川亨訳『啓蒙天道溯原』 洋装本

◇ 明治 15 耶蘇教書類会社 1 冊 269 p. 19 cm [東女大佐波, 同志社新島, 大阪外大石浜, 香川大神原]

◇ 明治 18 横浜: 美以美教書類会社 1 冊 269 p. 20 cm [青山学院, 慶大]

◇ 明治 27 半田研吉訳 東京: メソヂスト出版舎 1 冊 269 p. 19 cm [青山学院]

※ 佐波亘編「天道溯原訳解第一編出版願書その他 11 の各種資料 (原本)」 明治 7 1 冊 31 枚 半

- [東女大佐波]
- ※ 吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究一『天道溯原』の研究・附訳註一』(汲古書院, 1993年)
- 天文啓蒙 7巻 光緒12 (1886) 総稅務司署 1冊 [九大]
 □『西学十六種』第5冊 [国会]
 □『西学啓蒙十六種』第11冊 [日比谷実藤, 早大]
 □『西学十六種啓蒙』第11冊 [関大増田]
- 天文図説 4巻 柯雅各 (R. Cole) 撰 摩嘉立・薛承恩訳 (N. Sires) 光緒9 (1883) 上海: 益智書会 1冊 [UCLA (B), 東洋藤田]
- 天文須知 傳蘭雅 (J. Fryer) 訳 光緒7 (1881) 上海 1冊 pp. 24 [BL 2点]
 □『格致須知』所収 [東北大狩野, 日比谷実藤]
 ※ Douglas, 補130
- 天文畧論 合信 (B. Hobson) 道光29 (1849) 広州: 恵愛医館 1冊 図+1+1+39+附表 27×16 cm [BL, New York Public Library, 欠図 国会]
 ※ Wylie, 127 Douglas, 202
- 天路指南 倪維思 (J. L. Nevius) 咸豐7 (1857) 寧波 1冊 73丁
 ◇ 咸豐10 (1860) 上海: 美華書館 1冊 [静嘉]
 ◇ 咸豐11 (1861) 上海: 美華書館 1冊 92丁 25 cm [青山学院, 東大総, 大谷, 大洲矢島, 佐賀鍋島]
 ◇ 同治13 (1874) 上海: 美華書館 1冊 84丁 25 cm [東女大佐波]
 ◇ 光緒8 (1882) 上海 [BL]
 ※ Wylie, 224 Douglas, 補98
 □ 中田道之助訓『天路指南完』東京: 米国聖教書類会社 明治17 洋装本 185 p. 21 cm [青山学院, 東女大佐波]
- 天路指明 揚格非 (G. John) 撰 同治元 (1862) 1冊 25 cm [国会]
 □ 光緒10 (1884) 漢口 pp. iv, 61 [BL]
 ◇ 光緒19 (1893) 漢口: 英漢書館 1冊 [東洋]
 ※ Wylie, 238 Douglas, 補157
- 天路歷程 5巻 約翰 (J. Bunyan) 撰, 賓為霜 (W. C. Burns) 訳 咸豐5 (1855) 香港 [BL]
 ◇ 同治8 (1869) 上海: 美華書館 1冊 [BL, 内閣, 東北大狩野, 茨城大菅, 東洋, 大谷, 立命館岡, 関大増田]
 ◇ 同治11 (1872) 上海 [BL]
 ◇ 光緒9 (1883) 5巻 真寶堂 [東北大]
 ※ Wylie, 175 Douglas, 5, 補6
 □『官話天路歷程』5巻 同治11 (1872) 上海: 美華書館 1冊 [東北大, 静嘉]
 ※ Wylie, 176
 □『続天路歷程官話』6巻 同治8 (1869) 上海: 美華書館 1冊 [茨城大菅, 静嘉, 新潟県立図書館]
 ◇ 光緒31 (1905) 上海: 美華書館 1冊 26 cm [長崎大武藤]
 ※ Wylie, 282
 □ 天路歷程土話 5巻続 6巻 同治9・10 (1870・71) 広州: 恵師礼堂 2冊 [東北大 3点]
- 東教宗鑑 3巻 固櫛乙訳 隆源等校 同治2 (1863)
 出版地不明 1冊 [東洋]
 ◇ 唐紙 1冊 17+8+8丁 18.1×12.1 cm [青山学院 (G92-12)]
 ※ 裏表紙に「大清/李雲海書」と墨書.
 ◇ 和刻本『東教宗鑑』3巻 1冊 17+8+8丁 18.0×12.5 cm [青山学院 (G92-12-2), 東大岡, 香川大神原]
 ※ 上書と同一版.
 □ 訓点本 [明治初] 1冊 [香川大神原]
 □ 分類不明 (訓点の有無等) 3巻1冊 [東北大]/中 1冊 [茨城大菅]
 □ 明治16 1冊 [静嘉]
- 動物学啓蒙 8巻
 □『西学十六種』第9冊 [国会]
 □『西学十六種啓蒙』第8冊 [関大増田]
- 東西洋考毎月統記傳 4巻 愛漢者 (K. F. A. Gützlaff) 編 道光13 (1833)-道光15 (1835), 道光17 (1837) -18 (1838) 広東・新嘉坡 25×15 cm [1833-35, 1837-38 BL]
 ※ Wylie, 58 Douglas, 164, 補102
 ※『小方壺斎輿地叢鈔』第81冊再補編「毎月統紀傳」
 ※抄録.
- 特選撮要毎月紀傳 麥都思 (W. H. Medhurst) 1823-1826 バタヴィア 21×13 cm [1823 No. 1, 3 BL]
 ※ Wylie, 28 Douglas, 164
- 内科新説 2巻 合信 (B. Hobson) 著 管茂材撰 咸豐8刊 上海: 仁濟医館 1冊 [BL, UCLA-Medical Library, 23.3×15.2 cm 印刷所々不鮮明 国会, 東北大狩野, 静嘉, 葵, 京大, 大阪府, 香川大神原]
 □『新輯各国政治芸学全書』所収 [京大人文研]
 ※ Wylie, 127 Douglas, 79
 □ 和刻本『内科新説』2巻 桃樹園三宅氏藏板 安政6 (1859) 刊 江戸: 老臣館萬屋兵四郎発行 3冊 [25.8×17.4 cm 蕃調→国会, 内閣, 宮城小

西, 黒羽町作新館 2 点, 埼玉小室, 宮書古賀, 26 cm 国教研, 東洋藤井, 學院, 4 冊 25 cm 慶大富士川, 25.8×17.4 cm 東大鶴軒, 新潟県立図書館, 26 cm 金沢市蒼龍館, 京大富士川, 杏雨, 岡山大池田, 岡山大古医書10点, 幕末期医学書復刻II期, 1 冊 (巻上後半) 鹿沼大櫻, 1 冊 (巻下) 25 cm 慶大富士川, 2 冊 (巻上下) 25.2×17.5 cm 研医会 2 点]

- ◇ 後印 [東北大狩野, 小浜市立図書館]
- ◇ 明治 4 印 覆安政 6 刊 東京: 萬屋兵四郎 116丁 26 cm [順天堂大山崎]
- ◇ 明治 7 印 東京: 萬屋兵四郎 [東洋藤井]
- ※ 和刻本は全文翻刻
- 和刻本『内科新説』3 卷 平安: 天香堂藏版 安政 7 (1860) 刊 3 冊 [東洋藤井, 慶大, 26 cm 順天堂大山崎, 25.2×17.6 cm 東大総5 点, 葵, 滋賀医大河村, 25.1×17.5 cm 北野, 京大, 杏雨, 岡山大古医書, 25×18 cm 浅野, 九大眼科, 九大衛生, 存巻上 神戸大医]
- 分類不明 卷中1 冊 [黒羽町作新館]/3 冊 [刈谷村上]/2 冊 (欠上巻) [岡山大古医書 (赤沢文庫)]
- 『[内科新説] 傳染霍亂説 [コレラ病]』1 卷 張府: 復古斎藏梓 近世木活字本 安政 7 (1860) 刊 (序) 信陽: 百華園製本 1 冊 9 行×15字 8 丁 17.5×12.8 cm [大阪府, 杏雨]

内科闡微 嘉約翰 (J. G. Kerr) 口訳・林湘東筆述 広州: 博濟医局 同治12 (1873) 1 冊 24 cm [国会, 京大, 京大富士川, 杏雨]

- ◇ 光緒15 (1889) [京大富士川]
- 和刻本 坪井信良再訳『内科闡微』 明治 7 東京: 初白斎発兌 1 冊 34 丁 18.5×12.5 cm [19 cm 国教研, 東洋藤井 2 点, 19 cm 順天堂大山崎, 東大洪庵, 金沢市蒼龍館, 滋賀医大, 京大, 杏雨]
- ◇ 写本 [東博]
- 浅田宗伯『内科闡微私評』写本 明治17写 1 冊 [杏雨]

日月星真解 揚格非 (G. John) 撰 漢口: 聖教書局 1 冊 [東洋]

日食図説 瑪高温 (D. J. Macgowan) 咸豐 2 (1852) 寧波: 真神堂 1 枚 [New York Public Library]
※ Wylie, 133

野客問難記 麥都思 (W. H. Medhurst) 咸豐 4 (1854) 上海

- ◇ 同治 9 (1870) 香港: 英華書院 1 冊 [BL, 内閣, 新潟県立図書館]

※ Wylie, 28 Douglas, 256

※ 同『清明掃墓之論』の新版.

博物新編 3集 合信 (B. Hobson) 著 陳修堂撰

- 『博物新編初集』? 広州: 恵愛医館 1 冊
- 『博物新編二集』? [咸豐 3 (1853)] 広州: 恵愛医館 1 冊
- 『博物新編三集』 咸豐 4 (1854) 広州: 恵愛医館 1 冊 22 丁 26.3×15.8 cm [BL, 牧野]
- 咸豐 5 (1855) 上海: 墨海書館 3 冊 [BL, 東北大狩野, 東北大本館, 24.2×15.5 cm 研医会, 葵, 1 冊 福井市, 立命館竹越, 24.4×15 cm 関大增田, 九大薬局]
- ◇ 後印 (咸豐 8 後) 上海: 仁濟医院 3 冊 25.5×15.8 cm [牧野]
- ※ 岡山大池田に「英合信撰 博物新編 初集 大 1 冊」あり。『博物新編』上海版の端本か。
- ※ Wylie, 126 Douglas, 79, 補47
- 和刻本『博物新編』(題簽「官板博物新編」) 3 集 江戸: 老臣館萬屋兵四郎
- ◇ 各冊末に黒印「老臣館発兌」「萬屋兵四郎」 3 冊 [25.8×17.8 cm 岩瀬, 25.8×17.5 cm 半田]
- ◇ 初冊末に黒印「老臣館発兌」「萬屋兵四郎」, 2 冊 末に老臣館萬屋兵四郎「発閲目録」 2 冊 (欠第 3 集) 25.8×17.6 cm [茨城大菅]
- ◇ 各冊末に老臣館萬屋兵四郎「発閲目録」 3 冊 25.9×17.6 cm [青学短, 東大田中]
- ◇ 初, 2 冊末: 元治元年「老臣館発兌書目」, 3 冊末「発閲目録」[西京商業高]
- ◇ 奥付萬屋兵四郎広告詳細不明 [2 冊 (存 2, 3 集) 東京理科大]
- ※ 「博物新編地理全志等の英人著述追追出版ニ相成申候」(安政 6.1.25 武谷掠亭あて箕作秋坪書簡) 井上忠 (1958: 35)
- ※ 「六合叢談, 博物新編等ノ官板トナリ行ハル」(文久 3.9 香山院竜温「急策文」)
- ◇ 奥付に元治元年「老臣館発兌書目」 3 冊 25.4×17.3 cm [内閣, 宮城小西, 東北大医?, 宮城教育大, 酒田光丘, 千葉, 26 cm 国立科博, 国教研, 25.2×17.0 cm 研医会 2 点, 25.4×17.3 cm 東大総3 点, 早大, 横浜市大, 金沢泉丘高, 福井市 4 点, 26 cm 内藤, 京大富士川, 25.4×17.1 cm 大谷, 立命館原, 杏雨, 関大増田, 愛日, 天理, 岡山大古医書, 岩国微古館 5 点, 愛媛大, 九大物理, 2 冊 城北, 1 冊 (存第 2 集) 福井市, 2 冊 京都府, 1 冊 (存第 2 集) 神戸大医, 2 冊 (存 1・3 集) 津山洋学, 1 冊 岡山大古医書]
- ◇ 後印 老臣館萬屋兵四郎 3 冊 [城北, 福井市]
- ◇ 分類不明 24×17 cm 3 集 3 冊 [黒羽町作新館 3

- 点]/3集3冊 [静嘉大楨]/東都：萬屋兵四郎 3冊 26 cm [慶大医]/老良館萬屋兵四郎 3冊 [福井市, 1冊(存第2集)福井市]/2集2冊 江戸 萬屋兵四郎 [長崎大武藏]
- ◇ [明治] 東京：老良館萬屋兵四郎 [牧野3点]
- 鹿児島藩版 明治4 3冊 [東大総, 高鍋町立図書館2点, 鹿児島] ※ 摺りやや不鮮明。
- 明治4版『改正博物新編』3冊 [京都府]
- 明治4版『博物新編』東京：萬屋兵四郎 3冊 [多和文庫→マイクロ国文学研究資料館]
- 明治4版『博物新編 再刻』老良館(萬屋兵四郎) 3冊 25 cm [愛日, 牧野]
- 明治5版『博物新編 再刻』3集 福田氏蔵梓(東京：老良館萬屋兵四郎) 3冊 [内閣, 酒田光丘, 千葉, 成田, 佐倉高, 宮書, 無窮真軒, 無窮平沼, 玉川大, 早大小倉, 26 cm 名大皇学, 神宮, 滋賀医大河村, 25.2×17.0 cm 北野, 25.1×17.5 cm 北野, 京大, 杏雨, 26 cm 神戸大住田, 牧野, 鹿児島]
- 『博物新編 再刻』3冊 図は初刻のまま [国会, 1冊(存卷2)宮城教育大]
- 明治5版『博物新編』4巻 東京：萬屋兵四郎 3冊 [豊橋]
- 明治7版『博物新編 三刻』3集 福田氏蔵梓 東京：老良館萬屋兵四郎発行 3冊 [内閣, 東北大狩野, 筑大, 学士院, 国教研, 静嘉, 東洋藤井, 学習院, 玉川大, 25.5×17.1 cm 東大岡, 東外大, 早大, 新潟県立図書館, 内藤, 逢左, 立命館原, 杏雨, 岡山大大原農書, 大洲矢島]
- ◇ 写本「六合叢談・博物新編抄」賀藤月篷写 51丁 [秋田東山]
- 大森秀三「博物新編訳解草稿」稿本 卷之三増訂・本文挿入文 江戸末 1冊 [香川大神原]
- 大森秀三訳『博物新編訳解』3集4巻
- ◇ 慶応4序 翁翠居蔵板 [慶応4]-明治3刊 東京：青山(雁金屋)清吉等 5冊47, 32, 30, 44, 52丁 18.0×11.9 cm [国会, 内閣2点, 筑大, 19 cm 国立科博, 宮書, 尊經, 青学短, 東京理科大, 加賀聖藩, 小浜市立図書館, 上田市藤廬, 半田, 神宮, 京都府, 重山, 杏雨, 愛日, 香川大神原, 牧野, 佐賀鍋島, 活字翻刻版日本教科書大系近代編21, 3冊(卷1・2)宮城小西, 4冊(欠巻3)黒羽町作新館, 3冊(欠巻3・4)黒羽町作新館, 4冊 慶大, 3冊(欠巻1・巻2上)玉川大, 3冊(欠巻1上)横浜市大鮎沢, 2冊(存巻1・3)加賀聖藩, 4冊(欠第5冊)小浜市立図書館, 3冊岩国徵古館2点, 3冊(存巻2上下・巻4)長崎大武藤]
- ◇ 明治3 京都：出雲寺文次郎 5冊 18 cm [一宮市豊島団有隣舎]/明治3刊 18.0×12.0 cm [研医会2点]/須原屋ほか 明治2-3 5冊 18 cm [佐賀鍋島]
- ◇ 刊年不明 東京：青山清吉 5冊 18 cm [愛教大→マイクロ国文学研究資料館]
- ◇ 明治7版 東京：青山清吉 5冊 18 cm [国会, 筑大, 成田, 国教研, 東書, 横浜市大鮎沢, 京大富士川, 杏雨, 牧野]
- ◇ 分類不明 2冊(明治2) 1冊(明治3) 12冊(巻4, 明治3) [高鍋町立図書館]/2集1冊 [高鍋町立図書館]
- ◇ [明治] 東京：雁金屋 1冊 [高鍋町立図書館]
- 小幡篤次郎訳『博物新編補遺』3巻
- ◇ 明治2 尚古堂 3冊 38, 46, 33丁 [内閣, 宮城小西, 22×15 cm 黒羽町作新館, 筑大, 宮書, 玉川大, 東大総, 23 cm 東京理科大, 加賀聖藩, 射和, 神宮, 京都府, 杏雨, 凤鳴青山, 岩国徵古館, 牧野, 23 cm 佐賀鍋島, 高鍋町立図書館4点, 2冊(上下)慶応4秋序 山形大佐久間, 2冊筑大]
- ◇ 明治6 慶応義塾出版局 3冊 38, 46, 33丁 22.1×15.1 cm [国会, 内閣2点, 青学短, 慶大2点, 東大岡, 玉川大, 蓦, 福井市, 逢左, 京都府, 杏雨, 愛日2点, 牧野]
- ※ W. and R. Chambers's eds. Introduction to the Sciences [1861?] の訳。
- 市岡正一編『博物新編字引』
- ◇ 明治7 旭堂 1冊 34丁 15×11 cm [国会]
- ◇ 増補版 明治10 大阪：三木書樓 56丁 19 cm [国会]
- 成瀬悌三郎編『博物新編字引』明治8刊 大阪：大野木市兵衛等 1冊 79丁 [18×9 cm 国会, 18.0×8.1 cm 北野, 18.0×8.3 cm 北野]
- 橋爪貫一編『博物新編』巻1(上下) 明治7刊 2冊 19 cm [国会]
- 石坂堅壮口述・神崎有燐筆記『博物新編紀聞』3巻 明治8 備中倉敷黒金舎 3冊 26, 30, 22丁 22 cm [国会, 玉川大, 杏雨, 岡山大大原]
- ◇ 後印(明治7序) 大阪：文栄堂前川善兵衛 [牧野]
- 福田敬業『増補博物新編』2巻 稿本 明治初1冊 [香川大神原]
- 福田敬業英訓『増補博物新編』4巻 福田氏蔵梓 明治8刊 18.3×12.5 cm 4冊 [国会, 内閣, 巷1欠 国教研, 東書, 杏雨, 牧野, 3冊(欠巻4)鹿沼大櫻]
- 容兆倫『博物新編二篇』2集(4-5集) 東京：大

- 角豊次郎蔵板 明治 8 年版権免許 明治 9 刊 2 冊 30, 21丁 24.9×16.6 cm [国会, 筑大, 學習院 2 点, 慶大, 玉川大, 東大田中, 東京理科大, 三重大, 逢左, 京都府, 牧野, 存第 4 集 早大, 存第 4 集 牧野 2 点]
- ◇ 明治刊 [内閣, 東書]
- ※ 著者は来日清国人
- 大森秀三編『博物新編後集』第 1 卷 動物部 明治 8 刊 青山堂 1 冊 57丁 23 cm [国会]
- 堀野良平訳『博物新編演義』卷 1・2 明治 8-9 刊 尾張犬山町: 堀野良平 2 冊 48, 52丁 [国会, 国教研, 杏雨, 1 冊 (存卷 1) 内閣]
- 福田敬業注解『博物新編註解』5 卷 東京: 江藤喜兵衛蔵板 明治 9 刊 東京: 雁金屋 (青山) 清吉 5 冊 37, 29, 34, 35, 36丁 22.5×15 cm [国会, 内閣, 東京理科大, 半田, 神宮]
- 小室誠一鼈頭『鼈頭博物新編』3 集 明治 9 刊 東京: 稲田政吉 3 冊 [神宮 2 点, 横浜市大鮎沢, 山梨, 香川大神原, 1 冊 (存 3 集) 杏雨]
- ◇ 小室誠一頭書 明治 9 柳絮書店 3 冊 26 cm [国会, 千葉, 神宮 2 点, 牧野 3 点, 2 冊 (欠第 3 集) 杏雨]
- ◇ 明治 9 刊 後修 柳絮書店 3 冊 [金刀比羅]
- ◇ 小室誠一頭書 明治 10 柳絮書店 4 冊 (1 集上下, 2 集, 3 集) [19 cm 国会, 3 冊 (欠第 3 集) 杏雨]
- 安代良輔標註『標註博物新編』3 集 明治 10 刊 三府書樓発兌 京都: 河島九右衛門 (出版人) 3 冊 58, 25, 22丁 26 cm [国会, 内閣, 玉川大, 金刀比羅] ※ 底本は初刻本。
- 近藤圭造述『博物新編講義』4 卷 明治 10 序刊 中 4 冊 [牧野 2 点, 国会には 3 冊 (卷 2-4) 明治 9 刊あり, 東大教育も明治 9 刊 4 卷 4 冊]/明治 9 年 3 月 7 日版権免許汎愛堂 青山堂発行 1 冊 [国教研]
- 『博物新編志を利 (※しおり)』(写本) 1 冊 [多和文庫→マイクロ国文学研究資料館]
- 博物通書 瑪高温 (D. J. Macgowan) 咸豐元 (1851) 寧波: 愛華堂 1 冊 42丁 26×16.5 cm
- ※ Wylie, 133
- ◇ 写本 [国会蔵, 埼玉小室, 学士院川本, 東京電機大, 福井松平, 杏雨, 神戸大住田, 香川大神原, 長崎大武藤, 有所不為斎雑録]
- 和刻本『電気通標』近世木活字本 1 冊 20丁 26 cm [UCLA (B) 三井, 大谷]
- 萬国公報 林樂知 (Y. J. Allen) 上海: 萬国公報館 Vol. 7-15 (1874.9.5-1883.7.28) Vol. 1 (1) -Vol. 19 (237) (1889.2-1907.12) [1874- BL, The Honnold Library of Claremont College, 1868-1907 : HYL, 1-228 (1889-1907, 欠85-96) 早大, 1-48期 (1889-1892) 国会, 73-134 東洋, 5 冊 (第 6-10 冊 1893) 静嘉]
- ※ A. A. Bennett, comp. Research Guide to the Wan-kuo kung-pao, 1874-1883. San Francisco: Chinese Materials Center, Inc., 1976.
- ※ Douglas, 補 101
- 影印 清末民初報刊叢編之 3, 4 (台北: 華文書局, 1968 年) 40 冊 [Vol. 1-18 (1889-1906) 北大, 1-40 (1889-1892) 早大, 1-40 (1889-1892) 東洋, 1-40 (1889-1892) 都立大, Vol. 7-15 (1874-1883), Vol. 1-18 (1889-1907) 東洋大, Vol. 7-15 (1874-1883), 1-216 (1889-1907.1) 筑大]
- ※ 『教会新報』後続誌. A. A. Bennett (1983) 参照.
- 萬国公法 4 卷 惠頓 (H. Wheaton) 撰述 丁韪良 (W. A. P. Martin) 編訳 同治 3 (1864) 北京: 崇實館存板 4 冊 228丁 [BL, 国会, 日比谷実藤, 早大, 長崎大経済]
- 『西学大成』卯編史学 [国会, 日比谷実藤, 早大 小倉, 京大人文研]
- 『新輯各國政治芸学全書』所収 [京大人文研]
- ※ Wylie, 206 Douglas, 補 52
- ※ Wheaton's International Law
- 開成所繙刻『官板萬国公法』4 卷 慶應元刊 (官板) 6 冊 (総目・卷 1, 1-2, 2, 2-3, 4, 4) 26 cm [静嘉, 立教大久保, 早大 5 点, 愛教大?, 25.5×18 cm 福井県大野高, 25.7×17.4 cm 重山, 京大小早川, 金刀比羅, 九大 3 点]
- ◇ 慶應元刊 後印 老臣館萬屋兵四郎 6 冊 (序・総目・卷 1, 1-2, 2, 2-3, 4, 4) 25.6×17.3 cm [東北大狩野, 黒羽町作新館, 瑞龍院龍門, 筑大, 千葉, 宮書 3 点, 東大総 3 点, 早大 3 点, 加賀聖藩, 福井市 2 点, 小浜市立図書館 2 点, 山梨, 豊橋羽田, 半田, 射和, 京大谷村, 岡山大池田, 香川大神原 2 点, 九大 2 点, 25 cm 佐賀鍋島, 長崎大経済, 鹿児島大玉里, 1 冊 (存卷 1 首) 内閣]
- ◇ 分類不明 慶應元刊 6 冊 [慶大 3 点, 岩国徵古館]
- ※ 元治元年の萬屋兵四郎の奥付をもつものがあるが, 原本が元治元年では未刊のため, 他書の奥付の流用とされる.
- ◇ 江戸末 萬屋兵四郎 2 冊 26 cm [国会]
- ◇ 明治 3 6 冊 26 cm [神戸大住田]
- ◇ 明治 4 印 東京: 萬屋兵四郎 6 冊 26 cm [立教大久保, 日比谷井上, 長崎大経済, 1 冊 慶大]

- ◇ 明治印 6 冊 [22.5×17 cm 西京商業高, 愛日]
- ◇ 「和訳万国公法」写本 5 冊 [鹿児島大玉里]
- ※ 第2巻4章（官版第4冊の途中）までの和訳。
- 長崎広運学館訳「和解万国公法」写本 慶応4訳 10冊 [鹿児島大玉里]
- 重野安繹訳述『万国公法』（題簽「和訳万国公法」）首目1巻・2巻 慶応4序 鹿児島：鹿児島藩 3 冊 26 cm [慶大, 山梨, 立命館西園寺, 2巻4冊 築大, 2冊(卷1-2)立教大久保2点, 1冊(総目)立教大久保2点]
- ◇ 序・凡例・図・総目, 1巻1-2章 明治3序 鹿児島：鹿児島藩藏梓 3 冊 18.3×25.9 cm [半田]
- ◇ 明治藩版 3 冊（欠あり） [宮書]
- 惠頓(Wheaton)原著 提穀士志訳『万国公法訳義』2巻 慶応4刊 京都：錢屋惣四郎 4 冊 22 cm [内閣2点, 立教大久保, 宮書, 横浜市大鮎沢, 21.5×14.5 cm 福井県大野高, 愛教大, 香川大神原, 九大法, 伝習館高, 3冊（欠あり）佐賀大小城鍋島, 2巻2冊 江戸：山城屋佐兵衛等 20.4×13.4 cm 重山]
- 高谷龍洲注解 中村正直批閱『万国公法蠡管』初編2巻中編3巻下編3巻 済美齋藏版 明治9 東京：北畠茂兵衛 8 冊 27 cm [内閣2点, 築大, 立教大久保, 秋月郷土館, 2冊(存初編2巻)東大経]

萬国地理全集 K. F. A. Gützlaff

- 『小方壺斎興地叢鈔』第82冊再補編 「萬国地理全図集」 [国会, 築大, 日比谷実藤, 無窮平沼, 愛知大霞山, 京大人文研, 大阪外大石浜]
- ※ Wylie, 60
- ※『海国図志』の引用も「萬国地理全図集」

- 微積溯源 8巻 華里司(W. Wallace)輯 傳蘭雅(J. Fryer)口訳・華衡芳筆述 同治13(1874) 上海：江南製造局 6冊 27 cm [BL, 国会, 東北大岡本, 東北大狩野, 築大, 学士院, 東大経, 早大小倉, 大阪府]
- 『古今算学叢書』所収 [東北大林]
 - 『華氏中西算学全書』貳集 [早大小倉]
 - 『測海山房中西算学叢刻』第20・21集 [東北大狩野, 東京理科大]
 - 『江南製造局釋訳各種西書』7・8冊 [静嘉]
 - 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
 - ※ Douglas, 補49
 - ※ Encyclopaedia Britannica 8版(1853-60)中の「Fluxions」(W. Wallace)→『測候叢談』『代数術』も見よ。

- 皮膚新編 嘉約翰(J. G. Kerr)口述・林湘東筆述 同治13(1874) 広州：博濟医局 1冊 23 cm [国会, 京大富士川]
- 和刻本『皮膚新編』1巻 東京：清水(瑞穂屋)卯三郎梓 明治8刊 1冊 22.4 cm [国会, 内閣, 東大経, 静嘉, 横浜市立大]

廟祝問答 2巻 葉納清(F. Genähr) 咸豐6(1856)

香港

- ◇ 咸豐9(1859) 香港 1冊 [BL]
- ◇ 咸豐11(1861) 新沙書館 1冊 20 cm [国会]
- ◇ 同治10(1871) 香港：英華書院 1冊 8丁 19 cm [内閣, 東女大佐波, 新潟県立図書館, 関大増田]
- ◇ 光緒15(1889) 広州：小書会 1冊 [東北大]
- ※ Wylie, 162 Dougalas, 144

婦嬰新説 合信(B. Hobson)著 管茂材撰 咸豐8(1858)序刊 上海：仁濟医館 1冊 [BL, 国会, 東北大狩野, 日比谷実藤(相当印刷疲れ), 東洋藤井, 香川大神原]

- ◇ 咸豐8(1858) 上海：仁濟医館 2冊 [国教研]
- ※ Wylie, 127 Douglas, 78, 補47
- 和刻本『婦嬰新説』2巻 平安：天香堂藏版 安政6(1859)刊 2冊 25.7×17.3 cm [茨城大菅, 25 cm 慶大富士川2点, 26 cm 順天堂大山崎, 東大経2点, 早大, 玉川大, 25.3×17.6 cm 研医会2点, 小浜市立図書館, 京大, 24.8×17.5 cm 北野, 大阪府, 神戸大医, 岡山大古医書, 25×17 cm 浅野, 幕末期医学書復刻II期]
- 和刻本『婦嬰新説』2巻 桃樹園三宅氏藏板 江戸：老臣館萬屋兵四郎 2冊 [国会, 内閣, 宮城小西, 埼玉小室, 宮書古賀, 25.4×17.3 cm 東大経3点, 金沢市蒼龍館, 滋賀医大守一堂?, 岡山大古医書7点, 1冊 香川大神原]
- 『婦嬰新説』2巻 桃樹園三宅氏藏板 安政6(1859)刊 江戸：老臣館萬屋兵四郎 2冊 [杏雨, 岡山大古医書]
- 分類不明 2冊 内閣(195-294)/上下2冊 26×17 cm [黒羽町作新館2点]/1冊(欠巻上) 静嘉大楓/2巻(上下) 京都：若山屋茂助 62丁 25 cm [慶大医]/萬屋兵四郎 2冊 [岡山大池田]/2冊 和大 [京大富士川]/2冊 [岩国徵古館]
- ◇ 『婦嬰新説』2巻 明治4 東京：萬屋兵四郎 2冊 [学習院, 岡山大古医書]
- 『婦嬰新説』2巻 東京：英蘭堂 2冊 [東北大狩野]
- 広瀬元周訳『婦嬰新説和解』3巻 明治7 東京：文明書樓 3冊 [滋賀医大河村, 京大, 杏雨]

- 「麻痘瘡抄說」写本 11丁 24 cm 『婦嬰新說』
よりの抜書 [順天堂大山崎]
- 福音之箴規 愛漢者 (K. A. F. Gützlaff) 輯 道光16
(1836) 新嘉坡：堅夏書院 1冊 18丁 24 cm
[HYL, 東洋]
※ Wylie, 57
- 福音廣訓 米撣 (W. Milne)
□ W. H. Medhurst 改訂 咸豐4 (1854) 上海 1
冊 [BL]
□ W. C. Milne 改訂 同治6 (1867) 香港：英華書
院 1冊 中 [茨城大菅, 静嘉, 早大, 新潟県立
図書館]
※ Wylie, 19, 124 Douglas, 3
※ W. Milne『鄉訓』の改訂版.
- 福音道問答簡略 克陞存 (M. S. Culbertson) 同治元
(1862) 1冊 19丁 [大谷]
※ Wylie, 147
- 福音道問答合講 克陞存 (M. S. Culbertson) 咸豐11
(1861) 上海：美華書館 1冊 [内閣, 大谷]
※ Wylie, 147
- 福音四書合串 同治13 (1864) 福州：美華書局 1冊
[東北大]
- 辟奉偶像解 江德 (I. M. Condit) 同治8 (1869) 上
海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]
□ 刊年不明 1冊 [大谷]
※ Wylie, 261
- 希伯來書註釋 陶錫祈 (S. Dodd) 訳 光緒元 (1875)
上海：美華書館 1冊 38丁 25 cm [東北大狩野,
青山学院]
- 貿易通志 (K. F. A. Gützlaff) 道光20 (1840) 1冊
63丁
□ 『小方壺齋輿地叢鈔』第81冊再補編 「貿易通志 1
卷」 [国会, 筑大, 無窮平沼, 愛知大霞山, 京大人
文研, 大阪外大石浜]
※ Wylie, 61
※ 『海國圖志』第83に「貿易通志」あり.
- 防海新論18巻 希理哈 (Victor E. K. R. von Scheliha)
輯 傳蘭雅 (J. Fryer) 口訳・華蘅芳筆述 同治13
(1874) 序 上海：江南製造局 6冊 26 cm [BL,
国会, 内閣, 静嘉]
□ 『江南製造局譯書彙刻』所収 [国会, 京大人文研]
※ Douglas, 補43
※ 1868年希理哈・原序
※ A Reatise on Coast Defence (London : E. and
- F. N. Spon, 1868)
- 陸軍參謀局和解『和解防海新論』18巻 東京：陸
軍文庫 明治8 (1875) 22.6×15.6 cm 6冊 (1
-4, 5, 6-8, 9-11, 12-14, 15-18) [内閣3点, 日
比谷近藤]
- 寶藏興焉12巻 費而莽 (W. Crookes) 撰 傳蘭雅 (J.
Fryer) 口訳・徐壽筆述 光緒10 (1884) 上海：江
南製造局 16冊 [静嘉]
□ 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]
※ A Practical Treatise on Metallurgy. 3 vols.
London, 1868-1870.
- 香港華字日報 香港：德臣印字館 (The China Mail)
同治3 (1864) -1872.4より『華字日報』-1941.12
[国会 同治11.3.29, 11.5.14-13.7.14]
- 香港船頭貨價紙 香港：孖刺報 (The Daily Press)
咸豐7 (1857) -同治? (1864 or 65) [1859年 計78
号分 Essex Institute, Mass.]
□ 写本 [No. 406 東大社会情報研, 抄録 No. 591,
595, 597, 601, 603, 604, 605, 607, 618, 620,
624, 625, 626, 627, 628, 630, 644, 645, 650,
653, 654, 659, 663, 664, 665, 666, 668 『鈴木
大雜集』13, No. 695, 696, 711, 718, 731, 732,
744, 750, 770, 774, 778, 781, 783 『鈴木大雜
集』16]
□ 和刻本 題簽「官版香港新聞」2巻 江戸：老良
館萬屋兵四郎 半 1冊 [国会, 東大明治→日本
初期新聞全集 1・2, 東大社会情報研小野, 東洋,
加賀聖藩, 京大上野, 香川大神原, 高鍋町立図書
館]
※ The Daily Press (Hong Kong) の中文版『香港
船頭貨價紙』(咸豐11.7.5-同治1.5.2) (1861-
1862) の抄訳. 卷1 No. 591, 595, 597, 601,
603, 604, 605, 607, 618, 620, 625, 626, 627,
644, 645, 650, 659, 663, 664, 665. 卷2 No.
666, 668, 710, 714, 717 所収.
□ 和刻本『香港新聞紙』 No. 1068-1077 同治
3.8.1-8.22 [東大明治, 幕末明治新聞全集1]
- 馬太傳福音書 同治4 (1865) 上海：美華書館 1冊
[東北大]
◇ 同治10 (1871) 1冊 [筑大, 静嘉]
◇ 同治12 (1873) 1冊 「東北大」
◇ 光緒12 (1886) 広州：美華浸信会書局 1冊
[長崎大経済]
◇ 官話訳 光緒13 (1887) 上海：大美國聖經会 1
冊 [東大経]
※ Wylie, 101, 124, 226

馬太傳福音書註釈（新約全書註釈卷1） 何進善撰 理雅各（J. Legge）校 上海：美華書館 同治4（1865）上海：美華書館 1冊 [京大人文研]
 ◇ 同治13（1874） 1冊 103丁 25cm [酒田光丘, 青山学院]

馬太傳問答 光緒14（1888） 広東長老会 1冊 [東北大]

馬太福音串珠 同治2（1863） 福州：美華書局 1冊 [東北大]

馬太福音書 新約全書第1卷 同治6（1867） 1冊 [大谷]

馬太福音書問答 哈巴（A. P. Happer）咸豐3（1853）
 広州 1冊 176丁
 ◇ 同治3（1864） 上海：美華書館 1冊 58丁 [内閣2点, 静嘉]
 ◇ 同治13（1874） 上海：美華書館 1冊 58丁 23cm [青山学院]
 ※ Wylie, 145

馬可福音 光緒18（1892） 福州：美華書局 1冊 [東北大]

馬可福音傳 同治7（1868） 香港：英華書院 1冊 [静嘉]
 ◇ 同治11（1872） 1冊 [東北大]
 ※ Wylie, 153

馬可傳福音書 新約全書第2卷 同治3（1864） 1冊 [大谷]
 ◇ 同治10（1871） 上海：美華書館 1冊 [筑大, 静嘉]
 ◇ 同治11（1872） 上海：美華書館 1冊 [東北大]
 ※ Wylie, 102

馬可傳福音書略解 倪維思（J. L. Nevius）同治元（1862） 上海：美華書局 1冊 49丁 24cm [射和, 佐賀鍋島]
 ◇ 同治5（1866） 上海：美華書館 1冊 22cm [国会, 内閣2点, 東大総, 京大人文研]
 ※ Wylie, 224

馬可傳問答 光緒14（1888） 広東長老会 1冊 [東北大]

問答良言 合信（B. Hobson）咸豐5（1855） 広州 1冊 10丁
 ◇ 咸豐7（1857） 上海 1冊 11丁
 ※ Wylie, 126
 □ 写本 明治5写 紙耕氏蘭堂 1冊 21.1×15.2cm 10丁 [青山学院]

※ 写本「真理易知」と合綴

冶金錄 3卷 阿發滿（F. Overman）撰 傳蘭雅（J. Fryer）口訳・趙元益編 同治12（1873） 上海：江南製造局 2冊 27cm [国会, 筑大, 大阪府]
 ◇ 『西學富彊叢書』辛集礦學 [国会]
 ◇ 『礦務叢抄』第3冊 [国会]
 ◇ 『江南製造局譯書彙刻』所収 [京大人文研]

訳印約書備考 咸豐10（1860） 上海：墨海書館 [関大增田]

□ 『中西通書』咸豐10（1860）版, 所収. 23ウ-29オ.
 [宮書古賀, 大谷, 関大增田]

約書亞記 光緒24（1898） 上海：美華書館 1冊 [東北大]

耶穌教要旨 培端（D. B. McCarter） 咸豐8（1858）
 寧波 1冊 22p. [BL]
 ◇ 同治7（1868） 上海：美華書館 1冊 [京大人文研]
 ◇ 上海：美華書館 1冊 [新潟県立図書館]
 ※ Wylie, 138 Douglas, 補89, 補159
 ※ Douglas, 補89によれば次の『耶穌教要訣』（寧波, 1849）の改訂版.

耶穌教要訣 1卷附「耶穌教例言」 培端（D. B. McCarter） 咸豐7（1857） 寧波：華花聖經書房 1冊 11+4丁 18×12cm [福井松平]

※ Wylie, 137, 138
 ※ Douglas, 93によれば『耶穌教例言』（上海, 1862, 12丁）はBL所蔵.

耶穌教要理大問答 同治5（1866） 上海：美華書館 1冊 61丁 23cm [内閣3点, 青山学院, 早大, 新潟県立図書館]
 □ 光緒7（1881） 上海 1冊 pp.124 [BL]
 ※ Douglas, 補159

耶穌教要理問答 克陞存（M. S. Culbertson） 道光29（1849） 寧波 1冊 24丁 [大谷]
 ◇ 同治5（1866） 上海：美華書館 1冊 [内閣2点, 静嘉, 東洋, 大谷]
 ◇ 光緒7（1881） 上海 1冊 pp. 36 [BL, 東大総]
 ※ Wylie, 145, 148 Douglas, 補159

耶穌教略 艾約瑟（麥都思, W. H. Medhurst） 道光26（1846） 上海 1冊 36丁
 ◇ 咸豐元（1851） 広州：恵愛医館 1冊 [静嘉]
 ◇ 咸豐5（1855） 香港 [BL]
 □ 咸豐8（1858） 上海 32丁 [BL]
 □ 同治6（1867） 香港：英華書院 1冊 19丁

- 19.6×13.0 cm [内閣, 東大南葵, 新潟県立図書館, 大谷]
- 同治 7 (1868) 上海: 美華書館 1 冊 27丁 16 cm [茨城大菅, 東女大佐波, 早大, 京大人文研, 大洲矢野]
- ◇ 同治 11 (1872) 上海: 美華書館 1 冊 27丁 16 cm [東女大佐波]
- 光緒 5 (1879) 上海 pp. 38 [BL]
- ※ Wylie, 33, 188 Douglas, 156, 256, 補159
- 耶穌教或問 施敦力 (J. Stronach) 咸豐 8 (1858) 香港 1 冊 [BL]
- ◇ 同治 8 (1869) 香港: 英華書院 1 冊 37丁 19 cm [国会, 東北大狩野, 静嘉, 東洋, 20 cm 青山学院, 新潟県立図書館, 関大増田, 香川大神原]
- ※ Wylie, 106 Douglas, 256
- 耶穌言行紀畧 4 卷 光緒 19 (1893) 香港 [BL]
- 清刊 1 冊 [内閣]
- [江戸末] 刊 1 冊 [香川大神原]
- ※ Douglas, 補159
- 耶穌言行綱目 慕維廉 (W. Muirhead) 同治 7 (1868) 上海: 美華書館 1 冊 [内閣, 東北大狩野]
- ※ 耶穌降世伝 1 卷 耶穌伝道論 1 卷
- 耶穌言行全傳 咸豐 11 (1861) 上海: 美華書館 1 冊 [内閣]
- 耶穌降世伝 同治 9 (1870) 上海: 美華書館 1 冊 [内閣, 東大紹, 京大人文研, 関大増田]
- 新版 光緒 5 (1879) 上海 pp. 120 [BL]
- ※ Wylie, 34, 170 Douglas, 補159
- 耶穌山上垂訓 理雅各 (J. Legge) 同治 4 (1865) 香港: 英華書院 1 冊 24丁 [東北大, 大谷]
- ◇ 同治 8 (1869) 香港: 英華書院 1 冊 [BL, 東北大狩野]
- 刊年不明 1 冊 25丁 19 cm [東女大佐波]
- ※ Wylie, 119 Douglas, 3
- 耶穌之寶訓 愛漢者 (K. A. F. Gützlaff) 輯 道光 16 (1836) 新嘉坡: 堅夏書院 1 冊 34丁 24 cm [BL, HYL, 東洋]
- ※ Wylie, 57 Douglas, 補38
- 耶穌門徒金針 祇理哲 (R. Q. Way) 咸豐 6 (1856) 寧波 1 冊 27丁
- 同治 10 (1871) 上海: 美華書館 1 冊 2+1+1 +1+14丁 16.1×11.4 cm [BL, 内閣 2 点]
- ※ Wylie, 140 Douglas, 補151
- 喻道傳 丁題良 (W. A. P. Martin) 咸豐 8 (1858) 寧波: 華花印書房 1 冊 48丁 小 [早大洋学, 大谷, 香川大神原]
- ◇ 同治 2 (1863) 上海: 美華書館 1 冊 [宮城小西, 関大増田]
- ◇ 同治 6 (1867) 1 冊 [神宮]
- ◇ 同治 8 (1869) 上海: 美華書館 1 冊 31丁 16.5×11.5 cm [内閣, 茨城大菅, 筑大, 静嘉, 青山学院, 早大]
- ※ Wylie, 205
- 渡部溫訓点『勸善喻道傳』1 卷 渡部氏藏版 明治 10 東京: 稲田佐兵衛 1 冊 39丁 22×14.8 cm [HYL, 内閣, 静嘉, 東洋, 青山学院, 早大, 関大増田]
- 喻道要旨 李提摩太 (Timothy Richard) 光緒 30 (1904) 上海: 広学会 1 冊 [千葉]
- 幼学淺解問答 米撣 (W. Milne) 道光 27 (1847) 1 冊 [大谷]
- ※ Wylie, p. 15 によれば、寧波版は1846刊, 上海版は1848刊という。
- 約翰真經釈解 合信 (B. Hobson) 咸豐 3 (1853) 香港 1 冊 47丁 [BL]
- 改訂版『約翰聖經釈解』 同治 13 (1874) 上海: 三牌樓聖堂 1 冊 2+47丁 25 cm [HYL]
- ◇ 光緒 5 (1879) 上浅: 三牌樓福音堂 1 冊 47丁 25 cm [BL, 東洋, 青山学院]
- ※ Wylie, 126 Douglas, 補 4
- 約翰傳福音書 同治 10 (1871) 上海: 美華書館 1 冊 [内閣, 静嘉, 新潟県立図書館]
- 約翰傳問答 光緒 14 (1888) 広東長老会 1 冊 [東北大]
- 約翰福音書官話 (約翰傳) 丁題良 (W. A. P. Martin) 訳 同治 3 (1864) 上海 1 冊 22 p. [東北大]
- ※ Wylie, 206
- 約翰福音傳 同治 7 (1868) 香港: 英華書院 1 冊 [静嘉]
- 路加傳福音書 同治 3 (1864) 1 冊 [大谷]
- ◇ 同治 4 (1865) 上海: 美華書館 1 冊 [東北大]
- ◇ 同治 10 (1871) 上海: 美華書館 1 冊 [内閣, 筑大, 静嘉, 新潟県立図書館]
- ◇ 同治 11 (1872) 上海: 美華書館 1 冊 [東北大]
- 路加傳福音全書 同治元 (1862) 1 冊 [大谷]
- 路加傳問答 光緒 14 (1888) 広東長老会 1 冊 [東北大]

- 六合叢談 偉烈亞力 (A. Wylie) 等 1-15 (咸豐 7/1-8/5, 1857/1-1858/6) 上海：墨海書館 15冊 254丁 [1-13 BL, 欠 2, 10, 12 宮城伊達, Vol. 1 1刊・2写・3-9刊・10写・11刊・12写・13刊 Vol. 2 1-2刊 長崎大武藤]
※ Wylie, 173 Douglas, 164, 補101
※『格致彙編』1881年4月号に「格物窮理論（摘要六合叢談章廉臣稿）」あり。
□ 和刻本『六合叢談』1-15 文久年間 22.7×14.4 cm
◇ 題簽「官板六合叢談刪定本」15冊 東都：萬屋兵四郎 [内閣16冊 (15冊附重學浅説), 東北大狩野15冊, 茨城大菅15冊, 千葉15冊, 宮書古賀15冊, 東洋15冊, 東大有栖川15冊, 神奈川近代文学15冊, 金沢市蒼龍館15冊, 23×15 cm 福井県大野高15冊附重學浅説, 西京商業高15冊, 伝習館高15冊, UCLA (B) 三井13冊, 国会新城8冊(1-4, 9-12), 宮城小西4冊(9-13), 瑞龍院龍門1冊(存13), 23 cm 立教大久保13冊(1-13), 東大史料13冊(1-13), 東大社会情報研小野2冊(1, 10), 金沢市蒼龍館4冊(5-8), 福井市2冊(Vol. 2 1, 2), 京大谷村8冊(1-8), 龍谷14冊, 天満宮13冊, 関大増田13冊(1-13)・8冊(1-8)・2冊(2, 3), 和歌山大紀州藩10冊(1-5, 9-13), 九大13冊, 佐賀鍋島11冊(2-6, 9-13), 長崎大武藤2冊(1-7, Vol. 2, 1-2), 日本初期新聞全集1 15冊]
◇ 題簽「六合叢談刪定本」6冊(1-2, 3-5, 6-7, 8-10, 11-13, Vol. 2, 1-2附) [国会6冊(現・15冊附1冊, 原題簽欠く), 東大社会情報研小野6冊(1-2, 3-5, 6-7, 8-10, 11-13, Vol. 2, 1-2附), 京大上野6冊国会鈴木5冊(1-2, 3-5, 6-7, 8-10・13, Vol. 2, 1-2附), 内閣5冊(1-2, 3-5,

6-7, 8-10, 11-13), 内閣1冊(1-2), 内閣1冊(Vol. 2, 1-2 附重學浅説)]

- ◇ 題簽不明 官板六合叢談 23 cm 7冊(1-2, 3-4, 5-6, 7-8, 9-13, Vol. 2 1-2, 附錄) [立教大久保]/1卷1-2卷2号 [東大明治]/官板 23 cm 合本3冊(1-13) [神戸大住田]/3卷3冊(欠卷2) [大洲矢野]
◇ 写本 六合叢談・博物新編抄 賀藤月篷写 51丁 [秋田東山]
□ 分類不明 (唐本か和本か) Vol. 1, No. 2 1冊 [大谷]

靈魂貴於身體論 培端 (D. B. McCarter) 同治元(1862) 上海 1冊 pp. 12 [BL 3点, 大谷]

- ◇ 同治6(1867) 上海 1冊 [BL]
※ Wylie, 137 Douglas, 補93

靈魂總論 培端 (D. B. McCarter) 同治元(1862) 上海 [BL]

- ◇ 同治6(1867) 上海：美華書館 1冊 3丁 16 cm [BL, 東女大佐波, 大谷]
※ Wylie, 137 Douglas, 補93

靈魂篇 培端 (D. B. McCarter) 咸豐6(1856) 寧波 1冊 26丁

- ◇ 同治元(1862) 1冊 [大谷]
◇ 同治7(1868) 上海：美華書館 小 [早大, 京大人文研]
◇ 同治11(1872) 上海：美華書館 1冊 32丁 16 cm [静嘉, 東洋, 青山学院, 東大総, 早大, 関大増田]
※ Wylie, 139

以上

引用参照文献一覧

1. 目録を作成するに使用した蔵書目録

国外の部

Douglas, Robert K. Catalogue of Chinese Printed Books, Manuscripts and Drawings in the Library of the British Museum. London, 1877. 複製版 ロバート・K・ダグラス編 坂出祥伸解説『大英博物館所蔵漢籍目録』科学書院, [1987年].

Douglas, Robert K. Supplementary Catalogue of Chinese Printed Books and Manuscripts in the Library of the British Museum. London, 1903. 複製版 ロバート・K・ダグラス編 坂出祥伸解説『大英博物館所蔵漢籍目録・補遺篇』科学書院, 1987年.

Hayashi, Nozomu & Peter Kornicki, Early Japanese books in Cambridge University Library : a catalogue of the Aston, Satow and von Siebold collections. ピーター・コニッキー, 林望共編『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録：アストン・サトウ・シーボルト・コレクション』Cambridge, Eng.: Cambridge University Press, 1991.

Crouch, Archie, Steven Agoratus, Arthur Emerson and Debra E. Soled eds. Christianity in China : a scholars'guide to resources in the libraries and archives of the United States. New York : M. E. Sharpe, Inc., 1989.

Harvard-Yenching Library. Catalogues of the Harvard-Yenching Library, Chinese Catalogue. Author/Title. 28vols. New York and London : Ger-

land Pub., 1986.

岡雅彦, 青木利行編『ハーバード燕京図書館和書目録』
ゆまに書房, 1994年。

New York Public Library. Dictionary Catalog of the
Oriental Collection, The New York Public Li-
brary, Reference Department. 16 vols. Boston : G.
K. Hall, 1960.

University of California, Berkeley. East Asiatic Li-
brary University of California, Berkeley. Author-
titel Catalog. 13 vols. Boston : G. K. Hall, 1968.

University of California, Berkeley. East Asiatic Li-
brary, University of California, Berkeley. Subject
Catalog. 6 vols. Boston : G.K.Hall, 1968.

岡雅彦, 児玉史子, 戸沢幾子, 石松久幸編『加州大學
パークレー校所蔵三井文庫旧藏江戸版木書目』ゆまに
書房, 1990年。

U. S. Library of Congress and American Library
Association. The National Union Catalog of Pre-
1956 Imprints. 704 vols. Chicago : Mansell, 1968.

国内の部

<全国>

海老澤有道監修・基督教史学会編『日本基督教史関係和
漢書目録 1590~1890』文晃堂, 1954年。

Ebisawa, Arimichi, comp., Christianity in Japan : A
Bibliography of Japanese and Chinese Sources,
Part I (1543-1858). Tokyo : Committee on Asian
Cultural Studies of International Christian Uni-
versity, 1960.

国際基督教大学アジア文化研究委員会編『日本キリスト
教文献目録—明治期』創文社, 1965年。

アジア経済研究所編纂発行『中国文雑誌・新聞総合目
録』1986年。

<宮城県>

宮城県図書館

- * 宮城県図書館編集兼発行『宮城県図書館漢籍分類
目録』1985年。
- * 宮城県図書館編集兼発行『小西文庫和漢書目録』
<特殊文庫目録第1冊>1983年。
- * 宮城県図書館編集兼発行『伊達文庫目録』<特殊
文庫目録第3冊>1987年。

東北大学

- * 東北大学附属図書館編纂兼発行『東北大学所蔵和
漢書古典分類目録漢籍』経部, 史部, 1974年。子
部, 集部, 叢書部, 附録, 1975年。書名人名索引,
1980年。
- * 東北大学附属図書館編纂兼発行『東北大学所蔵和
漢書古典分類目録和書』中, 1978年。
- * 東北大学狩野文庫マイクロ化編集委員会監修・東

北大学附属図書館編『東北大学附属図書館所蔵狩
野文庫目録 和書之部』第1門「総記・雑書」, 第
3門「歴史・地理」, 第4門「語学・文学」, 第6
門「法律・政治・経済」, 第8門「理学」, 「総合索
引」, 丸善, 1994年。

宮城教育大学

* 宮城教育大学附属図書館編集兼発行『宮城教育大
学所蔵和漢書古典目録』1980年。続, 1981年。

<秋田県>

秋田県立図書館

* 秋田県立秋田図書館『秋田県立秋田図書館所蔵東
山文庫目録』1959年。

<山形県>

酒田市立図書館光丘文庫

* 酒田市立図書館光丘文庫編輯『酒田市立光丘文庫
所蔵漢籍分類目録』1986年。

* 酒田市立図書館光丘文庫編輯『酒田市立光丘文庫
所蔵国書分類目録』1988年。

龍門文庫(瑞龍院内)

* 長澤規矩也, 長澤孝三編「瑞龍院龍門文庫漢籍分
類目録」1978年。長澤規矩也等編『未刊諸文庫古
書分類目録』第3輯, 汲古書院, 1987年, 所収。

山形大学

- * 『佐久間文庫目録』山形大学, 1967年。
- * 山形大学附属図書館編集兼発行『山形大学柳原文
庫目録』1981年。

<茨城県>

茨城大学

- * 茨城大学附属図書館編集兼発行『茨城大学所蔵管
文庫漢籍分類目録』1974年。
- * 茨城大学附属図書館編集兼発行『茨城大学附属図
書館蔵管文庫国書分類目録』1981年。
- * 茨城大学教育学部国文研究室編『茨城大学附属図
書館蔵管文庫(国書)書名索引』1982年。

筑波大学

- * 東京高等師範学校『(大正元年12月現在) 東京高等
師範学校図書館和漢書書名目録(五十音別)』1915
年。
- * 東京文理科大学編纂兼発行『東京文理科大学附属
図書館和漢書分類目録』上, 下, 索引, 1934年。

<栃木県>

鹿沼市立図書館

* 長澤規矩也編「鹿沼市立図書館所蔵大樺文庫目
録」。長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』
第3輯, 汲古書院, 1987年, 所収。

黒羽町教育委員会

- * 黒羽教育委員会編集兼発行『黒羽藩校作新館旧蔵図書仮目録』1981年。

<群馬県>

館林市立図書館

- * 小池篤編纂入力『秋元文庫目録索引』館林市立図書館（工藤三壽男），1989年。

<埼玉県>

埼玉県立文書館

- * 土井康弘編「『小室家文書』洋学関係資料（抄）—明治以前」個人作成資料，n. d.

立教大学（新座保存書庫）

- * 立教大学附属図書館編集兼発行『大久保利謙文庫目録附大久保利武コレクション』1990年。

<千葉県>

千葉県立中央図書館

- * 千葉県立中央図書館編集兼発行『千葉県立中央図書館所蔵漢籍目録』1986年。

成田図書館

- * 『成田図書館蔵書分類目録』成田図書館，（第4編）総類・宗教・哲学・教育部，1978年。（第6編）歴史・地理・政治・法律・経済・軍事部，1980年。社会・運動・理学・医学・工学・産業部，1981年。

千葉県立佐倉高等学校

- * 『鹿山文庫目録』千葉県立佐倉高等学校，1971年。

<東京都>

国立国会図書館

- * 国立国会図書館図書部編集『国立国会図書館漢籍目録』国立国会図書館，1987年。
- * 国立国会図書館編集兼発行『国立国会図書館漢籍目録索引』1995年。
- * 国立国会図書館整理部編『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録3』国立国会図書館，1973年。
- * 国立国会図書館図書部編『国立国会図書館蔵書目録 明治期』第1編「総記・哲学・宗教」，第2編「歴史・地理」，第3編「社会科学」，第4編「自然科学・工学・産業」，「書名索引」，「著者索引」，国立国会図書館，1994-1995年。
- * 国立国会図書館閲覧部編集『国立国会図書館所蔵新聞目録（昭和55年12月末現在）』国立国会図書館，1981年。
- * 国立国会図書館専門資料部編『国立国会図書館所蔵中国語・朝鮮語雑誌新聞目録（平成3年末現在）』国立国会図書館，1993年。
- * 国立国会図書館整理部編『亀田次郎旧蔵書目録』<国立国会図書館蔵書目録別冊第1>国立国会図書館，1960年。
- * 国立国会図書館整理部編『新城新蔵旧蔵書目録』

- <国立国会図書館蔵書目録別冊第3>国立国会図書館，1970年。

- * つかさ書房編集兼発行『(改訂増補) 国立国会図書館支部上野図書館所蔵本草関係図書目録』1976年。

- * 国立国会図書館著『稀本あれこれ—国立国会図書館蔵書から』出版ニュース社，1994年。

国立公文書館

- * 内閣文庫『内閣文庫国書分類目録』上，1961年。下，1961年。索引，1962年。

- * 内閣文庫『(改訂) 内閣文庫漢籍分類目録』1971年。

- * 内閣文庫『内閣文庫明治時代洋装図書分類目録』1967年。

- * 長澤孝三・五島征二「『内閣文庫所蔵資料鎖国時代の異国事情展—世界に開く小さな窓—』報告」『北の丸（国立公文書館報）』第17号（1985），pp. 139-147。

お茶の水図書館

- * 川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵新修成寅堂文庫善本書目』（財）石川文化事業団お茶の水図書館，1992年。

宮内庁書陵部

- * 宮内庁書陵部『和漢図書分類目録』上，1952年。下，1953年。索引，1955年。

研医会

- * 研医会図書館『研医会図書館蔵書目録』第3輯和・漢・洋古医学文献及医史学関係資料，上下巻，1966年。

国文学研究資料館

- * 国文学研究資料館編『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』1985年，1990年。

国立科学博物館

- * 国立科学博物館編集兼発行『国立科学博物館蔵書目録和文編1984年版』1984年。索引，1984年。

国立教育研究所

- * 国立教育研究所編集兼発行『国立教育研究所附属教育図書館蔵書目録（和書の部 総記安西文庫）』1963年。

国立天文台

- * 内田正男，伊藤節子「東京天文台所蔵天文曆学関係和漢書目録」『東京天文台報』Vol. 17, No. 1 (1974), pp. 83-122.

- * 中村士，伊藤節子，神田泰「浅野家所蔵『天文方渢川家文書』の調査（I）」『国立天文台報』Vol. 1, No. 4 (1993), pp. 401-421.

静嘉堂文庫

- * 静嘉堂文庫編集兼発行『静嘉堂文庫国書分類目録』1929年。

- * 静嘉堂文庫編集兼発行『静嘉堂文庫漢籍分類目録』1930年。
- * 国立国会図書館支部静嘉堂文庫編輯『静嘉堂文庫国書分類目録再統』国立国会図書館管理部, 1951年。※「大槻文庫本」を含む。

大東急記念文庫

- * 大東急記念文庫編修兼発行『大東急記念文庫書目』1955年。
- * 大東急記念文庫編修兼発行『大東急記念文庫書目第二』1978年。

東書文庫

- * 東京書籍株式会社編纂兼発行『東書文庫教育図書目録』第4輯(自昭和14年至昭和17年3月)1942年。

東京国立博物館

- * 東京国立博物館編集兼発行『蔵書目録(和書2)』1957年。

東京都立中央図書館

- * 東京都立日比谷図書館編集兼発行『東京都立日比谷図書館井上文庫目録』1964年。
- * 東京都立日比谷図書館編集兼発行『東京都立日比谷図書館藏実藤文庫目録』1966年。
- * 東京都立日比谷図書館編集兼発行『東京都立日比谷図書館藏近藤記念海事財團文庫目録』1966年。

東洋文庫

- * 東洋文庫図書部編『東洋文庫所蔵漢籍分類目録子部』東洋文庫, 1993年。
- * 国立国会図書館支部東洋文庫編『藤井文庫目録』国立国会図書館, 1969年。
- * 『藤井文庫目録』東洋文庫, 1930年。

日本学士院

- * 岡本則録編『和算図書目録』帝国学士院, 1932年。復刻版:『和算図書目録』日本学士院蔵』臨川書店, 1981年。
- * 朝比奈貞一「川本幸民遺品目録」, 同『和蘭の涙とボロニアの徳利』理学社, 1949年, pp. 64-73.

前田育徳会尊経閣文庫

- * 公爵前田家尊経閣文庫『尊経閣文庫漢籍分類目録』石黒文吉, 1934年。索引, 1935年。
- * 公爵前田家尊経閣文庫『尊経閣文庫国書分類目録』石黒文吉, 1939年。

無窮会

- * 林正章編『神習文庫図書目録』無窮会, 1935年。復刻版:無窮会編『神習文庫図書目録』名著出版, 1982年。
- * 林正章編『平沼文庫蔵書目録』第1輯(槃山先生蔵書目録), 無窮会, 1956年。
- * 無窮会編集兼発行『平沼文庫蔵書目録』第2輯,

1961年。

青山学院

- * 青山学院資料センター編『明治期キリスト教文献目録—翻訳文学その他特別資料』1992年。

学習院大学

- * 学習院図書館編兼発行『学習院図書館和漢図書目録』1913年。

慶應義塾大学

- * 慶應義塾図書館編纂兼発行『慶應義塾図書館和漢図書分類目録』第1巻(哲学・宗教・教育)1937年。
- * 慶應義塾図書館編纂兼発行『慶應義塾図書館和漢図書分類目録』第4巻(政治・外交・経済及社会問題・統計・法律)1936年。
- * 慶應義塾図書館編纂兼発行『慶應義塾図書館和漢図書分類目録』第5巻(科学・技芸・辞書及類書)1942年。
- * 慶應義塾大学医学メディアセンター編集兼発行『古医書目録[改訂版]』1994年。

国学院大学

- * 國學院大學日本文化研究所編『河野省三記念文庫目録』錦正社, 1993年。

国際基督教大学

- * 国際基督教大学図書館編集『内村鑑三記念文庫目録』内村鑑三先生記念文庫設置世話人会, 1964年。第2版(増補訂正), 1971年。

順天堂大学

- * 順天堂大学図書館編纂兼発行『山崎文庫目録』1969年。

玉川大学

- * 玉川大学図書館編集兼発行『玉川大学明治和装本目録』1986年。

東京商船大学

- * 東京商船大学附属図書館編集兼発行『東京商船大学增加目録 昭和48・49年度』1975年。
- * 東京商船大学百周年記念資料館運営委員会収蔵資料目録編集委員会編『百周年記念資料館収蔵資料目録』東京商船大学, 1991年。

東京女子大学

- * 木村健次郎編『(植村記念)佐波文庫目録』東京女子大学附属比較文化研究所, 1965年。

東京大学

- * 東京大学総合図書館編集兼発行『東京大学総合図書館漢籍目録』1995年。
- * 斎藤勇見彦編修兼発行『南葵文庫図書目録』1913年。
- * 東京帝国大学附属図書館『田中美津男男爵寄贈図書目録』1936年。東京大学総合図書館所蔵。

- * 東京大学総合図書館編『東京大学総合図書館古医学目録』日本古医学資料センター, 1978年.
- * 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『明治新聞雑誌文庫所蔵新聞目録』東京大学出版会, 1977年.
- * 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目録』東京大学出版会, 1979年.
- * 東京大学新聞研究所図書室編『新聞研究所図書室所蔵特殊資料目録』1990年.
- * 東京大学東洋文化研究所著兼発行『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』1973年. 書名人名索引, 1975年.

東京理科大学

- * 東京理科大学図書館編集兼発行『東京理科大学蔵書目録 和装本の部（I）』1975年.

日本大学

- * 日本大学総合図書館編集兼発行『室井文庫目録』<日本大学総合図書館蔵書目録第10輯>1975年.

二松學舎大学

- * 二松學舎大学附属図書館編『二松學舎大学附属図書館と書目録』二松學舎, 1988年.

早稲田大学

- * 早稲田大学図書館編集兼発行『小倉文庫目録』<早稲田大学図書館と漢書分類目録特刊之2>1957年.
- * 早稲田大学図書館編集兼発行『洋学文庫目録〔稿〕』1971年.
- * 早稲田大学図書館編纂兼発行『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』1991年.

城北学園

- * 城北学園図書館指導部編『城北学園深井文庫目録』城北学園, 1991年.

<神奈川県>

大倉精神文化研究所

- * 大倉精神文化研究所附属図書館『蔵書目録（宗教）』大倉精神文化研究所, 1991年.

神奈川近代文学館

- * 神奈川文学振興会編集兼発行『高木健夫文庫目録』<県立神奈川近代文学館所蔵文庫目録7>1992年.

横浜開港資料館

- * 横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会編集・発行『横浜開港資料館所蔵 新聞・雑誌目録（平成2年12月末現在）』1991年.

横浜市立大学

- * 横浜市立大学図書館編集兼発行『三枝博音文庫目録』<横浜市立大学図書館目録叢刊第2輯>1968年.
- * 横浜市立大学図書館編集兼発行『鮎沢信太郎文庫目録』<横浜市立大学図書館目録叢刊第10集>

1990年.

<新潟県>

新潟県立図書館

- * 新潟県立新潟図書館編集兼発行『新潟県立新潟図書館所蔵漢籍目録』1980年.
- * 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編集兼発行『新潟県立新潟図書館漢籍分類目録 新発田市立図書館漢籍分類目録』<漢籍所在調査報告2>, 1982年.

新潟大学

- * 新潟大学附属図書館編集兼発行『新潟大学所蔵漢籍目録』上, 1987年. 下（索引）, 1989年.

<石川県>

加賀市立図書館

- * 長澤孝三編, 長澤規矩也校「加賀市立図書館蔵漢籍 準漢籍分類目録」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第3輯, 汲古書院, 1987年, 所収.
- * 矢野貫一代表編『聖藩文庫目録』加賀市立図書館, 1987年.
- * 磯部彰『大聖寺藩旧蔵漢籍の研究』私家版, 1986年. ※「加賀市立図書館所蔵聖藩文庫漢籍分類目録」含む.

金沢市立図書館

- * 金沢市立図書館編集兼発行『金沢市立図書館蔵蒼龍館文庫目録』1968年.

金沢泉丘高等学校

- * 石川県立金沢泉丘高等学校編集兼発行『金沢泉丘文庫高等学校蔵書解題目録』1981年.

<福井県>

福井県立図書館

- * 福井県立図書館編集兼発行『松平文庫目録』1968年.
- * 長澤規矩也, 長澤孝三編「福井県立図書館『松平文庫』漢籍準漢籍分類目録」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第2輯, 汲古書院, 1977年, 所収.

福井市立図書館

- * 福井市立図書館編集兼発行『和漢古書分類目録』1979年.

小浜市立図書館

- * 長澤規矩也, 阿部隆一, 長澤孝三調, 長澤規矩也, 長澤孝三編「小浜市立図書館所蔵漢籍分類目録（崎門派以外ノ準漢籍ヲ含ム）」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第2輯, 汲古書院, 1977年, 所収.
- * 小浜市立図書館編集兼発行『酒井家文庫総合目録』1986年.

大野高等学校

- * 長澤規矩也、長澤孝三編「福井県立大野高等学校漢籍分類目録」、長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第2輯、汲古書院、1977年、所収。
- * 福井県立大野高等学校『大野藩等旧蔵図書目録』1980年。

<山梨県>

山梨県立図書館

- * 山梨県立図書館編集兼発行『山梨県立図書館所蔵漢籍目録』1987年。
- * 山梨県立図書館編集兼発行『山梨県立図書館所蔵国書目録』1988年。

<長野県>

上田市立図書館

- * 上田市立図書館編集兼発行『藤廬文庫目録』1956年。

<岐阜県>

内藤記念くすり博物館

- * 内藤記念くすり博物館編集『蔵書目録 和漢書の部』内藤記念科学振興財団、1977年。

<静岡県>

静岡県立中央図書館

- * 静岡県立葵文庫『静岡県立葵文庫和漢図書目録 [大正15年3月現在]』1926年。
- * 静岡県立葵文庫『静岡県立葵文庫和漢図書目録 追加之部第1 [昭和3年12月現在]』1929年。
- * 静岡県立葵文庫『静岡県立葵文庫和漢図書目録 久能文庫之部』1928年。
- * 静岡県立中央図書館葵文庫編集兼発行『静岡県立中央図書館葵文庫久能文庫目録』1969年。

<愛知県>

一宮市立豊島図書館

- * 一宮市立豊島図書館編集兼発行『有隣舎和装本目録』1968年。

刈谷市中央図書館

- * 刈谷市立刈谷図書館編集兼発行『村上文庫図書分類目録』1978年。

豊橋市中央図書館

- * 長澤規矩也編『豊橋市民文化会館所蔵漢籍目録』豊橋市教育委員会、1969年。

西尾市立図書館

- * 岩瀬文庫編『岩瀬文庫図書目録』1936年。西尾市教育委員会発行、1992年。

半田市立図書館

- * 半田市立図書館編集兼発行『半田市立図書館蔵書目録和装本編』1992年。

名古屋市逢左文庫

- * 名古屋市逢左文庫編『名古屋市逢左文庫漢籍分類目録』名古屋市教育委員会、1975年。
- * 名古屋市逢左文庫編『名古屋市逢左文庫国書分類目録』名古屋市教育委員会、1976年。

愛知大学

- * 愛知大学図書館編纂兼発行『愛知大学漢籍分類目録』1960年。※簡齋文庫、霞山文庫。

愛知教育大学

- * 愛知学芸大学附属図書館名古屋分館編輯兼発行『愛知学芸大学附属図書館名古屋分館漢籍目録』1965年。

楣山女学園大学

- * 梅山女学園大学図書館編集兼発行『梅山女学園大学所蔵八木文庫漢籍分類目録』1979年。

名古屋大学

- * 名古屋大学附属図書館編集兼発行『(名古屋大学蔵書目録古書の部第1集) 神宮皇學館文庫』1962年。

<三重県>

射和文庫

- * 射和文庫蔵書目録編集委員会編『射和文庫蔵書目録』竹川竹斎翁百年祭実行委員会、1981年。

神宮文庫

- * 神宮司廳編纂『神宮文庫国書目録』1922年。訂正影印版、汲古書院、1973年。
- * 神宮文庫『神宮文庫増加目録』第4冊(自昭和9年10月至昭和31年3月)、1958年。書名索引、1963年。

三重県立図書館

- * 『三重県立図書館所蔵国書漢籍蔵書目録』三重県立図書館、1995年。

三重大学

- * 井上進輯『三重大学漢籍目録』三重大学附属図書館、1995年。

<滋賀県>

滋賀医科大学

- * 『滋賀医科大学古書目録』滋賀医科大学附属図書館、1981年。

<京都府>

北野天満宮

- * 柴田純、藤井讓治、安國良一編『北野天満宮和書漢籍目録』北野天満宮、1990年。

京都府立総合資料館

- * 京都府立京都図書館『京都図書館和漢書分類目録 [理学工学之部] 昭和5年3月末現在』1930年。
- * 文獻課「明治初期の蔵書」(2)(3)、『資料館紀要』第9号(1981), pp. 1-30, 第12号(1984), pp. 57-

116. ※旧蔵者別、京都府総合資料館所蔵蔵書目録含む。

重山文庫

- * 新村出記念財団編集兼発行『重山文庫目録』1990年。

大谷大学

- * 大谷大学図書館編集兼発行『大谷大学図書館和漢書分類目録』1926年。
- * 大谷大学図書館編集兼発行『第二大谷大学図書館和漢書分類目録 [自大正13年10月至昭和7年7月增加]』1935年。
- * 大谷大学図書館編集兼発行『大谷大学図書館第三和漢書分類目録』第二分冊（第4門～第10門）1969年。

京都大学

- * 京都帝国大学附属図書館編纂兼発行『和漢書分類目録 第一 総記』1938年。
- * 京都帝国大学附属図書館編纂兼発行『京都帝国大学和漢書分類目録 第二 理学』1939年。
- * 京都帝国大学附属図書館編纂兼発行『京都帝国大学和漢図書分類目録 第三 工学』1941年。
- * 京都帝国大学附属図書館編纂兼発行『京都帝国大学和漢図書分類目録 第四 医学』1942年。
- * 京都大学附属図書館編集兼発行『京都大学谷村文庫目録』1963年。
- * 京都大学附属図書館編纂兼発行『京都帝国大学富士川本目録』<京都帝国大学和漢図書分類目録第4冊医学>1942年。復刻、富士川游『日本医学史』（形成社、1982年）別冊付録。
- * 京都大学経済学部上野文庫運営委員会編輯兼発行『上野文庫解題目録・新聞部門（2）』1961年。
- * 『小早川文庫目録』京都大学法学部、1978年。
- * 京都大学人文科学研究所著兼発行『京都大学人文科学研究所漢籍目録』1979年。通検、1980年。

京都女子大学

- * 「吉沢文庫目録」、那波利貞編集兼発行『京都女子大学図書館報』特輯号、1964年。

同志社大学

- * 同志社大学図書館整理課編『新島旧邸文庫所蔵目録』<同志社大学図書館シリーズ2>同志社大学図書館、1958年。
- * 同志社大学図書館編集兼発行『小室・沢辺紀年文庫目録』1991年。
- * 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究所編『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』同志社大学人文科学研究所、1967年。

立命館大学

- * 立命館大学文学部編集兼発行『立命館大学漢籍分

類目録』上、書名索引、1986年。

- * 立命館大学図書館編集兼発行『立命館大学図書館蔵原隨園博士蔵書目録』1987年。
- * 立命館大学図書館編集兼発行『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』1990年。

龍谷大学

- * 龍谷大学図書館編纂『(昭和十五年七月現在) 龍谷大学和漢書分類目録(総記之部)』龍谷大学出版部、1941年。

京都市立西京商業高等学校

- * 京都市立西京商業高等学校図書館『京都市立西京商業高等学校所蔵洋学関係資料解題』京都市立西京商業高等学校、1967-1969年。

<大阪府>

大阪天満宮

- * 長澤規矩也・長澤ちづ編、長澤孝三校『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』大阪天満宮、1977年。

大阪府立中之島図書館

- * 大阪府立図書館編集兼発行『大阪府立図書館蔵漢籍目録 叢書之部』<大阪府立図書館シリーズNo.11>1964年。
- * 大阪府立図書館編集兼発行『大阪府立図書館蔵漢籍目録 四部之部』<大阪府立図書館シリーズNo.15>1966年。
- * 大阪府立図書館編『近世活字本目録』<大阪府立図書館特別集書目録>清文堂出版、1973年限定再版。

杏雨書屋

- * 武田科学振興財団編兼発行『杏雨書屋蔵書目録』1982年。

大阪外国语大学

- * 『大阪外国语大学所蔵石浜文庫目録』大阪外国语大学附属図書館、1977年。

大阪女子大学

- * 大阪女子大学国文科編纂『大阪女子大学附属図書館和漢書分類目録』大阪女子大学、1977年。

大阪府立大学

- * 岡田光代編『大阪府立大学経済学部図書室所蔵大阪商船三井船舶寄贈図書目録』、n. d.『同追加目録』、n. d.

関西大学

- * 関西大学図書館『関西大学所蔵増田涉文庫目録』<関西大学図書館シリーズ第22輯>1983年。

岸和田高等学校

- * 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『大阪府立岸和田高等学校和漢書目録』大阪府立岸和田高等学校、1985年。

大阪市立開平小学校（愛日文庫、非公開）

- * 長澤規矩也, 森上修, 瀧井孝三編「大阪市立愛日小学校愛日文庫漢籍分類目録稿」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第1輯, 汲古書院, 1977年, 所収.
- * 末中哲夫, 塙上衛編『愛日文庫目録』大阪市立愛日小学校愛日教育会, 1986年.

<兵庫県>

神戸大学

- * 神戸大学附属図書館六甲台分館『住田文庫目録』1968年.索引, 1979年.
 - * 神戸大学附属図書館編集兼発行『神戸大学附属図書館漢籍分類目録』1975年.
- 篠山鳳鳴高等学校
- * 『(県立篠山鳳鳴高等学校図書館藏)青山文庫目録』兵庫県立篠山鳳鳴高等学校図書館, 1955年.

<奈良県>

天理大学

- * 天理図書館編集兼発行『天理図書館図書分類目録』第5編(自然科学・工芸学・産業・美術・語学)(昭和8年11月30日現在) <天理図書館叢書第5輯>, 1933年.
- * 天理図書館編集兼発行『天理図書館稀書目録』<天理図書館叢書第12輯>, 1940年.
- * 大内田貞郎「天理図書館蔵木活字版書目稿」『ビブリア』第23号(1962), pp.295-305.

<和歌山县>

和歌山大学

- * 和歌山大学附属図書館真砂町分館編『和歌山大学附属図書館真砂町分館蔵紀州藩文庫目録』和歌山大学附属図書館, 1971年.

<島根県>

島根県立図書館

- * 長澤規矩也編「島根県立図書館未整理本漢籍分類目録稿」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第1輯, 汲古書院, 1977年, 所収.

<岡山县>

津山洋学資料館

- * 市立津山郷土館編集兼発行『愛山文庫目録 和書・漢籍の部』<津山郷土館報第16集>1984年.
- * 津山洋学資料館編集兼発行『目で見る津山の洋学』<津山洋学資料第4集>1978年.
- * 津山洋学資料館『津山洋学資料館資料目録』平成2年度改訂版, 1990年.

岡山大学

- * 岡山大学附属図書館編集兼発行『岡山大学所蔵池田文庫総目録』1970年.

- * 岡山大学附属図書館編集兼発行『岡山大学附属大原農書文庫, 古医書集成目録』1987年.

<広島県>

広島市立浅野図書館

- * 広島市立浅野図書館編集兼発行『広島市立浅野図書館蔵古書目録』1964年.

<山口県>

岩国微古館

- * 宮田伊津美編『吉川家寄贈図書目録』岩国微古館, 1992年.

山口大学

- * 山口大学附属図書館編集兼発行『山口大学附属図書館所蔵棲息文庫目録』1986年.
- * 藤永秀夫編『明倫館・山口明倫館・越氏塾旧蔵和漢書目録』山口大学附属図書館, 1989年.

<香川県>

金比羅宮

- * 長澤規矩也, 松原秀明, 長澤ちづ編『金比羅宮漢籍準漢籍分類目録稿』. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第1輯, 汲古書院, 1977年, 所収.

香川大学

- * 香川大学附属図書館内神原文庫蔵書目録編集委員会編輯『神原文庫分類目録』風間書房, 1964年.
- * 香川大学附属図書館編集兼発行『神原文庫分類目録(続)』1994年.

<愛媛県>

大洲市立図書館

- * 長澤規矩也編「大洲市立図書館漢籍準漢籍分類目録(昭和43年11月調)」. 長澤規矩也等編『未刊諸文庫古書分類目録』第1輯, 汲古書院, 1977年, 所収.

- * 大洲市立図書館編集兼発行『大洲市立図書館矢野玄道文庫分類目録』1973年.

愛媛大学

- * 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編集兼発行『愛媛大学附属図書館漢籍目録』(漢籍所在調査報告3), 1984年. 書名人名索引, 漢籍所在調査報告3統, 1985年.

<高知県>

高知県立牧野植物園

- * 高知県立牧野植物園編集兼発行『牧野文庫蔵書目録(和書・漢籍の部)』1986年.

<福岡県>

秋月郷土館

- * 今井源衛, 中野三敏, 岡村繁, 丸山雍成編『秋月

郷土館蔵書分類総目録』文献出版, 1982年.

福岡県立図書館

- * 中野三敏, 町田三郎, 丸山雍成編『伝習館文庫蔵書分類総目録』文献出版, 1984年.

九州大学

- * 九州帝国大学附属図書館『九州帝国大学図書目録』第1巻(ア-ソ), 1932年. 第2巻(タ-ワ), 1933年. 补遺增加篇, 1935年.
- * 九州大学附属図書館編兼発行『九州大学附属図書館漢籍目録』上巻, 1994年.
- * 中野三敏「近世木活字のこと」『(九州大学附属図書館報) 図書館情報』Vol. 27, No. 1/2 (1991), pp. 1-5. ※「平成2年度大型コレクション“近世木活字本”リスト」含む.
- * 西日本科学史学会・日本科学史学会九州支部編「九州大学所蔵桑木文庫目録」『科学技術史研究』1968年, No. 2, pp. 95-115.

<佐賀県>

佐賀県立図書館

- * 佐賀県立図書館編集兼発行『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文書目録』一般資料(和書漢籍)編, 1981年. 索引編, 1982年.

佐賀大学

- * 佐賀大学附属図書館編集兼発行『小城鍋島文庫目録』1962年.
- * 佐賀大学附属図書館編集兼発行『小城鍋島文庫目録』1976年.

<長崎県>

島原公民館

- * 島原公民館図書部編『肥前島原松平文庫目録』島原公民館, 1961年.

長崎県立長崎図書館

- * 長崎県立長崎図書館編集兼発行『郷土資料目録』下, 1965年.

松浦史料博物館

- * 松浦史料博物館編集兼発行『図書類目録其一(山川・葉山文庫)』1965年.

長崎大学

- * 長崎大学経済学部編集兼発行『武藤文庫目録』1973年.
- * 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編集兼発行『長崎大学附属図書館経済学部分館漢籍分類目録・熊本大学附属図書館落合文庫漢籍分類目録』<漢籍所在調査報告1>, 1980年.

<宮崎県>

高鍋町立図書館

- * 高鍋町立図書館編『高鍋藩明倫堂文庫図書目録』

正幸会, 1984年.

<鹿児島県>

鹿児島県立図書館

- * 鹿児島県立図書館編『鹿児島郷土資料総合目録[公共図書館所蔵編]』1979年.

鹿児島県歴史資料センター黎明館

- * 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島の歴史と文化—テーマ展示図録』1983年.
- * 霞会館資料第17輯『(黎明館開館10周年記念特別展) 岩倉使節団 内なる開国』1993年.

鹿児島大学

- * 玉里文庫目録作成委員会編『鹿児島大学附属図書館玉里文庫目録』1966年.
- * 高津孝編『玉里文庫漢籍分類目録』鹿児島大学附属図書館, 1994年.

2. 目録を作成するに使用した書誌・研究文献

<欧文>

Bennett, Adrian A. John Fryer : The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-Century China. Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1967.

Bennett, Adrian A. Missionary Journalist in China : Young J. Allen and His Magazines, 1860-1883. Athens : The University of Georgia Press, 1983.

China, Imperial Maritime Customs. Illustrated Catalogue of the Chinese Collection of Exhibits for the International Health-Chinese Books. London, 1884, pp. 84-123.

Cordier, Henri. Bibliotheca sinica ; Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'Empire chinois. 5 v. Paris : Librairie orientale & américaine, 1904-1908, 1922-1924. 複製版 Taipei : Ch'eng-wen Publishing Co., 1966.

Lochhart, William. Medical Missionary in China, a Narrative of 20 Years' Experience. London : Hurst and Blackett, 1861.

Reardon-Anderson, James. The Study of Change : Chemistry in China, 1840-1949. Cambridge, Eng. : Cambridge University Press, 1991.

Wong K. Chimin. History of Chinese Medicines : Being a Chronicle of Medical Happenings in China from Ancient Times to Present Period. Tientsin : 1936. 2d.ed. Shanghai : National Quarantine Service, 1936. 複製版 Taipei : Southern Materials Center, Inc., 1977.

Wylie, Alexander. Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese. Sahngiae : American Pres-

- byterian Mission Press, 1867. 複製版 Taipei : Che'ng-wen Publishing Co., 1967.
- <中国語>（著者編者名の漢語拼音ローマ字綴りによるアルファベット順）
- 曹元字編著『中国化学史話』江蘇科学技術出版社, 1979年。（木田茂夫, 山崎昶訳『中国 化学史話』上下, 豪華房, 1990年）
- 曹正文, 張国瀛『旧上海報刊史話』華東師範大学出版社, 1991年。
- 戈公振『中国報学史』上海商務印書館, 1927年。北京版, 三聯書店, 1955年。
- 顧長声『伝教士与近代中国』上海人民出版社, 1981年。増補本, 1991年。
- 李喬萃『中国化学史』中冊, 増訂版, 台湾商務印書館, 1978年。
- 馬祖毅『中国翻訳簡史一五四以前』中国对外翻訳出版公司, 1984年。
- 沈渭濱主編『近代中国科学家』上海人民出版社, 1988年。（佐々木正哉「紹介」『近代中国』21 (1990), pp. 48-72）
- 史和, 姚福申・叶翠娣編『中国近代報刊名録』福建人民出版社, 1991年。
- 宋原放・李白堅『中国出版史』中国書籍社, 1991年。
- 王根元, 崔雲昊「閔干『金石識別』の翻訳, 出版和底本」『中国科技史料』第11卷 (1990) 第1期, pp. 89-96。
- 王揚宗「閔干『化学鑑原』和『化学初階』」『中国科技史料』第11卷 (1990) 第1期, pp. 84-88。
- 王揚宗「晚清科学訳著雑考」『中国科技史料』第15卷第4期 (1994), pp. 32-40。
- 王揚宗「江南製造局翻訳書目新考」『中国科技史料』第16卷第2期 (1995), pp. 3-18。
- 王萍『西方曆算学之輸入』<中央研究院近代史研究所專刊17>中央研究院近代史研究所, 1966年。修訂版, 1980年。
- 熊月之『西學東漸与晚清社会』上海人民出版社, 1994年。
- 熊月之「江南製造局翻訳館研究」『船史研究(上海)』第8期 (1995), pp. 90-116。
- 楊森富編著『中国基督教史』台湾商務印書館, 1968年。
- 袁翰青『中国化学史論文集』生活・讀書・新知三聯書店, 1956年。
- 張柏春『中国近代機械簡史』北京理工大学出版社, 1992年。
- 趙匡華主編『中国古代化学史研究』北京大学出版社, 1985年。
- 中国社会科学院近代史研究室翻訳室『近代來華外国人名辞典』中国社会科学出版社, 1981年。
- 周嘉華, 曾敬民, 王揚宗『中国古代化学史略』河北科学技術出版社, 1992年。
- <日本語>（著者編著名による五十音順）
- 石山洋「箕作阮甫の地理学」, 蘭学資料研究会編『箕作阮甫の研究』思文閣出版, 1978年, pp. 185-262。
- 石山洋「『潘吉星教授：用語<化学>および<植物学>の初期使用に関する新資料』に接して」『科学史研究』第II期第24卷 (No. 153) (1985), pp. 60-62。
- 井上和雄『書物三見』書物展望社, 1939年。
- ※「出版界の異彩萬屋兵四郎」「みづほ屋卯三郎」「清親と原胤昭翁」含む。
- 井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介—福岡藩における理化学発達の状態」(1) (2), 『西南学院大学文学論集』第4卷第3号 (1958) pp. 25-49, 第5卷第3号 (1959) pp. 21-41。
- 上野益三『日本博物学史』平凡社, 1973年。補訂, 1986年。
- 上野益三「『翻刻植物学』解説」。上野益三・矢部一郎解説『植物啓原/植物学』<江戸科学古典叢書24>恒和出版, 1980年, pp. 11-22。
- 海老澤有道『維新変革期とキリスト教』新生社, 1968年。
- 海老澤有道『日本の聖書』日本基督教団出版局, 1964年。新訂増補版『日本の聖書—聖書和訳の歴史』1981年。講談社学術文庫版, 1989年。
- 大槻如電修『新撰洋学年表』1927年。再版, 柏林社書店, 1963年。
- 大槻如電原著・佐藤榮七増訂『新撰洋学編年史』錦正社, 1965年。
- 小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』日本基督教団出版局, 1973年。
- 小野秀雄「翻刻新聞雑誌の原書について」『新聞学評論』第1号 (1952), pp. 52-73。
- 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識—世界地理・西洋史に関する文献解題』乾元社, 1953年。
- 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂出版, 1982年。
- 木村嘉次『(字彫り版木師)木村嘉平とその刻字』<日本書誌学大系13>青裳堂書店, 1980年。
- 武田楠雄『維新と科学』岩波書店, 1972年。
- 国文学研究資料館史料館編『近世・近代史料目録総覧』三省堂, 1992年。
- 国立国会図書館一般参考部編集兼発行『市中取締類集(正・続)細目』1959年。
- 坂出祥伸『中国近代の思想と科学』同朋舎, 1983年。
- 島尾永康『中国化学史』朝倉書店, 1995年。
- 書誌研究懇話会編『全国図書館案内』上下, 三一書房, 1979年。改訂新版, 1990年。

- 杉井六郎「『大美聯邦志略』の翻刻」『史窓（京都女子大学）』第47号（1990），pp. 1-43.
- 杉井六郎「合信の『博物新編』の翻刻について」『史窓』第48号（1991），pp. 91-102.
- 杉井六郎「江蘇上海墨海書館蔵板『博物新編』とその翻刻」『社会科学（同志社大学人文科学研究所）』第47号（1991），pp. 431-450.
- 鈴木大『鈴木大雑集』2，3＜日本史籍協会叢書＞東京大学出版会，1972年.
- 鈴木広光「中国プロテスタント伝道印刷所の金属活字について」『汲古』第25号（1994），pp. 59-64.
- ジョナサン・スペンス（Jonathan Spence）著，三石 善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』講談社，1975年.
- 高田誠二『維新の科学精神：『米欧回覧実記』の見た産業技術』朝日新聞社，1995年.
- 龍浦文彌「全体新論に就て」『開化』第2巻第7号（1938），pp. 2-3.
- 武内博編著『日本洋学人名事典』柏書房，1994年.
- 多治比都夫，中野三敏編『近世活字版目録』＜日本書誌学大系50＞青裳堂書店，1990年.
- 東京科学博物館編『江戸時代の科学』1934年. 名著刊行会，1976年.
- 卓南生『中国近代新聞成立史 1815-1874』ペリカン社，1990年.
- 長澤規矩也『図解古書目録法』汲古書院，1974年.
- 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録』汲古書院，1976年.
- 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録補正 附書名索引・校點者索引・使用法』汲古書院，1980年.
- 長澤孝三「『航海金針』のこと」『汲古』創刊号（1982），pp. 22-23.
- 中村久四郎「近世史支那の日本文化に及ぼしたる影響（第6回）」『史学雑誌』第25編第10号（1914），pp. 1205-1236.
- 中村久四郎「近世史支那の日本文化に及ぼしたる影響（第7回）」『史学雑誌』第25編第12号（1914），pp. 1587-1605.
- 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版，1984年.
- 日本科学史学会編『日本科学技術史大系』第1巻・通史＜1＞，第一法規出版，1964年.
- 日本学士院明治前日本科学史刊行会編『明治前日本物理学史』日本学術振興会，1964年.
- 日本機械学会・化学史学会編『平成6年度 産業技術の歴史に関する調査研究報告書』日本機械工業連合会・研究産業協会，1995年.
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館，1988年.
- 橋本敬造「中国の近代化と科学の知識—江南製造総局と繙訳館の位置」『関西大学教職課程研究センター年報』第4号（1990），pp. 121-134.
- 橋本敬造「ジョン＝フライヤー『江南製造局翻訳事業記』訳注」『（関西大学）社会学部紀要』第23巻第2号（1992），pp. 1-29.
- 橋本南都子「清朝江南製造局翻訳館の設立とその歴史的役割」『東海大学紀要外国語教育センター』第12輯（1991），pp. 69-75.
- 橋本万平『素人学者の古書探求』東京堂出版，1992年.
- 浜下武志『近代中国の国際的契機—朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会，1990年.
- 福井保『江戸幕府刊行物』雄松堂出版，1985年.
- 増田涉『西学東漸と中国事情』岩波書店，1979年.
- 増田涉『中国文学史—「文学革命」と前夜の人々』岩波書店，1967年.
- ※梁啓超「西学書目表」含む.
- 松本治朗「幕末維新を生き抜いた蘭方医-内科闡微 坪井信良訳 明治7年刊 全一冊」『さざなみ（滋賀医科大学附属図書館報）』No. 31（1989），pp. 8-9.
- 宮地正人編『幕末維新風雲通信—蘭医坪井信良家兄宛書翰集』東京大学出版会，1978年.
- 武藤長蔵「再び銀行ナル名辞ノ由来ニ就テ」(1)-(5)，『国民経済雑誌』第26巻（1919）第6号，pp. 75-82，第27巻（1919）第1号，pp. 91-100，第2号，pp. 124-135，第4号，pp. 106-116，第6号，95-106.
- ※『智環啓蒙塾課初步』とその和刻本の書誌.
- 森睦彦「徳川幕府の洋学書の翻訳出版規制」緒方富雄編『蘭学と日本文化』東京大学出版会，1971年，pp. 113-122.
- 矢崎健一「中国語聖書翻訳小史」『聖書翻訳研究』第4号（1972），pp. 27-39.
- 八耳俊文「漢訳西学書『博物通書』と「電気」の定着」『青山学院女子短期大学紀要』第46輯（1992），pp. 109-132.
- 八耳俊文「D. J. マッゴウアンと中国，日本 1843-1893」『洋学 I 一洋学史学会研究年報』八坂書房，1993年，pp. 43-87.
- 八耳俊文「中国における宣教師による科学啓蒙活動と進化論」平成2・3・4年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書『進化論受容の比較科学史的研究（研究代表鈴木善次）』1993年，pp. 51-61.
- 矢作勝美「明治活版印刷の成立と美華書館の影響」『文学』第49巻第11号（1981），pp. 149-160.
- 吉田寅「『張遠両友相論』考—中国新教伝道開拓の一側面」『基督教史学』第6輯（1955），pp. 1-14.
- 吉田寅「喻道伝とその説話—中国新教文書伝道の一資料」『基督教史学』第8集（1958）pp. 28-38.
- 吉田寅「『格物探原』と十九世紀の東亜キリスト教」『基督教史学』第11集（1961），pp. 15-28.

- 吉田寅「『地球説略』と反キリスト教運動—中国文布教書の流入と幕末期仏教会の反響」『東京学芸大学附属高校研究紀要』Ⅲ (1965), pp. 19-29.
- 吉田寅「宣教医ホブソンとその中国文医学書」上下、『古医学月報』第8, 9号 (1974) pp. 3-5, pp. 3-5
- 吉田寅「中国プロテスタント医療伝道の開拓とピーター＝パーカー」『キリスト教史学』第31集 (1977), pp. 21-37.
- 吉田寅「ウイリアム＝ミルン(米憐)の中国文布教書について—『幼学浅解問答』と『鄉訓五十二則』を中心として」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第18号 (1980), pp. 27-42.
- 吉田寅「アメリカ宣教医師カー(嘉約翰)の中国文医学書について—『西藥略訳』と『皮膚新編』」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第19号 (1981), pp. 23-35.
- 吉田寅「イギリス宣教医ワイリー(偉烈亞力)の中国文科学書について—『談天』を中心として」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第20号 (1982), pp. 9-22.
- 吉田寅「中国医療伝道とホブソンの中国語医学書」『(幕末期医学書復刻Ⅱ) 宣教医ホブソン(合信)の医学書』解説, 教育出版センター, 1986年.
- 吉田寅「入華プロテスタント宣教師の海外事情紹介」『歴史人類』第14号 (1986), pp. 1-42.
- 吉田寅「近代地理学の導入と幕末期仏教界の反響」『立正史学』第66号 (1989), pp. 15-35.
- 吉田寅「中国語キリスト教書の流入と仏教界の対応—幕末・明治初年を中心として」『仏教史学研究』第32巻第1号 (1989), pp. 1-23.
- 吉田寅「『閑邪存誠』の一考察付校注—幕末期仏僧の中國語医学書批判」『立正大学文学部研究紀要』第5号 (1989), pp. 1-49.
- 吉田寅「『護法新論』と入華宣教師の中国語著作一付『護法新論』校註抄」『キリスト教史学』第44集 (1990), pp. 59-74.
- 吉田寅「中国語科学書『博物新編』とその日本版」『東洋史論集(立正大学)』第3号 (1990), pp. 1-10.
- 吉田寅「『釈教正謬』訳註稿(I) —中国プロテスタント宣教師の仏教批判と仏教界の対応」『異文化交流』第6号 (1992), pp. 1-19.
- 吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究—『天道溯源』の研究・附訳註』汲古書院, 1993年.
- 吉田寅「入華宣教師ゲネールの中国語布教書について」『世界史説苑』<木崎良平先生古希記念論文集>1994年, pp. 255-271.
- 吉田寅「中国史におけるキリスト教の対仏教関係—入華宣教師の中国語伝道を中心として」『立正史学』第75号 (1994), pp. 35-53.
- 吉田寅「入華宣教師ホブソンの中国語布教書—『問答良言』と『約翰聖經釈解』」『異文化交流』第19号 (1994), pp. 1-23.

〔紹 介〕

松本三和夫著『船の科学技術革命と産業社会—イギリスと日本の比較社会学—』同文館, 1995年, 354頁, 5,500円。

科学の社会的側面に光をあてた歴史研究、いわゆる「科学の社会史」に属する研究はもはや珍しくはない。しかし、科学技術が産業社会にとって不可欠の要素となっていく歴史の大きな流れを、具体的な事例に即して、しかも構造的に解明しようという努力はあまりなされていない。本書は、そのような新たな研究分野を開拓する先駆的な研究といえる。

本書の著書、松本三和夫氏は、今から約20年前に大学院で社会学の専門教育を受けはじめた頃から科学社会学を志したという。しかし、当時の社会学で主流だったマートン派の科学社会学にも、それに批判的な新クーン派の科学社会学にもなじめず、独自の道を切り開くことになった。

著者は社会学者らしく、科学技術と社会の関係の一般的・構造的理解を自らの研究目標とし、そのための戦略的重要性から、19世紀後半から世紀転換期という時代を選び、また（化学や電気ではなく）造船という分野を、そして（ドイツやアメリカではなく）イギリスと日本という国を対象に選んだのである。本書は、世紀転換期日英造船技術史の実証的モノグラフという体裁をとっているものの、著者のいう「科学技術の比較歴史社会学」の研究としてこれを見ないと、研究史における本書の位置を正確に評価することはできないだろう。

本書は、1993年に著者が東京大学へ提出した博士論文がもとになっているが、原論文の骨格を損なわないかぎりで大幅に短縮されているという。

本研究のテーマである「船の科学技術革命」とは、「船の高速化と大型化に対応する船体構造と機関製造両部門における科学技術革命」を指し、各部門での科学技術革命を体现する事例として船型試験水槽と舶用蒸気タービンの出現が取り上げられている。ここで「科学技術革命」というのは、「産業社会における科学技術の生成」と“生成した科学技術への産業社会の適応”という「ふたつの過程をとおしてあらわれる科学、技術、社会

の関係の劇的な変化の総称」のことだという。

本書の構成と内容を概観してみよう。序章と終章の間に、イギリスの経験・日本の経験・日英比較をそれぞれ扱った三つの部が置かれている。

その構成と内容については著者自身が簡潔にまとめているのでそれを引用する。「第Ⅰ部では、イギリスで船の科学技術革命がどのような社会的背景のもとに生まれ（1章）、どんな社会的メカニズムによって展開し（2, 3章）、社会が船の科学技術革命にどう適応したか（4章）を分析する。第Ⅱ部では、イギリスの船の科学技術革命が日本へ波及するとき、日本はどのような社会的背景をもち（5章）、どんな社会的メカニズムによって科学技術移転を果たし（6, 7章）、社会が船の科学技術革命にどう適応したか（8章）を分析する。第Ⅲ部では、船の科学技術革命に関するイギリスと日本の経験を比較するモデルを提示し（9章）、科学技術教育（10章）、研究・開発組織（11章）、労働過程（12章）に的を絞り、日英比較の含意を述べる」（13章）。

実際に各章でどのようなことが書かれ、どのような結論が導き出されているかを知りたいと思われた方は、是非とも本書をひもといてほしい。

本書の叙述スタイルにおける特徴は、著者の言葉を借りれば「扱う材料はできるかぎり慎重に原史料に立ち返り、結論はできるかぎり科学社会学的に大胆なかたちで提出するようにつとめた」という点にある。このようなスタイルの研究は前例を見ないものであり、そのため多くの読者は違和感さえ抱くことだろう。

それゆえ紹介者が（そしておそらく著者自身も）恐れていることは、本書が歴史学界からも社会学界からも無視され、人知れずあまたの研究の山のなかに埋もれてしまうことである。

文献目録が省略されているのはまことに残念であるが、詳細な事項索引・人名索引が本書には付けられている。これは、各章・各部の末尾に付された“まとめ”とともに本書を何度も参照する価値のある文献とするものである。著者の提唱する「科学技術の比較歴史社会学」が今後どのように発展するかは全く未知数であるが、本書を基礎にこの研究分野が発展することを祈っている。

（田中浩朗）

編集後記

☆第22巻第4号をお届けします。

☆川田氏の巻頭論文は、氏が1995年の1月に提出した修士論文をベースにしたものであります。

☆八耳氏の中国書の所在目録は、大変な労作であります。かなりな量ですが、1号にまとめて収録するのがよいという編集委員会の判断で、一括して掲載させていただきました。

☆欧米での科学史や技術史の研究においては、史料の内容や所在が容易にわかり、また整理された史料を研究者に紹介するプロのアーキビストも各コレクションに存在します。そのような便利で重宝な制度が整っていない日本において、八耳氏の目録は大変貴重な案内役になってくれるものと思います。

☆編集委員会では論文・寄書・書評などのご投稿を、お待ちしております。

(橋本毅彦)

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、著作権者から複写権の委託をうけている次の団体から許諾を受けて下さい。
学協会著作権協議会

〒107 東京都港区赤坂 9-6-41 社団法人 日本工学会内
Tel.: 03-3475-4621 Fax: 03-3403-1738

各種問合わせ先

○入会その他 → 化学史学会事務局

郵便: 〒101 東京都千代田区神田錦町 2-2
東京電機大学工学部人文社会系列
古川研究室
(下線部を必ず明記してください)

振替口座: 東京 8-175468

電話: 03-5280-1288 (Fax 兼用)

事務連絡はなるべく Fax でお願いします。

○投稿先 → 『化学史研究』編集委員会

〒153 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部科学史・科学哲学研究室
橋本毅彦 (気付)

○別刷・広告扱い → 大和印刷 (奥付参照)

○定期購読・バックナンバー → (書店経由) 内田老鶴園

編集委員

委員長: 鎌谷 親善 顧問: 柏木 肇
飯島 孝 大野 誠 亀山 哲也
川崎 勝 小塙 玄也 田中 浩朗
塚原 東吾 橋本 毅彦 林 良重
藤井 清久 古川 安 武藤 伸
八耳 俊文 吉本 秀之

維持会員

旭化成工業(株) ライフ サイエンス総合研究所	住友製薬(株) 第一製薬(株) 探索第一研究所
味の素(株)	ダイセル化学工業(株)
出光興産中央研究所	田辺製薬(株)
荏原製作所	(株)ナード研究所
鐘淵化学工業(株)	富士レビオ(株)
参天製薬(株)	三菱化学(株)
塩野香料(株)	三菱ガス化学(株)

賛助会員

(株) 内田老鶴園	武田科学振興財団
三共(株)	(株) 東京教学社
三共出版(株)	肥料科学研究所
(株) 第一学習社	和光純薬工業(株)

(1995年12月1日現在)

化学史研究 第22巻 第4号 (通巻73号)

1995年12月25日発行

KAGAKUSHI Vol. 22, No. 4. (1995)

年4回発行 定価 2,575円 (本体 2,500円)

編集・発行 © 化学史学会 (JSHC)

The Japanese Society for the History of Chemistry

会長: 芝 哲夫

President: Tetsuo SHIBA

編集代表者: 鎌谷 親善

Editor in Chief: Chikayoshi KAMATANI

学会事務局 Office

東京電機大学工学部人文社会系列古川研究室

% Yasu FURUKAWA, Tokyo Denki University, 2-2 Kanda-Nishiki-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan

Phone 03-5280-1288

印刷 (株)大和印刷

〒173 東京都板橋区栄町 25-16

Tel. 03-3963-8011 (代) Fax 03-3963-8260

発売 (書店扱い) (株)内田老鶴園

〒112 文京区大塚 3-34-3

Tel. 03-3945-6781 (代)

Overseas Distributor: Maruzen Co., Ltd.

P.O. Box 5050, Tokyo International, 100-31 Japan

Phone 03-3272-7211; Telex, J-26517.

昭和52年3月24日 郵政省学術刊行物指定

化 学 史 研 究 第22巻 (1995年) 総目次

【論 文】

トーマス・グレアムのコロイド研究再考
立花太郎 (1)

江戸後期における酒造技術—灘酒の出現と特徴
鎌谷親善 (85)

『フロギストン論考』仏訳における
ラヴワジエ夫妻の協力 川島慶子 (163)
パラオ熱帯生物研究所—その誕生から
終焉まで— 坂野 徹 (180)
メルセンヌの学問擁護論 川田 勝 (263)

【特 集】

技術史シリーズ 第11回
アンモニア合成技術 (I) 江崎正直 (15)

技術史シリーズ 第12回
合成洗剤の歴史 刈米孝夫 (114)

技術史シリーズ 第13回
環境問題からみた合成洗剤の技術開発史
大場健吉・武井玲子 (127)

技術史シリーズ 第14回
アンモニア合成技術 (II) 江崎正直 (197)

技術史シリーズ 第15回
1-アミノアントラキノン製造法の変遷
—日本における無公害型製造法の開発—
上仲 博 (288)

【特 集】

日本の化学者 第1回
水島三一郎先生の研究足跡 坪井正道 (142)

日本の化学者 第2回
黒田チカー天然色素研究における業績とわが国
初の女性化学者としての生涯 前田侯子 (226)

【講演要旨】

1995年度化学史研究発表会講演要旨 (53)

【広 場】

質量作用の法則という名称の
初期の使われ方 大西 寛 (252)

レントゲン線発見100年 原田 騒 (300)

【紹 介】

Piyo Rattansi and Antonio Clericuzio (eds.),
*Alchemy and Chemistry in the 16th and 17th
Centuries* 吉本秀之 (152)

J. M. トーマス著, 千原秀昭・黒田玲子訳
『マイケル・ファラデー—天才
科学者の軌跡—』 芝 哲夫 (155)

Ekmeleddin Ihsanoglu (ed.), *Transfer of
Modern Science & Technology to the Muslim
World* 塚原東吾 (156)

竹内敬人, 山田圭一著『化学の生いたち』日本
化学会編, 新化学ライブラリー (全30巻)
小塩玄也 (158)

藤田英夫著『大阪舎密局の史的展開
—京都大学の源流—』 鎌谷親善 (255)

William H. Brock, *The Fontana History
of Chemistry* 梅田 淳 (256)

クラウス・ハフナー著, 中辻慎一訳『化学の建築家
ケクレーベンゼンいまむかし』 塚原東吾 (260)

松本三和夫著『船の科学技術革命と産業社会—

イギリスと日本の比較社会学—』 田中浩朗 (359)

【会 報】

1995年度総会報告 (159)

【雑 報】

旧制高校教師 山岡望先生について 鶴田禎二 (50)

【資 料】

長崎における A. F. ボードウインの
舎密学傳習講義録 芝 哲夫 (239)

化学史および周辺分野の新刊書 (1994)
編集室 (309)

清末期西人著訳科学関係中国書および
和刻本所在目録 八耳俊文 (312)

『化学史研究』投稿規程 (1992年3月21日改訂)

化学史学会編集委員会

1. 投稿資格 著者のうち少なくとも一人は本会会員であること。但し、編集委員会が認めた場合あるいは依頼した原稿についてはこの限りではない。

2. 投稿期日 本誌は年4回（原則として3月、6月、9月、12月）発行するので、余裕をみて投稿すること。但し、査読を要するものは、さらに最低1ヶ月の査読期間を見込むこと。

3. 原稿区分 つぎのいずれかを著者が選択して指定すること。但し、編集委員会で変更することがある。

—論文・寄書・総説・解説・原典翻訳・紹介・資料・雑報・広場・討論—

なお、新しい知見をまとめ一定の結論に導いたものを論文、断片的ではあるが新しい知見を含むものを寄書と区分する。

4. 原稿の審査 論文・寄書については編集委員会あるいはその依頼する者が査読を行い、その結果によって編集委員会が採否を決定する。その他のものについても訂正を求める場合がある。

5. 校 正 著者校正を一回行う。そのための原稿の写しは著者の手許に保管しておくこと。それに基づいて再校以降を編集委員会が行うので、校正刷はなるべく速やかに返送すること。

6. 別 刷 掲載された論文などの別刷を希望する場合は、著者校正の際に必要部数を申し込み、別に定める料金を支払うこと。

7. 著作権および転載 掲載された記事等の著作権は本会に所属するが、編集委員会の承認を得れば他に転載することができる。

8. 投稿方法 原本およびその写し一通を別に定める投稿先に書留便にて郵送する。

なお投稿先は変更される場合があるので、最近号の会告に注意すること。

執筆要項

1. 原稿はなるべく400字詰原稿用紙を用い、完全原稿とする。水性のインクやHより硬い鉛筆はなるべく避ける。ワープロ原稿に関しては書式を22字×37行に設定し、禁則処理を行うことが望ましい。

2. 投稿原稿の第1枚目に、①投稿区分、②題名、③著者名（ローマ字書きを添える）、④所属、および⑤校正等送付先（電話番号）を記すこと。

3. 論文・寄書・総説・解説には、欧文で題名、著者名、所属および要旨を別紙添付すること。欧文要旨は約200語（ダブルスペースでタイプ用紙1枚程度）とし、なるべくタイプする。

4. 論文は400字詰原稿用紙40枚をもって一応の限度とする。ワープロ原稿に関しても、これに相当する量をもって一応の限度とする。

5. 原稿は横書き、現代かなづかいによる。

6. 読点はコンマ（，），句点はピリオド（.）を用い、文中の引用は「」の中に入れる。

7. 元号その他西暦以外の紀年法によるときは、必要に応じて（ ）内に西暦年をそえる。

8. 外国人名や地名は、次のいずれかの方法に統一する。
(a)原綴を用いる場合は初出の個所に（ ）内にカタカナによる表示をつける。
(b)カタカナを用いる場合は、初出の個所に（ ）内にその原綴またはローマ字転写を示す。
(c)よく知られたものについてはこの限りではない。

9. 欧語は、タイプまたは活字体で記すこと。

10. 引用文が長いときは、行を改め本文より2字下げて記す。

11. 図および構造式などはそのまま製版できるように墨または黒インクで白紙上に仕上げ、それぞれ挿入個所（必要に応じて大きさも）を赤字で原稿の右側に指定すること。なお、粗書き原稿で希望する場合には本会でトレスさせ、別途代金を請求する場合がある。

12. 写真等はなるべく原本を添付し、返却希望の場合はその旨を明記すること。

13. 単行本および雑誌名は、和漢語の場合には『 』の中に入れ、欧語の場合にはイタリック体（下線を付す）を用いて表す。

14. 論文の題名は、和漢語の場合には「 」の中に、欧語の場合には‘ ’の中に入れること。

15. 単行本などの中の特定の章または節の題名、および編纂物等に含まれる文書名も、和漢語の場合には「 」に入れ、欧語の場合には‘ ’に入れる。

16. 文献と注は通し番号1), 2)……を用い、本文中の相当個所に肩つきで番号を示し、本文の最後に一括して記すこと。

17. イタリック体は下線_____, ゴチック体は波線~~~~~を付け、それぞれ赤字で原稿中に指定する。

18. 引用文献の書き方は、以下に示す実例に準ずる。

例

<論文>

- 1) 仁田 勇「化学史周辺雑感」『本誌』1983, 123-126頁。
- 2) 辻本満丸「姥鮫肝油中の新炭化水素について」『日本化学会誌』(以下『日化』と略す) 55 (1934), 702.
- 3) Wallace H. Carothers, 'Polymerization', *Chemical Reviews* (以下 *Chem. Rev.* と略す) 8 (1931): 353-426, p. 355.
<書籍>

- 4) 日本化学会編『日本の化学百年史——化学と化学工業のあゆみ』(東京化学同人, 1978), 580-597頁。
- 5) Arnold Thackray, *Atoms and Powers: An Essay on Newtonian Matter-Theory and the Development of Chemistry* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1970), pp. 14-18.

投稿先 〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部科学史・科学哲学

研究室 橋本毅彦（気付）

『化学史研究』編集委員会

パストゥール ビールの研究

ÉTUDES SUR LA BIÈRE

ビールの病変、病変の原因、
ビールに変敗耐性を付与する方法

および

発酵に関する新理論

Louis Pasteur 著

齊藤日向 監修

竹田正一郎・北畠克頭 共訳

A5判・上製／口絵(巻頭)・本文：390頁。
版画図版：12／挿絵：85 定価10,300円(税込み)

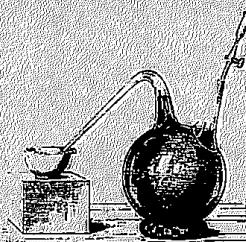
【主要内容】

- 1章 ビールないしその製造に使用される麦汁に
変敗しやすい性質があることと、醸造工程
との間に存在する密接な相関について
- 2章 ビールおよびその製造に使用される麦汁が
病変を起こす原因の研究
- 3章 蔽密な意味での発酵原の起源について
- 4章 各種の生命体を純粋状態で培養すること、
およびこれらにみられる自律性について
- 5章 アルコール酵母
- 6章 発酵の生理学的理論
- 7章 ビールの新製法／付録(ひすび)

“かつて化学の世界に現れた最も完全なひと”

パストゥール没後百年記念出版

一己ノ欲スルユエニ事物アリトスルハ
精神ノ最大ノ迷惑ナリ
発酵に関する実験事実と生命の自然発生
説の否定をめぐるかの大リーピッヒとの
論争の詳細も記述されていて、いまなお
“面白い”科学・医学史上の貴重な書を
初版本から完訳；化学史研究者必読の書。



企画・製作 アサヒビール生活文化研究振興財団

編集・発行 大阪大学出版会

〒565 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内

Tel. & Fax. 06(877)1614 振替: 00990-4-120298

ご注文は、書店または直接小会まで。

KAGAKUSHI

The Journal of the Japanese Society
for the History of Chemistry

Volume 22 Number 4 1995
(Number 73)

CONTENTS

ARTICLE

- Masaru KAWADA: The Defence of Science by Fr. M. Mersenne 263 (1)

THE HISTORY OF CHEMICAL TECHNOLOGY SERIES 15

- Hiroshi KAMINAKA: The Transition of the Manufacturing Process of 1-Aminoanthraquinone: The Development of the Non-Polluting Process in Japan 288 (26)

FORUM

- Kaoru HARADA: Röntgen Rays Centennial 300 (38)

SOURCE

- LIST OF NEW BOOKS (1994) 309 (47)

- Toshifumi YATSUMIMI: A Union List of Chinese-language Books on Science and Religion, Written by Westerners in the Nineteenth Century, and Their Japanese Editions and Reprints, Preserved in Japan. 312 (50)

BOOK REVIEW

- 359 (97)
-

Edited and Published by
The Japanese Society for the History of Chemistry
c/o Yasu Furukawa, Tokyo Denki University
2-2 Kanda-Nishiki-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan
Overseas Distributor: Maruzen Co. Ltd.,
P.O. Box 5050, Tokyo International, Tokyo 100-31, Japan